

総明会 50周年記念誌

明治大学付属明治高等学校・中学校同窓会

此 糸 組 の 詩

書：総明会名誉会長 向殿 政男

巻頭のことば

明治中学高校同窓会が卒業生により創立され50年の節目を祝う行事が2012年から準備企画されました。50周年となる2014年には11月16日の総明会総会会場にて記念式典が挙行され、また、これと並行して2015年に記念誌を刊行し、次世代に繋げるべく総明会会員全員に配布することとなりました。

記念誌編纂委員会が、会報委員会および会報委員経験者の有志により結成され、まずは取材、古い資料の発掘から開始されました。総明会の安定期に幹事学年を経験した昭和50年卒以降のメンバーで、A5版冊子の総明会会報を制作できるほどのスキルを持つ、玄人はだしの集団ですが、昔のことは判りません。第1号からすべての同窓会報をお持ちの大先輩より会報をお借りし、スキャナーで電子化保存する作業から開始しました。委員会では、母校90年史を参考に、まず過去の会報をすべて読み、先輩がお持ちの古い卒業生名簿や資料を拝見し、また明治高校の総明会室にある資料などを調べました。さらに初期に同窓会が活動していた日本工業倶楽部などへの取材、先輩へのインタビューや座談会などで情報を確実なものとししました。これら取材により、本記念誌は作られました。また、会の歴史を知る上で重要な資料の多くを電子化保存できました。

同窓会創生期である1926年に学友会主導の同窓会が設立され、しばらくのブランクの後、旧制明治中学卒業生が卒業生主導の同窓会を1965年再建創立し、新制明治高校の卒業生へとバトンタッチ、さらに総明会の名称が付き、現在に至ります。同窓会の変遷を知ると、母校創立100年を超える歴史の重みを感じざるを得ません。明中、明高に学んだ同窓がその時代時代でどのような活動をしてきたのかが偲ばれます。

初代校長の鶴澤總明先生の「第一級の人物たれ」の教えを継承し、「質実剛健・独立自治」の理念を堅持しつつ、さらに幅広い分野で活躍する未来の総明会会員を輩出し続ける明治高校であって欲しいと思います。そのためにわれわれ総明会会員はこれからもオール明治で母校を応援していきましょう。末筆ながら本記念誌の刊行に際し快く取材にご協力いただき、物心両面で多大なご支援をいただいた諸先輩はじめ会員の皆様、また明治高校関係者の皆様へ厚く御礼を申し上げます。

総明会副会長・周年担当 井家上 哲史(昭和51年卒)



第1回 同窓会（総会・懇親会）



初代会長の椎村越郎氏（左）と副会長の片岡龍夫氏



議長団長 大沼孝夫氏



準備委員長 蒲山博氏



母校の島田正郎校長



来賓の中村孝也博士



1965年（昭和40年）6月5日、第1回総会・懇親会風景。総会は明治大学記念館、懇親会は明治大学体育館4階で行われた。ここから総明会の歴史が動き出した。

昔の同窓会風景

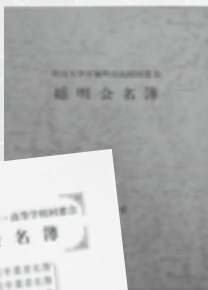
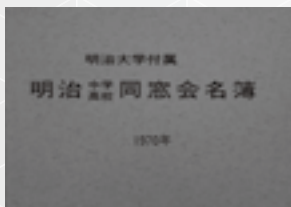
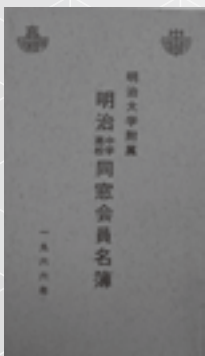


母校総明会室に残されていた同窓会発足当初の貴重な写真が納められた古いアルバムから掲載。日本工業倶楽部や母校（猿楽町校舎）で開催していた総会・懇親会の様子がうかがえる。

■ 同窓会員名簿



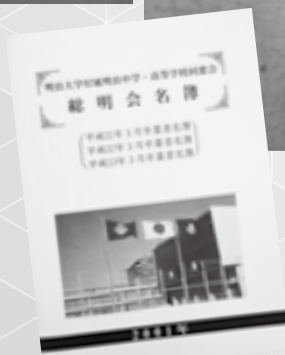
旧制明治中学校時代の同窓会名簿



■ チケット



総会・懇親会用のチケットを用意していた学年もあった。

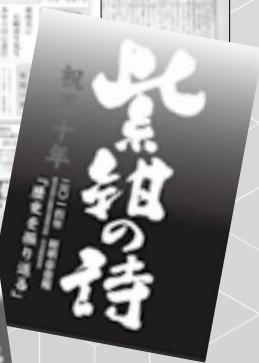


総明会会員名簿。1966年（昭和41年）から2001年（平成13年）まで計7回発行されていた。

■ 会報

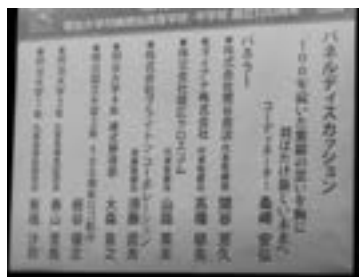


タブロイド判、冊子タイプ、CDなど様々な形で制作されたが、現在はA5版の形で発行されている。



母校創立100周年を記念の式典・祝賀会の模様を号外にして、2012年の総会・懇親会で配布した。

2012年（平成24年）5月5日に行われた総明会主催の明治高校創立100周年祝賀会



総明会主催明治高校創立100周年祝賀会では、「100年続いた紫紺の思いを胸に羽ばたけ新しい未来へ」をテーマに8人のOB・OGが招かれパネルディスカッションを行った。祝賀会では、応援団・チアガールの出演、マンドリンの演奏など華やかな会となった。



祝賀会の開始前に男坂で、学年ごとに記念撮影を行い、祝賀会の終了時に配られた。



2012年（平成24年）11月7日に行われた母校主催の創立100周年式典・祝賀会



明治大学アカデミーコモンにおいて母校明治大学付属明治高等学校・中学校創立100周年記念式典ならびに祝賀会が開催された。在校生、学校関係者をはじめ多くの来賓の方が出席され盛大な式典となった。



写真左：2012年10月26日、母校創立100周年記念事業募金の寄付者芳名を刻銘した銘板の除幕式が行われた。この募金は、在校生の留学を支援する奨学金などに利用されている。

写真右：創立100周年記念の一環として母校への支援・貢献への感謝として総明会に感謝状が贈られた。

2014年（平成26年）11月16日に行われた第50回総明会 総会・懇親会



第50回総明会 総会後に記念式典が行われ、長年の貢献に対して、向殿政男名誉会長（昭和36年卒）、小林昭雄顧問（昭和22年卒）、山浦晟暉顧問（昭和29年卒）、山崎敬生顧問（昭和32年卒）、佐久間洋一顧問（昭和43年卒）、服部雄二顧問（昭和44年卒）の6名が表彰された。そして向殿政男名誉会長の講演も行われた。



第50回総明会懇親会では、総明会50周年を祝って楽しい宴が催された。

目 次

巻頭のことば 総明会副会長・周年担当 井家上 哲史

第1章 50周年に寄せて 13

- 「総明会50周年記念誌刊行によせて」……14 総明会会長 尾島 育四郎
「総明会は永遠に不滅なり」……18 総明会顧問 山浦 晟暉
- 「総明会50周年を祝して」……15 明治大学付属明治高等学校・中学校
校長 安藏 伸治
「不易流行」……19 総明会顧問 山崎 敬生
- 「座右の銘」～総明会50周年に想う～……16 総明会顧問 佐久間 洋一
総明会名誉会長 向殿 政男
「総明会会長当時の思い出」……20
- 「総明会三題噺」……17 総明会顧問 服部 雄二
総明会顧問 小林 昭雄
「総明会50周年記念誌刊行によせて」……21

第2章 総明会の歴史 23

第1節 同窓会の発足 24

1. 同窓会の設立
2. 戦後の同窓会再建へ

第2節 幹事学年制へ 31

1. 第2代会長 片岡 龍夫
2. 会報の発行
3. 会則改正
4. 戦後卒業生との融合
5. 同窓会名称変更
6. 幹事学年制始動

第3節 総明会誕生 35

1. 第3代会長 栗原 勝一
2. 明治中学校・高等学校の状況
3. 軌道に乗る幹事学年制
4. クラブOB会・チャリティーゴルフ
5. 明高・クラブOB会
6. 母校創立70周年
7. 第4代会長 坂本 朝一
8. 同窓会20周年
9. 総明会命名
10. 同窓会旗完成

第4節 総明会の成長41

- | | |
|-----------------|----------------|
| 1. 1985年(昭和60年) | 5. 1989年(平成元年) |
| 2. 1986年(昭和61年) | 6. 1990年(平成2年) |
| 3. 1987年(昭和62年) | 7. 1991年(平成3年) |
| 4. 1988年(昭和63年) | 8. 1992年(平成4年) |

第5節 総明会の革新46

- | | |
|------------------------|------------------|
| 1. 1993年(平成5年) 向殿体制発足 | 9. 1999年(平成11年) |
| 2. 1994年(平成6年) 総明会30周年 | 10. 財政基盤の確立 |
| 3. 武陵会との交流 | 11. 組織の確立 |
| 4. 明治大学記念館講堂 | 12. 追悼 片岡 龍夫 |
| 5. 1995年(平成7年) | 13. 2000年(平成12年) |
| 6. 1996年(平成8年) | 14. 2001年(平成13年) |
| 7. 1997年(平成9年) | 15. 2002年(平成14年) |
| 8. 1998年(平成10年) | 16. 2003年(平成15年) |

第6節 総明会の充実60

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1. 第6代会長 佐久間 洋一 | 5. 2007年(平成19年) |
| 2. 2004年(平成16年) | 6. 2008年(平成20年) |
| 3. 2005年(平成17年) | 7. 2009年(平成21年) |
| 4. 2006年(平成18年) | |

第7節 総明会は未来に向かって65

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1. 第7代会長 尾島 育四郎 | 5. 2013年(平成25年) |
| 2. 2010年(平成22年) | 6. 会報ネーミング |
| 3. 2011年(平成23年) | 7. 2014年(平成26年) |
| 4. 2012年(平成24年) | |

終節71

第3章 総明会の活動 ————— 73

総明会の運営組織および一年の主な活動 74

1. 主な委員会の紹介
 2. 総明会の意思決定機関の仕組み ～総会・理事会・評議員会～
 3. 総明会活動の1年間
 4. 幹事学年の活動内容
- 総明会チャリティゴルフ大会 開催一覧 ■ 明朗会開催一覧
- 総明会賞受賞者一覧

第4章 卒業生学年寄稿 ————— 87

- | | | |
|-------------------|--------------------|------------------|
| ■ 昭和21・22年卒「午巳の会」 | ■ 昭和41年卒「41明友会」 | ■ 昭和56年卒「明翔会」 |
| ■ 昭和24年卒「明高一期会」 | ■ 昭和42年卒「M41」 | ■ 昭和57年卒「明魂会」 |
| ■ 昭和25年卒「明二会」 | ■ 昭和43年卒「紫讃会」 | ■ 昭和58年卒「明輪会」 |
| ■ 昭和27年卒「明高会」 | ■ 昭和44年卒「男坂倶楽部」 | ■ 昭和59年卒「明心会」 |
| ■ 八丈島高校卒「八明会」 | ■ 昭和45年卒「獅子の会」 | ■ 昭和60年卒「闘紺会」 |
| ■ 昭和29年卒「二九会」 | ■ 昭和46年卒「明潮会」 | ■ 昭和61年卒「新世輝」 |
| ■ 昭和31年卒「明楽会」 | ■ 昭和47年卒「四七四七同志酔会」 | ■ 昭和62年卒「明猿会」 |
| ■ 昭和32年卒「明治会」 | ■ 昭和49年卒「翼明会」 | ■ 昭和63年卒「昭和戊辰乃会」 |
| ■ 昭和34年卒「旧雨会」 | ■ 昭和50年卒「明紫会」 | ■ 平成21年卒 |
| ■ 昭和36年卒「明駿会」 | ■ 昭和51年卒「明々会」 | ■ 平成22年卒「明雄会」 |
| ■ 昭和38年卒「二年に一会」 | ■ 昭和52年卒「男子校根性組」 | ■ 平成23年卒「共楽会」 |
| ■ 昭和39年卒「三九会」 | ■ 昭和54年卒「明誠会」 | ■ 平成26年卒「ゆいまーる」 |
| ■ 昭和40年卒「明優会」 | ■ 昭和55年卒「紫魂会」 | ■ その他卒業生会名とその由来 |

第5章 後世に伝えたい寄稿 ————— 109

『～八丈富士に白雲がなびいていた～
明治大学八丈島高等学校』
昭和47年卒 並木 清志氏

『ある教育家の横顔 村田勤先生のこと』
大正10年卒 片岡 龍夫氏

『旧師追悼 鶴澤 總明先生』
大正10年卒 島田 龍郎氏

『鶴澤校長の訓辞』
大正10年卒 安達 正博氏

『戦中の台湾の田園で、たった3人で同窓会』
昭和13年卒 館野 春男氏

『49年ぶりの卒業式に出席して』
昭和20年卒 石塚 弘蔵氏

『一枚のハガキ』
大正10年卒 片岡 龍夫氏

『「東京五輪のわ」東京五輪出場 林崎昭裕氏
同期昭和36年卒 高德武徳氏に聞く』
昭和58年卒 西秋 輝彦氏・坂井 周太郎氏

『不安と自信とスキ 東京五輪を撃ち終えて』
昭和36年卒 林崎 昭裕氏

『画にならない生活の中で』
平成16年卒 羽田 圭介氏

『記念館と私』
昭和31年卒 斉藤 鉄太郎氏

『明治魂の球譜 昭和33年の夏』
～甲子園を賭けた激闘 明治 vs 早実～
昭和57年卒 玉置 正人

『「明魂会」の諸君、30年経ちました』
教諭 安部 友己氏

『私と明治高校』
元教諭 後藤 朋智氏

『志を高く』
元校長 清水 紀夫氏

『明治高校での最後の3年間』
元英語科教諭 矢田 理世氏

『同窓会々報第1号「創刊に寄せて」』
元校長 福島 則雄氏

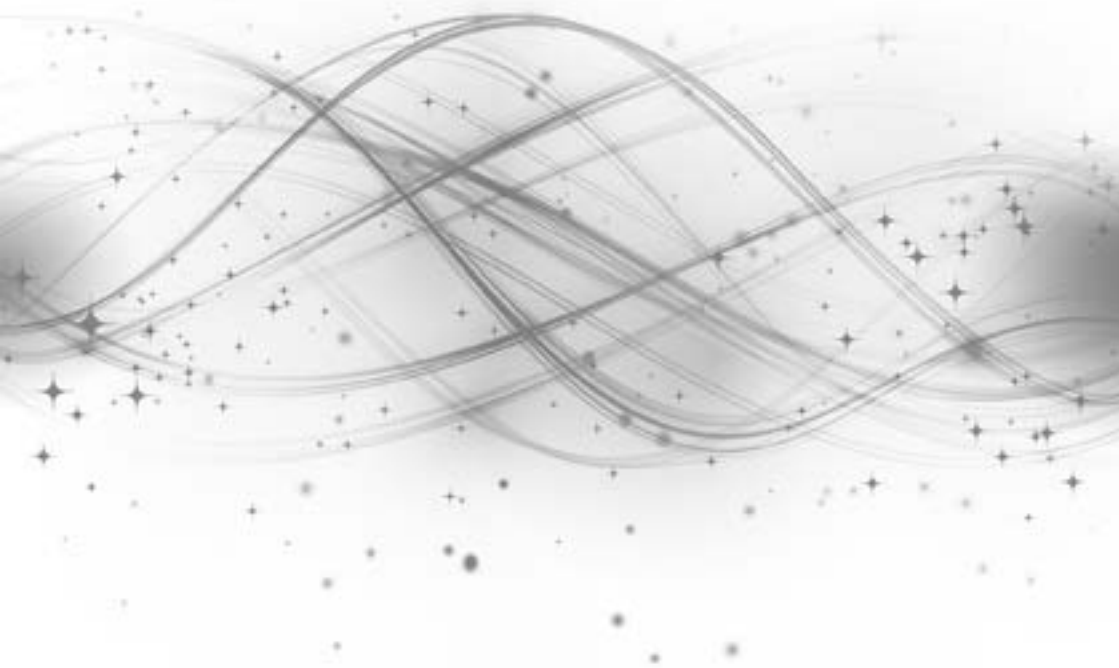
第6章 資料編 ————— 135

- 総明会略年表
- 総明会会則
- 明治中学校同窓会規則
- 総明会歴代役員一覧

総明会50周年記念事業御寄付者一覧 ————— 176

おわりのことば 総明会周年委員会委員長 桑崎 安弘 ————— 179

第1章 50周年に寄せて





総明会50周年記念誌 刊行によせて

明治大学付属明治高等学校・中学校同窓会

総明会会長 **尾島 育四郎** 昭和41年卒

総明会は、昭和40年6月5日明治大学記念館講堂において「明治中学校・高等学校同窓会」として設立総会が挙行され発足致しました。初代会長笹村越郎氏、2代片岡龍夫氏、3代栗原勝一氏、4代坂本朝一氏が歴任され、その間第20回総会に於いて「総明会」と改名されました。当時の同窓会役員の方々は再建・基盤づくりと会組織・運営の充実という今日の土台を立派に築かれました。

5代向殿政男氏・役員の方々は十年の期間、財政基盤の確立、組織の確立、事業の活発化、母校との交流の活発化をされ、財政の飛躍的改善が今日の総明会発展に寄与されました。

6代佐久間洋一氏・役員の方々も路線を継承され、事業遂行は進展し母校と総明会の協力関係を築かれました。

近年に於いては、調布移転に伴う共学制移行、100周年事業基金募集・式典と多大な協力をして参りました。平成26年50周年記念式典・平成27年50周年記念誌発行と現在に至っております。

50年の歳月は決して平坦なものではありませんでしたが、同窓会歴代役員はじめ会員全員が協力し、母校との信頼を基に築き上げたものと確信しております。そして、その総明会50年の歩みを記録に残すために、編纂委員会が時間と労力を割いて編集したものがこの「総明会50周年記念誌」であります。

移りゆく時代の中、母校と総明会がより綿密な意思疎通を行い、信頼関係を継続してゆくことが将来においても大切だと考えております。「質実剛健・独立自治」は本校の理念であります。理念は変えてはなりませんが、一方で良い事は真摯に受入れ、発展させ、次世代の後輩たちに引継いで行かねばなりません。伝統を守るとは革新の連続であります。総明会の更なる飛躍を期待し、その精神・魂を次世代の会員諸氏に伝承されます事を願っております。



総明会50周年を 祝して

明治大学付属明治高等学校・中学校
校長 安藏 伸治

本校は、2012年に創立100周年を迎え、現在第二世紀にその歴史を刻んでいるところです。明治高等学校の卒業生の同窓会は、第二次大戦の混乱が収束しわが国の再興の足並みが整い始めた1964年、「明治中学校・高等学校同窓会設立発起人会」が発足、1985年に会の名称を「総明会」と改称し、現在まで50年の時を積み重ねてきました。

まさにこの間、本校は「伝統校」の名に相応しい歴史と優秀な人材を輩出してきただけでなく、新入生は、4月の歓迎式から校歌をはじめ応援歌、学生歌など徹底した明治スピリッツを注入され、6年あるいは3年の月日を経て、「質実剛健」・「独立自治」の校訓を会得した健児として、明治大学を中心とした高等教育機関に進学していきます。最近では、本校卒業生の大学進学後の学業や資格取得などの面における活躍はめざましく、またグローバル化をめざす明治大学が協定する海外の大学への交換留学に多くの卒業生が採用されています。まさに、明治大学の先陣を担う存在となっているのです。

こうした活躍の力は、一朝一夕にできるものではありません。伝統の重みが生徒達を育成していくのです。創立100周年時に多くの卒業生諸氏や父母から頂戴した「鶴澤総明教育振興・奨学金」のサポートにより、毎年200名近くの生徒を海外の語学研修やホームステイに送り出し、また中国の建平中学への国際交流研修に参加させることが可能になっています。こうした支援が10代での海外体験を可能にし、その後の勉学への動機づけに大きな効果を与えています。また、班部活動にも多くの卒業生が監督・コーチとして日々指導にあたってくれています。その他、進路説明会や「ようこそ先輩」などで優秀な先輩達に接することで、生徒たちはロールモデルを見出すことができ、いかなる研鑽を積む必要があるのかを学んでいるのです。優秀な先輩を常に後輩が目標とし、さらなる成長を遂げる環境こそ「伝統校」の意味であると考えます。

総明会は、素晴らしい人材が集まる同窓会ではありますが、今後は明治中学校・明治高等学校の生徒の育成にも文武両面において積極的に関わっていただきたいと存じます。



座右の銘 ～総明会50周年に想う～

明治大学付属明治高等学校・中学校同窓会
総明会名誉会長 向殿 政男 昭和36年卒

誰でも座右の銘の一つぐらいは持っていると思います。

“不易流行”、これは、時々、私が総明会の会報誌に書いたり、会長としての挨拶などに口にした言葉です。私の座右の銘の一つとしてきました。芭蕉の言葉といわれていますが、“変わってはいけない本質的なものを基本に、時代の変化に柔軟に対応して新しいものを取り入れて行く”、という意味にも、また、“時代に対応した新しい変化（流行）を重ねていくことこそが、不易（変わらないこと）の本質である”、という意味にも解釈されています。最近、私は、益々この感を強くしています。それは、私の生きた時代の変遷と選んだ職業分野の革新が関係しているのでしょうか。戦前に生まれて、戦後の食糧不足を経験し、その後の経済的発展や停滞期等を経験したという時代の変化や、また、私が飛び込んだ情報やコンピュータの世界の激変が大きく影響していると思います。誠実さを基本に、激変する時代を経験してよくここまで生きて来たものだということに、感慨を覚えるからです。

翻って、わが母校の明治中学・高校は、そして総明会はどうでしょうか。戦前の旧制明治中学時代、明治大学付属中・高時代、そして現在の調布での男女共学の時代、母校も変遷を重ねております。しかし、創立100年を越えても、質実剛健、独立自治、挑戦する前向きな精神は変わっていません。同窓会である総明会も年を重ねて今年で50年、感慨深いものがあります。私の会長時代の前後に総明会と命名したと思いますが、その少し前ぐらいから、現在のホスト学年制度という素晴らしい仕組みは確立されていました。その後、財政的な確立、組織としての制度的な整備がなされ、会員皆様のご努力で時代と共に隆盛を向かえ、現在の総明会に受け継がれています。そこに貫いているものは、明高魂と友情と繋がりでしょう。

言葉や組織は命を永らえますが、そこを通過する人間の寿命は有限です。母校や総明会は、次々と受け継いでいく教職員や生徒、卒業生が時代と共に形づくって行くものです。そこでの総明会活動の基本は、母校を支援し、それを通しての同期、先輩、後輩間の触れ合いにあります。総明会の伝統は、これからも引き継がれ、時代と共に新しい活動に挑戦することになるでしょう。品格と風格を持った組織とそれを支える構成員、それが、次なる総明会の目指すべき方向でしょう。



總明会三題噺

明治大学付属明治高等学校・中学校同窓会

總明会顧問 **小林 昭雄** 昭和22年卒

時は昭和30年代末、某日某所に昭四会（昭和4年卒）の集まりがあった。^{たまたま}談偶々同窓会の事に及び論議沸騰、これが同席の蒲山先輩より同じ剣道部OB諸氏に齎され、事は同窓会設立準備会立ち上げへと進み程なく発足した。小生は、準備会一員に指名された同期級友が多忙を理由に代役を申し越したことにより急遽出沒した次第。

作業を進める昭四会・剣道部OB方に、時しも明治大学 島田法学部長（昭和8年卒）明治高校校長就任の朗報が入る。活動に拍車がかかり、翌昭和40年6月5日明治大学記念館にて創立総会を迎える。

上記を昭四会・剣道部・島田校長をお題とする三題噺その一とすれば、会報・会名・会旗をお題とする以下はその二である。

まずは“会報”、第二代片岡会長就任に時を合わせる如く昭和50年4月第1号が発行された。奥野先輩による編集で2号以降は広報委員会、第9号より担当学年制の定着により総会運営担当学年が兼務となり、標題も「總明会会報」となる。ついで“会名”、昭和59年10月神田YMCAに於ける評議員会で、公募会名につき評議の結果、片岡名誉会長の裁定に一同賛同、「總明会」と決定。後日、鶴澤先生のご子息に通知、ご了承頂く。“会旗”は伊藤君（昭和31年卒）の執念の結晶、独力で企画・制作を成し遂げた。昭和60年7月完成。会名揮毫は書をよくする同期岡本怜一君。

かく喫緊事成就の一方、「会」体制整備も向殿会長はじめ三代にわたる新制世代会長と会務に長じた諸君の尽力により進展した。しかし今や、母校の変革、環境の急変をうけ「会」も即応すべき時機を迎えてはいまいか。憚り乍ら唐突なことを承知で古人の言を引かせていただく。

「衣は新しきに若くは莫く、人は故きに若くは莫し」（晏子春秋）

衣は新しい方がよく、人は気心の知れたた昔馴染みがよい、との謂。

終わりに、笹村会長諸先輩に感謝と哀悼の意を表したい。



総明会は 永遠に不滅なり

明治大学付属明治高等学校・中学校同窓会
総明会顧問 **山浦 晟暉** 昭和29年卒

総明会設立50周年、誠にご同慶の至りに存じます。総明会は、創立102年の歴史と伝統ある我が母校の男坂で汗し、同じ学舎で青春を過ごした同窓生が結束し、初代校長、鶴澤總明先生のお名前を頂き発足し、「総明会」と命名した。正しく、オール明治の同窓会である。

初代笹村会長から、今期の尾島会長まで、半世紀の長きに亘る多くの喜びや感動、そして数々の苦難を乗り越え、歴代会長以下執行部のリーダーシップと会員各位の協力、又学校・PTAの温かいご理解とご協力により、今日の繁栄・発展があった事に、感謝と敬意を表します。

私が明中入学時（昭和23年）の校舎は、米軍の空爆を避ける為、真黒に塗られたままであった。戦後の荒廃した社会で、国民は夢中で復興を目指し、一枚岩で頑張った。

日本の教育は、米軍マッカーサー司令官指導の下、私が選んだ剣の道も「剣道部」とは云えず、「竹刀競技愛好会」としか云えない時代であった。そんな環境下でも、硬式野球部は「強豪明治」と云われ、春夏甲子園に7回出場した。私は、その甲子園の感動をOBや現役の明高生にも、再度味わってもらいたいと、「明高野球部を甲子園に送る会」を設立した。

「質実剛健」「独立自治」の建学の精神に与えられた卒業生は、大学の中核を担う個性ある学生と成り、又現代社会の各界にて活躍し、自らの人生を築いている、多くのOBで構成されているのが総明会である。決して「最後まで諦めない明治魂」、その精神力で目標達成にかける「執念」と「忍耐力」、その明治魂の結集された総明会の会員である事に、自信と誇りを持ち、会の目的である会員相互の結束と親睦を計り、母校の発展に一層賛助して行こうではないか。

同窓の仲間と青春に戻って、幸せを交わす時間を持てる総明会、その仲間との出会いは、何物にも替え難い人生の至宝である。公私共に多忙な45才の幹事担当学年が、同期生の強い絆と責任感により、その責務を果たし、次年度に毎年引継ぐ友愛、これこそ正しく同窓会の感動と繁栄を演ずる、「世に誇れる大ドラマである」と毎年心より感銘させられている。

「総明会は永遠に不滅なり」設立50周年は、総明会100周年に向かっての、折り返しの新しい出発点であり、この機を総明会は、輝かしい未来に向い、尚一層、母校愛・同窓愛の絆を深め、次なる60周年の新たなスタートの年とし、益々名門、明中高の同窓会として、飛躍発展される事と会員各位のご健勝ご多幸、そして更なるご活躍を併せて祈念し、祝辞とします。

ふ え き り ゆ う こ う
不易流行



明治大学付属明治高等学校・中学校同窓会
総明会顧問 山崎 敬生 昭和32年卒

人はみな様々に故郷を持つ。多感な青春を過ごした母校もその1つに数えられよう。特に中学・高校で仲間と過ごした時間は色濃い筈だ。巣立ち、社会の荒波と斗い、そして老いていく過程で、ふと振り返った時、ひとしお懐かしく、いとおしさを感じる。

鳥に帰趨性があるように我々にも母校への温もりを求める思いがある。大正6年卒に始まり、今に至るまで明治中学・高校の同窓の流れは大河の如きである。その大河の雫の一滴、一滴を集め、それを俯瞰^{ふかん}し質実剛健の下、守ってきたのが総明会である。

その総明会が50周年を迎えた。当初の10年は戦後OB中心で運営がなされてきたが、呼びかけに応じ戦後のOBが召集されたのが、昭和49年、自身35歳の時、初めてそこで卯木先輩と出会い、そこから戦後OBの快進撃が始まった。奇しくも駿河台に新校舎が建った同時期である。卯木さんはすでに他界されたが、戦後OBの中核であり、総明会の中興の祖とも云って過言ではない。

以来40数年の間、数多の先輩・後輩と共に会を支えてきたが、共通したものは母校愛、同窓愛を強く持ち、利害損得を考えず、私利私欲もない「志」の高さであったと思う。

『孟子』に「志何をか事とす 曰く志を尚うす…」とある。

我が総明会の尚ぶ所 唯志

第二代 片岡会長も忘れてはならぬ。慈雨を降り注ぎ育ててくれ、小林元副会長がその精神を継いでくれた。総明会の近代化を図り大輪の華を咲かせてくれたのは第五代 向殿会長である。その功は偉大。

そして五十周年を古武士の如き尾島会長を中心として若手の面々が活躍し迎えられた。

母校も「志」高い校長、教育者により将来を見据えた男女共学の中高に育ってきている。これからの総明会は、女子OBを含め人間としての良識・見識を持って運営されんことを切に願う。

時代は変わろうと総明会の本質は変わることはない。



総明会会長当時の 思い出

明治大学付属明治高等学校・中学校同窓会

総明会顧問 佐久間 洋一 昭和43年卒

私の会長時代（2003年11月から2009年11月まで）は、前半が会則の改訂、後半が調布現校舎移転に関する活動に明け暮れていた。

前半の会則改正は、私が会長就任に際しての公約であった。改正の目的は、主として会長選出方法をめぐる会員の不満、疑問を解消することであった。このために会長就任後間もなく組織検討委員会を立ち上げ、関谷専務理事（当時、以下の肩書も同じ）、北島委員長を中心に協議を重ねた。しかし、時間ばかりが経過するものの委員会が紛糾し、合意案どころでなかった。2005年11月の会長再選後も見通しがつかなかった。2006年の総会に改正案を示し総会の承認を得なければ、翌2007年11月の会長選任は、これまでの会則で運用しなければならず、混乱が予想された。そこで、私も2006年5月頃から組織検討委員会の議論に参加し、同年夏ようやく改正案ができた。同年11月の総会にこれを上程し、ようやく総会の承認を得ることができた。これが現在の会則であるが、そのポイントは、①会長、副会長選出方法の透明化。②評議員会の位置づけ。③評議員会の構成の変更。

つまり評議員をこれまでの各学年選出の委員に加え、各班クラブOB会からの選出者を委員としたことである。

会則改正の目途が付き始めた頃から、前年の2005年7月に立ち上がった母校移転記念事業、創立100周年記念事業についての協議が総明会内において本格化した。上記について主として、理事会・評議員会において協議した。その結果、会員から合計1,000万円以上の寄付金を募るとともに、記念品としてモニュメント等を母校に寄贈しようということになった。

モニュメントは、現在母校の鶴澤総明ホールの壁面にあるレリーフである。悩ましいことは、どのようにすれば1,000万円の寄付を集めることができるかであった。会員の皆さんに対して、書面・会合等で、繰り返し寄付のお願いをするのは当然のことながら、母校の協力を得て所得税の寄付控除の特典を設けるなどした。その結果、どうにか目標額の達成ができ、安堵の胸をなでおろした。

兎にも角にも、現在総明会の存在と発展について、諸先輩をはじめとする会員の皆さん、母校、その関係者に感謝します。



総明会50周年記念誌 刊行によせて

明治大学付属明治高等学校・中学校同窓会
総明会顧問 **服部 雄二** 昭和44年卒

総明会50周年おめでとうございます。

私が総明会に関わったのは、二十代半ば頃だったと思います。当時の総明会は今の様に組織化されておらず、幹事の集まりも一年に数回でした。その時一番年の近い先輩は山崎敬生先輩で、大先輩達の集まりの中、私のような若輩者は意見も無く、居心地が悪かったのを覚えております。

会に出席しても何をしたいのかかわからず、当時の私にできることは集合時間よりも早く行き、大先輩方々のお茶汲みをする事だけでした。しかし、その経験が、その時の先輩方々に顔や名前を覚えて頂くことに繋がり、後の総明会で大変役に立ちました。

総明会に入った当初こそ私にとっては毎回恐縮してしまうような会でしたが、だんだんと年の近い先輩方や同期の出席者も増え、私が四十代の頃には、同期と総明会幹事学年を務めさせていただくことになりました。

私達は駿河台の明治高校で総明会総会の開催を企画し、皆仕事と総会の準備で大変忙しい日々を送りました。しかし、同期の仲間達と共に総会に向けて頑張った時間は、まるで学生時代の文化祭の様でとても楽しく、良い思い出となっております。

幹事を務めさせて頂いたお陰で、学生時代にはあまり親交のなかった友とも親交を深めることができ、同期との絆も強くなりました。かけがえの無い友ができたことが、私の何よりの財産です。

五十代に入り総明会の役員に選出された時には、私には不相応であると恐れ多い気持ちでありましたが、選出して頂いたことに感謝し、役員を務めさせて頂きました。

総明会に関わった事で、私は今まで経験できなかった事を経験させて頂き、諸先輩方をはじめ様々な方と出会い、そして勉強をさせて頂きました。総明会のお陰で私は成長出来たのだと大変感謝しております。

この素晴らしい総明会が今後も末長く続く様、心より願っております。

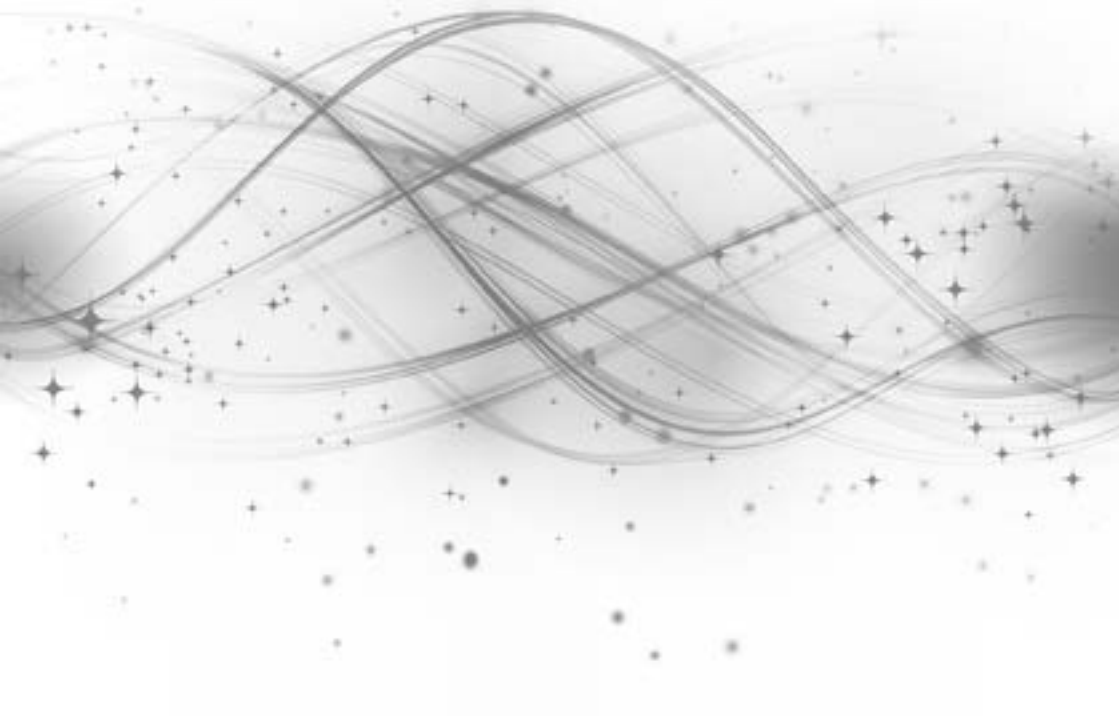


大正 11 年猿楽町校舎



昭和 12 年 本校に航空グライダー部が創設された

第2章 総明会の歴史



第1節 同窓会の発足

昭和40年6月5日。記念すべき第1回同窓会が開催される。戦前に僅か2回だけ開催された同窓会は長い沈黙のあと復活する。この50年間は「同窓会」時代の苦難を乗り越え、「総明会」へと繋げた人達の時代を模索した物語である。

同窓会は決して安定していたわけではない。脆弱な財政基盤、低調な同期会活動、同窓の融和。これらを乗り越え50周年を迎えたのはひとえに「母校愛」といった至って単純でわかりやすい同窓会を支える根幹があったからだ。

そして、今も継承している同期会の輪が同窓会であるという50年を貫く理念が少しも変わらなかったからだろう。現在に至る総明会を辿ってみたい。

1. 同窓会の設立

1912年(明治45年)4月に開校されたわが明治中学校には、在校生を普通会員、卒業生を特別会員とする「学友会」なる組織があった。しかし、卒業生が年々増加するにしたがい「同窓会」設立の気運が高まり、1924年(大正13年)学校・卒業生の発議により、発会に向けて具体的準備が始められた。

こうして、1926年(大正15年)1月「同窓会」が設立され、母校講堂において第1回総会が開催されたのである。そこでは、鵜澤總明校長他諸先生の講話があり、芸能人の余興が催された。

会則の主なものは、「同窓会は学友会に属するものとし、会長・副会長は、校長・教頭が兼ね、総会を毎年1回開催する。」というものであった。

このようにして発足したものの、第2回総会は大正天皇の崩御により延期され、2年後の1928年(昭和3年)開催、第3回以後の総会は開催されず、活動は停止したままであった。その後、戦後20年間も母校の同窓会が空白であったことは、たとえ戦争敗戦という国土荒廃した非常の出来事があったとしても不思議でなかった。

それでは戦前の同窓会はどうであっただろうか。戦前の同窓会の記録は母校には皆無に等しかったが、1991年(平成3年)急逝された新井久雄先生(昭和27年卒)が、熱心に探された数冊の古い「学友会誌」(旧制時代に毎年発行)の中に、第1回と第2回総会の記事があった。

大正14年発行の学友会誌には「同窓会に就いて」と題して、その設立の主旨と会則が載っている。

「明治中学同窓会の設立は、既に5、6年以前から計画せられつつあったが、機漸く熟し、今

秋愈左の規則に因って設立せられた。

生徒は学校を卒業したからと云って、学校と縁が切れたのではない、卒業生という切っても切れぬ縁があるばかりでなく、学校は卒業生の幸福を祈り、卒業生は又学校の発展を冀い、その親しみは特に深いものである。而して卒業生と学校の関係は生徒と学校の関係の延長であるから、同窓会は校友会の一部となったのである。

生徒が校友会の会員である以上は、卒業生は当然同窓会の会員であるべきである。其の同窓会員が、卒業後各地に散在した時に、毎年会費を払うことは中々困難である。それで永い間校友会費の余剰金を積み立て置いたのを以って校友会の基本金となし、同窓会員から別に同窓会費を徴収しないことになった。つまり学校を卒業すれば、同窓会に入会金も会費も納めなくて、当然同窓会員となり、毎年会員名簿の配布せられることになったのである。」とあり、「明治中学校同窓会規則」として第1条から第16条まで載っている。

特記すべきことは、第2条で同窓会を明治中学校校友会の一部としたこと、第5条では会長は校長、副会長は教頭とし、幹事は母校職員2名、各回卒業生2名で、全く母校主導、母校依存型の同窓会であった。当時の卒業生は毎年100名前後で、大正13年というと卒業生の数も500～600名しかなく、しかもその大部分はまだ大学在中で経済力がないため、同窓会費なしはありがたいだろう。反面、卒業生の自主性が全くなく、戦後同窓会に空白が20年も続いた原因の一つが、このあたりにあったのではなかろうか。

総会は毎年1月に開くと規則で決められ、第1回総会は大正15年1月5日に開催された。この年の校友会誌によれば「大正15年の新春を迎えた第5日、宮中にて新年宴会を行わせられるという嘉辰、吾が同窓会は其の第1回総会を母校の大講堂に開催した。午前11時、飯高蔵司

うざわ ふざあき 鵜澤 総明

1872年（明治5年）千葉県長柄郡（現在の茂原市）にて誕生する。1886年（明治19年）地元的高等科を卒業後、同校の教員として就職する。後に、儒者の太田和斎氏に弟子入りし、石井菊次郎氏らとともに漢学を学ぶ。その後上京し、旧制第一高等学校に入学する。

1908年（明治41年）衆議院議員に当選。1912年（明治45年）に明治中学校初代校長に就任。そして、総明会の前進である同窓会の初代会長である。後に名前をいただき「総明会」となった。1927年（昭和2年）に大東文

化学院（のちの大東文化大学）総長を経て、1934年（昭和9年）には明治大学総長に就任する。この間1928年（昭和3年）には貴族院議員に選ばれている。

また、特に弁護士としても著名で、東京帝大で法律を学び、第二次大戦後の極東国際軍事裁判の日本側弁護団長となったほか、浜口首相暗殺の佐郷屋留雄事件など、常に人権の擁護に尽力された。



調布の母校構内にある鵜澤校長の胸像。

君（第1回卒）の開会の辞によって会は藹々たる和気を湛えて開かれ、大橋副会長の同窓会設立変遷に関する細話に続いて、鶴澤総明会長の追憶談、希望談、中村孝也博士の講話があったが、何れも拍手喝采裡に終わり、昼食となり、一同精養軒の料理に舌鼓を打った。食後大谷内越山師の講談、嘉本潤水師の薩摩琵琶、其の他会員の落語等種々の余興が演ぜられ、一同は互いに飲を罄し愉を極め、時を移るを覚えない有様であった。かくして午後3時30分布施禎章君（第2回卒）の挨拶で盛会裡に閉会を告げた。当日の来会者は142名と注ぜられた。」。

第2回総会は前述にもあるが、大正天皇崩御のため、1年おいて昭和3年1月5日に本校大講堂で開催された。和田寿次郎氏（第3回卒）の開会の辞、大橋副会長の同窓会沿革談、昼食をとりながら桂文治師の落語「館林」、桃川若燕師の講談「鶉鴉兵衛」が催された。当日の来会者は80名であった。

この後記録が残っていないので、戦前の同窓会の総会は2回で終わったとも考えられる。

その理由としては、当時すでに軍事教練が始まり配属将校が来校しており、昭和6年には滿州事変など、日本は軍事国家の道を進んでおり、学校内外の状況は到底同窓会を催すなどの雰囲気になかったと考えられる。

2. 戦後の同窓会再建へ

戦争を経て戦後19年、その前年頃より胎動しつつあった「同窓会」再興の動きが活発になり、数度の会議を重ねて、1964年（昭和39年）11月21日、有志による「明治中学校・高等学校同窓会設立発起人会」が発足した。時勢は未だ定まらず、昭和38年にケネディ暗殺、39年には米空軍の北ベトナム爆撃があり、国内では、池田内閣から佐藤内閣へ移行し、東海道新幹線開業、東京オリンピックの開催など、明るいニュースもあった。

発起人会発足にいたるまでには、母校を愛し、その発展を願い、苦楽を共にした学友たちを団欒の輪の中に集わせたいという有志たちの奉仕があったことを記しておかねばならない。

発端は、旧制明治中学校第13回卒業生の集まりである「明中昭四会」が毎年1回適宜の場所で会合し、酒を酌み交わしながら旧友を温めていたことである。ここに、明中昭四会の会員以外の酒田留吉氏（昭和5年卒）、島岡吉郎氏（元明治高校野球部監督・当時明治大学野球部監督）も特別参加されていた。酒田氏が卒業された昭和5年卒業生には同期の集まりがなく、また、島岡氏も明治高校野球部の監督をやり、本校に強い愛着を持っているものの、本校の卒業生ではないため、監督をやめた後は学校との繋がりがなくなってしまい、ほぼ同年輩の「明中昭四会」の仲間に入れてくれということであった。会の席上当然のことながら、母校の同窓会が中断したままなことを嘆く声が起こり、出席者一同は何とか再建に努力しようということで、意見が一致したのである。

翌年、「明中昭四会」の幹事の話し合いの中で、「クラスメートでない者をクラス会に呼ぶのはおかしい」との話が出たが、「こうしたことが問題になるのは、やはり母校に同窓会がないためなのだ。この際、積極的に同窓会再建策を推し進めよう。比較的連絡のとり易い他の期の同窓生にこの会に出席してもらって、そこで相談しよう」ということになった。

こうして、いわば「拡大版明中昭四会」は、昭和39年10月2日、銀座のいさみ会館で開かれた。出席者は野木、原、小野の3先生に級友19名、加えて昭和3年卒業の宮下佐久雄氏、同5年卒の酒田留吉氏、同8年卒の高木正夫氏、同9年卒の滝沢寿雄氏の合計26名であった。その席上、同窓会再建として次のことが決定された。

1. 次の者を明中同窓会再建に関する第一段階の発起人とする。

昭和3年卒 宮下佐久雄

昭和4年卒 橘 義道、柚木 博、岩田 守、蒲山 博

昭和5年卒 酒田留吉

昭和8年卒 高木正夫

昭和9年卒 滝沢寿雄

2. 上記の発起人及び明中昭四会員は、前後各卒業年度の知己と連絡をとり、各年度毎に2、3名の適任者を選んでもらい、これを同窓会再建の正式発起人とする。
3. 第1回の正式発起人会は同年11月開催を目途とする。
4. 上記2.の発起人会は極力充実させるように努力し、その席上でさらに第2回発起人会の開催日を定める（予定としては昭和40年春）。

そして、在学当時剣道部に籍をおいていた蒲山氏、高木氏の両君が剣道部の先輩後輩に連絡をとり、また長い間明大相撲部の監督で顔の広い滝沢氏が同窓の友人知己に働きかけ、昭和39年11月21日、母校で第1回の発起人会を開いた。この発起人会には、前記第一段階の発起人はもちろん、総勢12、3名の同窓生が集まり、学校側からも事務長が出席して、同窓会再建の方策を相談した。もちろん全員が再建に賛成であり、今後新制中学・高校卒業生を含め、さらに発起人の数を増やすこと、会則案を作ること、同窓会総会開催の時期は来年初夏を目途とすることが合意された。

ところが、再建の話が進み通信費等の諸費用がかかるのに、資金が全くなかった。そこで蒲山氏から、当時俵ローヤルゴルフの社長をしていて、羽振りのよかった級友山崎泰明氏に相談し、10万円の寄付を受け、これをその資金に当てることとした。

また、発起人の拡大と親睦を図るため、昭和39年12月18日に発起人懇親会を催したが、この時には出席者の数も増えて30数名となり、和気藹藹のうちに談笑し、同窓会再建の気運は

大いに盛り上がった。

翌年の昭和40年2月27日、母校で第2回発起人会を開き、会則、各卒業年度の委員を決めた。

そして3回目の発起人会は昭和40年4月17日、母校の会議室で開かれ、同窓会創立総会開催の計画は相当具体的になり、次のことが決められた。

1. 開催日時は6月5日(土)午後2時からとする。
2. 開催場所は明治大学内とし、その承認や、会場設営については滝沢氏が骨を折る。
3. 会費は、一般500円、学生は低額にする。
4. 会長、副会長、理事候補者等の役員候補者は次回の発起人会で決める。
5. 総会開催の通知状を早速印刷し出来上がったものを発起人が手分けして発送する。
6. 校長等学校的首脳部に同窓会再建に関する正式申入れをしていないので、発起人の代表者が近日中にその申入れをする。

昭和40年4月26日には、蒲山氏、高木氏、滝沢氏、柚木氏が母校を訪れ、島田正郎校長、福岡雄教頭、事務長に会い、同窓会再建の準備を進めている経過を説明し、学校側の協力を要請した。これに対し島田校長から、「同窓会の再建は結構であるが、それが学校に対する圧力団体になるようでは困る。」旨の発言があったが、「同窓会は会員相互の親睦を深め、母校の発展を図ることのみを目的とするもので、圧力団体となる意志など毛頭なく、第一、どこの学校にも同窓会があるのに、当校にそれが無いのはおかしい。」旨を強調した。1時間余り話し合ったところ、元来、島田校長自身が旧制明治中学校の第17回(昭和8年)卒業生であることから、結局学校側も快く了解し、発起人らの同窓会再建に注いだ努力を多とすると共に、学校側としても全面的に協力することを約束してくれた。

4回目の発起人会は、5月15日母校の会議室で開かれた。この会は、同窓会創立総会・懇親会前の最後の発起人会のため、細目にわたる打合せが行われた。

1. 総会は明治大学記念館を、また懇親会は同大学体育館4階を使用する。
2. 総会は議長団が議事進行の任に当たり、議事は同窓会再建に至るまでの経過報告、会則の承認、役員の選任という順で行い、懇親会は総会が終わり次第開会する。
3. 議長団は大沼孝夫氏、岩田守、山崎晴一の3名で構成することとし、総務、受付、会場、会計等の各係を発起人が分担する。
4. 会長、副会長、その他の候補者を選出。
5. 総会及び懇親会には、教えを受けた恩師を招待する。

その他、当日支障を来さぬよう細々としたことが決められた。

以上のような経過をたどって、昭和40年6月5日明治中学高校同窓会の創立総会及び懇親会が開かれるに至ったのである。

盛況裡に終了した総会において、初めて選任された会長と副会長は次の3人であった。

会 長 笹村越郎(大正 9年卒：旧制第4回 汽車製造(株)社長)

副会長 片岡龍夫(大正10年卒：旧制第5回 共同印刷(株)常務取締役)

副会長 嶺 駒夫(大正12年卒：旧制第7回 昭和製袋(株)社長)

三人は、満場一致衆望を担って就任した。

その後、総会は毎年開催され、第2回より第10回までは、笹村会長が社長を務める汽車製造株式会社が法人会員であったことから、由緒ある丸の内の日本工業倶楽部大ホールで行われ、昭和22年卒(旧制第31回)の有志が運営を担当した。

この再建から10年間の同窓会活動の様子を何う資料は少ないが、明治中学高等学校「六十年の歩み」に記載されている文章を転用し、ここに紹介する。

◎昭和43年の役員改選では副会長の嶺氏が健康上の理由で副会長を辞め、代わって東洋大学教授で国際会話学院院长の山崎晴一氏(昭和7年卒)が副会長に就任した。理事には若手から17名増員して全員で36名となった。

◎昭和45年の改選では嶺氏の健康回復と山崎氏の国際的活躍の活発化で副会長が交代しただけで他の理事は再選となった。

この間、同窓会は母校より南志賀学寮建設の資金募集について協力の要請を受け約200万円を募金し学寮建設に協力した。この学寮は同窓会会員はだれでも母校事務室に借用を申し込み利用できるものとなった。学寮はその後昭和46年7月火災で焼失したが、昭和47年7月旧に倍する規模で再建された。

◎昭和45年2月に同窓会名簿2号を発行した。これは各期の学年委員が自分の期について電話帳を繰ったりあるいはハガキで問い合わせ、あるいは区役所等で調べるなど、献身的に活躍してまとめたものを編集したものであったが、学年委員に対してクラス会等の協力が充分ではなく住所不明者を多く掲載しなければならない期もあった。さらに充実したより完璧な名簿の完成が望まれていた。

◎昭和47年の改選では会長以下全員が再選された。また、この年は母校の創立60周年にあたり、その記念事業に協力を要請され、約300万円の資金を集め、母校に協力した。

昭和40年の再建第1回総会から昭和49年第10回総会までは、旧制明治中学校卒業生が中

一般社団法人 日本工業倶楽部

日本工業倶楽部は現在でも財界で活躍する人たちが名を連ねる。大正6年当時の実業家329名が集い、相互の懇親の発展のために設立された。そして、大正9年11月に会員の交流施設として、丸の内の東京駅駅前広場に面した角地に日本工業倶楽部会館が竣工した。建物は鉄筋コンクリート造5階建て、一部に鉄骨が用いられた。外観は「近世復興式」と呼ばれ、正面玄関に古典様式を用いているほか、全体的には幾何学的構成によるゼツウシオン様式で簡素にまとめられており、大正期の時代性が強く反映されている。一方、内装は倶楽部建築らしく華やかであり、各階の中心にある広間とそれらを立体的な一つの空間として繋げる大階段、談話室、貴賓室、そしてなによりも大会堂、大食堂といった大空間に見事な装飾と空間性を見ることができる。平成11年8月23日、登録有形文化財として登録されたが、老朽化の為平成15年3月に会館の南館部分を保存・再現し、三菱信託銀行本店ビルとして竣工した。

平成27年5月11日、当時の同窓会の様子を知る数少ない卒業生で、戦後同窓会組織の発展にご尽力いただいた昭和22年卒業の小林昭雄氏と共に、今も東京駅丸の内口から見える日本工業倶楽部会館を訪問した。小林氏は当時、日本工業倶楽部会館での総会・懇親会の準備委員を担当しており、毎年打合せにここを訪れていた。あれから50年の歳月が経った建物は、当時と全く同じ佇まいで私たちを迎えてくれた。1階は受付、階段を上がると2階には大会堂があり、更に上がった3階には大食堂がある。小林氏の話によれば、この大食堂で総会・懇親会を行っていた。総会は午後1時頃から始まり、引き続き懇親会となった。参加者は約130名で、この素晴らしい大会堂で和気藹藹とした中にも緊張感のある総会・懇親会が行われていた。また、当時の日本工業倶楽部会館側の担当者であった山根氏の計らい



総会が開催された日本工業倶楽部3階大食堂

で女性バイオリン合奏10数名の生演奏が会場で流れていた。山根氏は慶応大学OBで、同じく慶応大学OB・音楽家の服部正氏を通じてこの生演奏を手配してくださった。第2回から第10回までこの日本工業倶楽部会館を同窓会会場として使っていた。参加者の大半は旧制中学校卒業生で新制高等学校卒業生は数名だった。その新制高等学校卒業生が受付などを担当していた。毎年同じ場所で同じ仲間に出会える同窓会。そしてステータスある会場での総会・懇親会は昭和40年に再開した同窓生たちの旧交を温める最高の場所となった。

日本工業倶楽部会館には当時ここで明治中学校・高等学校の同窓会が開かれていた記録はない。従って開催日や時間、規模などの詳細な記録も残っていない。

今回、館内のご案内をお引き受けいただいた一般社団法人日本工業倶楽部調査部・保土田大介氏の好意で開館当時の記念葉書を頂いた。ものの言わぬセピア色の葉書からは時代を越えた重厚感を感じる。



心となり名簿の整備の苦労や学校への寄付金、運営費の資金不足など現在とは比較にならない難題に対応した時代であった。特に名簿は、第1回総会の翌年昭和41年6月5日に発行された。1年間という短期間で纏め上げられたことは、特筆すべき点であるが、昭和29年卒、昭和31年卒～39年卒が不詳となっていた。その後、役員、各学年幹事、学校側の一方ならぬ苦勞により、完全に各学年が揃ったのは、15年後の昭和56年のことであった。まさに同窓会の基盤作りの時期であった。この時期があったからこそ現在の総明会があり、存続発展していることは決して忘れてはならない。

また、同窓会の理念、すなわち同期会の集合体が総明会であり、学校との連携なくしては成り立たないことが確認されたのも、この時期である。

第2節 幹事学年制へ

1. 第2代会長 片岡 龍夫

第10回総会（1974年・昭和49年）において、会の基盤を築いた笹村会長に代わって、片岡龍夫会長が就任し、笹村会長は名誉会長に就任した。

片岡会長は、在任中様々な同窓会事業の改革を行い、現在の総明会の原形となるものを創っていった。

- 組織の充実
- 会報の発行
- 会費納入方法の変更（個人から学年単位へ）
- 総会運営、会報発行の担当制度化（従来は本部と特定同期会との合議による委嘱制だったが、卒業年次順に順次繰下げ当番制へ）
- 会則の改訂（現実に即しての整備）

など、会の拡充と共に、旧制世代より新制世代への交代の布石を打った。その指導力と包容力によって執行部を導き、会の発展に資するところ大なるものがあつた。

2. 会報の発行

昭和49年に片岡会長が就任してまず手掛けたことは、昭和50年に創刊した会報発行业務であった。現在では毎年発行されている会報誌の発行は、同窓会の念願であった。しかし、実

際の創刊までには同窓会復活から10年という歳月がかかっている。人材、資金、組織、あらゆる面で足りなかったと思われる。昭和50年4月20日に創刊された「明治中学高校同窓会々報」第1号に、片岡会長が「同窓会々報創刊にあたって」というタイトルでその思いを綴っている。

「同窓会の皆さん、今回ようやく待望の同窓会報が、創刊されることになりました。まことに同慶に堪えません。戦争によって中断されていた同窓会が、昭和40年6月5日明治大学の記念館を借りて、再建第1回創立総会をもって以来、毎年6月に開く総会も今年で第11回総会を迎えることとなりました。そしてこの10年間に会員皆さん方のご努力とご支援によって、わが明治中高同窓会もしっかり根をおろしました。しかしわれわれは現状で満足しておるものではありません。現状1万人の卒業生がいるわけですが、毎年総会に出席される方は2百余人にすぎません。どうしたら総会出席人数を増加させることができるのか、また戦後の卒業の諸君にもっと参加して貰うにはどうすればよいのか、会の運営費用はどうするか等、今後会を発展させるためのいろいろの問題をかかえております。同窓会はいま基礎づくりを終わり第二の発展期を迎えています。このときにあたり会報が創刊されることは全く時宜を得たもので又会の発展にはなくてはならないものと思います。年1回の集まりだけでは会員相互の意思の疎通も計れず、十分な心の交流も望めません。

今後はこの会報を媒体として、会員相互の親睦を計り、年度クラス会との連絡を密にすると共に、母校との連携を深めつつ同窓会のバランスのとれた拡大発展を願うものであります。」。

総会参加者の拡大施策、戦後同窓生との融合、運営費の確保等の問題を抱えながら、会報発行への期待が感じられるものである。片岡会長の言葉のとおり、会報が会の発展に寄与し、会員相互の意思の疎通や親睦を深め、母校との連携を密にした媒体となった。

創刊号の内容は、全4ページにわたるタブロイド判であった。1面は上記会長挨拶、笹村名誉会長の寄稿、学校長福島則雄先生の寄稿、第11回同窓会の案内。2面以降は同期会の報告とクラブOB会の報告である。まさに手作り感あふれる紙面となっている。編集者は旧制中学第24回卒業（昭和15年卒）奥野博司氏である。同窓会名簿によると職業欄に「料亭時報社」とあるので、出版関係者だったのだと推測される。

4ページながら、創刊号は現在の会報にも通じる編集内容である。会報のタイトルは「明治中学高校同窓会々報」とあり、そのタイトルの下に「会名募集」とある。当時はまだ「同窓会」と呼ばれており、現在の「総明会」となるのはまだ先のことである。

3. 会則改正

総明会事業の基盤となる様々な施策を導入した片岡会長であるが、その背景には、現在とは異なる多くの課題が山積していた。その当時の状況を憂い、同窓会の将来を提言した文章

が、会報第2号に寄稿されている。寄稿者は三上外喜男氏（昭和17年卒）で、「組織・会費より見た同窓会の将来像」というタイトルで会員に呼びかけている。

「役員諸兄のご努力にもかかわらず、既に十年を経た現在も同窓活動は思うに任せていません。昭和40年の発足時以来情熱を注いでいただいた諸先輩諸兄のご尽力、そして島田前校長、福島校長に代表される母校側の真摯なご協力、これらによってもたらされた同窓会も、残念ながら、昨今、あの悲願の発足成った当時の熱意が薄れがちで、協力姿勢を整えつつある学校側に逆に失望を与えかねないことが憂慮されます。

活動の低調は運営基盤が虚弱であるというところから来ており、その虚弱は、又、運営以前に考えられる同窓会と卒業生との結びつきの弱さや運営にあたっての活動の資金力、事務力の不足にあるといえますが、現状これをやむを得ぬこととしてこのまま過ぎますと、大切な同窓会も日増しに衰退に向かうであろうとおそれられます。それを防ぐには、再び発足の時点に立ちかえって反省し、組織が全学年次的に確然と整わぬままに進んできた根本的な弱点を整備し直すことが先決であると考えます。

組織の動脈根幹である委員会の再編をはかり、全同窓会諸兄に今一つ納得してもらえる活動の実施展開に向かうべきだと考えます。望ましい将来像は一朝一夕に築かれぬことは確かですが、それを目指す次の一歩として、組織・会費面に対する修正案を以下のように私案としてご批判に供したい次第であります。私案とはいえ、機関紙上でいきなり会則の修正提案にまで及ぶ行き過ぎを、お許しいただきたいと思います。』。

翌年の昭和52年、三上氏の提言により会則は改訂されたが、三上氏の提言がそのまま採用されたわけでない。しかし、その意図をくみ取り、大きく以下の内容が改訂された。

- 入会金の徴収方法とその使い道として基金を設定
- 各学年単位での年会費徴収とその財源を活用した委員会設置
- 同期会を確立させ、同窓会活動に寄与させる代表幹事制導入

など、現在の総明会活動の基盤となる会則改訂となった。

4. 戦後卒業生との融合

昭和50年、名誉会長の笹村氏の提案で、各運動部の若い集まりに従来のOBを加え、第11回（昭和50年）の総会に替えようという話がまとまった。ここに当時とは異なる新たな形態の同窓会がスタートすることになった。

この年の第11回総会・懇親会は、落成された新校舎の講堂（2号館体育館）にて行われた。これ以前の同窓会は、第1回こそ明大記念館であったが、当時の同窓会は丸の内にある日本工業倶楽部で行われていた。戦前卒業のOBが中心となった総会・懇親会だった。これに、戦後

の卒業OBを加えるスタートとなったものが、第11回総会であった。

第11回の総会・懇親会は、戦前卒と戦後卒をつなぐパイプ役として昭和26年卒の「猿楽会」が実行委員を務めている。いわゆる「幹事学年制」につながる革新的な制度改革であろう。

この時、猿楽会のメンバーは42才頃であるので、全卒業生のほぼ中間学年にあった。この後、前学年からの指名や同窓会執行部の推薦などで「学年幹事」が中心となり、総会・懇親会を開催していくこととなる。

会報第2号に、「今総会開催を機会に結成されたクラブOB会より笹村名誉会長、現会長片岡会長、同窓会の発展にご援助いただいた福島校長に、記念品を添えて感謝状が贈呈された。

閉会の時刻となり、『帝都の真中駿河台』の新旧二つ、そして戦後の『白雲なびく』の三つの校歌をそれぞれ声高らかに合唱した。

同期会を中心に横のつながりの今までの同窓会組織の中へ、クラブ活動を中心とした縦のつながりのクラブOB会の結成が、年次を超えた結びつきを得、多数の参加を得た一因となった。」とある。

戦後卒業生を中心としたクラブOBの融合などが、旧制卒業生と新制卒業生の融合の状況を示している。

翌昭和51年の第12回総会・懇親会も、昭和28年卒と昭和30年前後卒の若手を中心となって企画・運営をし、母校体育館で開催している。片岡会長は、「戦後の若い方にゆだねられた今回を契機として、今後もその方向を取られ、序々に同窓会の運営も若い世代に引きつがれて行く姿が見られたことは、同窓会のより発展のために大変良い傾向と存じます。」と語っている。

5. 同窓会名称変更

戦後卒業生との融合には、片岡会長の同窓会発展への並々ならぬ決意があったように感じられる。それを表すこととして、同窓会名称変更があげられる。

会報は、第2号まで「明治中学・高校同窓会々報」と称していたが、第3号から「明治高等学校同窓会々報」と改題された。

会の名称も、「明治中学高校同窓会」から「明治高等学校同窓会」へと変更された。発足当初は旧制中学校の卒業生が中心であったが、新制高等学校の卒業生も理事として会の運営に参加し、底辺を広げると共に両者の融合を図るのが狙いであった。同窓会の名称を変更するという、その一連の行動には当時の執行部の危機感と言葉では埋めることのできない「旧制」と「新制」の文化の違いがあった。それを時代に合わせていく過程には勇氣ある決断と不退転の決意を感じる。新たな時代を造るべき「新制」卒業生への期待と想いをこめた「明治

高等学校同窓会」は新たな舵取りを任されたのであった。

6. 幹事学年制始動

昭和50年第11回から戦後卒業生が加わり、翌昭和51年第12回、昭和52年第13回と母校体育館で開催し、昭和53年の第14回総会・懇親会はホテル・ニューオータニで行われた。同窓会本部主催、昭和26年卒猿樂会が中心となり進められた総会・懇親会の実施運営であったが、昭和54年第15回は、正式に「幹事学年制」が実施された記念すべき年になった。これは、同窓会本部の負担を軽減すると共に、同期会の集合体が同窓会であるという総明会の理念に基づくものであり、現在の総明会運営の根幹を司る制度となった。

担当は昭和17年卒 一七会である。「七夕総会」と銘打ち、母校体育館で実施された。執行部の指名とあるが、三上専務理事の学年で、新たな挑戦といった意気込みで幹事学年を買って出たのではないだろうか。今までとは違う懇親会を開こうと、それぞれ自分の商売のPRコーナーを会場に設ける試みがされている。非常に積極的に総会・懇親会に取り組む姿勢が見られる。動員も300名を超え、盛会であった。

手探りの開催ではあったが、幹事学年制のスタートとしては成功だったといえよう。今では当たり前になった幹事学年制での開催までに、同窓会復活から数えて15年が経っている。この後は、指名制という形で幹事学年制が継続し、現在に至っている。恐らく、他校でもこうした制度で同窓会を開催している学校は少ないのではないだろうか。

第3節 総明会誕生

1. 第3代会長 栗原 勝一

昭和55年第16回総会において、会長が第2代片岡龍夫氏から第3代栗原勝一氏（大正12年卒）にバトンタッチされている。片岡氏の在任期間は6年間。旧制卒業生と新制卒業生との結束と、同窓会の財政基盤の強化に努められ、会則の改正や総会・懇親会の幹事学年制導入など、同窓会の将来を見据えた運営改革に取り組まれた。

昭和56年、新会長栗原氏の会報における挨拶は「学校は友達を作る場所」と題して寄稿している。学校は教育の場であることは当然であるが、友人を通じて、卒業生になっても変わらずぬ友情を育むことが自身の経験からも必要であると語られている。

2. 明治中学校・高等学校の状況

この時代の学校の状況について記載する。この頃（昭和55年）の会報には、高校卒業後の進学状況に加えて、入試情報が掲載されている。特に中学においては、第1志望者を入学させたいとの考えから、昭和54年度より入試日を2月1日に変更した。これにより、1,000名を越えていた受験生は半減するが、「本当に明治入学を望む生徒」の確保には成功している。また、昭和49年に中学生の坊主頭を廃止したため、その後の受験生増加につながっている。入試日の改革、都立学校群制度の変革などもあり、単純な比較は難しいが、中学・高校入試は順調であり、明治人気は上々といえる。

それと同時に、物価高騰により教育費は右肩上りで増加していく。昭和49年度は、受験料、入学金、授業料の総額は19万6,000円であったが、昭和55年度当時は受験料1万5,000円、入学金23万円、授業料29万円、総額は53万5,000円と、7年間で2.7倍に増加した。また、これ以外にもクラブ活動や林間学校、修学旅行など出費は少なくない。

ちなみに大卒初任給を調べてみると、昭和49年は7万8,700円、昭和55年は11万4,500円になっている。当時の明治中学・高校の教育費の高騰ぶりが分かると思う。オイルショックによる物価高騰、学費の増加など、生徒たちの家庭における経済的な負担はかなり大きい状況であった。

3. 軌道に乗る幹事学年制

昭和54年より導入された幹事学年制は、翌年（昭和55年）にも引き継がれて行った。昭和55年第16回総会・懇親会は、昭和28年卒 明窓会が幹事学年となり、会場を母校体育館から上野の池之端文化センターへ移して行われた。前年の七夕総会は一定の成功を見たものの、開催時期が初夏であったため、母校体育館の気温はかなり高かったのではないだろうか。そのためか昭和55年6月2日発行の会報第6号には、第16回総会開催の案内に「冷房もよく効いた」といった文言がみられる。

この年の懇親会には、ゲストとして明治大学バトントワラーズを招いている。今日の総会・懇親会でも、応援紹介は多くの同窓の楽しみでもある。

昭和56年第17回総会・懇親会は市ヶ谷の私学会館において開催された。幹事学年は昭和31年卒。当日は300名を超す参加者を集め、ゲストによるアトラクションは幹事学年でもある佐伯亮氏が指揮を執る、明治大学マンドリン倶楽部の演奏であった。前年の明治大学バトントワラーズに続くものであった。

また、特筆すべき活動は、かねてから懸案であった同窓会名簿の発行である。1981年（昭和56年）版同窓会名簿は300頁、1万2,000名の同窓生が網羅されており、頒価1,500円とある。現

と異なり情報伝達手段が限られていた当時、この1万2,000名の名簿を作製したことは、大変な作業であったと思われる。名簿が同窓生をつなぐ唯一のツールであり、それだけ貴重なものであった。現在、名簿類を制作すること自体はばかられる時代になっており、まさに隔世の感がある。

いずれにせよ、幹事学年が本部と連携して総会・懇親会を企画、運営し、名簿委員会と共に会員名簿の発行をやり遂げたことは、幹事学年制が軌道に乗り始めたことを示している。

4. クラブOB会・チャリティーゴルフ

この時代で忘れてはならない大きな流れは、クラブOB会発足とチャリティーゴルフ大会の開催である。幹事学年制が導入され、戦後新制OBの活躍が軌道に乗り始めたことによるものである。会員の交流、親睦を兼ね、同窓会の興隆を計る活動の一つとして計画された企画で、第1回大会は昭和55年10月22日、170名が参加し、千葉県鶴舞カントリークラブで盛大に開催された。当時の専務理事卯木敏夫氏（昭和26年卒）はこの大会を振り返り、「特に各クラブOBの活動が目立ち、従来あまり同窓会行事に関心を持たなかった顔ぶれが多かったと云うことは、今後の同窓会発展に大いに役立つことも確認しております。」と、今後の同窓会活動での戦後OBの活躍を明言している。

翌年、昭和56年4月22日には第2回大会が開催され、2回で合計60万円を母校に寄付することができた。

5. 明高・クラブOB会

チャリティーゴルフの流れを受け、昭和57年3月21日「明高・クラブOB会」が発足した。発会式は母校体育館で行われている。実に350名が集まり盛大に行われた。初代会長には卯木敏夫氏が就任している。発会式参加の各OB会はアイスホッケー愛好会、応援指導班、剣道部、硬式野球部、JRC、柔道部、新聞班、水泳部、吹奏楽班、スキー部、相撲部、生徒会本部、テニス部、軟式野球部、バスケットボール部、陸上競技部、歴史研究会。卯木氏は同窓会専務理事も兼務しているため、卒業生における2つの団体での重職を兼務することになった。

このクラブOB会の展開には多くの期待が寄せられたことと思われるが、この後のクラブOB会の活動はそれほど広がりを見せることはなかった。活動の主たるものがチャリティーゴルフ、現役クラブ合宿への氷代援助、クラブ顧問先生との懇親会であった。やがてチャリティーゴルフ、合宿への援助は同窓会主催へと移り、現在は初夏に開催される総明会班・クラブOB・OG会懇親会になっている。

6. 母校創立70周年

昭和57年1月17日、「創立70周年記念式典」が東京厚生年金会館ホールにて、在校生はじめ明治大学、PTA、同窓会など関係者多数を招き盛大に挙行された。同窓会からも栗原会長、片岡名誉会長、卯木専務理事はか理事、監事の全員が招待されている。記念式典では、栗原会長が来賓祝辞を述べられている。式典では祝賀歌舞伎として「羽衣」が中村扇雀丈により演じられた。式典終了後には、PTA主催による記念祝賀会がホテルニューオオタニ鳳凰の間において開かれた。こちらも同窓会関係者多数が出席している。

この華々しい創立70周年を記念して、母校正面玄関入り口に鶴澤総明先生胸像が完成した。除幕式では清水義凡校長から感謝状を受け、同窓会からは、この建立基金の一部にあてていただくため、前述のチャリティーゴルフの60万円に各学年からの寄付金を加え、総額150万円を母校に寄付した。

このように、母校創立70周年は、同窓会も母校への協力援助事業を大きく前進させた年になった。

7. 第4代会長 坂本 朝一

明治高等学校・中学校創立70周年を迎えた記念すべき年（昭和57年）の第18回総会・懇親会は会場を母校体育館に戻し、昭和30年卒が幹事学年を担当して開催された。参加者は200余名を数えるも、前年より若干減少している。そしてこの総会で第3代会長栗原勝一氏が2年間の任期終了とともに退任している。前任の片岡氏が3期6年にわたり会長を務めたことを考えれば1期での退任は早すぎた。後任には第4代会長として坂本朝一氏（昭和9年卒）が就任している。栗原氏は友人を大切にして同期会の充実を訴えていた。この同期会の充実こそ同窓会の基礎となるからである。このことは初代会長笹村氏から一貫して変わることのない理念でもあった。また、坂本会長は同窓会会長として出席した卒業式で、“教育の荒廃”に触れ、同窓会会員も無関心であってはならないと説き、同窓会の役割を一步踏み込んで言及した。

翌昭和58年第19回総会・懇親会は「銀座三越」でおこなわれた。幹事学年は昭和29年卒二九会がつとめている。参加者の数などは記載がないので不明であるが、「予想を上回る参加者で立錫の余地も無く」との表現からも成功裡に閉幕した。

8. 同窓会20周年

昭和40年に復活した同窓会は、昭和59年にめでたく創立20周年を迎えた。そして、長く懸

案であった旧制卒と新制卒の融合も、この20年の歳月の中で何とか実を結んだ。決して創設から安定した成長を遂げたわけではなく、むしろ紆余曲折を経て20周年を迎えたといった感がある。これまで行ってきた様々な試みは、少しずつではあるが定着してきた。

会報はタブロイド判が継続され、毎年、同窓生に配布されている。加えて母校在校生にも配布されるようになり、同窓会の認知度は確実に上がってきた。内容も同期会報告や同窓会活動状況、さらに学校情報も掲載され、限られた紙面を有効に使っている。

総会・懇親会は、母校体育館での開催から、ホテルでの開催へとシフトしていった。

20周年を記念した第20回総会・懇親会は、赤坂プリンスホテル旧館ロイヤルルームで行われた。幹事学年は昭和32年卒 明治会が担当した。

参加者は約300名で、ゲストにはアントニオ古賀（本名：伊東貞行氏 昭和34年卒）を招いている。抽選コーナーもあり、大いに盛り上がったとある。最後は校歌の大合唱で幕となった。

9. 総明会命名

我々が使っている同窓会の名称「総明会」は第20回総会で決まった。名称の募集はかなり早くに告知されていたが決定するに至らなかった。実際に会名として使用されるのは翌年（昭和60年）の第11号会報からで、題字の下部に以下の内容が掲載された。

「名称が総明会と決る。昨年（昭和59年）の第20回同窓会総会で、会の名称を『総明会』とすることに決まった。かなり以前から会に名前をつけようという声があり、いろいろな意見の中から、母校の実質的な創立者であり初代校長でもあった故鶴澤總明法学博士の名前をいただき、かつ明中高同期会及び同窓生の総体という意味あいから、全会一致で決まったものである。」

以後、「総明会」という名称についての説明は会報に掲載され続けているが、その内容は上記同様のものであり、総明会のデビュー記事としてはいささか物足りない感じは拭えないが、事実を簡潔に伝えている。

命名の過程では会名を付けたいという要望はかねてよりあった。そこで昭和58年の理事会で検討されることになった。当初は5～6個の候補があったが、初代校長鶴澤總明先生のお前から一字いただき「総明会」という名称が提案された。この案を当時の執行部が推し、その意を汲んだ片岡元会長の鶴の一声で決まった。この会名のもう一つの意味としては、明治の同窓会は同期会の集まりが基盤であり、その総体の会という意味も含んでいる。

こうして決定した「総明会」という名称は当時、明治大学で教鞭をとられていた鶴澤總明先生のご長男に承諾をいただき、ここに「総明会」としての同窓会がスタートする。



10. 同窓会旗完成

総明会の命名にあわせて、同窓会旗も作製された。作製においては、伊藤茂雄氏（昭和31年卒）が担当した。

「同窓会旗が欲しい。作ろうではないか。」という話は以前から出ていたが、同窓会の名称内定が、同窓会旗の計画を後押しする一端ともなったのである。

また、前年催された明治会運営の第20回総会が、大成功の内に多額の余剰金を出したことも会旗制作に一層拍車をかけたのである。

一口に同窓会旗を企画・制作するといっても、デザインをはじめとてたくさんの評議事項があった。シンボルマーク、書体、色、寸法、生地、イラスト、品位、バランス、重厚さ、美しさ、制作費、納期…等、個々に検討していった。

旗の制作を企画して以来、旗の勉強が続いた。未知の知識を得るべく各種運動競技大会会場を訪れ、各校、各部の旗を見学。さらに十余の学校を訪問し、多種多様な旗を見学してめぐった。また、旗を取扱う業者に接し、教えられることも多かった。

日常から旗を取扱う機会の多い応援団OBの意見も参考にし、旗のデザインをまとめてみると、中央にシンボルマーク。つまり校章、部章等を置き、下段又はボール側に団体名をいれたものが主流であることがわかった。旗の話が進むにつれ、シンボルマークは“M”、中央に“総明会”と入れようとの意見が出た。結果、下記のような仕様となった。

- 中央にMのシンボルマークを入れ、その中に総明会と入れる。



班・クラブOB会旗

昭和51年まで母校の校長を務められた福島則雄先生は、当時まだ耳慣れぬ「全人格教育」「特別教育活動（クラブ活動等）」を熱心に実践され、その業績は全ての人の知るところで、クラブOB会組織の機運が高まって来ると大変喜ばれ精神的に大きなバックアップをしてくださっていました。その先生が死去された時（昭和57年1月）、先生の日頃の班・クラブOB会に対する深い想いと期待をご遺志として、ご子息の福島弘毅氏から、明高・クラブOB会旗（目録）を贈呈されたものである。

その後平成6年をもって班・クラブOB会が

独自活動から総明会に組織、事業とも一元化され、活動を終了したため、班・クラブOB会旗を長年管理されていた昭和44年卒の小川滋氏から昭和52年卒の樋田哲次氏に管理が移管された。その後、平成23年には理事会にて班・クラブOB会旗の取り扱いについて吉田耕太郎副会長より総明会で管理をする旨の発言があり、総明会事務局に管理が移管されている。



総明会事務局に管理が移管されている班・クラブOB会旗。

- 下段に明治中学高等学校同窓会。
- 紫紺地に白抜き、生地は正絹。
- 旗の大きさは母校応援団の中団旗と同じ位にする（タテ2,300mm、ヨコ3,100mm）。

書体については、楷書に決定し、岡本怜一氏（昭和30年卒）に書をお願いした。岡本氏は、高木東扇先生に書道の基礎を教わり、以来、仕事の傍ら書道を趣味とされた方である。

こうして、昭和60年7月初旬、明治中学高等学校同窓会旗は完成した。

第4節 総明会の成長

日本全体が低迷する経済状況から抜け出しつつある昭和50年代も終わりを迎え、間もなく日本経済の爆発的な活況「バブル景気」がやって来る。

こうした状況を背景に、組織が固まりつつある「同窓会」は「総明会」へと変わり、経済同様に活発な成長期へと向かうのである。

1. 1985年（昭和60年）

第21回総会・懇親会は10月5日（土）午後6時から東京プリンスホテルで開催された。幹事学年は昭和36年卒 明駿会が担当した。「目で見、音で聴く母校70年の歩み」と題して、スライド上映や、今では恒例となったマンドリン演奏など、質実剛健の校風に“ナウ”なセンスを味付けした企画を工夫した。

また、当時の会報の特集には、明治高校の卒業生である故林崎昭裕氏（昭和36年卒）がオリンピックのライフル競技に出場し、五輪新記録で6位入賞を果たした記事が掲載されている。明治高校からオリンピックに出場した卒業生は、今のところ林崎氏ただ一人である。このように、総明会会報は卒業生の偉業を伝える役割を少しずつ果たしている。

2. 1986年（昭和61年）

第22回総会・懇親会は、ホテルニューオータニ鳳凰の間で11月8日（土）に開催されている。幹事学年は昭和33年卒同期会（後に三三会と命名）。昭和29年卒業OB、ジャズシンガー高橋伸寿（本名高橋三次郎氏）を迎え、懐かしいジャズの夕べと銘打ち、ダンスフロアを用意す

るなど華やかな雰囲気をかもし出した。

総明会総会は、すでに大型都市ホテルでの開催が定着してきている。この年は世に言う「バブル景気」の始まりの年であり、未曾有の好景気に日本中が活況を呈す。

バブル時代幕開けの会報(第12号)には、「我等が先輩三先生と懇談」とある。3先生とは、明治大学総長 島田正郎先生、青山学院大学学長 鶴澤昌和先生(昭和11年卒)、慶応義塾大学塾長 石川忠雄先生の3名のことである。鶴澤昌和先生は明治中学校の初代校長鶴澤總明先生の次男であり、鶴澤校長在籍中に明治中学校に通われた。

この年、総明会の事業の一つとして、母校の生徒を対象とした講演会を開催することが決められ、第1回講演会が7月15日、母校の視聴覚教室に於いて、高2の生徒を対象として開催された。講師は吉田三陸氏(昭和26年卒)であった。総明会会員の現役生徒への直接指導であり、総明会として学校との新たな関わりを持つこととなった。

3. 1987年(昭和62年)

第23回総会・懇親会は、11月21日(土)に明治大学100周年記念大学会館で開催された。ホスト学年は昭和34年卒 旧雨会で、同期のアントニオ古賀とマンドリンクラブOBによる懐かしの古賀メロディーを楽しむ企画を催した。また会費を5,000円とし、記念品も用意し、多くの会員に出席してもらうことで、総会・懇親会の意義を明確に打ち出すものとなった。その結果、この年の総会・懇親会は300余名の出席者を集め成功裡に閉会となった。

この時期の特筆すべき総明会活動として、新版名簿の作成があげられる。旧制・新制の全会員にわたり再調査を実施すると共に、登録名簿を刷新し、登録の電算化を図った。

新版名簿は5年毎に発行することになっており、増補、改訂し、1988年(昭和63年)11月21日付けで、総明会を冠して発行した。値段は、1冊3,000円(送料共)、10冊以上の場合の特価2,000円(送料共)であった。この名簿発行により、名簿電算化経費120万円、新版名簿制作費300万円を計上している。積立基金をこれに充当したほか、名簿広告に多数の協賛を募り完成したものであるが、当時の総明会の財政を圧迫していた。この年の総明会の支出の部総計が1,100万円だったことを考えれば、この名簿制作がいかに負担になっていたが分かる。

また、若い(当時の40年代卒以降)世代に同期会発足を促し、協力するよう呼びかけていた。

今日でもそうであるが、幹事学年を担当する以前の同期会結成が課題であり、この頃からすでに総明会として、同期会結成の後押しをしていた。

4. 1988年(昭和63年)

第24回総会・懇親会は、11月26日(土)九段会館で開催され、幹事学年は昭和35年卒同期会(後に「珊瑚の会」と命名)であった。

総会では坂本会長が再選、副会長に卯木氏が就任され、会則の改訂が承認された。懇親会では60年代のポップスをBGMで流し、ビンゴゲームが行われた。会費は1万円(同伴5,000円)と従来の金額に戻り、これ以降、この金額で現在に至っている。

この年、事務局、総務部、事業部、組織部の4つの部門が増えている。年々活発になる活動に対応組織が必要であったのであろう。それと並行して、部会(現在の委員会)の設置や評議員等、時代と共に変化していく体制に即した改制が行われた。

会報第14号には、翌年実施予定の「春の韓国ツアー大募集」の広告が出ており、上記新体制事業部が会員相互の親睦活動に力を入れていることが伺える。

松枝正弘先生(チーター)退職・逝去

平成元年の会報第15号に退職される先生の紹介で、松枝正弘先生の記事が掲載されている。異例のカット割である。

松枝先生は「チーター」の愛称でお馴染みであり、これほど生徒に影響を与えた先生は居なかったと思う。チーターの愛称の由来は、動物のチータ同様、素早く走り回る所からきたと言われている。バレーボールの部の顧問を40年間努め、授業は体育を専任し、その教育は積極的、活動的。“足腰はうさぎ跳びから”が信条であった。授業でバレーボールを指導するのは勿論のこと、時には真冬の雪の中を裸ランニングを举行し、神保町で名物となった。愛のパンチで数多くの不良学生を苦渋させ、チーターを知らない生徒はいなくなった。その為か卒業して師を懐かしく思い訪れた教え子が多かったそうである。また、運動会、文化祭等の企画・進行は、天下一品であり、特に明治大学80周年記念祭の時、国立競技場で、“M80”の生徒による人文字は、入場者、関係者を深く感動させたそうである。

会報の記事は、退職する先生への質問形式で書かれており、「学校へ一言」の質問に対しての松枝先生の返答は以下である。



「天と地の差がある 在りし日の松枝先生。」

と思う。又、私は生徒に差があるのではなく親に差があると思う。昔の親は判らなかつたら殴って下さいと平気をお願いしてきた。今なら大変な事です。今の生徒に関しては、偏差値主義で可哀そうと思う。学校に対しては、生徒を型にはめず伸び伸び教育して、スポーツと学業を両立させ私立の特徴をはっきり出して欲しい。」

この翌年(平成2年)松枝先生は心不全の為に亡くなられた。千日谷会堂で行われたその葬儀には明治大学島田総長、明治高等学校金井校長をはじめとする学校関係者、卒業生、1,800名が会葬した。行動的でかつ情熱的で、野生味あふれる指導は、以後“伝説の人間教育”として永久に語り継がれることとなった。

また、クラブ・OB会主催のゴルフコンペの広告には、「クラブ・OB会的主催としては最後になると思いますので、奮ってご参加ください。」の一文があり、クラブ・OB会が総明会活動の一部として位置づけられつつあることも分かる。

5. 1989年(平成元年)

第25回は総明会創立25周年の記念の年だったが、この25年を振りかえる企画等はなく、例年どおりの総会・懇親会だった。11月17日(金)、ホテル国際観光で開催し、幹事学年は昭和37年卒 37会が担当した。

昭和天皇の崩御で、平成が始まった年であり、祝25周年と簡単にはできなかったであろう。

6. 1990年(平成2年)

第26回総会・懇親会は、11月16日(金)に明治記念館で開催された。幹事学年は昭和38年卒 二年に一会が担当した。懇親会では100円硬貨争奪ジャンケン大会が行われ、賞金は来年の総会の補助金へ充当された。

この年の4月より、第10代明治中学校・高等学校校長に金井照治先生が就任された。総会での挨拶で「生徒が進学する学部の選択にあたっては、高1からの進路指導の積み重ねがあるものの特に経済系学部の内容の違いが明確につかめず判断に苦しむ現実がありました。今年は、試みにこの解決の一助として、商学部・経営学部の各2名のOBにご協力を願い講演会を行い、学部の専門とする分野・講義内容・研究の実態・将来への進路など体験を通して学部の紹介をいただきました。人間性に富み学識豊かな卒業生を総明会に加えさせて頂く努力をしていかなければならないと思います。」と語っている。

この頃になると、首都圏の中学受験者数は4万8,000人になる。その後はゆとり教育の実施による公立校離れが進み、私立校ブームにさらに拍車がかかり、加熱していく。すでに少子化という言葉も聞かれる頃となり、学校経営は勝者と敗者の二極化へと進んでいく。私学経営は、21世紀を前に難しい岐路に立っていた。高校受験も受験科目を減らした。これは、受験しやすい環境という点で評価し、優秀な生徒を獲得することを目的としている。進路指導においては、学生OBを活用する試みをはじめ、人間性に富み、やる気のある人材を輩出して行くことが総明会との連携強化になる考えを示した。

この年の総明会活動報告で、新たにクラブOB部(昭和36年卒矢島芳郎部長)が発足し、クラブ・OB会が総明会活動の一部として位置づけられたことが明確に示された。

7. 1991年(平成3年)

第27回総会・懇親会は、11月22日(金)に上野精養軒で開催された。幹事学年は昭和39年卒 三九会が務めた。幹事を担当した経験を、翌年の会報に「無事に終了 青春の復刻版」と題して、幹事学年の苦労やそこから得た同期との結束、満足感を寄稿している。特に、奥様方が影の功労者であったことは昨今の幹事学年でも当てはまるのではないだろうか。

総明会の運営は順調に進み次の幹事学年にもうまくバトンが渡され、毎年つつがなく運営されていた。総明会の年度予算案も1千万円前後で推移しており、発足当時の脆弱な予算規模に比べ大幅に拡大していた。しかし、財政的には厳しい状況が継続しており、会計の二村昌也氏(昭和33年卒)は、会報第17号で会員に下記のとおり呼びかけている。

「総会の経費が年々上昇の一途をたどり、入場料の値上げも考えざるを得ない状態になっています。こういった事態の前に同期会の組織が未結成等の理由により、年会費の支払いなき学年はどうか今年中に組織を発足させて、総明会の年会費をお支払い頂きたいと思います。総明会としましてもその為の助成金やアドバイスを惜しみません。」

この呼び掛けと共に、未結成学年の参考になるように、年会費未収学年を一覧表にして提出している。昭和40～50年代の学年が多く、この年の幹事は昭和39年卒であったことから、幹事学年以前の年代の同期会結成と、年会費の徴収が課題であったことが分かる。

8. 1992年(平成4年)

第28回総会・懇親会は、11月7日(土) 椿山荘にて開催された。幹事学年は昭和40年卒 明優会が担当した。明優会の名付け親は、同期であり母校教諭であった故田村晴彦氏。田村氏の引合い合戦のつもりで、同期の総力をあげて幹事学年を遂行した。総会では副会長の向殿政男氏(昭和36年卒)の会長選出が可決された。記念品として、参加者には「MEIJI」ロゴ入り特製ベストが配られた。

総明会の活動においては、「織田信長 戦国時代への旅」と題して、第2回総明会親睦ツアーが実施された。平成元年に実施された海外親睦ツアー「ソウル・済州島の旅」に続く企画であり、総明会が主催する会員相互の親睦活動がますます活性化されていった。

この年は母校創立80周年を迎え、総明会より母校に対して50万円の寄付がなされた。財政面では、同窓生でPTA会長でもある山浦晟暉氏(昭和29年卒)の理解を得て、新会員の入会金を増額していたが、予算規模も約1千59万円から約1千379万円へと拡大した。

この年、校長は金井先生の後を受けて、村野圭吾先生が就任している。

また、坂本会長が高校の「リーダー研修会」に講師として参加している。会長就任以来、一

貫して各分野での教育の重要性を説いている坂本会長だけに、大いに期待された。会長は国際化についての現状を鑑み、議論を促した。おりしもPKO法案の審議が注目されている時でもあり、研修は活発な質問が飛び交い、成功だったようである。そして、総明会が教育現場をバックアップする立場であることを明確にした事柄となった。

この年の会報では「我が子を母校に！気がつけば、難関校」の特集が組まれている。この頃の明治中学校の偏差値は62前後、高校に至っては偏差値70前後である。私立校受験は一過性のブームではなく、世情を反映してすでにしっかりと定着していた。その背景には、公立校の大学進学実績の低下がある。実際、都立校では現役で六大学に受かることは難しいらしい。

また、都立校の学校群制度により、志望校に入れなかったという弊害が出て、「都立校離れ」が加速した。都立下位校では定員割れが起き、学力不適合者まで入学させる始末であり成績優秀者は私立に流れた。

この現状を見て、東京都は平成5年から「単独選抜」となり、学校群制度は廃止された。大学進学実績が受験に際しての第一指標となっており、ゆとり教育で、当時の文部省が実施した週休二日制も、学力低下を心配する父母の不信を増長した。この年の会報は、塾の選び方や学習塾の紹介など、徹底した特集を組んでいる。「自分の息子を母校に」の思いは、多くの卒業生が抱いているものであった。このような状況の中、母校は多くの入学志願者を集める人気校の一つとなっていた。

第5節 総明会の革新

1. 1993年(平成5年)向殿体制発足

第29回総会・懇親会は11月6日(土)、東京會館ローズの間で行われた。幹事学年は昭和41年卒 41明友会である。この年は総明会にとっては大きな転機の日であった。前年の第28回総会で向殿政男氏が新会長に選出され、5期10年続いた坂本体制から新会長向殿体制にバトンタッチされた。総明会の発足から30年近くが経ち、新制高等学校卒からの会長選出は初めてのことであった。

まずは10年の会長期間を振り返って、坂本朝一会長の挨拶を抜粋する。

「私が在任中一番心したことは、我々旧制の明治中学校を卒業した者と、現在の新制の明治中学・高校を卒業した者との関係が、言葉遣い一つで、誤解を招く恐れがないかと。

その事は教育制度の改変もさることながら、校歌一つとっても『帝都の真中駿河台』と歌っ

た我々は『白雲なびく駿河台』の明治大学と同じ校歌を歌う現在の有様とは心理的に『時代』を感じさせられて、一寸センチメンタルになったりする。

そう言う旧制の卒業生の心情を察して、同窓会の当番幹事は、旧制の校歌も別に歌わせる心配をしたりして、嬉しくなったりした。

しかし、私の前任者の片岡先輩は、大正10年の卒業で校歌も『帝都の真中駿河台』と多少違っているとのことで、我々昭和時代の旧制卒業の者も頭が上がらない思いだった。只、我々旧制卒業のものは、あの校舎の場所に断ち切れぬ思いがあって、総明会なればこそ、お茶の水駅で降りて、文化学院の前を通過して母校へ行けると、多少胸が高鳴る思いをしたりした。

私は、実は早稲田なのだ。従って、総明会会長としては多少コンプレックスを持っていて、そろそろ新制の明治っ子になんて言っていたら、今度昭和36年の向殿政男氏が新会長になった。これこそ、紛れもない明治っ子の会長で喜んでいる。会員の皆様も同様の心境なのではないだろうか。そんな思いでいるから、現在の副会長以下の役員も、後輩の新会長を助けようと真剣になって頂いていることを、小生も有難く思っている。】。

旧制中学校出身の最後の会長として一番いい時期に新制高校出身の新会長にバトンタッチが出来た。

総明会も創立30周年を控え、執行部理事に昭和30年卒、40年卒が増える中、次の時代を見据えた英断だった。こうした背景を踏まえて向殿会長の挨拶を抜粋する。
「総明会の皆様、こんにちは。今回、恐れ多くも坂本朝一前会長の後を引き継ぎ、総明会会長という大役を仰せつかった向殿です。力不足なのは明かですが、本会の発展と充実のために微力を尽くしたいと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。

同窓会の存在意義は何でしょう。今更言うまでもなく、答えは自明です。大先輩の言葉にも在るように、“生徒が学校を卒業したと言う縁は永遠であり、学校側は卒業生の幸福を祈り、卒業生は学校の発展を願う”のは、自然の情です。ここにあって、同窓会の目的は、会員相互間の親睦であると共に、母校発展への賛助、すなわち母校に対する精神的、時には経済的支援に有ります。現在の私たちの会則には、これに加えて、“同窓会の知的および精神的連帯のもとに”という付帯条件が明らかに謳われているのは、総明会の誇りとするところです。1965年6月に笹村初代会長の時に発足し、片岡・栗原会長を経て、坂本前会長に至るまでに基礎固めの第一ステップと発展の第二ステップを完了したと思います。これからが本番の第三ステップの充実期に突入する、これが総明会のリストラの意味する所ではないでしょうか。この第三ステップの当面の課題の主なもの、

- ①財政基盤の確立
- ②組織の確立
- ③事業の活発化

④母校との交流の活発化

の4点に絞られると思います。すなわち、“足腰を強くして、益々事業を発展させ、母校とのコミュニケーションを盛んにする”ことがこれからの総明会の与えられた使命だろうと考えます。

この総明会の諸活動を支えるのは、母校愛に基づくボランティア活動であることは間違いありません。皆様のご協力を得て、冒頭で述べましたように、微力ではありますが、少しでも当会の発展に寄与したいと思いますので、ご支援の程をよろしくお願い致します。」。

新会長の挨拶は時代に対応した組織の再構築が基調になっている。これからの時代を充実期として、4つの目標を掲げている。これが確たる基盤を強固なものとし、総明会事業の発展の先にある母校とのコミュニケーションを使命と謳った。シンプルな中にも戦略的要素が伝わる新会長の決意が伺える。バブル後の冷え切った経済状況は教育現場にも先行きに暗い影を落としている。

総明会事業としては5年振りに名簿が発行された。前年に新名簿編集諸費用として約150万円が支出され、この年には新名簿経費として600万円が計上されている。足掛け2年で750万円を掛けて制作された名簿は一部4,000円で頒布されている。年間約1千300万円の予算が組まれる総明会において750万円の支出はかなりの負担である。時代はアナログからデジタルへ。今ではなくてはならないインターネットもこのころはまだ耳にする程度。通信の飛躍的革新と技術の発展により「ネット」、「携帯電話」の時代がやって来る。そんなアナログの最終章の時代、ペーパーベースの情報はまだ時代の中心にあった。

ペーパーベースの情報誌としてこの年、新たに「M・総明ホットライン」(第11号まで発行)という機関紙がスタートした。総明会と在校生の仲間意識・親睦を育てる在校生へのパブリシティ誌であり、12月24日の終業式に発行、配布された。この発行にはPTAと大学在学中の若い会員が編集に参加した。若い会員に早い時期から「総明会」の存在を知ってもらうことや、PTAとの交流を一層密にして行く狙いであった。

会報においては、従来の編集と少し異なり、「学校の思い出」と題して5名の寄稿文が掲載されている。この頃から会報には編集に変化が見られる。前年から「同期だより」が無くなった。

これは紙面割りのマンネリ化に対応してのことだと思われるが、その反面、特集記事は充実してきている。特に学校関連の記事が増えている。

2. 1994年(平成6年) 総明会30周年

第30回記念総会・懇親会は11月5日(土)、ホテルニューオータニ本館鶴の間で開催された。幹事学年は昭和42年卒 M41である。30回記念特別企画として昭和27年卒三迫ボクシングジム会長・元東洋フライ級チャンピオン三迫仁志氏の記念講演や旅行等豪華賞品が当たる

福引が実施された。

この年、役員改選が行われ、長年にわたり副会長として総明会の発展にご尽力いただいた小林昭雄氏（昭和22年卒）と卯木敏夫氏（昭和26年卒）のお二方が勇退され、山浦晟暉氏（昭和29年卒）と山崎敬生氏（昭和32年卒）のお二方が選任された。そして、小林、卯木の両氏は顧問に就任した。執行部理事も専務理事に三浦昭生氏（昭和38年卒）、事務局長に尾島育四郎氏（昭和41年卒）らが選任され、30年代後半～40年代卒が多くなり組織の若返りが図られ、役員スタッフ会議も2カ月に1度開かれるようになった。

会員相互の交流を深め、活発な運営を目指し親睦旅行等を行ってきた事業部活動においては、更なる総明会会員の交流活動を活性化させる施策として東武トラベル㈱と提携した。

3. 武陵会との交流

また、総明会の対外的な活動においても新たな試みが始まった。それは明治大学付属中野高等学校校友会組織「武陵会」との友好提携である。事務局長に選任された尾島育四郎氏の事務局寸評を紹介する。

「第30回という記念すべき大会を迎える運びとなりました。此の度初めて明大中野高等学校校友会『武陵会』の正副会長を招待することになりました。

過去には正直な所お互いに角を出した時期もあったと思われます。しかし大学に入学すると明治高等学校、中野高等学校出身者同志互いに接する時が多く、良い面が数多く発見され仲の良い友人になるケースが多く見受けられます。同窓会組織同志が今後共に良い関係を続けて行く事を望み又そう願わずにはられません。互いに明治を愛し、ボランティア精神の基、同窓会を長く継続する事に全力を傾けています。」。

武陵会との提携は同じ明治大学の付属校の同窓会として、協力しあって互いの組織の発展を願い実現した。この年5月に初めて武陵会の会長、副会長、専務理事と総明会役員との懇談をもった事が、その始まりとなった。そして武陵会との交流は翌年（平成7年）より人事往来を実現し、友好提携が確立して行く。

4. 明治大学記念館講堂

創立30周年、新体制始動、石崎章生新校長就任など総明会、母校ともに転機の年となった。大学においては「明治大学記念館講堂改築問題について」の記事が掲載されている。古くは明治高等学校・中学校の入学式、卒業式が行われていた。昭和25年には、この記念館講堂で大学創立70周年式典が行われ昭和天皇がご臨席になり、鶴澤總明総長が祝詞を読んだ。

その後は学生運動でバリケード封鎖されたりと、歴史とともに歩んできた建物だった。学生サークルの練習場としても多くの明大生の思い出の場所でもあり、明治大学総合施設整備準備室では移転も検討したが鉄筋コンクリート造りの建物であっては無理との結論から断念している。結果として、翌年取り壊しが決った。その際にはサヨナラコンサートが行われるなどして、多くの卒業生が解体を惜しんだ。

5. 1995年(平成7年)

記念総会の翌年、第31回総会・懇親会は11月18日(土)、目白の椿山荘瑞雲の間で行われた。幹事学年は昭和43年卒 紫讃会である。懇親会では、昭和30年代の明治高校と一般時事のスライドに加え、当時流行った音楽を生バンドで演奏したことが好評であった。そして今では恒例となっている幹事学年による人垣の見送りが自然発生的に行われたことが感動的であり、以後後世に引き継がれた。

総明会の活動においては、総明会会計がこの年より「一般会計」と「総会会報特別会計」の2本立てになったこと等が特筆すべき事項であった。

組織部により結成された「若手の会」は評議員会や総会に若手の出席が少ないことに対応した施策で、平成2年卒より学級幹事5名を選出してもらい、早期に同期会の基礎を作り、総明会活動に参加してもらうことを目的した。現在の組織委員会による若手への対応はこの時期より開始されることとなった。

また、PTAとの交流を活発にとPTA役員の方々との懇親茶話会の開催やバザーへの協賛等を行った。

そして、従来クラブOB会主催であったゴルフ大会が総明会主催になり、「総明会第1回学年対抗ゴルフ大会」が開かれた。1月24日(火)茨城県龍ヶ崎市の“ザ・ゴルフクラブ竜ヶ崎”で行われ、当日は好天に恵まれ、平日にもかかわらず保坂元校長先生はじめ、PTAの方も3名参加され、総勢82名の大ゴルフ大会となり、ゴルフ場も貸切りになった。

そして、この年は後藤朋智先生と水落八郎先生が定年退職を迎えられた。両先生ともその退職を記念して盛大な会が開かれている。

後藤朋智先生の会は、後に「ごとう会」として現在も毎年5月10日に開かれている。教師と生徒という関係は一生変わることはない。年を重ねて人生経験を積んだ生徒は成長し、やがて酒を酌み交わし、遠い昔を懐かしむと共に母校への郷愁を共有するのであろう。

6. 1996年(平成8年)

第32回総会・懇親会は11月17日(土)、久しぶりに母校、明治中学校・高等学校校舎で行われた。幹事学年は昭和44年卒 男坂倶楽部である。「OBのための紫紺祭」と銘うった総会・懇親会は2部構成となった。特に第一部では「未来の総明会会員と共に」と題して現役の明治中学校・高校生が参加している。

マンドリンクラブの演奏、吹奏楽班の演奏、応援団の模範応援指導、バレーボール部の現役対OB戦、剣道部の現役対OB戦、パットゴルフ、インターネットなどが行われている。これは今までにはない画期的な企画といえよう。現役生徒との交流が図られており、総明会の輪を広げるための企画ともいえる。学校というのはあくまで学び舎であり、教育の場である。総明会懇親会はパーティであり、飲酒が前提となる。頭では分かっている、実際のイメージとなるとなかなか難しい問題も多かったと思われる。久しぶりに母校で行われた総明会は楽しい一日となったようである。

総明会活動においては、「M・総明ホットライン」の発行、「若手の会」、PTA、白駿会(PTA同窓会)との連携、ゴルフ大会、武陵会との交流、評議員会等、その活動が活発化してきた。その中で特筆すべきはPTA、白駿会との連携である。現在でもPTAと白駿会との連携、交流は図れているが、この当時は総明会会報や「M・総明ホットライン」への広告やゴルフ大会への参加などの協力を得ており、総明会としてはPTA役員との懇親茶話会やバザーへの協賛をおこなっている。母校のPTA会長を努め、白駿会会長である山浦晟暉氏が平成6年に総明会副会長に選任されたことによる活性化と思われる。

そして、総明会会計報告においては、次年度繰越金は500万円を越え、一般会計と総会会報特別会計をあわせると1千500万円に迫っており、年々事業規模が拡大してきた。

7. 1997年(平成9年)

第33回総会・懇親会は10月18日(土)、東京プリンスホテルで行われた。幹事学年は昭和45年卒 獅子の会であった。懇親会ではチャリティをはじめ乗用車が当たるクイズ等好企画により400余名の出席者を集め、大盛況となった。

この年の会報第23号に、向殿会長から次のような挨拶があった。

「学校は何で評価されるのでしょうか。良い教育が行われている、良い教師がいる、良い生徒がいる、良い建物や設備がある等いろいろあるかもしれませんが、良い卒業生がいるということにはかないません。

卒業生こそが学校のアウトプットであり、最終的には、卒業生がその学校の評価を決める

事は間違いありません。(ついでにいうならば、卒業生にとって学校は常に心の故郷であり、卒業生は現役の生徒にとっての目標です。)この意味からも、毎年ホスト学年のまとまりと活躍を見るにつけて、我が母校明治高校は高く評価されてしかるべきでありましょう。

最近どの学校でもいわれていることですが、卒業した学校に対する求心力が希薄になりつつあると聞きます。これが現代の傾向としても、我が明治高校の卒業生にあっては、総明会を通して母校に対する思いを強くし、団結しようではありませんか。そして、母校が高く評価されるように、また現役の生徒の目標になるように卒業生としても心しようではありませんか。

総明会(総ての明治の会)名が示す如く、母校と共に卒業生同士が手を結べば、こんなに心強いことはありません。」。

会長が訴えたいことは母校を支える一番の応援部隊は母校愛溢れる卒業生であること。そして、今再び団結を求めた。

この年には事業部によるハゼ釣り大会、長野オリンピック観戦ツアーなどが企画・実施された。そして総明会記念講演として第2代会長、名誉顧問片岡龍夫氏の「明治高校を思う」と題した講演会も実施された。向殿体制が掲げる「組織の確立」「事業の活性化」などが着実に推進されつつあった。

会報も特集『「過程」にみるクラブ活動の変遷』と題して現在のクラブのルーツを探るべく取材がされている。反面、掲載広告が増加して、会報全14頁の内、半数の7頁が全面広告となっている。この頃の会報広告収入は200万円を越えており、寄付に次ぐ予算計上になっている。

そして財務部においては明治大学120周年事業に総明会として金100万円を寄付する報告がなされ、第1回寄付金40万円を寄付した。

8. 1998年(平成10年)

第34回総会・懇親会は11月14日(土)、ホテルオークラ曙の間で開催された。幹事学年は昭和46年卒 明潮会である。懇親会で「明治ブロムナード」と題し、総明会会員の店舗、事業をテント形式で出店させ、紹介、販売等を行う企画や男坂の巨大パネルを前に記念撮影ができて男坂記念写真コーナー、明治高校近況VTR上映等の演出により、好評を博した。

また、総会・懇親会の前に開かれた事業部企画では、前田俊明氏(昭和43年卒)の講演会が実施された。前田氏は中学・高校・大学とマンドリンクラブに所属し卒業後に古賀政男、猪俣公章各氏に師事した。平成4年藤あや子の「こころ酒」で日本レコード大賞編曲賞を受賞し、編曲者の第一人者であった。スポーツだけではなく、幅広い分野で活躍するクラブ活動の成果がここにある。

総明会活動においては従前の活動と共に、財務部より明治大学120周年寄付金として前年

の第1回に続き、第2回第3回目が実施され、総額で100万円を寄付した報告があった。また、評議員会では平成11年度より各学年の年度会費を1万5,000円から2万5,000円にすることが決定された。支出の面については、多額の資金を要すると思われた新名簿発行費用も関西廣済堂との契約により50万円と抑えることができた。

平成10年の会報第24号には、全総明会会員を驚かす文面が掲載された。

『明治高校 移転か？』

大学が調布に土地を購入したという事実がある。

卒業生としては、「明治」は、お茶の水にあって明治である。

卒業生はお茶の水を心のふる里にしている。

白雲なびく駿河台なのである。

が、しかし、今のまま、明高がお茶の水にあり続けるには、余りにも手狭すぎる。

学問もスポーツも中途半端……？

明高の将来を考えるのであれば、広い敷地・キャンパスの中で、学生が学問・スポーツに励む姿が望ましいのでは……

そして、やたら反対ばかりしては、明高の将来の足かせになるのでは……

「うーん、親(大学)の本体が、お茶の水にあるのならば、子供の明高もお茶の水だぜ……」の声が聞こえてくる。』

誰が書いたものなのかは不明なのだが、会報に掲載する以上はさまざまな議論があったと思われる。これ以降、明治高校全卒業生、全教諭をはじめ多くの関係者が母校移転という大問題に直面する。

9. 1999年(平成11年)

第35回総会・懇親会は11月20日(土)、帝国ホテルで開催された。「あなたの根^{ルーツ}跡を確かめて下さい」とのタイトルが目を引く。幹事学年は一風変わった会名の昭和47年卒 四七四七同志酔会である。21世紀に向けてカウントダウンに入る年、～新たな時代の幕開け～と銘打った総会・懇親会開催であった。

総会では「特別基金」の設立(後述)、会則の一部改訂が承認された。講演会は高橋伸寿氏(昭和29年卒)による「童謡歌手からジャズ歌手へ」とのテーマによる講演が行われた。懇親会ではマンドリンクラブOB演奏、大抽選会が行われ好評裡に終了した。

この年の会報から「会報委員会」が制作に関与した(委員会制度は73ページ第3章参照。)。そして、例年より多い20頁となっている。流石に紙面の作りは従来とは異なり整理されてきている。特集記事もOB訪問ではJリーグ理事・(株)日立柏レイソル社長小林正三郎氏(昭和32

年卒)へのインタビュー記事や明高中の移転問題についてと題してそれまでの経緯や移転問題の現状、移転の背景など簡潔にまとめている。恩師を偲んで、母校のクラブ活動報告、文学散歩 神田界隈の歴史再発見。また、OB寄稿文は卓球の前原正浩氏(昭和47年卒)、競輪の桜井久昭氏(昭和45年卒)など多岐にわたる記事が多数掲載されている。学校報告においては明大推薦と国公立大併願制度が確立されたこと、PTAからは白駿会の説明とその内容は充実している。

この年は総明会にとって様々な変革が実施された節目の年となった。総明会を取り巻く環境では、母校の移転問題が大きな議案となる中、向殿体制発足時に掲げた課題の「財政基盤の確立」「組織の確立」等を着実に手掛けた。

10. 財政基盤の確立

これまでは、新入会員の入会金と各同期からの学年会費で会が運営されてきたが、各同期会からの学年会費収入はそれ程多くなく、総明会活動の新たな発展のための基金や、母校を経済的に支援するための基金がまったくなかった。そこで、昨年度の卒業生から、学校とPTAの協力により、終身会費制(従って、個人会費制)を採用し、卒業時に終身会費を頂きその学年からの同期会の学年会費をなくすことにした。当面はこの終身会費のかなりの部分を「特別基金」として、次世代の総明会の財政基盤の確立のために蓄積をしていくことになった。

そして、この特別基金の充実には、これまでの卒業生にも「特別基金」として寄付を募ることにした。

この年(平成11年)の会報第25号には「特別基金」への会員の協力を強く呼び掛ける会長の、お願いが掲載された。

「この度、総明会におきましては、『特別基金』制度を評議員会のご賛同を得て発足する運びとなりました。昭和40年の総明会発足以来、会の運営基盤は期ごとの学年会費制を中心として維持されてきております。総明会は、会の運営や会員名簿の整備等の責務を担ってまいりましたが、未納入の学年も多く、財政基盤の強化が大きな課題とされておりました。

今回の『特別基金』は、個人会費制でない現況の中で、各OBの方々の母校への想いと同窓会への温かい愛情をこの新制度の中で集約させて次世代への財政基盤の確立を目指して設立されたものです。具体的には、

- ①不況等において学費未納の現役学生への奨学金的支援
- ②総明会の将来的な活動資源
- ③母校及び母校各クラブへの支援
- ④卒業生による同期会・OB会への支援

等を柱とするものです。

OBの皆様、お一人お一人の善意とご厚情が基金へのご寄付の姿で、母校明治の旗の下で終結することを心より願っております。何卒ご理解の上『特別基金』へのご参加を伏してお願ひ申し上げます。

尚、平成10年度卒業生より、学校、PTAのご理解の下に、個人会費制をとり、終身会費として1万円を総明会に納入して頂きました。毎年200万円以上に達するこの資金は、一般会計ではなく、この『特別基金』に算入しておりますことを、併せてご報告申し上げます。

今年2月に逝去されました片岡龍夫名誉顧問のご遺族の小平紀子様から、故人のご遺志ということで総明会に100万円の御寄付がありました。今回設立された『特別基金』に繰り入れることにいたしました。」。

また、卒業生への終身会費については、その創設時、向殿会長名で、学校教員、PTA会員宛に送った趣意書が母校総明会室に残されていたので紹介する。

「明治中学・高等学校教員各位、PTA会員各位、常日頃、総明会の活動に対するご協力とご配慮に深く感謝申し上げます。

さて、総明会においては、母校に対する財政的支援の可能性を求め、財務部を中心に長い間、財政基盤の確立について検討を致して参りました。

これまでは、各新入会員から卒業時に学校側及びPTA側のご協力を得て総明会の入会金を徴収して戴き、さらに卒業後は各年度の同期会から年会費を徴収して、これらの財源を以て会の運営をして参りました。しかし、卒業後に年会費を徴収するには、同期会の基盤の無い学年にとってはかなり困難が伴い、納入率が悪くなるばかりでなく、各年度の幹事の個人的負担となるケースもあり、同窓会活動に支障を来すようになっているのも事実であります。

そこで、今回、他校の多くの同窓会が採用していますように、総明会としても、入会金とは別に終身会費を別途徴収して、徴収した終身会費は年間の必要経費には組み込まず、基金として積み立てて生かすような方策として、基金制度を発足したいと考えました。この基金の活用の一例としては、例えば、生徒の中には親を亡くしたり、親の経済的理由から学業半ばで明治中学・高等学校を去らねばならなくなるような場合が時々あると聞いておりますので、このような生徒に対する奨学金等に充てることも考えられると思います。

この新しい制度にはOBにも参加して戴いて、より強力なものとする事により、総明会の長い夢でありました財政基盤の確立と母校支援のための基金の創設が可能となります。

以上、同窓会の終身会費制の趣意を述べさせて頂きました。

ご父母の皆様方には、この趣旨をご賢察戴き、終身会費の創設に対して是非とも御理解とご協力を戴きたく、宜しくお願ひ申し上げる次第です。」。

向殿体制発足当時に掲げた「財政基盤の確立」を特別基金の発足、そしてその主たる財源

となる終身会費の導入によって成し遂げて行った。平成11年度の会計報告では収入で総明会基金が450万円計上され、次年度繰越金が1千万円以上となり、一般会計で1千400万円を超え、総会会報特別会計も1千万円弱で、総明会の事業全体として年間約2千500万円とその規模を一気に拡大した。

11. 組織の確立

この年（平成11年）、専務理事尾島育四郎氏の活動報告で新制度について説明している。

それは従来の「部」から「委員会」制度に移行すると共に、明確にその委員会の役割を示している。ここに尾島氏の報告と新制度の委員会の役割を記す。

「向殿会長を中心に、総明会組織のあり方を従来の『部』制度から『委員会』制度に移行すべく、各委員会を担当役員の下に設置し、事前に打ち合わせをして担当役員の了承の下に理事会に議題を提出して、理事会了解の下、評議員会に報告・審議する制度に移行することになりました。その為理事会は年5回開催する事にいたしました。以上のように組織を活性化する事が、今後の若い会員の皆様が総明会に参加する意識を確立するよう活動してまいります。」

現在に繋がる組織がこの時に作られた。理事会・評議員会というそれぞれ構成委員が異なる検討組織が設置された。

12. 追悼 片岡 龍夫

この年、同窓会の設立当時からその基礎づくり、発展に貢献された第2代会長（名誉顧問）片岡龍夫氏が逝去された。片岡氏は総明会の生みの親、育ての親であり、自身が会長を退いても、様々な形で総明会を支えて下さった。その片岡氏と共に総明会の発展にご尽力いただいた小林昭雄氏が追悼文を寄稿している。ここに引用、紹介する。

「片岡龍夫その人は、総明会にとって最後の明治人であった。その表現はいささか注釈を要するであろう。即ち『最後の明治人』とは何か。二重の意味において片岡先輩は『明治の人』であったのである。

その一は、今は無残に墮落した日本に、かつて気概をもって生きた明治人の最後の世代であったことである。

その人たちは、単に明治時代の人ではないのである。日本の近代史に厳然として存在し、今は消滅してしまった明治人、それは私たちが誇るべき日本人の一つの典型としての種族なのである。先輩はその一人として私たち後輩を導いて下さった。

その二は、真正の『旧制明治中学校元生徒』を表象する『明治』の人ということである。」

13. 2000年(平成12年)

第36回総会・懇親会は11月2日(木)、東京マリオットホテル錦糸町東武で開催された。幹事学年は昭和48年卒 波の会である。特筆すべきは開催曜日が木曜日だったことであろう。したがって開始時間も総会が午後6時30分から、講演会が午後7時から、懇親会は午後7時45分からになっている。懇親会のテーマは「会社帰りに昔の仲間に会いませんか」。会社帰りに同窓会に行きましょうという発想である。また、会場も錦糸町というのも総武線沿線に多くの卒業生を持つ明治ならではの選択といえよう。

講演会では小林正三郎氏(昭和32年卒)により「高校球児からサッカーJリーグの経営へ」のテーマで(株)日立柏レイソル社長のスポーツ体験を通じて得た人間関係の講演が行われた。懇親会では、卒業学年毎のテーブルが用意され、ここに来れば必ず誰かに会えるという企画で好評裡に終了した。

そして、この年の会報で初めてタブロイド判から冊子タイプに移行した。内容も同期会報告が更に充実し、また、評議員の名簿や委員会の役割、構成メンバー、活動内容等が掲載された。

総明会委員会活動においては、名簿委員会によりアクティブリストの作成が開始された。

アクティブリストとは総明会活動に理解を示し、面白そうな企画なら参加する意思のある会員リストで、総明会から様々な案内をするものであった。総明会活動の活発化を狙った施策といえる。

また、運営委員会においては第1回シニアクラブを開催した。これは現在の明朗会の前身で年配の先輩を対象とした企画運営であり、内容は落語会や懇親会となった。向殿体制における事業の活発化は推進され、大先輩から若い会員まで幅広く、総明会活動に参加を促すものとなった。

14. 2001年(平成13年)

第37回総会・懇親会は10月13日(土)、東京ドームホテルで行われた。幹事学年は昭和49年卒 翼明会である。懇親会のテーマは「21世紀を楽しく元気に羽ばたこう」であった。

総会においては役員改選が行われ、役員の全員の再任が承認された。講演会においては昭和25年卒、元国務大臣総務庁長官石田幸四郎氏が「明治高校から国政の場へ」というテーマで戦中、戦後の明治中学・高校の思い出や政界の裏話を語った。懇親会は明治大学バンドクラブによる演奏、明治大学チアリーダーの可憐な演技など、21世紀の幕開けの年にふさわしい元気が出るような催しとなった。

総明会組織においては一部変更を行った。組織・クラブOB委員会を組織委員会に名称変

更、M委員会を広報委員会に吸収、行事・企画委員会を企画委員会に名称変更、運営委員会を企画委員会に吸収等の変更内容となった。

そして、財政面においても平成10年度に発足した特別基金とその主たる財源となる終身会費の導入によって、次年度繰越金が約1千900万円となり、一般会計で2千300万円を超え、総会会報特別会計も800万円弱で、総明会の事業全体として年間約3千万円の規模となった。

15. 2002年(平成14年)

第38回総会・懇親会は11月16日(土)、浦安ブライトンホテルで行われた。幹事学年は昭和50年卒 明紫会である。懇親会のテーマは「家族の絆・明治の魂」として家族を大事にすることを念頭におき、プログラムや開催場所、講演会から懇親会まで一つのテーマに沿ってプロデュースした。講演会は総明会顧問卯木敏夫氏を中心としたパネルディスカッション形式で行った。総会では佐久間洋一氏(昭和43年卒)が副会長に選出、承認された。

そして、この年の会報は今までにない画期的なものとなった。それは会報のCD化である。

情報量が豊富で、テキスト、画像はもちろんのこと、オープニングには校歌が流れ、会長の挨拶、応援歌等の音声も楽しめる内容となった。そしてこの会報のCD化に合わせて、コンピューターに不慣れな方むけに、IT講習会も開催した。このチャレンジブルな姿勢こそが、明治中学高等学校の卒業生、すなわち総明会の姿勢であることを象徴した1年となった。

一方、母校においては、創立90周年を迎え、新校長に栗田健先生が就任した。栗田先生は大学の総長も兼務であった。一連の移転問題の鎮静化を図る為の人事とも取れる。母校創立90周年に際して、校史編纂が行われ、総明会からは顧問の小林昭雄氏が編纂に協力した。

16. 2003年(平成15年)

第39回総会・懇親会は11月15日(土)、浅草ビューホテルで行われた。幹事学年は昭和51年卒 明々会である。懇親会のテーマは「元気な明治」で、明中高で学んでいた血気盛んだったあの頃を思い出して、明日の活力になればとのコンセプトとした。獅子舞や浅草サンパフェスティバル準優勝チームによるサンパショー等の催し、講演会では明治大学ラグビー部OBの吉田義人氏にチャレンジスピリッツや北島ラグビーへの想いを語っていただき、コンセプトに合致した内容となった。

会報も前年に引き続きCDでの発行となったが、それと共に従来の新聞の良さを継承し、カラーのタブロイド紙も発行し、CDと同封した。

そしてこの年の総会で10年間会長を務めた向殿政男氏から佐久間洋一氏に会長職が引き

母校移転問題

1998年（平成10年）会報第24号に掲載された「明治高校移転か？」の文章で、総明会内において母校移転問題が表面化した。

そもそも移転問題は昭和40年代より取り沙汰されていた。広大な土地を獲得して人気を集めていたライバル校に対して、遅まきながら校地移転を検討し始めた。移転先は読売ランド付近（現日本女子大所在地）、明大生田、さらに横浜市青葉台、明大八幡山グラウンド、明大誉田農場と推移した。これらの候補地は、いずれも明治大学、移転先の地元、明治高校・中学校内部の各事情によって本決まりに至らず、移転は実現しなかった。地価の高騰や明治高校・中学校が旧制時代以来培ってきた明治ファンを失う事は出来ないとの判断もあった。

その後20年以上の年月が過ぎ、明治大学が1997年（平成9年）12月に調布にある日本航空のグラウンド約14,000坪を取得し、この土地の使用目的に農学部、新学部、明治高校・中学校の移転先等として検討することとなった。

一方、猿楽町校舎の建物、施設は、その在校生徒数から、当時施行されていた東京都学校設置基準を満たしていないとされ、校舎自体も完成後40年近く経過し老朽化が進んでいた。こうした背景から、校舎、施設を東京都の設置基準に満たすものに再構築するか、他の土地に移転して新築、新設するかという選択を迫られた結果、移転問題が再浮上した。

そして、明治大学及び明治高校・中学校の理事、教職員等で構成する明治高校・中学校教育環境改善計画検討委員会が設けられ、同委員会が移転問題について協議検討を開始した。

明治高校・中学校の教職員も校地移転に対して検討を行い、上記委員会に以下の理由で反対を表明した。

- ① 在校生徒の45%を占める千葉、埼玉、神奈川、都内の一部区域から通学が困難となり、



調布の新校舎建設地。

これが高い学習能力と意欲を持つ入学志望者、生徒の減少、生徒の質が低下、明大への推薦にも影響が及ぶ。

- ② 明大中野校及び明大中野八王子校と競合し、同一法人の付属校と系属校が共倒れの恐れがある。
- ③ 調布校地は、以前に早稲田実業高校の移転候補地として検討され見送った経緯があり、この地を本校の移転先とする事に強い違和感がある。
- ④ 調布校地は大学体育会も使用予定であり、明治高校・中学校が敷地全部を利用できない。また調布飛行場の東側で、その騒音が授業に影響を及ぼす。

などの理由からであった。しかしながら、学校法人明治大学では、2001年（平成13年）3月12日開催の理事会、同年10月26日開催の評議員会において、明治高校・中学校の平成18年4月時の調布への移転が決定された。


これが移転問題の経緯と結論である。学校法人明治大学の経営、運営に対して卒業生がどれだけ口を挟むことが出来るかは疑問であるが、直系の附属高校、中学校であるが故にその結論には大きな衝撃があった。

総明会、教職員、PTAが連携して、反対表明を示したが、その想いは大学理事会、評議員会に届くことはなかった。

これ以降総明会は母校移転の支援へと進んでいった。

継がれた。副会長も山崎敬生氏から尾島育四郎氏、服部雄二氏（昭和44年卒）へとバトンタッチされた。

向殿会長は10年間に亘り会長を務められた。財政基盤の確立、組織の確立、事業の活性化、母校との交流の活発化など、就任時に掲げた目標を確実に成し遂げた。しかしそれ以上に、若手を登用し、伝統を引き継ぎ、発展させていった人材育成がその後の総明会にとって大きな功績となった。



第6節 総明会の充実

1. 第6代会長 佐久間 洋一

まず、佐久間会長の初年度となった2004年（平成16年）会報第30号より就任に際しての挨拶を紹介する。

「総明会が、いわゆるノスタルジーに浸るために群れる場ではなく、今を生きるみなさんが『個を強く』して、仕事、趣味などの多方面に活動を拡げ、あらゆる垣根を越えて縦横無尽に世界中の人と出会う端緒を開く場にしたいと考えています。

壮大に過ぎる目論見と取られるかも知れませんが、1万数千名にも上る卒業生とその関係者がネットワークを駆使し、相互に情報交換できるようになれば、夢物語に終わる事はないと信じます。

この目的の実現には、皆さんに総明会のホームページ等を活用いただき、かつ総明会活動に参加していただくことが必要不可欠です。そこで、ホームページを充実し、会則を見直し、活動の広範囲化を図り、より魅力ある総明会活動になるよう努力します。」。

以上のように、佐久間会長は従来の総明会の更なる発展を目指し、ネットワーク化の拡充とそれと連動した活動の多様化、そして新たな総明会のあり方を規定する会則の見直しを公約として掲げた。

前任の向殿会長が昭和36年卒に対して、佐久間会長は昭和43年卒である。若返った会長らしい、変革への意気込みが感じられる挨拶となった。

そしてまず佐久間会長として初めて実施したことは総明会賞の見直しであった。今まで、高校3年生を対象に授与してきた総明会賞であるが、これまでの成績優秀者に対する表彰から、2003年度からはそれに加え班、クラブ活動、対外活動、学校行事など、学校生活全体を通して活躍や貢献をした人物も選考の対象とした。また、表彰状にはその表彰内容を明記して副賞の万年筆とともに贈呈をすることとなり現在に至っている。

2. 2004年(平成16年)

第40回総会・懇親会は11月20日(土)、アルカディア市ヶ谷で行われた。幹事学年は昭和52年卒 プリリアントクラブ(後の男子校根性組)である。懇親会のテーマは「質実剛健－原点回帰－」とし、男らしさ、汗臭さ、蛭カラ、硬派などをキーワードにし、「男子校根性物語」と銘打って会報、総会・懇親会を進めた。

講演会では、宝井琴調師による講談「幡随院長兵衛」が、すばらしい口調で語られ、また懇親会では、馬簾太鼓、ビックバンド等の催しが行われた。

会報の特集においても「男子校根性物語」と題し、校訓である「質実剛健」を取り上げ、「蛭カラ」をキーワードとして先輩、後輩、そして同期の「蛭カラ」体験記を掲載した。母校が男女共学に向かうなか、男子校しか知らないOBにとって懐かしく、楽しい内容となった。

総明会の活動においては、組織検討委員会において北島常務理事を委員長に、上は昭和17年卒の安藤賢司氏から昭和53年度卒の竹越利之委員まで9名にて、会長の選考方法、基金の運用等の総明会の基本となる諸問題に対して検討を開始し、会則の見直しに着手し始めた。

一方、母校においては、新校長に吉田善明先生が就任した。吉田校長は法科大学院教授を兼務しながらの校長就任であった。

3. 2005年(平成17年)

第41回総会・懇親会は11月20日(日)、ホテルパシフィック東京 萬葉の間で行われた。幹事学年は昭和53年卒 紫友会である。懇親会のテーマは「やらせて！お願い！1,000人総会」とし、日曜日の午後2時より総会を始め、一人でも多くの同窓生に参加してもらおう計画を立てた。総入場者は417名で大盛況となった。

総会では佐久間会長の3年目への信任が得られ、副会長に新たに吉田耕太郎氏(昭和45年卒)が選任、承認され、三副会長制となった。講演会では昭和29年卒、国際アイスホッケー連盟副会長の富田正一氏の貴重な体験談が語られ、懇親会はスペシャルゲストに歌手の庄野真代を迎えて開催された。

会報特集は「セピア色の思い出～紫紺色の男坂」と題して、中高時代の思い出の寄稿を集め、その寄稿者中からセピア色大賞を選出する内容となった。

一方、3年目への信任を得られた佐久間会長は精力的にその活動を加速して行った。まず、公約に掲げたホームページの充実である。掲示板には同期会案内やクラブの集会、訃報などを掲載することができ、母校や大学のホームページにリンクを貼り、会員のホームページにもリンク可能にし、携帯電話からもアクセスできるようした。

そして、母校移転後の総明会活動拠点の確保にも取り組んだ。これまで総明会理事会、評議員会は御茶ノ水の猿楽町校舎で開催されていた。調布移転に伴い総明会の活動拠点をどこに置くかという問題にも直面したのである。明治大学小川町校舎跡地の校友会館（現在の「紫紺館」）に総明会室を開設することは実現しなかったが、2008年の調布移転以降はこの紫紺館で理事会、評議員会が開催されることになった。そればかりではなく各委員会活動や幹事学年の会合も紫紺館で開催されることとなった。

昨年就任した吉田校長からは、2008年4月から開始される調布キャンパスでの男女共学化実施についての説明が会報第31号に掲載された。

「重要な教育上の課題の一つとして準備しているのは、男女共学化の実施です。本校が女子生徒を受け入れ共学化を図ることについて批判的な意見もありましたが、結論として得たものは、本校生徒が男女平等の価値理念を享受し、心豊かな強く、優しい人間として成長してもらいたいとの念願からでした。それは男女共同参画社会と言われる現代の要請であるともいえます。

女子生徒の受け入れにより卒業生から本校が伝統として培われた『質実剛健・独立自治』の校訓が廢れるのではないかといった不安も耳にしますが決してそうなりません。『質実剛健・独立自治』なる校訓は、一見男子校にみられた慣用語に思われますが、現代という状況のもとで共学校となることを自覚して解釈をしますと、前者は『強さ、優しさ、純朴（純粹）さ』を意図した人材の養成、後者は『学びの自立、共生の自治』の実現と解することができます。『共生』（共に生きる）の背景には、かつて明治大学が他大学に先んじて職業婦人を輩出した女子部がそうであったように、この思想は本校の共学化の思想と解し継承したく思っています。」

吉田校長の説明する「質実剛健・独立自治」を総明会は受け入れて、母校は男女共学化実施へと進んだ。

4. 2006年（平成18年）

第42回総会・懇親会は12月3日（日）、セルリアンタワー東急ホテルで行われた。幹事学年は昭和54年卒 明誠会である。懇親会・会報のテーマは「男坂讃歌～未来の後輩たちへ～」であった。母校移転にあたり、想い出の数々を見守ってくれた男坂に想いを馳せ、当時の学生生活を懐かしんでもらうことと、駿河台の地で培われた明治の良き伝統、質実剛健、明治らしさを未来の後輩たちへ語ればよいことのテーマであった。

懇親会では明誠会の名の入った揃いの半被でもてなし、その姿は、さながら新撰組を思わせる威風堂々たるもので、明治祭りにふさわしく、質実剛健の明治らしさを未来の後輩たちに充分伝えられたものとなった。

会報においても男坂を中心とした学生時代の思い出にとどまらず、男坂の歴史、校舎の変遷などを調査、掲載し、駿河台を振り返るのに十分な読み応えのある内容となった。

総明会においては、この年、幾つかの新たな取り組みが明確になった。それは、母校移転への協力と会則改訂への取り組みである。

まず、母校移転に際しての記念品と「母校創立100周年」の記念事業として寄付を募ることが、前年(平成17年)の総会で決定した。寄付金額は一口1万円以上、寄付目標金額は1千万円で、寄付募集期間は2006年10月から2012年12月とし、寄付金募集に際して母校の協力を得て、所得税の寄付控除が受けられるようにした。

そして、会則改訂であるが、その目的は、主として会長選出方法をめぐる会員の不満、疑問を解消することであった。このために佐久間会長は就任後すぐに組織検討委員会を立ち上げ、3年間の協議を重ねての上申、承認となった。改訂の要点は、

- ①会長、副会長選出方法の透明化
- ②評議員会の位置づけ
- ③評議員会の構成の変更

つまり評議員をこれまでの各学年選出の委員に加え、各班クラブOB会からの選出者を委員としたことであった。この会則改訂により、平成19年より、各班部OB会より代表1名が、従来の学年評議員と共に評議員会を構成し、協議することとなった。会長、副会長選出委員会も評議員会、理事会から3名の委員を選び、昭和17年卒の安藤賢治氏が委員長に就任し、選考会を発足することとなった。

この年のもう一つの新たな取り組みは個人情報の保護に関する規定の確立とその施行であった。個人情報保護法が2005年(平成17年)4月1日に全面施行されたことによる対応であった。前年の総明会「プライバシーポリシー」に続く措置であり、これまで総明会の一大事業であった名簿はこれ以降発行されることが無くなった。

5. 2007年(平成19年)

第43回総会・懇親会は11月17日(土)、場所を御茶ノ水に戻して行われた。幹事学年は昭和55年卒 紫魂会である。総会は母校視聴覚教室で行い、懇親会は明治大学アカデミーコモンで開催した。明治中学・高校が御茶ノ水で迎える最後の総会・懇親会であった。母校視聴覚教室で行われた総会後には、男坂で各同期の写真撮影が行われ、懇親会も「さらば男子校～更なる飛躍～」のテーマにふさわしい駿河台での思い出をよみがえらせる企画となった。

そして、吉田校長のあとを受けて、母校出身の小林正三郎校長(昭和32年卒)が就任している。小林校長は明治中学校、明治高等学校を経て、昭和36年3月明治大学商学部を卒業され

ている。その後、(株)日立製作所に入社、その後サッカーの(株)日立柏レイソル代表取締役社長を務められた。民間企業出身という、これまでの校長にない経歴である。



この年の会報第33号に総明会より寄贈される校地移転記念レリーフの内容が掲載された。作者の岡島延峰氏の説明を紹介する。

「表現イメージタイトル『男坂』。伝統ある明治のイメージとして、重厚感・純粋性・柔らかいがこれだけは譲れないと言い切る頑固さを感じ、私が選んだ素材は銅です。これは人類が初めて道具に使った金属であり、又柔軟性・延展性に富み、これぞ明治に最適な素材であると確信しました。

駿河台から調布へ移転、又男女共学となり学園の雰囲気も明るく華やいだものに成ると思います。

その様な事を念頭に置き考えたのは金属の持っている色、それを最大限効果の有る表現方法で今までには無い作品に仕上げたいと、銅・真鍮・ステンレスを用い、又それらの金属を塗装ではなく他の鉱物を用い、色の幅を持たせることにしました。

明治と言えば『男坂』、この男坂を作品の主題に据え、銅板をベースに本緑青で仕上、左に富士山と聖橋を浮き彫り(レリーフ表現)、右側には銅を硫化で^{いぶ}燻して赤黒く力強い動きを持たせ、その男坂をステップにして飛び立ち、世界で躍進している先輩達の力と自信を、銅・真鍮・ステンレスを用い明確な弓状のカタチで表現し、又左側に有る球状の物は子供達の無限の可能性と抱きかかえきれない位大きな夢をイメージし、それらも銅・真鍮・ステンレスを用い、又一部に鉱物を使い変化を持たせることで作品全体に華やかさを表現させる事ができると思います。これにより男女共学の生徒達にも受け入れ易くなると思います。」。

6. 2008年(平成20年)

第44回総会・懇親会は11月15日(土)、母校調布新校舎にて行われた。幹事学年は昭和56年卒 明翔会である。学年テーマは「新たな飛翔～Boys & Girls～」で、明治高校・中学が猿楽町から調布に移転、共学となったことから新校舎での開催となった。新校舎までは、紫紺のスクールバスを手配し遠方からの来校者への対応も配慮された。総会は3階多目的ホールで行われ、その後新校舎見学会を実施し、その後懇親会という内容だった。懇親会では、旧猿楽町校舎の閉校式、調布新校舎の開校式や入学式の様子等がDVDにて放映された。調布の地で初めてOBによる「白雲なびく」が斉唱された総会・懇親会となった。

会報においても、新校舎の紹介、新校舎調布周辺の紹介、そして男女共学となった学校教育の現状を先生方との座談会を通してレポートした。表紙も校舎に向かって歩く男子生徒と女子生徒の写真を使用し、新校舎の様子をより鮮明に伝えるため、冊子形式では初めて一部カラー化を実施した。

この取り組みは今後の会報作りに活かされることになった。とりわけ新校舎のレンガ色、校庭の緑、そして抜ける様な青空は都心ではみることのない景観であった。カラー写真をから伝わる新校舎は新生明治の未来を感じさせるに十分であった。冊子のカラー化や取材を通して学校との連携を強めるなどエポックメイキングな会報になった。

7. 2009年（平成21年）

第45回総会・懇親会は11月29日（日）、ANAインターコンチネンタルホテル東京で行われた。幹事学年は昭和57年卒 明魂会である。「明治魂 ～伝承～」をテーマとし、母校の学び舎は調布に移転したが、明治魂は永遠に不変であること、その明治魂を追い求めた。鈴木秀彦氏（平成13年卒）による「極寒の地 南極の冬」と題した講演会を、懇親会においては卒業生のお笑いコンビ「シバカゼ」（柴田拓磨氏、関谷風次氏 共に平成21年卒）による漫才が催された。彼らは、在学中に「M-1甲子園2008」で3年連続決勝戦まで進んだそうである。

この年の会報から冊子サイズがA5版となった。より見やすい、読みやすい会報作りを目指しての取組であり、テーマ会報らしく八丈島高校OB、昭和33年早実戦など、さまざまな「明治魂」が寄稿された。

そしてこの年の総会においては3期6年の任期を終えた佐久間氏から尾島育四郎氏（昭和41年卒）に会長職がバトンタッチされた。佐久間会長はホームページの充実、会則の改訂などの整備に取り組み、また、母校移転という明治激動の期間を会長して務めた。

第7節 総明会は未来に向かって

1. 第7代会長 尾島 育四郎

平成21年11月29日の第45回総会において、第7代会長として尾島育四郎氏が承認された。

尾島会長は、5代目会長向殿氏の時代にスタッフとして参加し、会の財政基盤の確立、組織の確立、事業の活性化、母校との交流の活性化に携わった。母校創立100周年、総明会50周年

という大きな節目、新時代を迎える時代の会長として就任した。会長就任の挨拶で、「次のステップは総明会と母校のコミュニケーションを盛んにすることが我々の使命だろうと考えています。」と抱負を語っている。

この年(平成21年)、母校には金子光男校長が就任している。金子新校長は1967年、明治大学政治経済学部卒業後、政治経済学部助手を経て、1987年明治大学政治経済学部教授、学部長などを歴任している。そして3年後に迎える創立100周年に向けて、向こう100年の飛躍を目指した意義深いものにすべきとしている。会報の金子校長の挨拶からは、大学教授側から見た付属と高校校長側からみた付属という話が書かれている。異なる立場に居た金子校長ならではの話だが、これは視点を変えれば同じ事象であっても立場で見方が異なるという実例である。この違いを埋めるのが「コミュニケーション」であり、今後の学校と総明会を取り持つ重要なキーワードであることを示している。

また、清水紀夫元校長が残した寄稿の中にもあったように、「…たとえば、学校行事や班・部活動への積極的な参加で充実感や感動が与えられることは、明治の教育上不可欠な要素なのです。それは、ここで指導してくださる先生やOB、上・下級生との日常的な接触こそが、個々人の人格形成に、教室での学習にまさって役立つからです。そこに、歴史と伝統ある明治の校風を体得すべき内容が凝縮されており、また、本校では特に重んじられているからでもあります。」。

母校が目指すべき指針と尾島会長の指針が重なってくる。学校と総明会の接点はここから始まり、まずは母校と総明会が意思疎通をはかりベストな関係を構築すべきと語っている。

新会長は各委員会の委員に若手を起用する一方、育成委員会を新設するなど総明会の伝統を堅持しながら、毎年の幹事学年制を次世代の会員に円滑に引き継ぐよう磐石の布石を敷き、今日に至っている。若手の登用は今後の総明会を考えれば非常に重要な位置付けになっている。これは、総明会の活性化にも繋がり、また、若手から若手への次代を担う世代の育成という意味合いが強い。

本当の狙いはこの先輩、後輩という関係から伝統を継承していくことにある。組織の活性化を図る一方、会員相互の親睦、総明会の活動を幅広い層に知ってもらうために2010年5月にホームページのリニューアルを実施した。これにより発信する活動報告、情報告知など情報も増えた。

2. 2010年(平成22年)

第46回総会・懇親会は11月20日(土)、ホテルイースト21東京で行われた。幹事学年は昭和58年卒 明輪会である。テーマは「ひとのわ こころのわ」。幹事学年である昭和58年卒の彼らの多くは昭和39年生まれである。すなわち東京オリンピックが開催された年である。五輪の

「輪」から会名を得ている。

この年は総会の前に在校生も参加する「明大明治カミング」と題して学校説明会に加えて在校生によるマンドリン部の演奏、吹奏楽班の演奏、応援指導班の校歌・応援歌披露が行われている。生徒の参加、学校説明会という今までにない取組は大いに評価された。

テーマである「ひとのわ こころのわ」は会報全編に貫かれ様々な「わ」を伝えている。総明会における「わ」は、一年間の活動そのものであり、いつの時代も組織を支える土台である。言葉に出さずとも「わ」は「輪」であり「和」ある。

3. 2011年(平成23年)

第47回総会・懇親会は11月19日(土)ホテルイースト21東京で開催された。幹事学年は昭和59年卒 明心会である。テーマは「未来へつなぐ絆～100周年に向かって」とある。

この年の3月11日には東日本大震災が起きている。実際に震災以降は総明会も全ての事業が止まった。それほど、先が見えない未曾有の災害であり日本中が沈黙した年であった。第47回総会・懇親会はそのような中で開催された。

会報も絆をテーマに特集が組まれている。母校でもこの年の3月には初めての女子卒業生を送り出している。明治高等学校・中学校が男女共学となって3年が経過し64名の女性を総明会に迎えることになる。それに伴い「班・クラブOB会」は「班・クラブOB・OG会」と改称し、各班・クラブOB会も名称を変更している。看板は架け替えても、内容が伴わなければ意味がない。今の総明会において、あえて欠けているところがあるとすれば「女性」の存在であろう。現在、評議員において数名の女性の名前をみることができる。これからの総明会の運営で急務なのは女性スタッフの登用であろう。

4. 2012年(平成24年)

第48回総会・懇親会は11月25日(日)、ハイアットリージェンシー東京で開催された。幹事学年は昭和60年卒 闘紺会である。テーマは「新しい100年へ～今を知り、明日を考える。」であった。この学年の特筆すべきことは、次年度幹事学年も交えて活動したことである。次年度幹事学年新世輝(昭和61年卒)のために役立つことはないかと考え、定例会議に参加させたり、諸先輩の同期会に同行させ、寄付・広告のお願いをしたりと少しでも早く、幹事学年の活動や準備を見せ、教えてあげたいという気持ちからである。

明治高等学校・中学校は旧制中学開校以来、創立100周年を迎えた。母校は「創立100周年記念事業委員会」を発足し、委員会の副委員長には尾島会長、向殿元会長が就任した。記念

事業として開催された「創立100周年記念式典・祝賀会」では、長年にわたり母校のためにご尽力された方々（個人6名、団体3団体）に対して功労者表彰が行われ、総明会もこの中に含まれていた。代表として尾島会長が登壇し、金子光男校長から賞状が授与された。

総明会としても母校へ最大の応援体制を敷いていくために桑崎安弘氏（昭和50年卒）を委員長とし100周年記念委員会を設置した。委員会の事業として総明会主催の「創立100周年記念祝賀会」を平成24年5月5日（日）に明治大学アカデミーコモンにおいて開催した。祝賀会においては「これからの100年に向けて」と題したパネルディスカッションを行い現役大学生の若い卒業生も含め200名を超える参加者があり盛会裡に終了した。

また、創立100年という節目を迎えるにあたり、チャリティゴルフも「100周年記念大会」と題し6月2日（土）120名参加という過去最大規模の大会となった。

さらに、「鶴澤総明奨学金」として総額3千万円の寄付を行った。思えば同窓会設立当時は、運営資金すら不足しているような万年金欠団体だった。それが約半世紀を経過してまとまった金額の寄付ができる団体に変貌した。財政基盤の充実は総明会の念願だった。多くの卒業生の努力の賜物だと思うと同時に、この寄付が生きた寄付として母校の繁栄に寄与できることを祈るばかりである。

この年の会報には100周年を記念した特集が組まれている。とりわけ明治大学、明治高校のトップが顔を揃えた座談会は過去の座談会とは一線を画す内容となった。座談会の中で金子校長から聖書の、「木はその実によって知られる」という言葉を引用した話があった。これは、木が良いか悪いかは、成った実で分かる。つまり明治の評価はその卒業生によって判断されるのである。総明会の活動はそれ自体に様々な効果が期待できるのである。

大学が望む付属校生、そして明治高校の目指す教育。付属ならではの特色ある教育から、特色ある人材を輩出することが大学から求められている。こうした教育を支えるべく鶴澤総明教育振興・奨学金プログラムが活かされている。長いスパンで行う独自のプログラムが今後どう成果を出すのか大いに期待されている。その一環として、この年には第1回英語スピーチ・コンテストが実施されている。前例のない座談会だったが多くの問題について活発に議論していただいた。直系付属校としての責任の重さを感じると共に、大学からの期待も大いに感じる事が出来た貴重な取り組みだった。

5. 2013年（平成25年）

第49回総会・懇親会は11月10日（日）、前年と同じハイアットリージェンシー東京で行われた。幹事学年は昭和61年卒 新世輝が担当した。テーマは「頂を目指す 繋がる伝統を世界へ」である。母校100年の歴史と伝統を今に伝え、その思いをもって世界へ羽ばたく精神をという

鵜澤総明教育振興・奨学金プログラム

母校は、創立100周年記念事業の一つとして、「鵜澤総明教育振興・奨学金プログラム」を創設した。このプログラムは、母校がこれまで歩んできた100年の伝統と偉業を継承するとともに、新たな100年を見据えた教育振興・奨学金プログラムである。このプログラムの最大のねらいは、100周年記念事業募金による寄付金（積立金）を原資とする奨学金の活用で、海外留学、体験学習、受け入れ留学生との交流等を促進し、グローバル社会におけるリーダーを育成することである。プログラム内容は下記である。

「グローバル人材育成プログラム」

グローバル社会において、世界で活躍するリーダー的人材の育成を目的とし、本校又は明治大学の海外協定校・提携校に生徒を長期（6か月以上）派遣するプログラム。

「世界を知ろう」フィールドワークプログラム

本校が100周年を記念して実施するイングリッシュプレゼンテーション、英語スピーチコンテスト等において、優秀な成績を収めかつチャレンジ心旺盛な生徒を海外に派遣するプログラム。
現地におけるホームステイ体験等を通じ、異文化の理解や国際的なコミュニケーション能力の涵養を図ります。

「海外交流体験プログラム」

本校の海外協定校、提携校等と共同で実施する生徒間交流プログラム、ワークショッププログラム、研修等に参加する生徒に対する支援プログラム。

「訪問留学生サポートプログラム」

本校の海外協定校・提携校と共同で実施する生徒間交流プログラム、ワークショッププログラム、研修等に参加するために来日した留学生に対し、ホームステイ先として受け入れてくれた家庭に対する支援プログラム。

「文化・スポーツ海外交流支援プログラム」

海外の学校、団体等と共同で開催する研究発表、演奏会、交流試合に参加する本校の班・部に対する支援プログラム。

「地域共同事業プログラム」

本校が主催または共催する地域と共同で実施する教育・文化・スポーツ事業に対する支援プログラム。
（※国内で実施する事業が対象）

総明会が行った寄付が、生徒が海外留学、体験学習、受け入れ留学生との交流等を促進し、将来積極的に海外に飛び出し、グローバル視野を持った人材へと成長していくことに役立つことを期待する。

コンセプトからこのテーマとした。会報の特集においては、「明治発、世界へ」というタイトルで、各界のトップで活躍されている母校卒業生にインタビューを行い、次の100年へ挑む母校や総明会会員に勇気を与える内容となった。

6. 会報ネーミング

この年、以前からあった会報に総明会ならではの名前がほしいという意見を受け、会報委員会、理事会、評議員会を経て会報へのネーミングの準備を開始した。総会・懇親会で配った号外や、ホームページ等を通して総明会会員にむけ募集を呼びかけ、23名の方から延べ30件の応募が寄せられた。これを受け会報委員会に広報委員長、100周年記念担当委員長、総務委員長をメンバーに加えたプロジェクトにより選考が行われた。

プロジェクトとしては応募の理由だけではなく、今後も末永く続く会報の名前に相応しいものであることを基準として選定しなければならないという考えに基づいて検討を行った。

その結果、応募された案の中で「紫紺」、「白雲」、「総明」、「男坂」といったキーワードのいずれかが含まれる名前が相応しいという意見にたどり着いた。これらのキーワードともう一つ会報を表す言葉を選定し、総明会の会報を表現できないかということになり、会報を表す言葉として「詩」が考えられた。

「詩」は応援歌などの歌（音）ではなく、我々総明会会員の心に残る詩（言葉）ということから上記キーワードと組み合わせた場合、最も響きが良く、総明会会報に相応しい名前であるとしてプロジェクト案「紫紺の詩」が第49回総会にて正式に承認され、誕生した。

こうして総明会会報は平成26年の会報から「紫紺の詩」として新たな一歩を踏み出すことになった。

7. 2014年（平成26年）

総明会は記念すべき設立50周年を迎え、第50回総会・懇親会は11月16日（日）3年連続でハイアットリージェンシー東京にて行われた。幹事学年は昭和62年卒 明猿会である。

この年から会報の表紙は総明会名誉会長 向殿政男氏に揮毫いただいた「紫紺の詩」を使用し、向殿名誉会長、幹事学年、現役大学生という世代の違うメンバーによる座談会が行われている。

また、この年を最後に金子校長が退任されている。金子校長は調布移転、男女共学化、母校創立100周年など激動の新生明治の校長としてご活躍された。

金子校長の後を受けて、安藏伸治新校長が就任し、これからの新生明治を託された。安藏校長は明治大学政治経済学部の教授を兼務されている。会報巻頭の挨拶の中で中学1年生との面談を通し「この学校では今後『競争』はしない」というメッセージを送っている。「助け合い」から学ぶ人間関係を重視して互いにサポートし合い、明日の明治大学を担う人材の育成を目指している。

総明会設立50周年記念式典においては、長年の貢献に対して、向殿政男名誉会長（昭和36年卒）、小林昭雄顧問（昭和22年卒）、山浦晟暉顧問（昭和29年卒）、山崎敬生顧問（昭和32年卒）、佐久間洋一顧問（昭和43年卒）、服部雄二顧問（昭和44年卒）の6名が表彰され、総明会から感謝状と記念品が贈呈された。また、向殿名誉会長による記念講演が行われた。

そして、この総明会設立50周年記念事業は総明会50周年記念誌編纂へと続いていった。



終 節

多くの先輩方がこの同窓会の運営を模索した。どのようにしたら多くの同窓生に参加していただけるのか。その課題は現代にも続く永遠のテーマなのかもしれない。しかし、総明会は今振り返れば多くの問題を「なんとなく」乗り切ってしまった。本当は多くの議論があり、挫折や歓喜もあったと思う。総明会は昭和40年に設立されて以来、その運営は異なる文化を持った卒業生によって行われてきた。それは設立から10回目までの笹村会長時代。そしてそれから6年間の片岡会長時代。この時に初めて伝統と校風（文化）は似ていて異なることを知る。総明会が迎えた初めての試練だったと思う。

この10年間で総明会は次代へ確実にバトンを繋ぐ「幹事学年制」を軌道に乗せる。旧制中学校と新制高等学校の卒業生の融合は必ずしもなし得なかった。我々はこれが単なる世代の違いではなく、校風の違いということに気づく。看板は「明治」でも全く異なる学校だったのだ。このあと栗原、坂本、向殿、佐久間、尾島各会長へと続く。この間、母校の70周年から100周年を共に祝い、「明治維新」とまで言われた母校の調布への移転、共学化を経験した。総明会は規模も大きくなり、母校への経済的支援も行える団体として成長してきた。

総明会は母校の共学化を受けて、女性会員も誕生している。しかし、現時点では女性がいる組織としての実感はほとんど無い。おそらく、総明会の「共学化」は幹事学年が「共学化」した時ではないだろうか。その時、幹事学年は先人の通ってきた道を辿り最良の答えを導き出すのだろう。本章にそんな答えがどこかに書かれていることを感じていただければ幸いである。

組織はいつも時代に柔軟に対応することで継続してきている。そこから伝統が生まれ、校風となって学校を作っている。総明会は様々な時代に対応した校風を持つ卒業生の団体なのである。総明会の本当の強みはここなのだと確信する。それが綿々と受け継がれ伝統を支え、そして母校において「先輩」として「後輩」に伝える。この絶えることの無い活動こそが「総明会」に一番求められている。学校と卒業生を繋ぐその接点が「総明会」ということであろう。

“温故知新”50周年記念誌制作の過程で知った総明会は、苦難の連続であった。初代笹村会長の「同窓会は学校の精神的な支え」といった信念は新鮮な言葉として心に響く。笹村会長がこれだけは固持すべきとした信念は、50周年を迎えた総明会の永遠の課題として受け止めたい。

毎年多くの会員が増える総明会。これから60年、70年、そして100周年を迎える総明会はどうなるのか。そのような団体になっているのだろうか。その様な心配は時代に柔軟に対応する伝統が脈々と

受け継がれていれば、校風は変わるとも伝統は継承されると信じる。

そして、さらに充実した総明会が未来に存在し、いつの時代も活力を失わない魅力ある組織であることを祈願して、2004年の会報巻頭に掲載された次の詩に思いを込めて未来の総明会に贈りたいと思う。

『青春の詩』 作詩家：サムエル・ウルマン

青春とは人生のある期間ではなく、心の持ち方を云う。

薔薇の面差し、紅の唇、しなやかな肢体ではなく、

たくましい意志、ゆたかな想像力、燃える情熱をさす。

青春とは人生の深い泉の清新さをいう。

青春とは臆病さ退ける勇氣、

安きにつく気持を振り捨てる冒険心を意味する。

ときには二十歳の青年よりも六十歳の人に青春がある。

年齢を重ねただけで人は老いない。

理想を失うとき初めて老いる。

歳月は皮膚にしわを増すが、情熱を失えば心はしぼむ。

苦悩・恐怖・失望により気力は地に這い、精神的な芥にある。

六十歳であろうと十六歳であろうと人の胸には、

驚異に惹かれる心、おさな児のような未来への探求心、

人生への興味の歓喜がある。

君にも吾にも見えざる駆進が心にある。

人から神から美・希望・喜悅・勇氣・力の靈威を受ける限り君は若い。

靈感が絶え、精神が皮肉の雪に覆われ、

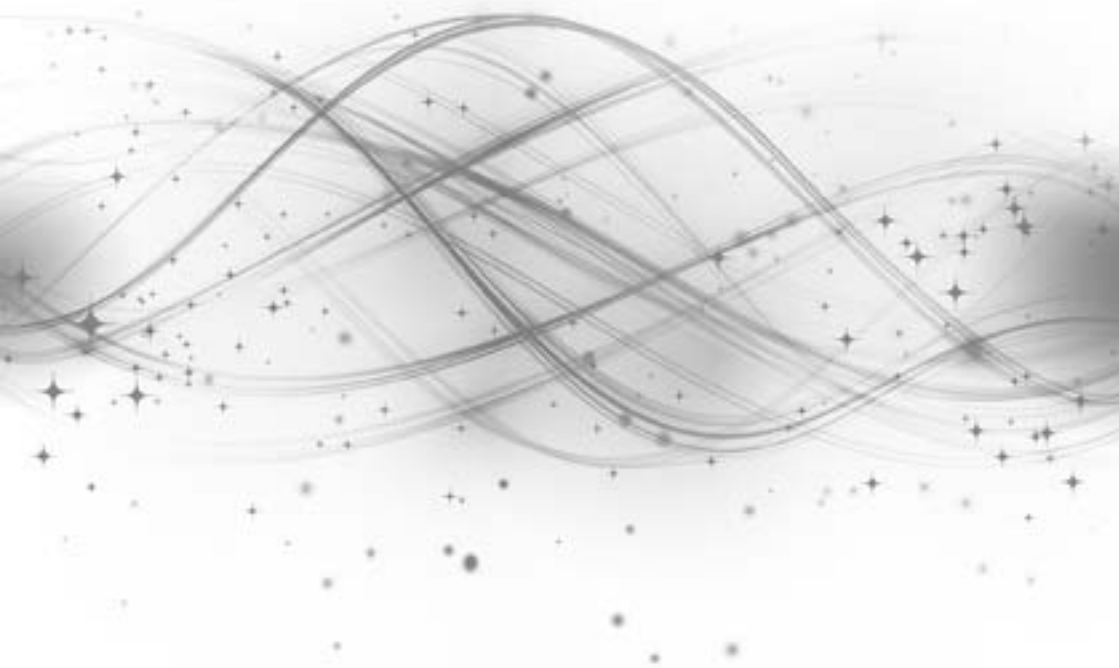
悲嘆の氷に閉ざされるとき、

二十歳であろうと人は老いる。

頭を高く上げ希望の波をとらえる限り、

八十歳であろうと人は青春にして已む。

第3章 総明会の活動



総明会の運営組織および一年の主な活動

1. 主な委員会の紹介

【総会委員会】 総会および懇親会の円滑な開催および充実を図るために、幹事学年と連携しながら支援を行う。ここ数年は総会部門に加えて、次年度以降の幹事学年を育てていく育成部門を配し、これらを2つの柱として活動している。

【会報委員会】 幹事学年と連携しながら、会報誌の特集記事の検討や制作過程における各種助言を行い、内容の充実を図る。また会報誌の発送に協力する。寄付金・広告費についても他委員会と連携しながら円滑に集める協力をする。2014年は総明会創立50周年を記念して会報誌の名称を『紫紺の詩』にネーミングした。

【ゴルフ委員会】 年に一度、総明会ゴルフコンペ（現在の正式名称は総明会チャリティゴルフ大会）の開催に向けた企画・立案、および実行を担う。
最近では参加者が総勢100名を超える華やかなゴルフ大会になっている。「個人順位戦」、「学年対抗戦」、「名人戦」、「大名人戦」からなる4種類の競技とドラコン・ニアピンの各コンテスト等を実施している。

【企画委員会】 会員に親睦を図るため、種々の行事を企画する。
近年の定例行事は、当初若手の会に刺激されて、60歳以上の先輩を集めて楽しんで頂くことを目的に行われた『明朗会』である。

【組織委員会】 学生を中心とした若手会員をサポートし、総明会全体の組織が盤石なものとなるよう種々の活動を行っている。
卒業を間近に控えた高Ⅲ生徒への『総明会説明会』の実施、卒業する生徒から指名された同期の活動の要となるクラス代表委員に対して行う『新卒会員との昼食会』の開催、大学卒業の時期に合わせた『同期会』の開催を促進する活動、大学在学中の1～4学年のクラス代表委員同志の親睦会である『若手の会』の開催（例年10月頃）など、総明会組織の礎を構築すべく活動している。

- 【総務委員会】 年三回の評議員会の準備・受付・議事録の作成、毎年7月に行われる「評議員・班クラブOBOG会懇親パーティ」、年末に行われる総明会の忘年会の準備・実行等が主な活動。緑の下で総明会を支える等、管理運営に関する要となる活動を行っている。
- 【広報委員会】 総明会ホームページの更新管理を担当している。総明会の各種情報をはじめ、幹事学年の活動状況、各委員会の活動報告、最近ではOB会の連絡や報告、運動部の試合結果の連絡等、各種イベント情報を掲載している。
- 【名簿委員会】 総明会会員（2万名を超える同窓生）の名簿を管理する。同期会・クラブOB会で必要とする名簿検索を行う。住所移転・変更時に改訂を行う。
- 【周年委員会】 明治高校・中学校の創立100周年を記念した祝賀会の開催、また総明会創立50周年の記念事業の企画・立案および実行を担う。
- 【その他】 総明会として卒業生への総明会賞の授与、母校の夏季クラブ活動におけるスポーツドリンクの差し入れ等を行っている。

2.総明会の意思決定機関の仕組み－総会・理事会・評議員会－

「総会」は会則に定める事項やその他重要な事項のうち、理事会が提案して評議員会が必要と認めた事項を審議事項として決議する。「理事会」は理事をもって構成され、会長が招集する。各委員会の委員長は理事となる。

「評議員会」は会長が招集し、会則に定める事項やその他重要な事項を議決する。評議員の構成は各卒業学年から2名以内、および総明会に登録した班部OBOG会から各1名とする。

会員は同期会を組織するとともに、在校中に在籍した班部毎に班部OBOG会を組織することができる。



総会



理事会



評議員会

3.総明会活動の1年間

総明会全体としての主な活動内容を紹介します。毎年11月頃に開催される総明会総会・懇親会を頂点とする総明会関連行事の企画・実行、また母校の学校行事への参加、白駿会（明治高校PTAの同窓会）や武陵会（明治大学附属中野中学・高等学校校友会）との親睦などの例年の活動に加えて、ここ数年は周年事業など、同窓会組織として幅広い活動になっている。

11月



総会・懇親会



忘年会

12月



第一回理事会



第一回評議員会

1月



顧問会

2月



高校Ⅲ年生対象の総明会説明会



武陵会（明大中野校友会）との懇親会

3月



第二回理事会



新卒業クラス委員との昼食会



卒業式（総明会賞授与）

4月



第二回評議員会



明治高校入学式

5月



第三回理事会

6月



総明会チャリティゴルフ



白駿会総会

7月



評議員・班クラブOB・OG会



第四回理事会

8月



第三回評議員会

9月



明朗会

10月

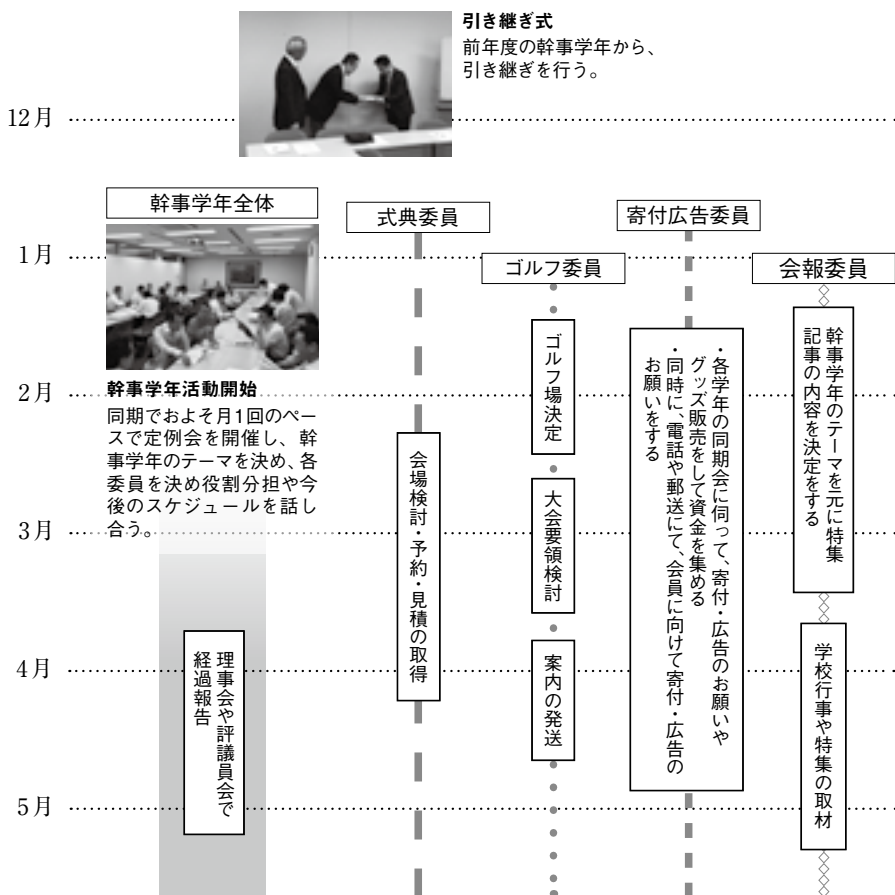
※開催時期は目安、理事会・評議員会等の開催回数は年により多少異なる。

4.幹事学年の活動内容

総明会には、「幹事学年制」がある。これは、昭和54年の第15回総会・懇親会から正式に採用・実施された制度であり、同窓会本部の負担を軽減すると共に、同期会の集合体が同窓会であるという総明会の理念に基づき、現在の総明会運営の根幹を司る制度である。

具体的には、毎年45歳になるOB及びOGが、その年のテーマを掲げ、その年に開催される総明会 総会・懇親会の開催準備をする式典委員、会報の企画から制作・発送までを担当する会報委員、総会・懇親会の開催費用や会報の制作費を調達する寄付広告委員、チャリティゴルフ

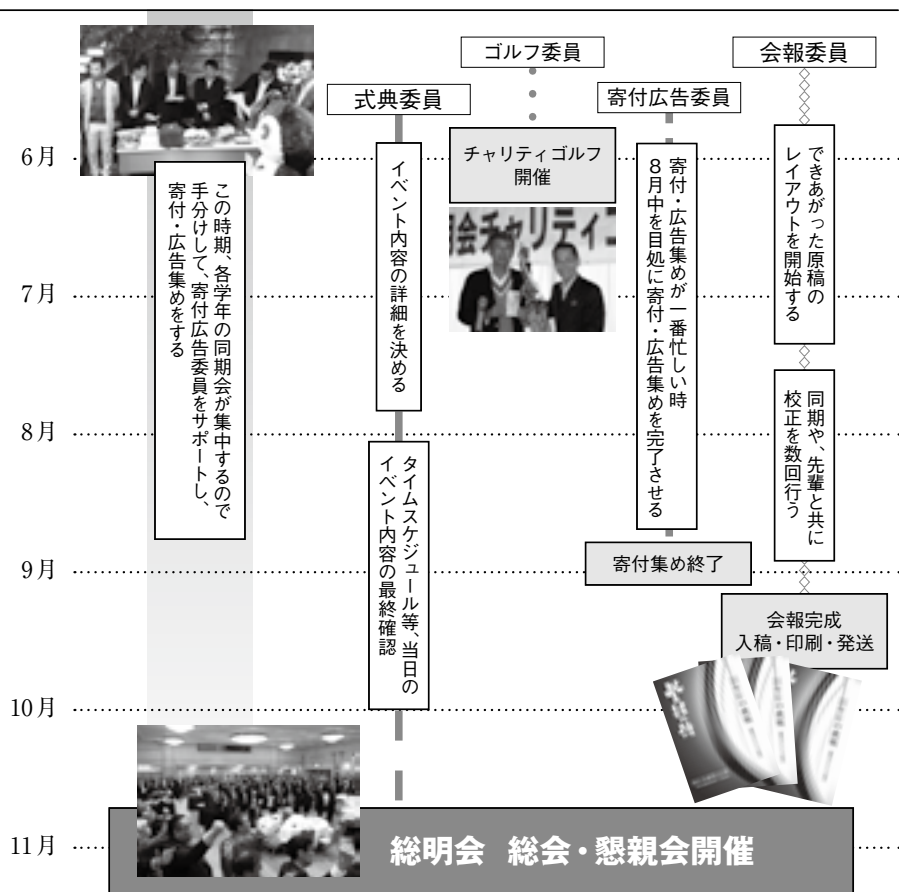
幹事学年の一年



フ大会の運営サポートを担うゴルフ委員などに役割を分担する。

そして、例年開催される「総会・懇親会」をゴールに、各委員の活動報告及び意思決定の場として幹事学年定例会が実施され、総明会本部の各委員会の指導・助言のもと連携し活動する。

この「幹事学年制」により、四半世紀ぶりに多くの同期生が再会し、幹事学年の1年間で共に汗をかくことで絆を深め、ここから参加型の組織的・継続的な同期会に発展する学年も多い。



総明会チャリティゴルフ大会開催一覧

総明会主催のゴルフ大会は「総明会第1回学年対抗ゴルフ大会」として平成7年1月24日にザ・ゴルフクラブ竜ヶ崎にて開催された（参加者82名）。第1回から第4回までのゴルフ大会は比留間竹郎氏（昭和45年卒）が幹事として運営。平成10年には総明会組織の改正により、「ゴルフ委員会」が発足。初代ゴルフ委員長は阿部正行氏（昭和40年卒）、副委員長には北島一弘氏（昭和45年卒）が選任され、第5回ゴルフ大会（平成11年）から委員会配下での運営が始まった。また大会名称は「総明会チャリティゴルフ大会」に統一された。

第6回ゴルフ大会（平成12年）には明治大学理工学部情報科学科向殿研究室の協力を得て、チャリティゴルフ専用ソフトを開発し、ゴルフ成績作成作業の効率化を図る。また同大会において大会史上初のホールインワンを高津茂夫氏（昭和44年卒）が記録した。

第18回ゴルフ大会（平成24年）は母校創立100周年記念大会として開催した。

チャリティゴルフの寄付金は震災支援等の一部を除いて明治高等学校・中学校に贈られ、その総額は150万円超え、母校の発展に寄与している。

大会名称	開催日	開催場所	参加人数
総明会第1回学年対抗ゴルフ大会	1995年（平成7年） 1月24日（火）	ザ・ゴルフクラブ竜ヶ崎 茨城県龍ヶ崎市	82名
第2回 総明会ゴルフコンペ	1996年（平成8年） 3月22日（金）	おおむらさきゴルフ倶楽部 埼玉県比企郡滑川町	82名
第3回 総明会チャリティゴルフ	1997年（平成9年） 4月1日（火）	武蔵丘ゴルフコース 埼玉県飯能市	93名
第4回 総明会ゴルフコンペ	1998年（平成10年） 4月2日（木）	セゴビアゴルフクラブ イン チヨダ 茨城県新治郡千代田町	96名
第5回 総明会チャリティゴルフ大会	1999年（平成11年） 4月4日（日）	筑波学園ゴルフ倶楽部 茨城県西茨城郡岩瀬町	140名
第6回 総明会チャリティゴルフ大会	2000年（平成12年） 3月25日（土）	スプリングフィールズゴルフクラブ 茨城県真壁郡協和町	約100名
第7回 総明会チャリティゴルフ大会	2001年（平成13年） 5月13日（日）	ザ・カントリークラブ グレンモア 千葉県印旛郡栄町	約100名
第8回 総明会チャリティゴルフ大会	2002年（平成14年） 6月2日（日）	飯能くすの樹カントリークラブ 埼玉県飯能市	約100名
第9回 総明会チャリティゴルフ大会	2003年（平成15年） 6月1日（日）	イトーピア千葉ゴルフ倶楽部 千葉県茂原市	不詳
第10回 総明会チャリティゴルフ大会	2004年（平成16年） 5月5日（水）	潮来カントリークラブ 茨城県潮来市	90名
第11回 総明会チャリティゴルフ大会	2005年（平成17年） 5月5日（木）	潮来カントリークラブ 茨城県潮来市	75名



2015年(平成27年)の第21回 チャリティゴルフ大会の写真

第12回 総明会チャリティゴルフ大会	2006年(平成18年) 6月4日(日)	富士OGMゴルフクラブ 出島コース 茨城県かすみがうら市	98名
第13回 総明会チャリティゴルフ大会	2007年(平成19年) 6月3日(日)	富士OGMゴルフクラブ 出島コース 茨城県かすみがうら市	82名
第14回 総明会チャリティゴルフ大会	2008年(平成20年) 6月1日(日)	イトーピア栃木ゴルフクラブ 栃木県下都賀郡都賀町	113名
第15回 総明会チャリティゴルフ大会	2009年(平成21年) 6月7日(日)	サンコー72カントリークラブ 群馬県高崎市	90名
第16回 総明会チャリティゴルフ大会	2010年(平成22年) 6月6日(日)	成田の森カントリークラブ 千葉県成田市	97名
第17回 総明会チャリティゴルフ大会	2011年(平成23年) 9月19日(月)	成田の森カントリークラブ 千葉県成田市	106名
第18回 総明会チャリティゴルフ大会	2012年(平成24年) 6月2日(土)	唐沢ゴルフ倶楽部 三好コース 栃木県佐野市	120名
第19回 総明会チャリティゴルフ大会	2013年(平成25年) 6月1日(土)	千葉新日本ゴルフ倶楽部 千葉県市原市	141名
第20回 総明会チャリティゴルフ大会	2014年(平成26年) 6月1日(日)	プレスステージカントリークラブ 栃木県栃木市	129名
第21回 総明会チャリティゴルフ大会	2015年(平成26年) 5月9日(土)	真名CC・ゲーリープレーヤーコース 千葉県茂原市	118名

明朗会開催一覧

平成12年に運営委員会が60歳以上の総明会会員を対象に相互親睦を深めるために「総明会シニアクラブ」を企画し、中村正容氏（昭和43年卒）を中心に落語を楽しむ会としてスタートした。後に名称を「明朗会」と変更し現在に至っている。

開催日	場 所	内 容	参加人数
2000年（平成12年） 10月14日	御徒町『吉池放心亭』	落語・懇親会 ・古今亭菊若（2つ目）	不詳
2001年（平成13年） 9月1日	御徒町『吉池放心亭』	落語・懇親会 ・古今亭菊若（2つ目）	不詳
2002年（平成14年） 8月31日	御徒町『吉池放心亭』	落語・懇親会 ・古今亭八朝師匠（真打）	39名
2003年（平成15年） 9月6日	御徒町『吉池放心亭』	落語・懇親会 ・古今亭八朝師匠（真打）	24名
2004年（平成16年） 9月3日	明治高校（駿河台校舎） 生徒ホール4号館	落語・懇親会 ・古今亭八朝師匠（真打） ・古今亭志ん五師匠（真打）	58名
2005年（平成17年） 9月3日（第1回）	錦糸町『そばの里みつまさ』 （蕎麦屋）	落語・懇親会 ・三遊亭金時師匠（真打）	39名
2005年（平成17年） 9月1日（第2回）	神宮第一球場	6大学野球観戦 明治vs早稲田	不詳
2006年（平成18年） 9月23日（第1回）	上野鈴木演芸場	落語・懇親会	25名
2006年（平成18年） 10月21日（第2回）	神宮第一球場	6大学野球観戦 明治vs法政	不詳
2007年（平成19年）	神宮第一球場	6大学野球観戦 明治vs早稲田	22名
2008年（平成20年） 9月27日	高田馬場『BIGBOX』	ボーリング・懇親会	19名
2009年（平成21年） 10月18日	東京ドーム天然温泉『スパ・ ラクーア』	温泉・懇親会	37名
2010年（平成22年） 9月25日	浅草ROX『まつり湯』	温泉・落語・懇親会 ・立川らく里（2つ目）	44名
2011年（平成23年） 10月15日	明大アカデミーホール・ 紫紺館『椿山荘』	落語・懇親会 ・明大落研50周年『明大落語会』	48名
2012年（平成24年） 9月29日	銀座グランドキャバレー 『白いばら』	ショー鑑賞・懇親会	42名
2013年（平成25年） 9月14日	東京スカイツリー・ 浅草『き介』	東京スカイツリー観光・懇親会	48名
2014年（平成26年） 9月15日	両国国技館・ ちゃんこ『巴湯』	大相撲観戦・懇親会	54名
2015年（平成27年） 9月5日	日本橋茅場町『鳥徳』	落語・懇親会 ・立川志獅丸（2つ目）、立川志ら 鈴（前座）、三遊亭小円歌師匠（三 味線漫談）（真打）	53名

総明会賞受賞者一覧

総明会賞は、1994年度明治高校卒業式（1995年3月10日）にて3名の生徒を表彰したことから始まる。それ以前は成績優秀な生徒に授与される優等賞の副賞との位置付けであったが、向殿会長をはじめ、総明会執行部の働きかけもあり、独自に総明会賞として、成績優秀者を対象に表彰することになった。総明会賞副賞として高級万年筆も贈られている。

当初、表彰理由が成績優秀者に限っていたため、表彰状の文面は画一的に、『明治大学付属明治高等学校建学の精神にのっとり、伝統ある校風のもとに学業に励んで優秀な成績を収めたことを賞する』であった。佐久間会長時代の2007年度卒業式からは成績優秀者のみならず、班部活動、対外活動、学校行事など、学校生活全体を通した活躍や貢献も考慮して選ばれるようになった。現在の表彰状は、表彰者各人の受賞理由を個別に記載している。

年 度	対象者	受賞理由
1994年度 (平成6年度)	田中 佑治 伊藤 淳史 時岡 淳三	明治大学付属明治高等学校の建学の精神にのっとり、 伝統ある校風のもとに、学業に励んで優秀な 成績をおさめたことを賞する。 ※1994年度から2006年度までの受賞理由は 同一内容であった。
1995年度 (平成7年度)	丸山 徳丈 根岸 圭 中山 源治	
1996年度 (平成8年度)	渡邊 博史 和田 康 片岡 康	
1997年度 (平成9年度)	奥野 照康 野瀬 達也 小黒 祐介	
1998年度 (平成10年度)	稲生 雅史 加藤 尚之 白橋 良修 和田 一真 宮下 崇 近藤 歩 高橋 健一	
1999年度 (平成11年度)	保科 大輔 増井 陽一 川崎 祐介 滝川 昂 大串 佳彦	
2000年度 (平成12年度)	前澤 高志 足立 和也 金子 良平 伊東 大輔 小島 秀夫 成田 正樹	
2001年度 (平成13年度)	木下 拓郎 長島 光一 砂金 英幸 清水 琢実 丸山 達郎 吉田 朋師 鈴木 賢治	
2002年度 (平成14年度)	不詳	不詳

2003年度 (平成15年度)	羽染 敬規 大磯 貴昭 安藤 慶 佐見 勇人 宇須 真一 高山 好司 橋本 雅彦	
2004年度 (平成16年度)	武山 潤 井上 宗一 久 勇介 菅澤 雄大 森 健 吉川 晃平	明治大学付属明治高等学校の建学の精神にのっとり、 伝統ある校風のもとに、学業に励んで優秀な 成績をおさめたことを賞する。
2005年度 (平成17年度)	重光 勇介 遠藤 龍太 若山 宗士 木村 竜太 弦巻 泰之	※1994年度から2006年度までの受賞理由は 同一内容であった。
2006年度 (平成18年度)	池山 志豪 上野 博義 山本 康太 菅原 健生 森 照朝 吉本 将大	
2007年度 (平成19年度)	伊藤 安弘 藤島 秀雄	日本学生化学賞3年連続入賞 生徒会活動での貢献
2008年度 (平成20年度)	杉 正宗	剣道部部長として部の活性化に尽力すると共に、人を思いやり母 校を愛する精神を学校生活の様々な場面で発揮。文化祭などの学 校行事に中心的な役割を担うとともに奉仕活動に積極的に参加 、貢献した。
	中島 直之	硬式野球部副将としてチームをよくまとめ、常に部員のために人 事をつくしクラブを支えた。小さなことでも疎かにせず周囲に気 遣い貢献的に行動する姿勢は学業や学校生活において他の生徒 の模範となり、責任ある立場を任され立派に遂行した。
2009年度 (平成21年度)	久米慎太郎	軟式野球部で鍛えた精神力と礼儀正しさに勤勉さや責任感が備 わり多くの場面で行動の範となった。
	齋藤 豪平	学年の最大行事である修学旅行をこれまでにない見事で感動的な ものにし、成功させた。人物面でも高い評価を教員より得た。
	安田隆一郎	向上心、学習意欲と旺盛で自ら学習内容を深化させ、より高度(平 成年度)な内容を目標とし突き進むことができ、優秀な成績を修 めた。
2010年度 (平成22年度)	細川 桃子	高校生活を通じて、球技大会など多くの学校行事に積極的に取り 組んだ。また日本学生科学賞入賞や日本畜産学会での発表など 学校外での活躍は明治高校の名声を高めるのに大きく貢献した。
	三浦 泰貴	高校入学当初より化学部部長として部をまとめ、その重責を立派 に務める一方で研究活動にも熱心に取り組み、研究成果を日本学 生科学賞、日本畜産学会など権威のある大会で発表し、高い評価 を獲得した。
	春山 愛美	応援指導班においてチアリーディング部門の1期生として数々の 苦難を乗り越えてきたのと同時に女子初の副団長を務め、同級生 や後輩をまとめ上げた。
	塚本 達也	応援団長(兼応援指導班班長)として各部活動の応援を精力的に 行い、全校生徒を励ますとともに気持ちの支えとなった。

2011年度 (平成23年度)	三浦 彩	吹奏楽班の副委員長としてリーダーシップを発揮し、高I、IIでHR委員、学級活動を活発にリードした。
	大熊 康友	サッカー部部長として都大会ベスト16の成績を残し、球技大会や文化祭などの学校行事で率先リードした。
	佐久間美咲	JRC副部長、有志シャブラニール代表として募金活動、慈善活動、国際交流に精力的に取り組んだ。
	東儀 沙弥	応援指導班の副団長としてチアリーディング部を纏めて活性化・後輩指導に尽力した。
	大嶋 将貴	JRC部長として募金活動・事前活動など真摯で地道な活動を行った。
2012年度 (平成24年度)	影山 千春	生徒会誌「過程」の編集委員長として、編集委員をよくまとめ、創立100周年に相応しい成果を挙げた。
	田口 諒	吹奏楽班の学生指揮者としてリーダーシップを発揮し、班員をよくまとめて都大会出場に大きく貢献した。
	田邊知沙希	各活動において責任感と冷静な判断、臨機応変な対応で本校の範であった。
	押田 華穂	応援指導班、初の女子班長としてリーダーシップを発揮して全体を取りまとめた。
	箕浦 啓喜	サッカー部部長としてリーダーシップを発揮し、学習面でも常に高い目標に向かい努力を重ねた。
2013年度 (平成25年度)	若菜 真穂	100周年記念事務委員長として記念行事の企画・準備・実行に携わり、生徒一人一人に良き思い出を創造し、次の100年につなげた。
	土屋 弦	生徒会本部総長および新聞班班長として活動した。100周年記念事業や東日本大震災支援にも参加し、積極的に活動した。
	鈴木 晟史	I年次より協議委員となり、バスダイヤ改正などを手掛け、II年次では協議会議長として生徒会組織の改革主要メンバーとして新組織を作り上げた。
	芹沢 柚香	初の女性生徒会長として生徒会活動の活性化に尽力するとともに、100周年記念式典において本校の紹介で参加者に深い感銘を与えた。
2014年度 (平成26年度)	峰崎 絵美	応援指導班の副団長及び旗手として班を纏め熱心に活動に取り組んだ。修学旅行委員長としてリーダーシップのもと、旅行の成功につなげると共に、学年全体を代表する生徒となった。
	小平 直紀	男子硬式テニス部部長、生徒会本部総務長としてリーダーシップを発揮。学習面でもどの教科も手を抜くことなく真面目に取り組み安定した成績を修めた。他生徒からの信頼も得た。
	村野 陽菜	行動力に溢れ、クラス、学年、学校行事で常にリーダとして活躍し、周囲への細かな気配りと思いやりを併せ持って、多くの友人や後輩からも信頼されている。剣道部副部長としても大変熱心に活動した。
	小林 秀行	抜群の集中力と計画的な学習を積み重ね非常に優秀な成績を収めるとともにバレー部部長として日々熱心に練習に取り組んだ。
	山中 友貴	何事にも積極的かつ一生懸命取り組み責任感も強い。英語力向上にも熱心で非常に優秀な成績を修めた。

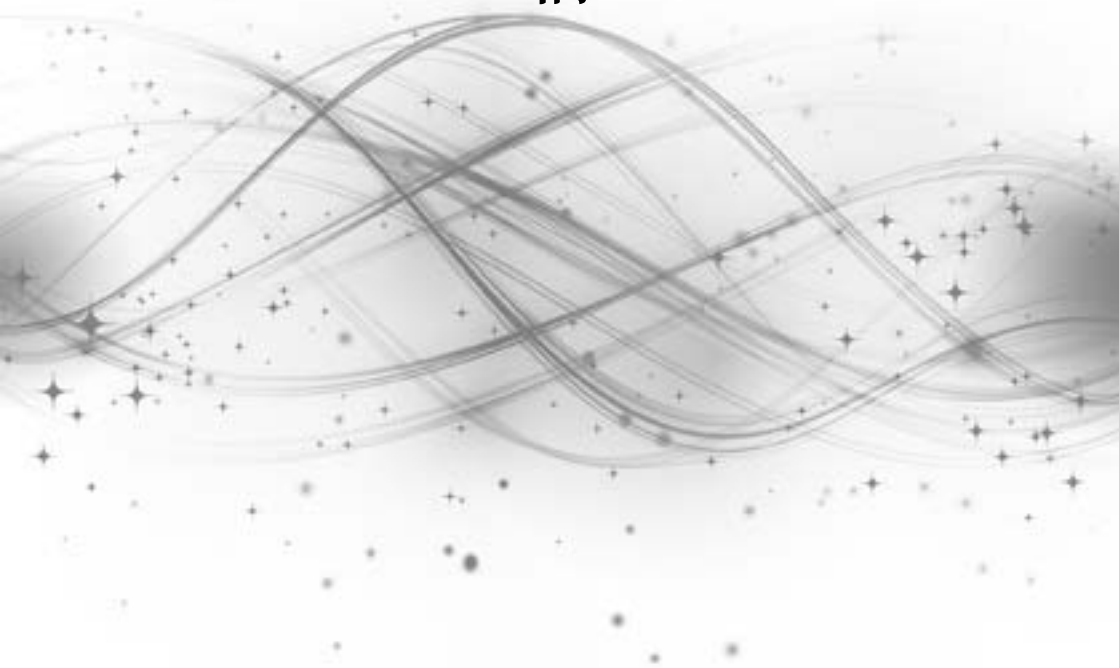


昭和42年当時の校舎



昭和58年当時の校舎

第4章 卒業生学年寄稿



昭和21・22年卒「^{うまみ}午巳の会」

■幹事学年時の総会・懇親会の開催場所

当初不定、後にニューオータニイン東京

■会の名前の由来

会友の生まれ歳の干支が「午」と「巳」であったため。



「^{うまみ}午巳の会断想」

今は昔、戦後復興の兆しが見え始めた某日、元C組11名が母校教室に集合、元担任出井師を囲み昔話に興じた一同期会の萌芽である。纏てA組B組も糾合、遂に昭和33年11月、世話人斉藤君努力の結晶の名簿により同期会結成を目して指針を発信。念願の会発足。

以降各年例会を開催。他方、旅行会「散友会（後に讃友会）」ゴルフ会「UMM倶楽部」は同期会にさきだって活動、親睦を深めた。同窓会への協力では、初期の総会運営を由緒ある日本工業倶楽部において数期に互り担任した。

本会は斉藤君の尽力で諸事追々整い、近年は定例集会場も遠山君父子の斡旋により大崎のニューオータニイン東京とした。会名もすでに同期の干支にちなみ「午巳の会」と決定。旨み又五味を意識し味のある人たれとの寓意を籠めた。

先頃、斉藤君により追想文集「会友寄稿集」が編まれ会の括りが果たせた。会を今日まで倦まず慈しんだ才知宇君又協力者諸君に深く感謝したい。

（文：小林 昭雄）

昭和24年卒「^{いつきかい}明高一期会」

※昭和23年の卒業生を含む

■会の名前の由来

昭和24年（1949年）高校として最初の卒業生なのでこの名称としました。

旧制中学4年終了の人、5年卒業の人と一緒に。

私たちは、昭和18年（1943年）明治中学に入学しました。在校時期は、第二次大戦中と戦争直後の激動混乱期です。戦争末期は東京は米軍機の空襲で被害が続出しました。食糧事情も悪く生活は苦しくなりました。

「勤労動員」にも出ました。子供なりにそれぞれ苦勞しています。そのため「根性」だけがあります。

この15年ほど毎年1回6月に、神田で集まり懇親会をやっています。連絡できている方は41人です。今年はまた一人参加しました。話題は、戦争中の苦しかった話が多いです。

その中でも若者らしく楽しみを求めている話もあります。明中のあった神田の猿楽町や神保町の話。恩師の諸先生の思い出など、話は尽きませんね。

総明会の若い皆さんのご活躍を祈りつつ、これからも元気でがんばります。

幹事は、大西新二、金谷栄一、遠山景忠、守田満、内藤功の5人です。

（文：内藤 功）

昭和25年卒「^{めいじかい}明二会」

■会の名前の由来

後25年卒は新制高校2期生であることから、明二会（めいじかい）を幹事に承認され決定した。



中学4年、校庭にて大柴武男先輩より「お前、チヨット来い」と言われ制裁かなと思いつつ従った。先輩の言葉は「応援団をつくるから、入ってくれと言われ」殴られるより良いかなと思い、応援団創部に参加した。同期は、秋田・小田川・長谷川の3名であった。昭和22年明治中学応援団が結成されたが、翌年新制高校に移行し大柴先輩は旧制5年生卒業になり、引き継ぎもなく1年で消滅になった。

だが高校2年、学校より、虎の門に住まいする島岡吉郎明高野球部監督を幹部3名が訪問するよう指示され、斯くて明治高校応援団が結成するに至った。

平成12年総明会会報の「明治高校校歌物語」において校歌が3つあったと言われていたが、高校には校歌が1つも無かったのが真実である。

しかし21年に八巻明大応援団団長が六大学リーグ戦再開により応援に参加するようにと、全生徒を校庭にて明治大学校歌・応援歌の指導をされていた。

私達幹部3人が意を決し、「白雲なびく」を校歌にしようと生徒監の野木晋一郎先生に願ひ出たところ「良いだろう」と正に鶴の一声。涙ぐんで喜んだ。我が人生八十路なかば、未だ忘れ得ないお言葉である。

（文：小田川 玉城）

昭和27年卒「明高会」

総明会会長の坂本朝一さんは、神田明神下の高級料亭の御子息です。同期会は開いておりませんが、そのご縁で近くの広間のある料理屋で福島元校長さんが担任当時のクラス有志による「こふで会」が毎年開催されています。

総明会の元副会長の卯木敏夫さんも神田の出身です。

総明会の元会長向殿名誉教授は、平成23年11月に明治大学創立百三十周年記念全国校友東京大会を校友会会長として主催し、帝国ホテルに1,300余名の校友を全国から集め、盛大な大会となりました。小生も実行副委員長として参加させていただきました。

総明会で育った大前実之さんが明治大学校友会東京南部支部（中央区、港区、品川区、目黒区、大田区、千代田区）の幹事長兼中央区支部長として活躍され、池上繁夫さんが港区幹事長、大西静士郎さんが千代田区幹事長として活躍されておるのは頼もしい限りです。

（文：米山 耕右 藍綬褒章受賞者・内神田鎌倉町顧問）

八丈島高校卒「八明会」

■会の名前の由来

明治大学付属八丈島高等学校の八丈島の「八」を取り、八明会としました。



第三期生の卒業写真3年間在校した真の意味での卒業生です。

明治大学付属八丈島高等学校創立の経過。昭和23年八丈島に高等学校問題が課題となり、都立園芸新制八丈島分校が昭和23年5月決定。同年7月27日入学式、授業9月1日。当時私は中学生。

八丈島は三根村、大賀郷村、檉立村、中村郷村、末吉村の5カ村。都立八丈島の校舎の建設場所をめぐり、三根村と大賀郷村が対立し、都教育課を巻き込み、島全体の課題となりました。三根村は、中道（現在八丈病院）に、大賀郷村は現在の所に。一年間の紛争の結果譲らず。

結果、都立八丈島の校舎が大賀郷村に置かれ、三根村は、明大出身の山田耕三氏（故人）と明大との話し合いで明治大学付属八丈島高等学校を誘致し、昭和25年6月授業開始となりました。当時鶴澤總明博士来島とあります（来島せず）、又川委員長（双葉山の名付親）が来島し将来は大学（水産学部、熱帯植物の研究）と、当時の大人達の意地の張り合いにより明高が出来たのですが、5年後に閉校。

故に八丈島明高は廃校となり、都立八高に吸収合併となり現在に至っています。

しかしながら明治高校応援団の大御所小田川氏、あるいは関川氏（昭和57年卒）外の方々のご配慮により総明会の一員として私達が参加でき、身にある事と感謝しています。今後ともよろしく願います。

（文：高橋 和夫）



昭和29年卒「二九会」

■幹事学年時の総会・懇親会の開催場所

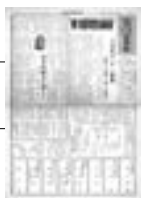
銀座三越8階大食堂

■会の名前の由来

単純に29年卒と言うことで命名。

■幹事学年時のテーマ

日本一の銀座の真ん中でやろう。



三越8階大食堂を借り、先輩に景品をいただき大抽選会を開きました。案内状に2～3,000枚だったか、私が1枚1枚にペンで短い文を書き出した事。それによって北海道より先輩がわざわざ会いに来てくれビックリ。楽しい思い出です。

みんなで協力を惜しみなくてきたことを思い出します。

同期会は昭和51年10月第1回80人集合以来8年連続し開催。平成初期に2回開催、以来10年休会し、平成17年以降は毎年開催するも、物故者が増え続け、いつ自分の番かと思うこの頃です。

初めの昭和51年名簿づくりのため電話をかけまくり、仕事をそっちのけで第1回の同期会を開き、集った同期のみんなの嬉しそうな顔を見た時は、大変なことを全て忘れそれ以降は楽々会も開くことができたことを懐かしんでいます。

（文：山本 峰司）

昭和31年卒「明楽会」

■幹事学年時の総会・懇親会の開催場所

市ヶ谷私学会館

■会の名前の由来

明治をこよなく愛し、楽しみ又、当校が神田猿楽町に存在していたことを残すため明楽会と名付けた。当時同期会で投票にて決定。

■幹事学年時のテーマ

当時はまだ、幹事学年のテーマはなかった。



昭和31年卒業して以来早や60年を経過しようとしております。私共幹事学年の総会は昭和56年に初めて当番幹事として役割が廻ってきました。最初は戸惑いながら初代会長田中真之助君（故人）と共に8名程で発足、市ヶ谷私学会館にて総勢80名程で開催されました。当時総明会では、名簿が必要であるとして初めて同窓会名簿を発行し好評を得た記憶があります。

それ以来学年に会名をつけた方がよいと発案され、翌年の同期会に恩師（石川・伊藤・水落諸先生）のご出席をいただき数個の会名の中より「明楽会」という名称が選ばれました。それ以来、60年間毎年同期会を11月第一金曜日に開催しております。これまで、節目の年、還暦・古希・喜寿と記念品を作成して祝い思い出を残しております。近年一番寂しさを感じるのは年々出席人数の減少、恩師の方もほとんど逝ってしまいました。田中真之助君の意思を継いで次の傘寿の記念すべき節目の開催に努力し、健康に十分注意して続けてゆく所存です。これからも総明会の増々の発展と盛会を祈念いたします。（文：佐藤 健一）

昭和32年卒「明治会」

■幹事学年時の総会・懇親会の開催場所

赤坂プリンスホテル

■会の名前の由来

会名検討の段階で、候補の一つであった「明治会」が他にないことを確認し決定した。

■幹事学年時のテーマ

総明会の持続的発展と拡大「20周年記念大会」



総明会の総会、懇親会が昭和59年20周年を迎えるのを機に、20周年にふさわしい内容と規模を拡大充実させ、総明会の持続的発展の礎として寄与したいとの強い思いから、われわれ明治会は幹事学年として立候補した。

総明会坂本会長の承認を頂き、明治会の担当幹事と初めて一流ホテルでの開催が決定した。当時は幹事学年制が定着しておらず、動員計画、収支の算段、魅力ある企画・内容など、全てゼロからの出発であり、リスクとプレッシャーが大きく重かったが、明治会が結集し総力をあげて取り組むことになった。

発想の転換により大幅な動員増をはかるため、パニーガールを入れることを決め、余興福引きも目玉を「香港旅行ペア招待」にするなど話題性、注目を高めることに努めた。幸い多数の方の賛同協力を得て、「20周年記念」を大盛会で終わることができた。総明会懇親会が、今日の隆盛発展の歴史転換点となったものと改めて感慨をおぼえている。（文：小林 正三郎）

昭和34年卒「旧雨会」

■幹事学年時の総会・懇親会の開催場所

明治大学 会議室

■会の名前の由来

故福島則雄先生から命名していただきました。

由来は、「旧雨今雨」昔からの友人と最近親しくなった友人のことをいいます。



総明会50周年記念おめでとうございます。我々「旧雨会」は34年卒の同期会です。明治高校の歴史の中で唯一の春・夏連続で甲子園出場を果たした、年齢は75歳の強者揃いでございます。「旧雨会」の活動は2010年以来5年間もストップしている状態です。総明会50周年記念の寄付の件もあり“誰かがやらなければならない”との精神から、現在はノウハウを持って32年の歴史を持つゴルフ会幹事会が、前会長から引き継ぎまして新たに「旧雨会」運営委員を立ち上げました。まずは情報が古くなった名簿の作成です。これまで多くの友人を失いました。その情報を確認のためと、転居、携帯電話番号、メールアドレスを新たに調査するために全員にアンケートから始めなければなりませんでした。

名簿作成は保存版と考え、A4版・16ページ・印刷製本で現在の調布高校の写真などを入れて、プロのデザイナーにレイアウト依頼して作成中です。他の学年の方でも希望があれば配布します。

(文：秋山 義昭)

昭和36年卒「明駿会」

■幹事学年時の総会・懇親会の開催場所

東京プリンスホテル

■会の名前の由来

我々の学年は^{うまだし}午年生まれなので、明治高校出身の駿馬の会として、明駿会と命名した。駿河台の意も込めている。

■幹事学年時のテーマ

同窓会の流れを変えよう！



応援団の卯木大先輩からのお声掛けで、卒業以来16年も経った1977年、同期会を結成することになった。まず、名簿作りからはじめた。仲間に声を掛け、年賀状などを頼りに、半年で300人中270～280人の名簿を完成させ、私が代表幹事に選任された（会員は皆、平等だという意味で会長ではなく代表幹事とした）。翌年、第1回の同期会を山の上ホテルで開催し、恩師が15名、同期が130名が出席をした。

1981年、我々の同期会を明駿会と命名し、1986年に総明会のホスト学年を仰せつかることになった。同期の多くの仲間の大活躍で、東京プリンスホテルを会場として総明会総会・懇親会を大成功に導くことができた。同期は、いざという時には本当に役に立ち、協力してくれた。ホスト学年を経験したことで、また、1992年から11年間、向殿政男君の総明会会長を全面的にバックアップしたことで、纏まりは益々強くなり、70歳をとうに過ぎた現在でも、2年に1回、明駿会を開催して旧交を温めながら毎回盛り上がっている。

(文：加藤 真義)

昭和38年卒「二年に一会」

■幹事学年時の総会・懇親会の開催場所

東京元赤坂 明治記念館

■会の名前の由来

卒業の翌年、有志が集まり同期会を発足。2年に1回ごとの開催を決め、会名も単純明快に「二年に一会」。

■幹事学年時のテーマ

明治への想い、愛着 昭和から平成の世へ



平成24年母校創立100周年・卒業50周年
記念二年に一会総会

総明会50周年おめでとうございます。早いもので私たち「二年に一会」が総明会の幹事学年を拝命して四半世紀。

仕事も酒も円熟期の45歳。三浦昭生会長、高橋正佑幹事長、関戸淳一事務局長を中心に組みました。メインは会報の編集、今のような立派な冊子ではなく、タブロイド判の20頁ほどの新聞形式ものでしたが、坂本朝一会長（第4代・当時）、金井照治校長（第10代・当時）のごあいさつはじめ大学関係先生方のご祝辞を掲載。クラブ・班のOB会情報、広告集めにも奔走。

猿楽町の校舎の一部屋を借り校正、そして何度となく会場と折衝、終わったあとの一杯のうまかったことか。また、編集上の不手際で一括で郵送できず、何千という部数を有志が家族ぐるみで手分けしてポストに投函という失敗談。すべてが仲間の絆を強くしました。

最後に総明会の歴史を良き後輩諸兄が引き継ぐことを願い幹事学年時の思い出とします。

（文：服部 紀夫）

昭和39年卒「三九会」

■幹事学年時の総会・懇親会の開催場所

上野精養軒

■会の名前の由来

文字通り我々の卒業年度の昭和39年が由来であるが、当初は生徒会OBの——七会が始まりであった。

■幹事学年時のテーマ

24年前のことなので記憶にありませんが「同期の絆を再び強めよう」だったと思います。



平成27年4月25日古希を祝う会（レストラン東洋）

会名の由来のところでも書きましたが、我々の同期会の元は卒業の翌年に、生徒会OBが集まり会の名前を決めたときに、学校の創立記念日1月17日にちなんで「——七会」、読み方は「イイナ会」。「昔はイイナ」をもじったものです。以来毎年1月下旬に欠かさず続いております。場所も毎年日本橋のレストラン東洋の地下の「畔居」と決まっています。同期の水村くんのお店です。幹事学年を担当したときも——七会のメンバーが中心となって行っていました。

とにかく——七会のメンバーは結束が固く、いつも会っていますが、50歳になった時、大々的に同期会をやろうということで全体を集める意味で、生徒会中心の「——七会」から「三九会」に名称が変更されたと思います。50歳到達記念と称し、100名以上が集まりました。その後、還暦記念、そして今年は古希のお祝いを大々的に行き、90名近くが元気に集まりました。次の節目は喜寿、傘寿、半寿、米寿、卒寿、白寿、百寿……三九会は、永遠に続きます……と願っています。

（文：佐藤 仁）

昭和40年卒「明優会」

■幹事学年時の総会・懇親会の開催場所
椿山荘

■幹事学年時のテーマ
祝おう！ 母校80周年を



我々明優会は平成4年に幹事学年を担当しました。当時、同期のほとんどが総明会の事を知らず、故米山廣昭君のみが評議員会委員を担っていた状況でした。いざ幹事学年になると決まった時、その招集に90名以上が集まりました。その時に1人2万円を徴収して運転資金としました。生徒会会長をした荒木毅君に委員長をお願いする事とし、酒井孝憲君の事務所ですぐに一回程度の実行委員会が始まりました。それぞれの担当が決まり、段々とムードが高まってきました。広告取りには苦勞しました。幸い荒木君が多額の広告料を提供してくれたので、助かりました。

当日、会場には予想していた300名を遥かに超えた総勢400名余りの参加者が集まり、おみやげとして用意した照田収三君の会社で制作した明治のロゴ入りベストが足りなくなっていました。仕方なく我々の物を回収し、参加者に差し上げました。後日、ベストは追加生産され、我々に配布されました。収支報告は、少しの黒字が出たとの事でした。

我々は、同期会の楽しさに気付く、一年に一度は開催する様になりました。寂しいかな年と共に、参加者が少しずつ減って行きましたので、二年に一度の開催になっていましたが、再び毎年開催する事になりました。会の資金は、前述の初会合で徴収した資金を大切に使用し、未だ活用できています。最近では仕事をリタイヤして時間の余裕の出来たメンバーが一人二人と参加する様になって来ています。集まればつい在学時代の事に話の花が咲き、この雰囲気をこれからも末永く持ち続けたいと思う今日この頃です。

(文：阿部 正行)

昭和41年卒「^{よんいちめいゆうかい}41明友会」

■幹事学年時の総会・懇親会の開催場所
東京會館（ローズの間）

■会の名前の由来

卒業の年が昭和41年だったので
「41明友会」にしました。

■幹事学年時のテーマ
団塊の世代の和



私共昭和41年卒の「41明友会」が総会の幹事学年になった第29回総会の平成5年11月6日（土）は、バブル崩壊後の経済の先行きが不透明・不安定の時でした。当時は、今と違って総会当日何人来て頂けるか当日になってみないとわからないという状況でした。その為にも皆様に楽しんで頂ける催し物を色々と考えていました。また、予算があまりないという状況で中々良い案が出ないので、私が歌で共演した「東京歌舞団」をお願いをし出演いただきました。その時の団長さんには、感謝の気持ちで一杯でした。

また私には司会進行も仰せつかっていましたので、そちらも卒なく失礼のないように出来るか心配でしたが、どうにかお役に立てたようでした。

雨も降らずに334名の方がいらして下さいました。つつがなく終わった時は、皆と一体となってやり遂げた喜びを分かちあいました。

(文：廣瀬 隼)

昭和42年卒「M41」

■幹事学年時の総会・懇親会の開催場所

ホテルニューオータニ

■会の名前の由来

明治・地名の付いた名称が多い中で、ユニークな名称で、かつ明治と卒業年度を表す名称として決めました。語呂合わせで、しじゅう1番を意味します。



M41の事務局は結城会長の結城法律事務所にあるため、幹事会は赤坂の交通の便がよい場所であるのが会の強みです。

同期会は、4年に1回、オリンピックの年に開催してきました。会として会費を定期的に徴収せず、同期会収入の剰余金で運営していました。

今回、50周年誌作成に伴い特別寄付金を支払う資金が無く、さらに幹事が立て替えていた金額が、約20万円ありました。

急遽、幹事会を開き会費を徴収すべくプロジェクトを立ち上げ、無事寄付金の支払い、立替金の精算が出来ました。会員の協力が大きな力になりました。

また、幹事会の終了後は同級生が経営している店で楽しく飲んで旧交を暖めています。

(文：結城 康郎)

昭和43年卒「紫讃会」

■幹事学年時の総会・懇親会の開催場所

椿山荘

■会の名前の由来

昭和43年卒の我々は、命名に当たり43のゴロに合わせ「シサンカイ」とし、文字は明治のスクールカラーの「紫」を使用した。



■幹事学年時のテーマ

当時はテーマを設けていなかった。

紫讃会の活動として以下の行事を行っている。

- ①紫讃会総会を年1回(6～7月頃)実施：会場は近年「銀座アスター御茶ノ水賓館」を使用し、東京の夜景を楽しみながら酒を酌み交わしている。
- ②定例会を原則毎月第四土曜日の夜に実施：同期の中華料理店「水新(浅草橋)」で開催し、毎回都合が付く者10～20人程度が参加している。忘年会シーズンなどは、気分を変えて他の店で行っている。
- ③ゴルフ大会、海外旅行の実施：ゴルフ大会は年2回程度、海外旅行は年1回程度(主に東南アジア方面)有志で行っている。
- ④その他(昨年のトピックス)：同期の者が65歳にて結婚(初婚)し、皆でお祝いをする。久しぶりの祝い事での慶弔費の支出となった。

これからも健康寿命を1年でも伸ばすため、楽しい会合を続けていきたい。(文：志村 一夫)

昭和44年卒「男坂倶楽部」

■幹事学年時の総会・懇親会の開催場所

旧明治中学校校舎

■会の名前の由来

明高生なら誰でも知っている男坂。何十年後にボケても記憶に残るのではないかとということで男坂倶楽部と命名しました。

■幹事学年時のテーマ

史上はじめて、母校で開く総明会総会。



初めて母校においての総会開催。600人以上の参加者が見込まれる為、校庭を含め全敷地が会場となりました。学校側も戸惑いましたが、喫煙、飲酒、飲食の場所確定、机椅子の移動及び終了後の原状回復について、会長である服部を長とする男坂倶楽部員全員が責任を持つという確約のもとで、許可がおりました。絶対に労力が必要となり、幹事学年全員が協力参加する事が必須でした。ワァワァ、ギャアギャア、と一年前より始まった検討会をこなしていくうちに、皆の顔が高校生ようになっていき、ついに開催日を迎えてしまいました。開催3時間前に集合！ さあ、いくぞ！ と終了後の恐怖が待っているとも知らずに一列になり、机椅子の手渡し、運び出しの会場設定が始まりました。総会終了！ 暗くなる中、再び一列になって手渡しで移動した物々をもとに戻していきました。戦い済んで、日が暮れて、当時45歳を超えているオジサン達には、甘酸っぱく、辛い一日でした。（文：中河 孝樹）

昭和45年卒「獅子の会」

■幹事学年時の総会・懇親会の開催場所

東京プリンスホテル

■会の名前の由来

昭和44年度に卒業したので、「四四」と「獅子」をかけて命名しました。

■幹事学年時のテーマ

OBのOBによるOBのための総明会



45年間続けてきた獅子の会は、吉田（耕）君や比留間君を中心に、現在ホームページで活動報告し、オリンピックイヤーに合わせ4年に1度総会を開催しています。第1回は昭和55年にホテルサンルート新宿で、その後、松本楼（第2回）、魚喜代（第3回）、山の上ホテル（第4回）、ホテル国際観光（第5回）、トップ浅草（第6回）、サロン紫紺（第7回）、紫紺館（第8回）、カンダーラ（第9回）、来年の第10回記念は65歳となるため1泊旅行の予定です。

この間にも平成9年の幹事学年では特賞カラーが当たる〇×クイズを東京プリンスホテルで開催、テーマの確立と式次第をマニュアル化し次年度へ引継ぎ、平成17年の母校移転時には旧校庭で記念写真撮影と新世界菜館、平成23年の60歳の還暦祝は神田明神と肉の万世で行いました。最近はりタイアした人も徐々に増え、新年会、花見会、花火会、同期三宅裕司君の公演会、小旅行、忘年会と何かに託つけて集まり活動することで、獅子の会も総明会の発展の一助になりたいと願っています。（文：笹本 和義）

昭和46年卒「明潮会」

■幹事学年時の総会・懇親会の開催場所
ホテル オークラ 曙の間(別館B2)

■会の名前の由来

高校在学当時の福島校長先生より
「時代の潮流になれ。明治の潮たれ」と拝命いただきました。

■幹事学年時のテーマ

明高の移転話が出た頃でテーマは「古き良き明治」



我が明潮会は1998年に総明会の幹事を務めました。本部に現在のような委員会組織も無かったため、大きなプレッシャーを常を感じながら活動していた記憶が蘇ってまいりました。

諸先輩方のアドバイスを受けながら、幹事学年の5年ほど前に準備委員会を結成して、協力をしてくれる仲間を集めて同期名簿を作成したり、毎年同期会を開催して準備金を蓄えたりと、それは仕事を犠牲にしながらの活動でした。当時の資料は未だに物置の奥に眠っています…。

ところが、幹事を終えた瞬間の解放感、達成感はとても気持ちが良く、同期の仲間意識がより高まったと思われまふ。

あれから15年以上が経過して、還暦も過ぎたので、現在は1年おきに総会を開催しております。毎年開催する新年会や飲み会に参加する人数が確実に増えており、明高の同期はこれからの人生に欠かせない友人であるとしみじみ感じております。(文：金子 敏一)

昭和47年卒「四七四七同志酔会」

■幹事学年時の総会・懇親会の開催場所
帝国ホテル

■会の名前の由来

酒好きの同級生が多いことから、夜な夜な同士が集まり、へべレケに酔っ払うということと、卒年の47年を掛け会名にしました。

■幹事学年時のテーマ

40歳過ぎてからの人間関係の再構築。お互いの人生にエールを贈り合おう。



1999年がホスト学年でした。約3年前の96年頃より準備に入りました。当日の運営や、会報については何とかなるだろうと思っていましたが、一番の気掛かりは、開催場所が帝国ホテルだけに、お金集めでした(帝国ホテルはお値段が高く、当時は通信費も幹事学年負担でした)。

しかし、それも杞憂に終わりました。お金集め担当の鈴木信夫君(庭球部主将)が、一千万円を集めてくれたのです。実行委員長が田中徹太郎君(母校の現副校長)だったこともあり、当日は母校教職員の方々をはじめ、大学からは、理事長、総長、学長の三役揃い踏み、校友諸々合わせ出席者430名となりました。

さらに、当日は同ホテルにて常陸宮様主催の全国高校・中学弁論大会があり、その会に天皇陛下が行幸される、というオマケまでつきました。懇親会の総合司会は、今をときめく「ワイドスクランブル」のテレビ朝日アナウンサー・大下容子氏にお願いし、素晴らしい会となりました。(文：廣野 宏士)

昭和49年卒「翼明会」

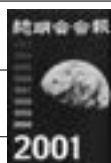
■幹事学年時の総会・懇親会の開催場所
東京ドームホテル

■会の名前の由来

翼明会の名前は、昭和49年卒という事で4と9のゴロ合わせて名付けました。

■幹事学年時のテーマ

21世紀を楽しく元気に羽ばたこう



幹事学年の時に大変印象に残っているのが、何年かぶりに大学のチアリーディング部に來てもらったことです。当時はまだ男子校という事もあり非常に盛り上がりました。

あれから14年が経ち、我々の代は還暦を迎える事になりました。昔は還暦と言うとメチャクチャ年寄りに感じましたが、いざ自分達がそうになると今は何だか変な気持ちです。

さて翼明会の同期会は、約2年に1回ほど行っております。今年は、11月22日の日曜日の午後5時から紫紺館の6階で行われます。

次の日も旗日でお休みですから、これをご覧の同期の皆様ぜひ一人でも多くお集まりください。

(文：大前 実之)

昭和50年卒「明紫会」

■幹事学年時の総会・懇親会の開催場所
浦安ブライトンホテル

■会の名前の由来

明治の「明」とスクールカラーの紫紺から「紫」をいただき、「明紫会」とした。

■幹事学年時のテーマ

「家族の絆・明治の魂」



問題学年であった我々昭和50年卒。翼明会が幹事だった総会終了時から、個々の幹事への意識が高まり、数名のメンバーから始まり、徐々に人数も増え定期的に議論を重ねました(三森 勲 談)。会報をCDで作ると言い出した時はマジか？と。最初はコンセプトも考えず、まずはデータ！写真が無くては話にならないので、各同期会・OB会の行事に参加しまくりました。その際は先生方や諸先輩方、関係者の方々に大変ご迷惑をおかけしました。

改めてお詫びと御礼を申し上げます。苦労は表紙の校旗。はためかせるには、どう作ればよいのか、2週間程悩んだのを覚えています。校歌や応援歌は、窪寺君がMIDIで作成しました。調子に乗ってロック調等に編曲までしてしまい、先輩に怒られるのではと、ひやひやしたのも今では楽しかった思い出です(富澤秀敏 談)。

千葉県浦安での総会開催も異例であれば、会報のCD化は明紫会と明々会の2学年のみです。やはり、問題学年？印刷媒体は現代ではアナログですけど、味がありますよね。会報が届くのを毎年楽しみにしていますので、後輩諸君も頑張れ！

(文：吉武 孝生)

昭和51年卒「明々会」

■幹事学年時の総会・懇親会の開催場所

浅草ビューホテル

■会の名前の由来

第一回同期会総会の案内状にて公募し、総会にて選出。
選出理由は「明るい明治」でシンプル。

■幹事学年時のテーマ

「元気な明治」



第39回総明会総会懇親会(平成15年11月) ●記念講演「吉田義人氏(明大ラグビー部OB)」
●アトラクション(獅子舞、浅草サンバカーニバル優勝チーム「バルバロス」)

平成4年頃、明高生の兄を持つ尾崎雄二君と上野雅宏君が来るべき「総明会幹事学年」に危機感を募らせ、同期会の設立を決意。友人、そのまた友人に声を掛け同期会設立準備会(名簿を持ち寄ろう会)を同期の小池良通君のお店「上野広小路 南蛮亭」にて行う(参加者20数名)。

平成6年2月に第1回同期会を「アルカディア市ヶ谷」にて行う(参加者約70名)。ここで会名「明々会」、会長「萩原秀紀」他役員、1年おきに総会を開く事等を決めた。幹事学年として担当した第39回総明会総会の一番の思い出は、メイン・アトラクションである浅草サンバの冒頭で会場のブレイカーが落ち、照明は復活したものの音声は死んだままで、ハンドマイクと生音で最後までしのいだ事。後日、浅草ビューホテルと交渉し、我々は鬼怒川へ打ち上げ旅行に行きました。

(文：上野 雅宏)

昭和52年卒「男子校根性組」

■幹事学年時の総会・懇親会の開催場所

アルカディア市ヶ谷(旧私学会館)

■会の名前の由来

高校時代そのままのアナログで不器用で鈍臭い心の通う
素顔の同期を増やしていこうという主旨で名付けました。

■幹事学年時のテーマ

「質実剛健」―原点回帰―



母校の調布移転・男女共学化という転換期を迎えようとしていたこの年、明治の体質であった「蜜カラ」が風化していくことが必至と考えた私たちは、今一度「蜜カラ」を見直そうと、「男らしさ」、「汗臭さ」、「蜜カラ」、「硬派」というキーワードを中心に『男子校根性物語』と銘打って会報作成、総会懇親会の企画運営を行ないました。余談ですが、この『男子校根性物語』が会名の命名にも影響を与えていると思います。昔から明治は蜜カラだと言われていましたが、辞書で引くと何とも恥ずかしいやら情けないやらで蜜カラを語れず23年間トラウマになっていました。そこで幹事学年の活動を通して全OBに聞いたかったのがテーマ会報のきっかけです。

その結果、当時の大先輩から「白雲なびく校歌」が蜜カラの象徴と論され腹の芯まで得心することができました、とても感謝です。おかげさまで、質素で男らしく(質実剛健)、同窓会本来の姿に立ち返り(原点回帰)、お金をかけない代わりに体を張った私たちは、ホスト学年の重責を笑い感動の涙で全うすることができました。

(文：小嶋眞作・大西静士郎)

昭和54年卒「明誠会」

■幹事学年時の総会・懇親会の開催場所
セルリアンタワー東急ホテル

■会の名前の由来

明治の誠の会で「明誠会」と名づけました。私たちは、
母校で「誠」を学び、その教えを社会で実践し社会に貢献する。これが明治魂だと思います。

■幹事学年時のテーマ

「男坂讃歌」～未来の後輩たちへ～

総明会50周年おめでとうございます。50年の長い歴史のなかで我々明誠会がほんの一部でも参加できたことを光栄に思います。明誠会は今から8年前、渋谷の東急セルリアンタワーで行った総会懇親会で幹事学年を仰せつかった学年です。ご記憶のある方がいると思いますが、紫のハッピーで闊歩していたあの学年です。

《卒業後の活動》平成10年11月7日にお茶の水ホテル聚楽で第1回の懇親会を行って以来、毎年懇親会を行っています。懇親会の集まりがいいのも明誠会の特徴かと思います。毎年50～60人は集まります。みなさんの学年もそうだと思いますが、集まった瞬間17歳にもどってしまします。最近ではなぜか奥様方の参加も増えて、「あれ、うちらって男子校だよな？」という妙な感覚もあります。

母校を思う気持ちのありかたは、在学した人数分あると考えます。それぞれの気持ちを持ち合い、それぞれの気持ちを尊重しあえる人が集う会。それが「明誠会」です。（文：岩田 茂）

昭和55年卒「紫魂会」

■幹事学年時の総会・懇親会の開催場所
総会 明治高校 視聴覚教室
懇親会 明治大学 アカデミーコモン

■会の名前の由来

スクールカラーである「しこん」はすんなり決まりましたが、
「紫紺会」か「紫魂会」とするかで意見が分かれ、決選投票の結果「紫魂会」となりました。

■幹事学年時のテーマ

移転直前！駿河台での総明会

明治高校の歴史（総明会の歴史）の中でも大きな出来事である調布移転及び男女共学化直前の「総明会」の幹事学年としてかなりのプレッシャーを感じていました。この年、この場所でしかできない「総明会」をどのように作り上げていくか…。諸先輩方にアドバイスを頂きながら幾度となく会合（+飲み会）を重ね、何とか形にすることができたと感じています。

明治高校視聴覚教室での「総会」、男坂での「記念撮影」、大学アカデミーコモンでの「懇親会」。特に「会報」の編集は毎年すごいエネルギーを費やしていたんだと実感できました。今から考えてみると、とてもいい経験ができました。みなさん、ありがとうございました。

そのおかげで「紫魂会」も定期的に年1回の同期会と年2回のゴルフ会を続けています。もう少し参加人数を増やすことが今の課題ですが、これからの仲間との「紫魂会」を楽しんで行きたいと考えています。（文：大迫 好孝）

昭和56年卒「明翔会」

■幹事学年時の総会・懇親会の開催場所
明治高校（調布校舎）

■会の名前の由来

テーマ「新たなる飛翔」から一文字を取りました。

母校の共学化、調布移転と併せて今後翔ばたいて行くことをイメージしました。

■幹事学年時のテーマ

新たなる飛翔～Boys & Girls～



総会・懇親会開催に際してはホテル開催か激論を交わしましたが、母校移転時の学校開催という機会は二度と無いということから決定しました。飛田給駅からのスクールバス送迎、新校舎の見学等総明会会員の皆様にいち早く新校舎をご紹介できたことを嬉しく思いました。会報による情報発信だけでなく、その情報を直接目にしていただけるという画期的な総会・懇親会が開催できました。母校での開催に際しては、学校に多大なご尽力をいただきましたことに感謝するとともに、ご出席いただきました皆様にご不便をおかけしたことをお詫び申し上げます。幹事学年直後の同期会は多くの同期が出席していましたが、年々参加者が少なくなってきたことは残念です。現在は同期全員で末永く会の運営ができるよう2年に1回役員を交替し、新年会、ゴルフコンペ、有志による日帰り温泉旅行、総会等の活動を続けています。最後になりますが、会報の表紙も男女共学化をイメージしたカラー表紙の斬新なものであったことを申し添えさせていただきます。（文：衛藤 雅一）

昭和57年卒「明魂会」

■幹事学年時の総会・懇親会の開催場所
ANAインターコンチネンタルホテル東京

■会の名前の由来

シンプルな「明○会」に決定。○を何に？

他学年とかぶらない明治を表す文字…。ど根性の「魂」があるじゃないかで決定。

■幹事学年時のテーマ

明治魂の伝承～魂を追い求めて



2007年の紫魂会の先輩達は、調布移転前の最後のお茶の水と言う事で、アカデミーコモンにて総会・懇親会を開催し、2008年の明翔会の先輩達は、調布移転初年との事で、新校舎のお披露目の意味合いもあり、校舎内にて総会・懇親会を開催されました。学校関連施設が2年続き、さあどうしたものか？ そろそろホテルで…と言う雰囲気もあり、どうせやるなら盛大にと赤坂溜池のANAインターコンチネンタルホテル東京にて開催する事になりました。

しかし、前年から続くSARS（新型肺炎）の流行を本気で心配したり、同じく前年のリーマンブラザースの破綻ショックによる景気の低迷等々心配事が絶えず…、執行部に2度3度と赤字の場合の確認をさせて頂いた事が思い出されます（笑）。

そんなこんなで当日を迎え同期が70数名も集合してくれ、また懇親会の司会に某テレビ局の本物の女子アナを呼んでしまったり…（驚）。大変だったけれど、やらせて頂いて本当に良かった一年間。幹事学年制に、本当に感謝感謝。有難うございました。（文：染谷 貴男）

昭和58年卒「明輪会」

■幹事学年時の総会・懇親会の開催場所
ホテルイースト21東京

■会の名前の由来

東京五輪開催の年に生まれた事、小さな輪が卒業後初めての同窓会リパティタワー23階にて恩師も招いて70名集結
大きな輪になっていく喜びをこめ、明治の「メイ」に五輪の「ワ」と書いて「明輪会」としました。
めいわかい

■幹事学年時のテーマ

ひとのわ ころのわ「広げようOBと現役との輪」

《幹事学年時のエピソード》明治高校在學生と卒業生との絆を深める交流の場として「明大明治カミング」を実施しました。第一部はマンドリン部の演奏披露、吹奏楽班の演奏披露、さらに応援指導班の校歌・応援歌披露を90分の時間の中で展開しました。当日、98名の生徒諸君は午前の授業終了後、スクールバス3台に分乗して、顧問の先生とともに会場に駆けつけてくれました。第二部はミニ進学相談会。明治中学高校の受験生と親のために、現役の先生にスライドを用いた学校説明、個別の相談を行い、予定の時間を延長しての真剣な場となりました。今まで総明会のイベントに現役学生が参加することはありませんでしたが、今回は現役・恩師・PTA・卒業生、その家族と、オール明治で楽しいひと時が過ぎました。

《同期会の現状》2020年に東京五輪開催が決まりました。明輪会の名前にちなんで、4年に1回の夏季五輪開催年の同期会は、普段の年よりも拡大傾向で行う予定です。

(文：高橋 浩)

昭和59年卒「明心会」

■幹事学年時の総会・懇親会の開催場所
ホテルイースト21東京

■会の名前の由来

明治の心で「明心会」。男坂倶楽部(昭和44年卒)の中河孝樹先輩に命名していただきました。

■幹事学年時のテーマ

未来へつなぐ絆 ～100周年に向かって～

我々は、明治高校創立100周年を目前にした創立99年目の年の幹事学年ということもあり、テーマを「未来へつなぐ絆」としました。

2011年のことです。その年の1月から活動を開始し、明治高校の卒業式取材した翌日の3月11日に未曾有の大災害である東日本大震災が発生しました。日本中の人々が衝撃を受け、世の中の動きが止まった瞬間でもあり、幹事学年の活動も一時停止しました。

しかしながら、先生方、諸先輩方からも例年以上の熱いサポートをいただき、チャリティゴルフ、会報、総会懇親会とも無事に役目を果たすことができました。

まさに、人と人との「絆」がクローズアップされた年であり、我々同期の絆も築くことができ、生涯忘れることにできない一年でした。

(文：田中 重幸)

昭和60年卒「闇紺会」

■幹事学年時の総会・懇親会の開催場所
ハイアットリージェンシー東京

■会の名前の由来

平成27年7月31日の山田伸夫先生の退職記念の会
「第1回ヤマダ大感謝祭」の2次会にて名称を決めました。

■幹事学年時のテーマ

新しい100年へ ―今を知り、明日を考える



初めて総明会の存在を知ったのは、総会・懇親会がまだ猿楽町の講堂にて行なわれていた時代。土曜日の午後、師弟食堂の料理とともに、グラスを傾け、懇談しているシーンを見て、「自分もいつかはこうなるのか」と思ったことを今でも鮮明に覚えています。そして私ども闇紺会。光陰矢の如しと申しますが、幹事学年を卒業し、早3年の月日が経とうとしています。

それまでは、ほとんど同期会らしい会を催していない学年でしたが、「第1回ヤマダ大感謝祭」をきっかけに徐々に人が集まり始めました。しかしながら、幹事学年は何をすれば良いのか、さっぱりわからず、会場選びから当日の段取りまで、まったくの手探り状態。それでもうまくことを運ぶことができたこと、今となっては良き思い出です。

後輩に櫂を渡した現在、年初の新年会、7月の総会・懇親会を定例行事とし、その他ゴルフや、釣り、ツーリング等の分科会に分かれ活動し、旧交を温めています。

(文：鈴木 重之)

昭和61年卒「新世輝」

■幹事学年時の総会・懇親会の開催場所
ハイアットリージェンシー東京

■会の名前の由来

山田伸夫先生命名。幹事学年時101年目で新世紀、そこに卒業時学年主任ポンコと第一応援歌「紫紺の歌」の歌詞から「輝」の字をいただく。

■幹事学年時のテーマ

「頂きを目指す」繋がる伝統を世界へ



総明会50周年おめでとうございます。私ども昭和61年卒『新世輝』は、49年目に幹事学年を担当させて頂きました。50周年へのバトンタッチという形で関わりました事は光栄な事でございます。改めまして今の新世輝の特徴的な同期会の事を、周年の記憶として寄稿させて頂きます。

新世輝は齢40を迎える頃に初めて同期会を開催し、それからずっとフリースタイル形式の同窓会(←今ネーミングしました)をとっております。会場を6時間ほど押さえておき、飲食は基本自分たちで用意、参加も退出も各自の都合で自由。誰でも無理なく参加、顔だけでも出してねという狙いで始めたスタイルです。新世輝はこのスタイルが好きで、緩い感じが馴染むようです。そこへ今年初の試みが！役割分担や会計報告の時間も必要だろうという意見あり、緩い中にも議事の時間を設けました。でも名前は「HR(ホームルーム)」。前半それなりに集まったところでおもむろに「HR始めま〜す」とやるのです。やはり緩いですね。緩く無理なく面白く、実に新世輝らしい同期会なのです。

(文：鵜飼 友義)

昭和62年卒「明猿会」

■幹事学年時の総会・懇親会の開催場所
ハイアットリージェンシー東京

■会の名前の由来

明猿会は申年が多い学年であり、校舎が猿楽町であった事、楽しい宴会が開ける様にとエンに因んで名付けました。

■幹事学年時のテーマ

歴史を振り返る



幹事学年を担当するのに卒業以来疎遠になっている同期を集めるのは、かなり難航しました。電話をかけると詐欺と怪しまれ相手にされないなど散々でした。いざ同窓会となると顔や名前が分かるかなと不安ばかりが先立ったのですが、不思議なもので見た目は年令なりに変わっていますが、面影や雰囲気はそのままなもので、違いといえば酒が飲める事、時が27年も経っているとは思えないくらい楽しい時間でした。

この年令になると、新たな社交を作るチャンスは無くなってきます。旧友と再会し気の許せる仲間と酒が飲めるというのは素晴らしい事で、男も一休みが必要な年令時に原点に戻れる場所や仲間がいるというのは非常に有難い事だと思います。そういったリセットをさせてくれる総明会の存在は、幹事学年を務めると良く理解出来ます。どうせするなら懸命に頑張れと先輩から教えを受け実践して本当に良かったと思います。これから同期とは永く良き付き合い合いが出来そうです。
(文：赤岩 大輔)

昭和63年卒「昭和戊辰乃会」

■幹事学年時の総会・懇親会の開催場所
明治大学 アカデミーコモン

■会の名前の由来

昭和63年は十干で戊、十二支で辰。120年前の戊辰戦争後、元号は慶応から明治へ。その歴史的背景と昭和最後の卒業生を掛けて。

■幹事学年時のテーマ

51年目の挑戦 ～総明会という財産～



私たち昭和戊辰乃会は、この原稿を投稿している今(5月)が幹事学年の活動の真っ只中です！ 寄付広告活動も本格化し、会報の企画案も承認され、進行を開始しました。私たち同期は10月の第一回定例会から20名弱が参加し、ここまでは順調に進んでいます。まだここからが大変なのですが…。

私たちのメインテーマ「51年目の挑戦」は、総明会の発足から50年を経て、新たな50年への出発の年。今まで50年の歴史に学び、経験を活かし、そして新たな挑戦をしていきたいという思いがあります。このメインテーマに沿う大きな挑戦として、我々幹事学年より若い世代の方々にもっと総明会を知ってもらい、参加してもらうというものがあります。その若手の動員にアイデアをみんなで絞り出し、今まで以上に若手が参加する総明会総会・懇親会を実現させます。結果がどう出るか11月7日を楽しみにしててください！ 場所は移転前の明治中・高生には馴染みのお茶ノ水です！
(文：尾崎 博之)

平成21年卒

平成21年卒として、初めて寄稿させていただきます。私たちは明治高校が猿楽町校舎から調布校舎に移設した初年度の高校三年生でした。思い出深い神田駿河台の地を離れることのさみしさを抱きつつも、新天地で充実した一年間を過ごした学年になります。

今から三年前の12月、有志メンバーが集まり明治高校を卒業してから初めて同窓会を開催しました。一次会は調布校舎の食堂、二次会は新宿の居酒屋で企画し、場所の確保から案内状の発送まで、みんなで手分けをして取り組んだことを覚えています。お世話になった先生方も招待して、それぞれの近況報告や今後の抱負を発表。昔話も尽きることなくあっという間に時間が過ぎていきました。先生方にはご迷惑をおかけした学年でしたが、改めて明治高校を卒業してよかったと思うと同時に、明治高校の仲間だけで会う楽しさを実感した一日でした。

私たちは今年で25歳、社会人3年目になります。それぞれ個々で集まることはあっても、地方で勤務をしている旧友も多く、同窓会以来全体が集まったことがありません。時間の調整も難しく、次に同窓会を開くにはもう少し時間がかかりそうな気がします。

一方で、様々な方面から同級生の活躍を見たり聞いたりする機会が多くなりました。高い目標に向かって挑戦していること、自分の夢に向かって努力していることなど、自分にとって大きな刺激になっています。明治の仲間の活躍が自分も負けていられないという情熱に変わるのだと思います。今すぐに集まることは難しくても、この明治高校で染いた繋がりをこれからも大切にしていきたいと強く感じました。

同級生みんなへ！ 具体的に何も決まっていけど、30歳までには一度集まろう。

またみんなで笑って盛り上げられる企画を考えます。その時はよろしく！

(文：加藤 敦)



平成22年卒「明雄会」

■会の名前の由来

最後の男子校学年であることから「男」を意味する字を会名に使用したかったのだ。



皆さんお久しぶりです。元気にはしてますか？

そもそも読んでいるかも怪しい気はしなくもないですが…。

私たちの同期会は大学4年時に行った一度のみですが、他大に進学した人等も含め100名以上が参加してくれて非常に嬉しかったですし、楽しかったです。

企画等と一緒にしてくれた幹事はもちろん、連絡の手伝いをしてくれた人、そして当日参加して楽しんでくれたみんな…ありがとう！

大学時代は校舎さえ同じであれば顔を合わせる機会はある程度ありましたが、社会人ともなると顔を合わせることもすら高難易度になってしまっていて、少し寂しいです。

ですので！ みんなの顔を忘れないうちに！？ また同期会ができたらなあと考えております。

その際はぜひ来てください！ 待ってます！

(文：亀屋 将紀)

平成23年卒「共楽会」

■会の名前の由来

共学化初年度の意を含め、「キョウガク会」と読む。男子も女子も、駿河台を知る者も知らぬ者も、共に楽しめるように。



私どもの学年は、東日本大震災の丁度前日に明高を卒業しました。同窓会としての歴史はまだ浅いですが、ここでは、二つのイベントについて振り返ります。

一つは2013年1月12日、京王プラザホテルで開催された成人祝賀会。総明会幹事という括りではなく、大塚(啓)君・日高君・樋田君ら有志メンバーが中心となり、企画を進めてくれました。3人のようなリーダーがいてくれたことは、「明治のサラダボウル」ともいえる我が学年にとって、非常に幸運だったと思います。私自身は出席できませんでしたが、多くの参加者に恵まれ、大成功を取めたと聞いております。お世話になった先生方からのビデオメッセージや、思い出の映像も上映され、活況を呈したそうです。

二つ目は、平田君を中心に企画された、高校卒業から4年の節目を祝う同窓会です。参加人数こそ少なかったものの、この場で会名も決定し、同窓会活動の基盤が完成しました(写真。詳細は平成27年度会報)。

(文：三浦 直人)

平成26年卒「ゆいまーる」

■会の名前の由来

中学・高校の6年の間、担任もしくは学年主任として由井先生がずっといてくれたことと、修学旅行が沖縄だったので。



2016年(平成28年)1月に行われる成人式に向けて、各クラスの代表がみんなに掛け合っています。6月中旬には代表数名による話し合いが行われました。

今後も数回にわたる話し合いを予定しています。

(文：岡田 尚也)

今回、ご寄稿が無かった昭和以前の卒業生と平成以降で会名が判明している卒業生の会名とその由来を一覧にいたしました。編集委員が過去会報より抽出し、記載しましたが、確認できなかった部分は不詳とさせていただきますことをご了承ください。

卒年卒	会 名	由 来
大正6年卒	不詳	不詳
大正7年卒	不詳	不詳
大正8年卒	不詳	不詳
大正9年卒	明四会	旧制明治中学第4回卒業の意味で命名した。
大正10年卒	五明会	旧制明治中学第5回卒業の意味で命名した。
大正11年卒	不詳	不詳
大正12年卒	明七会	旧制明治中学第7回卒業の意味で命名した。
大正13年卒	不詳	不詳
大正14年卒	<small>いっちゅうかい</small> 乙 丑 会	卒業した年が「きのとのうし」だったので乙丑会と命名した。
大正15年卒 (昭和元年)	いちごくらぶ	大正15年卒で「いちご」と命名した。
昭和2年卒	明士会	大正11年入学、昭和2年第11回の卒業で明士の「士」は入学年と卒業回数(の十一)という意味で命名した。
昭和3年卒	不詳	不詳
昭和4年卒	明中昭四会	昭和4年旧制明治中学卒で命名した。
昭和5年卒	明交会	不詳
昭和6年卒	大平会	定宿としていた箱根大平台の温泉旅館名から取り会名として命名した。
昭和7年卒	虎の会	大正3年の寅年生まれのものばかりなので称するようになった。
昭和8年卒	昭八会	昭和8年卒業で命名した。
昭和9年卒	エレスア会	故春日秀能先生のニックネームに因み命名した。
昭和10年卒	四志会	故野木先生の命名。四年C組の由来から命名した。
昭和11年卒	不詳	不詳
昭和12年卒	<small>に い ち か い</small> 明中二一会	昭和7年入学、同12年第21回卒業生である故に、十二年を逆に返せば二十一となるので、非常に解り易い為に、二一会と命名した。
昭和13年卒	<small>ふ じ か い</small> 二二会	旧制明治中学22回卒業で組織されたので命名した。
昭和14年卒	不詳	不詳

昭和15年卒	明中二六会	卒業年が皇紀2千6百年であったことから命名した。
昭和16年卒	不詳	不詳
昭和17年卒	い い な か い 明中一七会	昭和17年に卒業から命名した。
昭和18年卒	27回明治中学 卒業クラス会	明中第27回卒業をそのまま同期会の名に命名した。
昭和19年卒	に っ ぽ ち か い 二八会	明治中学第28回卒業と毎年2月28日に同期会を開催していた ことで命名した。
昭和20年卒	明治中学29の会	明治中学29期卒業生から命名した。
昭和26年卒	猿楽会	昭和7年の申年生まれが多く、母校の所在地、猿楽町にちなん で命名した。
昭和28年卒	明窓会	明治中学明治高校同窓の意味にした。
昭和30年卒	昭和30年卒業 同期会	昭和30年卒業同期会ということで活動中。 「三〇会」(さんまるかい)という名称も検討中。
昭和33年卒	三三会	卒業年の33年をもじって命名した。
昭和35年卒	珊瑚の会	35年卒業の35、サンゴウにかけて命名した。
昭和37年卒	37会	37年卒の同窓会ということで三七会と命名した。
昭和48年卒	波の会	1973年の卒業年を「ナミ」と読み、普通の人が普通に集まれる 会という意味で命名した。
昭和53年卒	紫友会	不詳
平成元年卒	改元会	不詳
平成3年卒	明仁会	不詳
平成4年卒	快汗、どすこい塾	不詳
平成9年卒	紫雲会	不詳
平成10年卒	紫98俱	不詳
平成11年卒	明哲会	不詳
平成12年卒	明瀑会	不詳
平成13年卒	明治21	不詳
平成18年卒	白雲会	不詳

第5章 後世に伝えたい寄稿



総明会の50年間には会報誌に卒業生や恩師から多くのご寄稿をいただいている。

それは恩師や卒業生の母校を思う気持ち、旧交を温める同期の語らい、高校時代の思い出など多岐にわたっている。この50周年記念誌の最後はそこから「後世に伝えたい寄稿」と題して、そのいくつかを掲載する。そこには決して色褪せる事なく、飾らない「明治の歴史」が確かにある。

～八丈富士に白雲がなびいていた～「明治大学八丈島高等学校」 昭和47年卒 並木 清志氏

私達が過去、学び育った明治高校（以下駿台明高）と同じ明治大学の付属高校が戦後のわずかな期間、存在していた。

男女共学・定時制がある事以外ほとんど同じ教育方針をもった高校であり唯一異なるのは、南に290km離れ黒潮に浮かぶ八丈島にあったという事である。

この高校は「明治大学八丈島高等学校」（以下明八校）と言い、今でも当時を知る島民の間では「メイコウ」と親しまれている。校歌も「白雲なびく駿河台…」であり、校章も本校と同じ。しかも明八校のあった場所（現在は八丈島病院と勤労福祉会館）は、卒業生の一部では、「八丈駿河台」として呼ばれている場所である。何故、人口一万に満たない島に明治大学の付属校があったのか、そして僅か五年間で閉校してしまったのか探してみる事にした。

終戦後、伊豆大島とのライバル意識もあり子息の教育環境を整えたい島民の宿願である新生高校の議論がくり返されるようになった。昭和23年、大賀郷村の公会堂を仮校舎として都立園芸高校の分校（のちの都立八丈島高等学校）が9月に開校された。その後、各村議会において正式な分校の敷地の選定が議題になり候補地として三ヶ所が提案された。（大賀郷大里・中道・元海軍受信所跡）。最終的に三根村の推す中道、大賀郷村の推す無線局跡の二ヶ所に絞られた。商業・漁業の盛んな三根村と、役場・裁判所などがある大賀郷村では何かにつけて競争意識が存在していた。

誘致問題で島内を二分する紛争は、両村独自で二つの高校を建築し、東京都に寄付を申し出るという激しい対立にまで発展した。

翌年（昭和24年）、東京都教育委員会が無線局跡に決定したことから、憤慨した三根村村民は独自で私立高校の設置を誘致することに決めたのである。

前三根村村長、山口喜与吉氏の次男、耕三氏が明治大学の出身であったため当時、明大の最高決議機関である評議員会を動かした結果、専務理事、双川喜一氏らの賛同を得る事に成功した（実は、この時期早稲田大学にも誘致の以来をしたが早稲田は乗り気でなかった。）当

時の明大総長鶴澤總明先生は、民主化の根底は教育の民主化にあると民主主義教育に熱意を持っておられた。そして「文化的・科学的な教育制度を浸透させることによって産業文化は教育優先の歴史的必然性にせまられている。」と設置理由を述べられている。

その結果、昭和25年に八丈富士の裾野にある三根村中道に、明治大学八丈島高校は記念すべき第一歩を歩みだした。南海タイムズ（当時の島内唯一の新聞）487号に次のように記されている。“三根は質実剛健の学風を以て70年の建学の歴史を有し、私学の最高峰を自負する明治大学の八丈島高等学校を夫々一挙に獲得、これにより本島教育文化に華々しい飛躍が約束されるに至った。

八丈富士を北西に望む敷地に一万坪、143坪の平屋の校舎に一学年80名、二学年80名、三学年若干名の募集が行われ、三根村の子弟は全員、園芸高校より転入した。初代校長は大橋留治先生（駿台明高と兼務）、以下12名の教員により、普通科・夜間の共学として始まった。教員の中には、森田半右衛門（イリノイ州立大卒）の英語科、榊原鉞止（東大名誉教授）の数学科などレベルの高い教師陣が着任していたのが特徴である。また、定時制は中元郷小学校の教室を借用した。実際は大橋校長ではなく当初より明大法学部を卒業し、陸軍中野学校の教官主事であった良田喜久男校長（昭和32年より駿台明治高校校長）が閉校まで務めていた。

順調な開校にみえたがその実、三根村に対する負担は相当なものであった。明大との契約内容において、土地建物は永久無償であり経営上の赤字は全て村が補償する事になっていた。都立高校の授業料程度の収入では、学校経営も非常に困難極まりないことは言うまでもないことであろう。

ともあれ明八校は年々、着実に生徒を増やし軌道に乗った。その後、分校から独立校となった都立八丈島高校とスポーツの交流も盛んに行われるようになった。特に野球では島の早慶戦として島民に親しまれていた。当時を知る卒業生に聞くと、紫紺の団旗（2m×1.5m）を振りかざし男女の生徒が白雲なびく駿河台を合唱し、白熱した対戦が行われ、そしてその結果は南海タイムズを通じて全島に報道され、島民は一喜一憂していたとのことである。

昭和27年から閉校になる3年間、明八校で教鞭をとられ、駿台明高の教師であられた釜屋正誠先生からも当時の状況を聞くことができた。「私は坂上（末吉村）分校の夜間高校へも教えに行っていた。天候の良い時は月明かりだけでも山道を通れたが、悪天候の時は知人の民家に泊めさせてもらわなければならなかった。この島の人達は人情が厚く、治安が良いので錠をかける必要がない。授業では生徒達の素直な性格と、南国特有の明るさがあり楽しく行う事ができた。夜になると島の電力（水力発電）がストップされるので生徒の中には月明かりの下で勉強をしていた子供達もいたようであった。」

釜屋先生は明大時代にマンドリンクラブにおいて活躍されていたので、同クラブを度々クラブの夏合宿地として招いた。そして練習の合間と余暇を利用して各村巡回演奏会を開催

した。総勢29名の演奏による豪華なメンバーで、のど自慢大会等も含めた楽しい演奏会であったということである。

ともあれ、平屋の校舎を一棟増築し、着々と基礎を整えつつあった明八校だったが、当初からの累積赤字などの財政難に直面することになる。また、三根村と大賀郷の融和もしだいに進み、分校であった園芸高校が都立高校の独立校となったことから、負担のかかる明八校は昭和30年、町村合併を契機に幕を閉じる事となった。

全日制193名、定時制76名、専攻科57名、合計326名の卒業生を送り出した。その中には明大に進学した方、あるいは島内の八丈支庁をはじめ各官庁、役場、などで活躍されていた方が多勢いらっしやる。

短期間の滞在であったが、明八校は島民の方々にとって今なお鮮明に記憶に残っているのを実感した。今回、私は明八校の卒業生と地元の方々と“でこでこ”という郷土料理店での酒宴に参加させていただく事ができた。初対面でしたが、話す事は滞ることを知らず、総明会の先輩方と会話をしているようにすら感じてしまった。酒宴の中の度重なる「メイコウ」の呼び名を耳にすると錯覚と混乱を覚え、酒の「黄八丈」がさらに拍車をかけるのだった。

平成11年 第25号総明会会報より

「ある教育家の横顔 村田勤先生のこと」

大正10年卒 片岡 龍夫氏

初代校長鵜澤先生については今更ここに書く必要はないと思うが、教頭の村田先生については私の知らなかったことが明中高等学校「六十周年の歩み」に詳細に記述してあるので、ここに抜粋して昭和22年12月27日享年82才で昇天された懐かしい恩師を偲びたいと思う。

村田先生は慶応2年松坂市の油商、勤七の長男として生まれ、幼名を栄次郎と云った。幼にして母を失い、12才より14才まで数度小僧奉公に出されたが家業を嫌い、17才の時、家督相続を放棄して同志社に入学した。ここで徳富蘆花と知り合い以後親交を結んだ。処女作「ルーテル伝」は蘆花の尽力によって博文館より出版された。明治19年同志社卒業。5年間新島襄の薫陶に深い影響を受け、またルーテルやナイチンゲールを敬慕して宗教改革史の研究を思いたち米国エール大学に自費留学を企て、同34年、妻と二児を岡山の妻の実父に預けて単身渡米し門番、鐘打ちを手伝いながら苦学して卒業、マスター・オブ・アーツの学位を受けた。

この栄光の時、次男東洋雄の訃報に接して失望落胆、深い悲しみを味わった。この時の悲しみが後年「子を喪いし親の心」を生むにいたった。明治36年（五明会員の多くが生れた年）帰国とともに一家は東京に移住し、麻布中学校長江原素六と同教頭清水由松に私淑して青

年教育に身を捧げることを心に決して教育家村田勤が誕生したのである。

その後麻布中学、日本女子聖学院、府立第四中学、拓殖大学等で修身科、西洋歴史科等の教鞭をとり、からわら「フロレンス・ナイチンゲール伝」前に記した「子を喪いし親の心」等を発刊している。そして明治45年明治中学の誕生とともに教頭におされた。鶴澤校長は政界、法曹界に活躍したいたから学校の運営は全て村田教頭にまかせ週に一度位しか学校には顔を出さず、その時は生徒を集め精神訓話を行った。先生はいつも山高帽をかぶりコーモリを持ち、大きな靴をはいてドタドタ歩いていたので、生徒は「ドタさん」「村長」とか「ルーテル」とかあだ名をつけた。

第一次世界大戦に反対で反戦思想が強く後には太平洋戦争にも反対し憲兵につかまるのではないかと周囲を心配させたと云われている。先生は大正9年2月に辞任した。大正9年1月13日夜明治中学は再び火災にかかり焼け落ちてしまったので先生の辞任はこの火災の責任をとったものと推定されている。其の後大正12年麻布中学校修身科教師として招かれ昭和17年清水校長（前記教頭）引退と同時に教育界より引退された。77才であった。同年10月金婚式を祝っておられる。

昭和22年2月年来の腎臓炎が悪化して重態となったが幸いに回復した。その時東京軍事裁判の弁護団長をしていた鶴澤博士が巣鴨拘置所より特に許可を得て雑司が谷の先生宅に見舞いにこられ涙の対面をされた。その後12月24日再び倒れ27日8時10分昇天された。

先生はルーテルやナイチンゲールに心を惹かれてヒューマニズムと自由主義を愛し、努力の人であり鶴澤先生との好コンビで明治中学の歴史に輝かしい一頁をひらいたのである。

昭和52年 第23号五明会会報より

「旧師追悼 鶴澤 總明先生」

大正10年卒 島田 龍郎氏

旧師の思い出を皆さんで書くことになり、北沢君から「君の書く先生は」と訊かれ、「校長の鶴澤先生」と言ってしまうと実のところ後悔した。というのは鶴澤校長と特に親しかったわけではなく、兄弟三人が明中にご厄介になっただけの話である。私の末弟正郎（島田正郎氏 のちの明治高等学校中学校校長 明治大学総長）は昭和21年頃、東大の東洋文化研究所の研究員だったが、当時明治大学総長の鶴澤總明先生から「明大にも純然たる学問の分野があってもよい。明大に来て東洋法制史を講じないか」とのお話で、甚だ実学から遠い講座を設けて下さり、弟は今日に至っている。今日でもこの様な講座は全国に数える程しかない。

鶴澤先生は漢字の造詣深く大東文化学院の院長をされたことがある。学院は戦後、新制大

学に移行し大東文化大学になった。先生の関係で明大には大東文化大出身の教授、講師が多く、正郎のほか今は亡くなったが義弟も明大で教鞭をとったことがある。私の父は昭和26年死去したが、曾て明大法学部長や女子部長をしていて、晩年は名誉教授だったので、明大では大学葬を以って遇された。その時鶴澤総長は八丈島にあった明大付属高校（昭和30年廃止）に出張される日程の都合から、亡父の大学葬が友引の日に行われたので火葬場が休みのため翌日茶毘に付された。これだけは今も忘れられない思い出である。

いわば「明大一家」の私が鶴澤先生にお目にかかったのは、後にも先にも父の亡くなった時だけだが、後年先生が逝去されて明大で大学葬が行われた時、私は先生の霊前に献花して深くとも冥福を祈った。

昭和53年 第30号五明会会報より

「鶴澤校長の訓辞」

大正10年卒 安達 正博氏

その要旨は次の様であった。「入学試験にめでたく合格、本校の一年生となった諸君！本校の歴史はまだ浅いが営利で経営しない私立中学である。現に5年生も今年初めて編成したほどだから矢多羅に補欠募集などして頭数ばかり揃える事はせず、ひたすら風格ある歩みを心掛けて来たのを知ってほしい。

また本年入学の諸君の中には本校以外に府立や受験日の異なる他校を受験した者もあるが、今日、本校へ入学したからには今後決してイジけてはいけない。何故なら光輝ある文化の開花した時代に、その名を校名として創立された明治中学の生徒なのだから是非プライドを持ち胸を張って行動する、即ち、本校の名誉を傷つけず学業に専念し常に明治中学生だという事を忘れないでほしい。」と全く胸に沁み入るように初代校長鶴澤總明先生から聴かされた。訓辞は入学の年の桜の花を生まれてこの方こんなに美しいものと眺めた思い出と共に、卒業以来60年波瀾万丈の人生コースの中にあっても今日まで忘れずにいた自分をいささか誇らしく嬉しく感じる次第である。

昭和56年 第50号五明会会報より

「戦中の台湾の田園で、たった3人で同窓会」

昭和13年卒 館野 春男氏

その当時、私は台中州員林郡田中町に鉄道隊の一兵隊として駐留していた。昭和20年春の或る日の午前。沖縄の血みどろの攻防が始まる直前の頃であった。そこは台湾独立鉄道大隊の本部事務室での事である。事務室といっても、土地の小学校の講堂で、本部勤務員の将兵、部隊副官以下30人程が執務中であった。私は部隊功績係として事務机に向かっていた。突然玄関より大声で、来訪を告げる見習士官がおった。彼は副官に来意を語り、その目的を終えた様子であった。とつかつかと、いきなり私の横に立って敬礼するではありませんか。上等兵の私は飛び上がらんばかりに驚いて直立して答礼を返した。「館野さんではありませんか」との言葉。よく見れば明中で二年後輩の田中順一君（現日本シービーケミカル役員）であった。余りの唐突、偶然の事であり、しばらく声もない有様でした。田中君は明中剣道部で共に汗を流した間柄であり、私の出征に関しては何人かで見送ってくれた仲間であった。お互い勤務中の事でもあり、次の日曜日の再会を約し、その日は別れたのである。さて、約束の日曜がきた。私に会わせる人がいると言う田中君の言葉に胸踊らせながら、五～六キロ離れた田園の中、彼らの駐屯地を訪ねた。そこで会った人は、なんと三年後輩の井上準一君（昭和16年卒 公認会計士 千代田区剣連幹事長 五十五年没）であった。彼らは明大を繰り上げ卒業、学徒動員で入隊、後共に有名な陸軍中野学校で特訓を受け、東京大空襲の直後、羽田から当地に赴任したのであった。私の家は空襲の為焼失しているだろうとの宣告もあった。彼らは当地で現地人の招集兵の特殊部隊を編成し、米軍上陸に備え、ゲリラ教育を始めた処であった。我々三人はその時点では生きて再び東京の土を踏めるとは思わなかった。それだけに、この外地で接している事が、何か感激的な心の交流を感じずにはいられませんでした。在校中の先生の噂、同輩後輩達の生き様、正に同窓会の会場での懇談そのものであった。我々三人は時の経つのも忘れ、談笑を続けた。そして確約出来ぬ再会を約して、私は自隊へ戻って行ったのである。懐かしい台湾でのたった三人の同窓会でありました。

昭和58年 第9号総明会会報より

「49年ぶりの卒業式に出席して」

昭和20年卒 石塚 弘蔵氏

忘却の彼方に過ぎ去ろうとしていた私の一時期の区切りが、昨年秋の一通の封書に依って、俄かに現実の姿となり、素晴らしい感動に身を震わしたのが、寄稿する動機となりました。平成5年秋、私達が加入している“明治中学29の会”幹事の方より「我々が出来なかった明治中学校の卒業式を平成6年3月10日に行われる明治高等学校卒業式に臨席することによって、その感激を体験したいと思う。学校側も快く受け入れてくれたので、出席しないか」との連絡を戴きました。

私達は旧制明治中学校の29期卒業生で、当時「大東亜戦争」(私達はこう呼んでいました)も終盤を迎え、国家は我々青年の体力を極端に要求せねばならなくなり、学業も4年修了と言うことになり、先輩の5年生と同時に卒業しました。“明治中学29の会”は従いまして2期に互って組織されております。

昭和20年3月10日の東京大空襲は言い伝えられておりますとおり、私の地区にも地獄図を画きました。幸いにも焼死を免れ、父の出身地山梨県塩山に避難し、卒業式に待機しておりましたが、当日朝、塩山駅では割当切符がないとのことで、汽車に乗車できず東京行きを断念したことを覚えております。私は4年皆勤で当日表彰状を頂戴することになっておりましたので、その無念は今でも忘れられません。現実には学校側としても、卒業式の実施は不可能だったのです。

明治高等学校卒業式当日はあいにくの小雨模様でしたが、受付にはちゃんと29期生の分もあり、導かれて式場に入りますと、左側前列に多くの同期生の顔も見え、暫く久闊を温め式は始まりました。残念なことに私達の手元に卒業証書はきませんでした、しかし旧師故山田市郎先生のご子息の山田伸夫教諭に一人一人各々氏名を呼ばれ起立し、明治大学総長先生、明治中学・高等学校校長先生他先生方に礼をし、着席しました感動と校歌斉唱の感激は終生忘れられるものではありません。

最後に拙文ではありますが大変なご努力を戴きました学校当局、並びに29の会幹事の方々に万腔の感謝と出席できなかった同期生の多くの方々に無念を胸に一筆筆を取りました。

平成6年 第20号総明会会報より

「一枚のハガキ」

大正10年卒 片岡 龍夫氏

このごろ暇をみては身の古いものを整理しているが一冊の古いアルバムが出てきた。開いてみると中学時代にクラスメートからもらったハガキが丹念に人名別に整理されている。これを一枚一枚読むと当時を思い出し、実になつかしく楽しい。自分の中学のころの一コマ、一コマが現れてはつぎつぎに消えてゆく。

その中大正9年1月14日付の北沢君からの一枚のハガキがあるが、それがあの母校の火事の様子をよく伝えていて面白い。

「一昨日家へかえったら猛烈な悪寒がしてとうとう流感のためにやられて了いました。熱は39度8、9分から40度を往復していました。酸素吸入は叔父の会社で出来るので、直ぐやりました。それかあらぬか少しはよくなった様でした。

恰度その時けたたましい半鐘！商船校（註 北沢家であずかっていた学生）が神田からその時帰って来て、火事は明中だつて云うので驚きました。平常の体なら韋駄天走りへヴィーをかけるものを。さりとて病には勝てず、ただ床の上であせるのみでした。翌朝は無論医者への勧告によって精勤は棒にしても欠席する筈でしたが、無理におして焼跡を見に行きました。ヒサンでしたね。教科書はありました。狸がオロオロしていた様でした。実際気の毒でした。何だか、いざ焼けてみるとあんまりいい気もしないものです。この休みの中に全快させましょう。17日の時間表をおしえて下さい。行きませんから」

さすがに後年のプレスマン、事件を面白く簡潔にまとめているのには感心した。皆さんもあのときの真黒く焼け落ちた校舎の残骸が水浸しになっていた姿を思い出すでしょう。

昭和53年 第32号五明会会報より

「東京五輪のわ」東京五輪出場 林崎昭裕氏 同期昭和36年卒 高德武徳氏に聞く 昭和58年卒 西秋 輝彦氏・坂井 周太郎氏

明輪会の会名の由来は、早生まれのものを除くと我々が東京五輪開催の1964年に生を受けたからである。そこで、「東京オリンピックと明治高校生の接点が何かないか？」と会報委員がいろいろと手を尽くし調査した結果、明高出身者でオリンピックに出場した方の記録に巡りあった。

その先輩は林崎昭裕氏といい、射撃競技のスマールボアライフル伏射種目に日本代表選手として出場された方であった。だが残念ながら林崎氏はすでに鬼籍にお入りになっていることもわかった。しかし日本ライフル射撃協会、ならびに明治大学スポーツ振興事務室及び射撃部の関係者の方々のご尽力で明治高校から同級生で明治大学射撃部に一緒に入部された高德武徳氏をご紹介いただき貴重なお話し伺うことができた。

東京オリンピックは、戦後の日本国の歴史の中で大きな意味のあるイベントであった。敗戦国として焼け野原になった東京を大きく近代化へと導き、大阪万博とともに高度成長の象徴的なトピックとして今尚多くの人の心にその名を刻んでいる。その東京オリンピックに出場した林崎氏とはどのような方だったのだろうか？

林崎氏と高德氏は明治高校時代ともに応援指導班に所属していた。新入生として明治大学和泉キャンパスを訪れたお二人は、「学生会館裏の射撃場でライフルを打ってみないか？」との射撃部の先輩の勧誘に面白半分について行き射撃の楽しさを体感して入部。それからは「禁酒、禁煙、禁マージャン」というストイックな日々を送ることとなる。入部時100名もの入部者も、朝9時集合で夕方4時過ぎまでの練習に明け暮れ、4年時には男子6名・女子3名になった。林崎氏はキャプテン。高德氏はマネージャーとして射撃部を盛りたてた。高德氏曰く「林崎氏には天賦の才能があった」という言葉どおり一年生の終わり頃からレギュラーメンバーとなり、その時から不動のエースとなった。明治大学射撃部は大正10年創部、大学初の射撃部であるだけでなく今なお常勝軍団の生え抜きのエリート集団で当時の部員は100名を数えた。

その中で林崎氏は群を抜いていたという。「どうしてそんなに的に当たるの？」という、高德氏の質問に「言葉では説明できない」とひょうひょうと答えていたとのことである。高德氏に林崎氏のお人柄を伺うと、「決断力はあるが、明るく後輩にも優しくかった」とのことである。しかし、射撃のことを常に考え練習場のある富岡までの電車移動中の約一時間いつも電柱に向かい射撃のイメージトレーニングをしていた（射撃の的に常に動いているので、動体視力が大切なのだそうである。）また、実弾射撃は当時ラーメンが50円の時代に一発25円したので一日50～60発しかできずあとは銃を構えての据銃にときを費やしていた。林崎氏がオリンピックに決った時の印象も、ご自信も部員も当然という思いでさしたる感慨はなかったらしい。そして、1964年10月16日大会第7日目 埼玉県朝霞射撃場で林崎氏はオリンピックの舞台に立った。前日までのオリンピック村での食事が豪華で少し太ったなどと冗談を交わすほどの余裕があったが、前半の30発を終えた後、役員を務めていた高德氏に「3発落とした、残りを満射しないと勝てねえなあ」と言い、珍しく緊張し弱気であった。「そんなこと言うなよ、いつも満射撃てるって話していたじゃねえかあ」と励ましたそうだ。その結果後半の30発も集中を切らず撃ち終えた。結果、1位のハンガリーのラスロー・ハンメル597点に対して594点で、見事に五輪新記録で6位入賞を果たした。何と1位から6位まで3点差という大接戦であった。

紙一重の結果に悔しいと思っていたらうけど、がっかりしている素振りは見せなかった。大学卒業を機に射撃から引退し、就職してお兄さんが興した会社に身を寄せた林崎氏であったが、卒業して数年後に不幸にも交通事故で亡くなる。

当時の事をまったく知らない私であるが、関係各位の皆様の悲しみは計りしれないものであったことは容易に想像が出来る事件である。しかし、その後、明治大学射撃部の先輩のご尽力により、その輝かしき栄誉を称えて毎年「スモールボアライフル伏射学生チャンピオン」には、林崎氏の楯が贈られるならわしとなっている。この楯は明治大学射撃部の先輩がデザインして、作成したのは高德氏であった。後日、今年度明治大学射撃部がこの林崎杯を受賞していることが判明して、写真を撮らせて頂けたので、牌録と共にここに掲載する。

牌 録

林崎昭裕君は、昭和36年春、明治大学に入学と同時に射撃部に入部した。在学中には幾多の優秀な戦績を残したが特に、最上級生の時、主将としての重責をもちながら、伏射60発競技の全日本選手権を獲得し、さらに第18回オリンピック東京大会では、世界の強豪を破って、594点のオリンピック新記録で第6位に堂々入賞した。

これは単に日本の学生射撃界のみならず、全日本の射撃界に大きな希望を興えた彼の功績は、「昭和44年3月3日」不慮の交通事故による彼の急逝によっても、決して忘却されるべきものではない。この賞牌は、射撃技能の優秀な学生に與えられ、その記録が彼の記録を更新することができれば、さぞかし彼も満足するものと確信する。

平成22年 第36号総明会会報より

不安と自信とスキ 東京五輪を撃ち終えて

昭和36年卒 林崎 昭裕氏

私が初めて銃を手にしたのは昭和36年4月、それは射撃部の新入部員募集の経験射撃の時で、場所は明大和泉校舎の和泉射場。それまで銃と名の付く物は、猟銃を幾度か見たことはあったが手にしたことはなかった。

大学進学の間、私は友人と共に体育会に属している部に入ろうと誓った。その時は単に体育実技の単位が貰えるからと考えたからかもしれない。私の知らなかったような部がいろいろある。射撃部もそのなかの一つで高校時代には聞いたこともなかった。「射たしてくれるんだってさ、行ってみようか」。何人かの友人と射場へきてみた。カーン、カーン…弾が鉄板にはねかえる音、とても勇ましく聞こえる。「射ってみないか？」。

部員らしい人がそう言って私に銃を手渡した。「随分とごつい銃だな。今まで見た空気銃とは違う」。褒められるままに射ってみた。もちろん最初はポンプも弾も、部員らしいその人が入れてくれた。引き金を引こうと思う間もなく弾は発射。2発目は教えて貰いながらエアを入れ、弾をつめ、今度は注意深く、そして恐る恐る、瞬間目をつぶって・・・カーン。弾はどこへ行ったかわからない。それでも15、6発射たして貰ったのだろうか。その間部員は何やら誘いの甘い言葉を言っていたようであるが。友人が10人ほど一緒に入部したのだろうか。「やめたら罰金だぞ」・・・その時に約束したが、それもととう取らずじまいである。

こうして競技射撃の第一歩を踏み出した。初めてレギュラーになったのは、翌年の中大とのオープン戦。この時は既にエアからスモールボアに転向していた。レギュラーになると、試合で敗れる気持ちがこんなに辛いものだとは、今まで思ってみたこともない。そして次第に部のためなら私生活を犠牲にしても、という気になる。その時は入部から二年余の月日が経っていた。

昭和39年4月、オリンピック代表選手第一次選考予選、三姿勢、伏射ともに予選通過。予選通過できたのは、2ヶ月前から練習に励んでいたからであることは明らか、しかしオリンピック予選のためのものではない。韓国遠征のための練習であった。この頃はまだオリンピック予選に体当たりしようという考えは少しもなかったし、第一次選考会でも余裕のある記録の射ち方ではない。その日射ち始めてみなければわからないといった状態、第二次選考会もそうであったように思える。第一次、第二次選考会の結果、伏射は1位との差3点で3位となり、監督、OBの「やれるだけやってみろ」の声援で徐々に己をその気分を持っていった。そしていつのまにか選考会で勝ちたいという気持ちになり、常に安定した自分に最も適した姿勢を見つけ出すのに必死になって、いろいろな姿勢で練習したものである。仙台合宿でこれならいけそうだと思う姿勢を見つけた。この姿勢なら記録が上がるという信念を持ち姿勢が固まると、今までようやく出していた記録が大して苦勞せずに射てるようになる。自信は恐ろしいものである。私の姿勢は決してリラックスした姿勢とはいえない。体力がないための悲しさか、全ての重量を左肩にかけてしまう。完全に慣れたと思い込んだ時でさえ、肩の神経が気持悪くなるほど痛くなり、酷いときは姿勢をとっただけで痛くて起き上がることもあった。この痛みは射撃をやめてやっとおさまった始末である。しかしこの痛みのお蔭で左腕の力を意識的に抜くコツをマスターすることができた。これは人から教えられて身につくものではない。貴重な収穫である。腕の力を抜くコツを覚えてからは記録の安定度が4、5点は高くなったはずである。

第三次選考会は、全日本選手権も兼ねていた。私は初めて勝ちたいと執念を燃やし

ていただけに、前の晩から何か落ち着かない。射座に入って大の字に寝ころんでみた。どのくらい経ったろうか。気づいた時、クリーニング・ショットの時間がきていた。寝ころんでいるうちに何分間かウトウトしていたのである。今考えるとなんともズズウしい話。しかしこれが幸いして邪念が消え、標的と自己だけしか考えることのできない自分になったのである。最終シリーズ・勝つか負けるかはこのシリーズにかかっていた。私の計算では満射して590・今までになかったほど強気に、そして点取り虫になっている自分を発見した。満射を成し遂げた結果は592と、計算より2点上回っていた。

第一次、第二次と他の選手が不調なため、幸運にも上位との点差が開いてなかった。第三次では自力で首位を勝ち得ることができたのである。正直なところ、オリンピック出場選手に選ばれるまで幸運の続きとおし、実力などそれはとてもなってはいなかった。それだけに選手決定後10日ほどの休みが続いた時は、何か酷く不安に襲われてしまった。

選手決定後初めての練習・一日目は空射ち、そして射ちこみ。何か初めて射撃をするような気持ちである。580点を第一歩として、確実に射ちこなせる記録を高位点に押し進めていく。それと並行して己のオリンピック選手としての自覚を植えつける。日一日と経っていくうちに、己が代表選手であることを疑うことなく受けとれるようになり、それが己への自信となって確実な記録も上がりはじめる。私が590点前後を常に射てるようになった時、他国の選手も調子を上げてきた。597点、596点・彼らは何の苦もなく短時間に射ってしまう。このような高記録を試合の10日ほど前から毎日見せつけられていたので、たとえ私が590点以上を射っても、今日は調子が良かったと思えず、それが当たり前のように、まわりの環境から錯覚してしまったのである(1ヵ月前までの私なら、この記録が下がらないようにと考えたに違いない)。しかしいつも高記録に挑戦したわけではない。自分の射ちこなせると思われる記録への挑戦、その日の気持ちの安定度によって目標を変えるのである。己だけの心の中に秘めた最低記録に確実に射ちこなせる自信をつけることが、大舞台に出る第一歩であるからである。このようにして常に590点前後を射ちこなせるようになった。残るは気力の充実である。これなくして高記録の実現はありえない。私はくどいほど己に代表選手であることを言い聞かせる。

いよいよ試合を2日先にむかえた晩、寝床に入ったものの、オリンピックという檯舞台で射つ不安が一度に募ってきた。私は心の中で「誰か助けてくれ」と叫んでみた。この時ほど心細かったことはなかった。しばらくして私が射っているところを思い出し、自己最高記録を射つ1発1発を頭に描いているうちに胸がドキドキして興奮状態になる。それからまた不安に襲われる。こんなことでこの夜は気持ちが動揺してほとん

ど眠れない始末である。一般にいう「アガリ」とはこの気持ちの動揺を指すのであろう。私はこの夜に最大の「アガリ」を創り出したのである。試合の前夜は何の心の動揺もなく寝つかれた。

いよいよ試合当日、射撃開始1時間前に射場に着く。まだ射座に入れない。後ろのベンチで銃の装備をする。私の手は少し震えていたようだ。不安の震えではなく武者震いというやつかも。射座に入る前にもう一度装備点検、射座に入ってもう一度。そして大の字になる。流石にこの時はウトウトするわけにはいかなかった。しかし体の力が何となくスーと抜けていくのを覚える。そして何もかも頭の中から消える。

クリーニング・ショット始め・・起き上がって4、5発射つ。射撃開始10分後1発目の試射を射つ。この時は既に観客はいたのだろうが、標的と己だけしかわからない自分になっていた。もちろん後ろの話し声も耳に入らない。全気力、全神経が総動員され、肉体は射撃することに充実しきっている。アガっていたから他のことはわからなかったのだろう、と人は言うかもしれない。アガっていれば射撃することに全神経を集中することができず、話し声はおろかちょっとした音も耳に入るだろう。一見冷静であるかのようであるが、私に言わせれば、これが競技中におけるアガリの状態なのである。射撃への気力の充実がないと言いたい。もし射撃中に後ろがうるさくて、静かにしろと怒鳴りなくなった時、その者は己の未熟さをまず考えるべきである。気力の充実なくして高記録への道はありえない。

前半の30発を射ち終えて小休止をとった時、初めて後ろの観客に気づいた始末。射場内を歩きまわる。観客の前で競技するのはこれが初めてであるが満更でもない。代表選手であることをひしひしと身に感ずる。1点でも記録を上げたい。妥協はすまい。

最終シリーズ。心の奥底では、早く射ち終えたいという気持ちがあったに違いない。その心のスキが後ろでつくため息すらも聞こえさせてしまった。ここまできて私のいうアガリの餌食になってしまうとは！

前評判どおり優勝が593、4点ぐらいというのを信じていたら、私はおそらく594点は射てなかったろう。前に述べたように、毎日好記録を見せつけられていた私には、これが入賞するほどの記録とはとても思えない。ただ無我夢中というところが本心だったろう。

射撃訓練の目的は誰に勝つということではない。己に勝つための訓練であり、その目的は己自身によってのみ達成されるものである。

平成22年 第36号総明会会報より

『画にならない生活の中で』

平成16年卒 羽田 圭介氏

自分たちが育った環境こそ最良であったと人は語りたがりがちで、男子校であった頃の明大明治高校・中学こそが最良であった、と僕も思ったりしていた。男子校で育ったからこそ個性を身につけることができた、と。しかし社会に出て色々な人たちと出会っても、男子校出身者のカラー・個性というものを誰に対しても感じることはない。10年間女子中・高・大漬けだったという女性などからは時折、独自の個性を感じることもあるが、それだっごくたまにであり、少なくとも男に関してそういうものは当てはまらない。男子校か共学校かは、プラスでもマイナスでもない。

明大明治という学校が最良である由縁はどこにあるか？

良い仲間たちと共に育つ。それに尽きると思う。

良い仲間たちが集まる、のではない。入試を経て入学してきた“元・受験生”たちが、明大明治流の教育によって“良い仲間”へと育つのだ。外から見ると、明大明治出身者は道徳的でおっとりしている人が多いらしい。これはよく言われた。男子校で育ったからではなく、明大明治で育ったからだ。現職の教員の方々はもちろん、卒業生たちの目によっても受け継がれている校風の存在は無視できないだろう。

厳しい(らしい)大学受験を乗り越えていないというマイナスはあるのかもしれない。それでもなお、大学受験に時間をとられない、というプラスは大きい。そのおかげで僕は高校2～3年時、小説を執筆して応募する時間を確保できた。多感な時期に自分の道を見つけられるというプラスがあった。少なくとも日本の社会では25才を過ぎててもなお自分の理想を探したり求め続けたりするのは非常に困難で、社会的自我の生まれる16才頃から24才頃までには人生の大枠を決め、アクションを起こしある程度地盤を固めなければならない。長いようでいて短い。貴重な時間をそれに充てられることができたのは自分にとって幸運だったといえる。

当時の校舎が神田書店街や楽器店街に近く、文化的素養を磨きやすかったというプラスも大きいだろう。ネットで何でも買える時代になって久しいが、消費することにすら身体性が欠如すると思の多様性は生まれにくい。そこから逃れ独自性の核を形成してゆけたという点において、あの立地環境は素晴らしかった。今振り返るとどうやりくりしていたのかまったくわからないが、月3,000円ほどの小遣いで、放課後に友人たちとマクドナルドで馬鹿話をしたり、好きな本やCDを買ったり、埼玉の実家に帰宅しては自転車選手を目指し江戸川で1日40キロほどロードレーサーで走るという勝手気ままな暮らしを送っていた。厳しい受験勉強や部活

動にうちこむ、という画に描いたようなアツい学生生活とは無縁で“悠々自適”という語がもっともじっくりくるほどだったが、そんな当時の生活はすべて現在の小説家という仕事の糧になっている。

調布の新校舎へ足を運ぶと、その広い敷地に驚く。満足に体力測定を行うスペースすらなかった旧校舎とは違い、あらゆるスポーツを同時並行で行うことができるグラウンド。人と会うにも適当に見当をつけて歩き回っていれば捜し当てられた旧校舎と違い、校内放送でも使わないと目当ての人には会えないというほど広い新校舎。そして数割の女子生徒。一見すると全く旧校舎の面影のない新・明大明治。

しかし教員室内の雰囲気だけは、昔とそんなに変わらない。強烈に“明大明治の匂い”を感じた。教育を施す側の方々は、伝統を受け継ぎこれまでと同じように明高生たちを育て上げようとしている。

変わった環境と、変わらない校風。調布時代に入った明大明治で、どんな仲間たちが育ってゆくのか。非常に興味がある。

平成23年 第37号総明会会報より

「記念館と私」

昭和31年 卒 齊藤 鉄太郎氏

神田駿河台で生まれ、6歳になるまで当地にいた私が、空襲によって、やむなく疎開する事になった。岐阜の郡上八幡、そして世田谷と移って、また駿河台に戻ってきたのが、明治中学に入学した時だった。小さい頃、見ていた明大記念館が、大きくそびえ立って、当時の姿そのまま、また、脇の石垣を登って遊んだ頃がなつかしく思えた。中学時代、記念館の脇を通して、よく地下の道場へ遊びに行った。柔道部の伊藤信夫主将、拳闘部の松永先生に可愛がられ、器具を自由に使わせてもらって、選手と一緒に自由にトレーニングに参加させてもらった。時々、手をとって教えてもらった。柔道部の選手に背負投げをかけられたら、畳にドスンと落ちて息は詰まるし、目の前がぐるぐる回ってしばらくは起き上がれなかった。拳闘部では選手のなわとびのスピードにはびっくりした。都会で遊ぶ場所が少なかったが、道場に自由に出入りさせてもらい、遊ばせてくれたり、いろいろな事を教えてくれた当時の先輩の皆様に思い出と共に感謝しております。さて、明治高校時代、私は担任の石川一郎先生のもとで、日本史、国文学の部に在籍していました。その教えの中に歌舞伎研究がありました。伝統を知り、知識を高めそして、親しんでいく為の勉強会でした。それには、歌舞伎座へ行き本物を見て、物語・踊り・歴史的にも学ばないと良く分からなかった。それから二年間研究したら少しは通になった。

高校3年の時、石川一郎先生から、卒業記念に、明治大学記念館を借りて、歌舞伎を演じてみないかと話しがあった。ぜひやってみようと、遠藤景孝・三好照明・鈴木勝・小室の諸氏他十名でメンバーを作り、まず何を演じようか協議し、同級生にも分かりやすいものでいこうと「御存知鈴ヶ森」に決めた。

幡随院長兵衛と白井権八と雲助のからみの三ノ二だ。台本を見ながら、放課後、一ヶ月練習した。衣装は専門店で借りた。舞台背景と駕籠は自分たちの手作りで、完成させた。幕が開いた、客席は先生と同級生、下級生で満席だった。ひやかして、本名を呼ばれた時は笑ってしまった。駕籠をかついで、エイホ・エイホの掛け声で舞台中央まで進んでいくと、人を乗せた駕籠の重さで肩がギシギシとなったが、まるで役者になったみたいで気分が良かった。全員セリフを間違いなく演じられ、幕がおりた。楽屋で成功の万歳をした。

学生時代の思い出だけでなく、人生の思い出となったこの機会を与えて下さった石川一郎先生と記念館講堂に感謝しています。

今、あらためて明大通りから記念館を眺めると永い時代の歴史が蘇り、夕日に映えるその姿はどっしりとした古城のように見えた。

平成8年 第22号総明会会報より

「明治魂の球譜 昭和33年の夏」～甲子園を賭けた激闘 明治 vs 早実～ 昭和57年卒 玉置 正人氏

【移転とスコアブック（球譜）】

昭和33年（1958年）8月3日、午後6時15分ゲームセット。神宮球場にて第40回全国高等学校野球選手権大会・東京大会決勝戦に終止符が打たれた。決勝戦はこの年の春の選抜大会に東京代表として揃って出場した宮澤主将が率いる明治高校と王貞治主将が率いる早稲田実業であった。試合翌日の新聞には「死闘12回、まさに奇跡としか言いようのない逆転。球史にもまれな大熱戦に薄暮の神宮球場は、ただ興奮のルツボ。内野席にギッシリつまった2万の観衆は、試合終了のサイレンが鳴り終わってもしばらくはボウ然、だれ一人として動かない」(朝日新聞東京版)と記されている。

ちなみに当時の早実 は前年の選抜大会で王投手の投打にわたる活躍により選抜史上初めて紫紺の優勝旗が箱根を越えた。この歴史に残る優勝に続き夏の制覇を目指す早実 は優勝候補の本命にあげられる強豪校であった。

それから半世紀を経た2008年春、明治高校が晴れて調布の新校舎に移転する時に一冊のスコアブックが倉庫から発見された。このスコアブックこそが、東京大会で永遠に語り継がれる

激闘の試合の記録である。さて、本題に入る前にこの試合を何故取り上げたのか。それは本年度のテーマである「明治魂の伝承」をこの試合を振り返ることにより検証したかった。また、その激戦の証言者として当時の明治高校野球部主将の宮澤政信氏（昭和34年卒）並びに、福岡ソフトバンクホークス株式会社取締役会長の王貞治氏に高校最後の夏を振り返っていた。特に王氏には早実のエースとしてマウンドから見た「明治魂」にも触れていただきたかったと思ったからである。

【同点で延長12回へ】

明治の先発投手は小田島、早実のエースの王で試合は始まった。5回表早実の攻撃で試合は動いた。ワンアウト後にショート内野安打と四球の1・2塁で3番王を迎える。ワンボールの後の2球目を叩いた打球はライト前のタイムリーヒットで早実が先制点をあげる。明治の反撃は6回裏であった。先頭の1番金子が四球で出塁。2番野村の送りバントと王投手の痛恨のボークでランナーは3塁へ。3番西広はファール4回とボール3つのフルカウントの8球目に見事スクイズを決めて同点。その後は明治の1回途中から登板したエース下田と早実・王の投げ合いで両者一步も譲らずに1対1の同点で延長12回へ進む。

【激闘12回の表 早実の攻撃】

スコアブックから明らかになった早実の攻撃は「曇り掛ける」という表現が最も適切だと思う。ここでも王選手は勝負強さを発揮して、逆転のタイムリーヒットを打っている。この試合で王選手の打撃成績は4打数3安打、ここ一番の勝負強さを発揮している。この4点を取った時のエピソードがある。

① ネット裏の高野連は「早実優勝」の準備を始めていた。

② 早実は甲子園の宿舎の確保をと大阪へ向かう列車の切符手配を終えていた。

しかし、この切符がその後、早実のご厚意により明治高校に譲り渡されるとは、この時点で誰も知る由はなかった。このような状況から運命の12回裏、明治の攻撃は開始される。

【激闘12回の裏 明治の攻撃】

12回裏の明治の攻撃はワンアウト後の代打攻勢で奇跡への足がかりを得る。勝利への執念とも言ふべきか、代打渡辺が3塁線を破るヒットで塁に出る。次の代打古庄の2塁ゴロでゲッツーを狙った早実のセカンドが、自身で2塁を踏んで1塁へ送球するも判定はオールセーフ。さらに、1番金子がライト前にヒットで続き満塁。次打者が四球で押し出しの1点をもぎ取る。ここで王投手はライトに下がり、早実二番手投手の河原田がマウンドに上がる。満塁で打者は3番西広、河原田の投じた3球目を叩く会心の一撃はセンター真正面に高く弾き返されたため一瞬センターは前進してしまう。その後、懸命に背走し転倒しながらグラブを差し出すが届かず。打球がフェンスに当たって転々とする間に、満塁の走者が一気にホームを踏む同点の3塁打となった。崖っぷちからの同点打で勢いは一気に明治に傾く。そして迎えるバッターは主将で4

番宮澤。まさかの同点打で、早実はライトに下がっていた王選手を再びマウンドに呼び戻す。

【王氏の回想】

（明治高校の）甲子園出場にかける、「最後まで諦めない」という強い気持ちを感じました。決勝戦ならではの戦いであったし、流れが明治高校に傾いた時から我々は守勢に立たされてしまい、野球の怖さを味わった瞬間でした。

両校主将同士の執念の対決はボールカウント、ワンスリー後の5球目であった。宮澤主将は「真ん中のストレートだった。バッターボックスでは意外と冷静だった。何も考えず無心でバットを振った。」と語っている。執念の一打は左中間を痛烈に破る逆転のサヨナラヒットで明治の宮澤が激戦に終止符を打った。午後2時15分の試合開始から4時間が経過していた。

神宮の杜にこだまする校歌「白雲なびく…」を斉唱するスタンドの応援団、生徒達はどうのような思いでいたのだろうか。明治スタンド全員が「明治魂」を体感した瞬間であった。早実というライバルがいてその後日本球界はもとより世界が認める王選手との真剣勝負は永遠に語り継がれる伝説の試合となった。

【王氏の回想】

プロ・アマを通じた野球人生の中で、強烈に印象に残っている試合です。この体験がプロ入り後の私自身の野球に対する取り組みの「執念」に活かされたと思います。

また甲子園には5回行けると思っていたものが4回で終わったことで、大学進学ではなくプロ入りに傾くという、自分にとっては運命といえるような試合でした。

この回想からもわかるとおり、この試合が王選手の野球人生の大きな岐路であった事が伺える。

【明治 宮澤主将の回想】

松田監督という厳しい指導者の下で、日本一と確信する練習量を誇っていた。その厳しい練習は、何に向かっているかその時々には見えない事もある。しかし、振り返ってこの12回裏のサヨナラヒットを打つための練習であったと今は思うことが出来る。

【王氏・宮澤氏の回想から見える明治魂】

明治高校に伝承すべき「明治魂」とは王氏と宮澤氏が共通して語っている「最後まで諦めない」精神力と目標達成にかける「執念」であると思う。また、宮澤主将は「ここ一番に力を発揮できるための強い精神力、厳しい練習に耐える忍耐力を明治で学んだ。決勝戦の延長戦ともなれば、技術力ではなく、強い精神力と一致団結するチームワークが重要である。」と語っている。

明治高校で過ごした貴重な青春時代。勉学や部活動からたくさんの事を学んだと思う。しかし、社会人となり今振り返って母校から授かった「明治魂」とは「何事にも屈しない、諦めない精神」であったと確信している。校舎も変わり共学にもなったが、この明治魂を今後もぜ

ひ伝承して欲しいと願う次第である。

西東京に移った明治。「明治対早実」の伝統の一戦が再び神宮球場の決勝戦で見られることを切に望んでいる。

『明治魂の球譜 昭和33年の夏』の掲載にあたりご多用中にも拘らずご寄稿いただきました王貞治氏、窓口となって労をおとりいただきました福岡ソフトバンクホークス株式会社広報室・木村寛氏に深く感謝いたします。

また、インタビューにご協力頂き貴重な資料をご教示下さった宮澤氏のご厚情に深謝いたします。むすびは王氏から明治高校にエールを送って頂きましたのでご紹介します。

【王氏からのメッセージ】

明治高校の甲子園出場を願っている高校野球ファンも多いことと思います。校長先生をはじめ、教職員の皆さん、父兄の皆さん、校友の皆さんが一丸となって選手達を支えていくことが大切です。

早実とは西東京ブロックで対戦する事もあろうかと思いますが勝負は時の運ということもあり、精一杯の戦いを繰り広げて欲しいと願っています。

福岡ソフトバンクホークス株式会社 取締役会長 王 貞治

平成21年 第35号総明会会報より

「明魂会」の諸君、30年経ちました

教諭 安部 友己氏

昭和54年4月、明治に就任した年、諸君に現代国語を教えることになり、以来、三年間、諸君と共に「明治高校」を感じるようになったわけですが、前任校(女子及び共学)に比したからか、花一本無い紫煙の中に、海千山千の男の匂いがする男塾である教員室(在籍していた女性教員3名は、その後退任され、平成七年度に女性の専任教員が採用されるまで、養護教諭を除いて女性教員は在職していない。)は、私のやる気を喚起してくれました。

当時の諸君の制服・制帽姿は、正に「独立自治」「質実剛健」の校訓を具現化したものであったし、学校生活に対する取り組み姿勢も、自然とそうになっていたと、ノスタルジアの部分差し引いても、やはりそう感じる場面は数多く有りました。

諸君が高校二年生の年に「A・Bクラス」というクラスが出来、私はそのBクラスの担任になったのですが、定期考査が終わる毎に、クラスの数名が他のC・D・Eクラスと入れ替わるという仕組みで、私は、そのメンバー表を教室の後へ貼る度に、心中で「頑張れ！」と呟いていたのを記憶しています。

Bクラスの諸君は、各クラブの部長が多く、七時間目の授業は、辛かったと思いますが、そんな中でも、友人の発言が「学校」の批判に及ぶものだったりすると、烈火の如く怒りを露にする諸君が大勢いて、「愛校心」とは、こういう場面にも現れることもあるのかと、心が揺さぶられたことを今でも懐かしく思い出します。

また、B組から生徒会長を出そうと画策した私の気持ちを汲んで立候補し、当選した生徒にも、その気概を感じました。

更に私が快感を覚えたのは、バトミントン部の生徒（現在彼は、高校日本一のチームを創り上げた他校の顧問です。）の国体出場が決った時、全校生徒が体育館に集まり、激励会を開いたことがありますが、諸君の大声でのエール、拍手が、諸君の男気と友情を強く感じさせ、改めて、明治の良さを感得することができたことです。

平成21年になった今でも、コーチとして来校している諸君の同級生がいること自体、その証左であると言えるでしょう。

個性的で、強くそして優しく、仁義を大事にした諸君の思いや諸先輩方から受け継いだものを踏まえた、明治の理想的な在り方を追求し続けていかなければなりません。私は、最近の卒業生の色紙に、「自己に厳しく他に優しく」と書くことが多くなりました。

言わずもがなの言葉を書かずともそうである凛とした生徒が、来校した諸君を迎える様になることを期して微力を尽くそうと、諸君の卒業式の日、体育館の天井目掛けて飛んでいき、きれいな絵柄に映ったあの制帽の舞を思い出す度にそう思っています。

平成22年 第36号総明会会報より

「私と明治高校」

元教諭 後藤 朋智氏

私が明治高校と関わりを持ったのは、今から50年前明大を卒業し助手として大学に残った年の夏のことである。指導教授の山本二郎先生から付属高校の夏期化学実験講習会を担当するよう指示され、初めて明高Ⅲ年生の諸君と顔を合わせるようになった。

実験は高校化学で行うべき実験を主体に行ったが、最終日は楽しんで頂くよう線香花火を作ってもらった。黒色火薬を作り、これを細長く切った和紙にのせ、こより状に巻いて完成するのだが、こよりを作ったことの無い生徒達には苦勞していたようである。線香花火の特徴である最後に放射状にパチパチと広がる燃焼が出ないうちに和紙が燃え切れるものが多かった。

当時、東京大学の糸川教授がペンシル型ロケット発射成功との新聞報道があり、これに触発されたらしく、残った黒色火薬でロケットを飛ばしたいと生徒の申し出で毛筆の竹筒を加

工して、水平発射させたら約10メートル程飛んで拍手喝采。以後講習会の最終日にはロケットを飛ばすのが恒例となった。

3日目には、直径4センチ長さ70センチ位の大きさの鉄製の本格的なロケットを、鉄工所の息子だという生徒が持って来たので、火薬作りに大変な思いをしたものである。グラウンドに長椅子でランチャーを作り45度にセットして点火、見事に発射、白煙を引きながら小田急線の線路を越えて農地に落下した。発射大成功の興奮さめやらずの時、駐在所のお巡りさんが自転車でかけつけ、大きな爆発音がしたが何か事故でも起きたのではと心配顔、一応説明してお引取り願ったが、今なら新聞種になる大事件である。50年前の良き時代の忘れられない思い出である。中野高校にも化学実験講習会を行ったがロケット発射は明高のみであった。講習会を通じて両校生徒の気質を較べてみると、明高生は明朗で人なつっこい様に思えた。実験終了後、研究室に遊びに来たのは明高生で、中野高校の生徒は引率教諭の注意があったのか実験終了直ちに下校していた。

昭和33年の初頭、総長武田孟先生に呼び出しを受け総長室に伺ったら、付属高校に行く気はないかと突然お申し出に驚き返答に困った。山本教授には、話は通してあるとのこと、どうやら良田校長の直々のご指名による転勤事件らしい。山本先生も色良い返事をされなかったようで、先生共々数回新宿の焼き鳥屋に招かれ付属に行けと口説かれた。結果的には明高に異動することに成った。ところがここで問題があった。

明大では大学から高校に異動する場合、退職して再雇用になるとのこと、微々たる退職金を頂いて生田の山を降りた。職員の場合はどの部署に異動しても身分の変動は無いが教員は別口の様だ。同一法人同一組合でありながら明大の格差を感じたものである。昭和33年4月同期採用者7名と明治高校に奉職したが、早い人は3ヶ月で退職、10年後には私一人が居残り定年退職まで御世話に成った。在職中11人の校長に仕えたが、私学としては異例の人数だと思う。明中高の学校運営が如何に難しかったかを物語る一例ではないだろうか。昭和40年頃から組合の民主化運動の一環として校長公選制を目指して、都内の公選実施校を訪問し資料分析し理事会との合意の上、昭和42年初の公選校長福島則雄先生が就任された。以後10年間務められ明中高の発展に尽力された。私が最も訓育を受けた校長のおひとりである。当時、明大への推薦者は6割程度で、早慶付属校の全入制には程遠いものであった。福島校長は全入を目指して各方面に当たられ、結果9割8分迄推薦者数を引き上げ、今日の推薦制度の基礎を築かれた。私も微力ながら校長のお供をして学部巡りをしたものである。深夜に及ぶ事も多く、市川の国府台のご自宅まで送り、柏の自宅迄帰った事も再三あった。車中色々と教師として薫陶を受け尊敬すべき校長の一人として今でも心に残るお人柄であった。

来年度より共学校として新天地で活躍する明中高であるが、幾多の困難が待ち構えていると思う。新校長のもと教職員、生徒、保護者、OBが一つになって90年の名誉ある伝統をさら

に届けられん事を祈って拙い文を終わります。

平成19年 第33号総明会会報より

「志を高く」

元校長 清水 紀夫氏

明治大学付属明治高等学校・中学校の教育の原点は「独立自治」「質実剛健」です。すなわち、「生徒の自立と人格形成で、目標は生徒個々の幸福」にあります。いつの時代においても中学・高校生が、その目標達成のために心がけてほしい事を3つあげます。

【学力と学習力を身に着けること】

高等学校・中学校で学ぶ全教科・全科目は、諸君の知性を豊にし品性を高め、人格を形成させる上で不必要なものは、何ひとつありません。全ての学習に意欲をもって積極的に努力し、学習能力を身に着けることです。「生活習慣を確立し、規律ある行動をとること」

基本的な生活習慣を確立させることにより、学習の成果は上がります。また、私達の自由や幸せを継続させる為に、規律と秩序を守ることは、古来より人間が作り出して来た知恵です。諸君は学校生活を通じて、集団生活における各自の役割と責任を、自覚を持って行動することが大切です。

たとえば、学校行事や班・部活動への積極的な参加で充実感や感動が与えられることは、明治の教育上不可欠な要素なのです。それは、ここで指導してくださる先生やOB、上・下級生との日常的な接触こそが、個々人の人格形成に、教室での学習にまさって役立つからです。そこに、歴史と伝統ある明治の校風を体得すべき内容が凝縮されており、また、本校では特に重んじられているからでもあります。

【自己の志を高く掲げること】

自分の才能・特性を見つけ、将来、社会において果たすべき使命を自覚しそれを育て上げることです。才能や特性を輝きあるものにするには、それなりに努力が必要です。その努力は、正しい価値観に基づいた行動や素直さを基礎として、自らが追及するものを求め、積極的に行動する意欲であり、自らの思考や判断で主体的に行動する力であり、かつ、既成の概念にとらわれず工夫し新しいことを考え行動して行く創造力です。どんなに才能や特性があってもそれを磨かなければ輝きません。どうか自分の力で才能・特性を磨き上げ自己の志しが達成できるように努力して下さい。それが、自己の人格を育む事になります。

最後になりましたが、私は平成18年3月末日をもちまして定年退職をいたしました。

在職中は公私共に皆様より温かいご指導・ご支援・ご厚情の数々を賜り心より感謝し厚く

お礼申し上げます。

教員生活42年は、上記、本校教育の原点を心に生徒を指導してきました。数多くの素晴らしい生徒たちが巣立っていき、社会のあらゆる分野で活躍されています。このことは、人生の大半を明治ですごした私には大きな喜びであり、誇りであり、生涯の宝だと思っています。本当に幸せなことでした。

これからも明治精神が絶えることなく受け継がれて行くことを、心より願っています。

平成18年 第32号総明会会報より

「明治高校での最後の3年間」

元英語科教諭 矢田理世氏

産休・育休を経て、私にとって4年ぶりに担任をしていたのが2008年4月入学の学年でした。その後3年間で共に過ごし、一緒に明治高校を卒業することになるとは考えてもいませんでしたが、この生徒達との3年間は私の人生にとってとても貴重な時間です。自分が親になって初めて担任した学年でしたので、親にとって子供は無条件に愛おしいという気持ちを実感しながら、複数の視点で生徒たちを見られたように思います。みんなとてもかわいい存在でした。

調布という新しい土地で新しい校舎、共学化一期生、そして久しぶりの担任業務。

不安要素がたっぷり揃った新年度でした。女子生徒を迎えて戸惑ったのは、クラスに約半数を占めていた明治中学校出身の男子生徒たちと、そして担任の私です。それまで10年以上男子校に勤めすっかり馴染んでいたのも、何かにつけて「かわいい！」と高い声で喜ぶ女子に困惑したのを覚えています。I年生の4月当初の様子は何度思い出しても笑えます。教室で番号順に二人ずつ席を配置したところ、一ヵ所だけ男女で並びました。男子生徒が一人でずっと顔を真っ赤にしているので、「男同士になるようにしてあげて下さい」と隣の女子生徒からお願いされました。放課後には、「ねー！私のこと〇〇（下の名前）って呼んでー」「…いや、自分には無理っす」というぎこちない会話が聞こえてきました。さらに、明治出身の男子生徒は女子に敬語を使って話していました。が、それが1年も経たないうちにお互いを呼び捨てにし合い、あちらこちらでカップルが誕生し、女子が男子からジャージを借りているところも目撃しました。時間と共にお互いに馴染んでよかった、と安心したものでした。

その後クラス替えを経てⅡ年生、Ⅲ年生と進級し、共学であることがごく自然な雰囲気になりました。我々教員側は常に「共学一期生」ということを意識せざるを得ない状況でしたが、当の生徒達はお互いを尊重し合い、クラス内で、授業で部活や学校行事でそれぞれが得意分野を発揮して、適材適所で能力を活かしていました。Ⅲ年生3学期の授業中にとあるテーマで

自分の意見を英語で言わせていたときに、「明治高校では男女が平等だ」という発言がありました。何気ない一言でしたが、とても印象的で、嬉しい一言でした。

高校生活では、知識を得ることはもちろんですが、その後の人生において心の支えになるような友達や思い出を作ることも重要なことだと思います。平凡な毎日でも、できるだけお互いを支え合い、自分に自信をもてるような場であって欲しいと意識していました。卒業した皆さんには、明治高校での様々な思い出や経験を心の糧に、男女の区別なくそれぞれが適性を活かして、社会で自分なりの居場所を見つけて精一杯生きていって欲しいと願っています。

優秀で心優しい生徒たちに恵まれたこと、そして彼らの大切な高校生活を一緒に過ごすことができたことを心から感謝しています。その後、私は新しい学校で日々精進しています。お互いにまた成長して、笑顔で再会できることを楽しみにしています。

平成23年 第37号総明会会報より

同窓会々報第1号「創刊に寄せて」

元校長 福島 則雄氏

待望久しかった同窓会々報が創刊されることになった。会員名簿の編集発行という矮骨の事業が、同窓会復興の発端をなすものと象徴するならば、このたびの会報創刊の事業は、さらに同窓会の充実発展の象徴と言ってよかろう。そして、さらにこのたびの教育環境の整備、校舎の再配置を期して明るく近代的な第2号館、第4号館校舎の落成したことよき記念ともなろう。

私学は、常に説くように一つの運命共同体のようなもので、その教育は個性と魅力を持つを原則とし、またそれ故に各自建学の精神を骨子として育てられた同窓会類集いあってどの学校でも同窓会活動は活発であり、団結が強い。本校も今回の同窓会報の発刊を機として、生徒会新聞とPTA会報を併せ、茲に三報を数えるに至った。そして戦後はじめて母校の三分野が大同円をみたことは慶ばしいことである。

やや説法めくので、すでに大成された方々は対象から省かせていただいて、日ごろの私の心の一端を創刊号の紙上をかりて歳若き卒業生に伝えたいと思う。諸氏は孰れも幾とせか前に白雲なびくを母校を巢立たれた。そしていま社会という果てしない洋野にある。さながら私の旧師超空折口信夫先生が卒業のとき「桜の花もちりぢりにしもわかれ行く遠きひとり」と君もなりなむ」と書いて下さったように。しかし、一個、〈独立自治の旗〉を翳す人間にとって、世の中はまことにきびしく住みよいものでは決してない。人間は弱いもので時には世の風潮ということに自己をのせて逃れる。しかし、人間の生きる道は自分を律することと強靱な精

神とをもつことである。挫折しては人生の花は咲かない。これが人間の独立である。そして精神こそ人間の行動の総てであり昔は修業と伝統とを守ることによって、その精神が培われたのである。耐え忍ぶこともこの強い精神の現れであって、社会に出てこの克己心さえあれば戦域にも融けこみ、社会という広野も、これ明朗となり希望も湧く。これなくしては、たとえ大学を出ても釣糸を垂んずして大魚を得んとする姿に等しい。若き卒業生諸氏〈母校明治の名において〉在学中心身に沁みこんだ建学の精神を想起し中道をまっしぐらに強く生き抜いて欲しい。わが校歌は、一つここに集える人間は独立自治なるべし、一つここに集える人間は高き理想の道をゆくべし、一つここに集える人間は霊峰不二を仰ぎつつ刻苦研鑽して他念なかるべし、と諭え励ましてくれている。

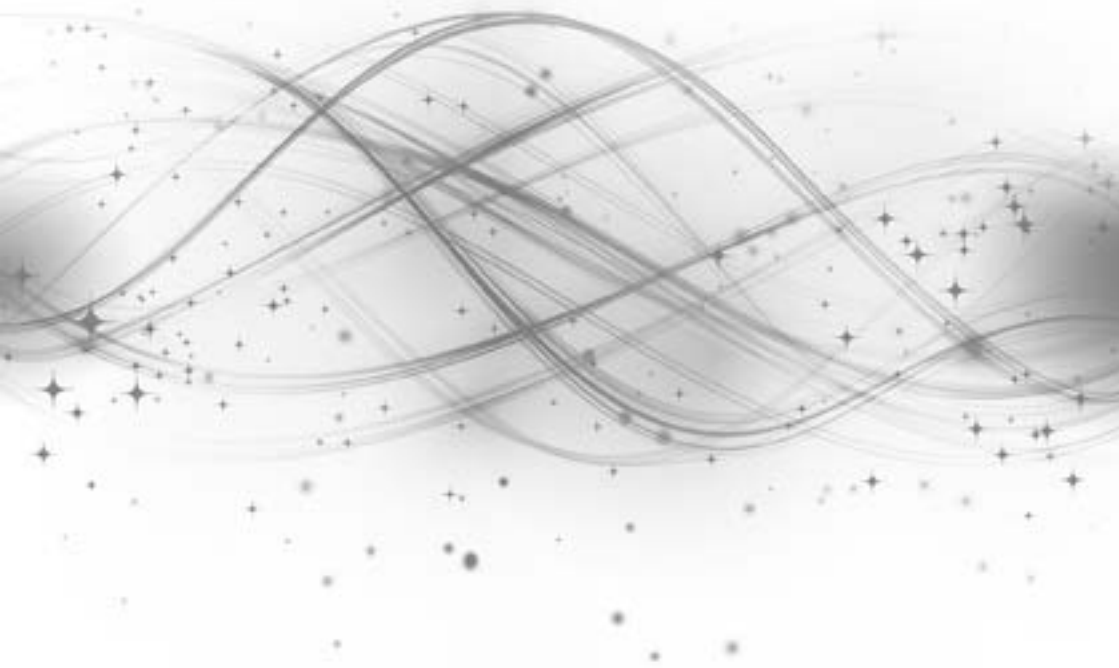
さて、母校ではいま高中約70人の教職員に約1400人の生徒を擁している。そして、時代的波乱と山積する課題をかかえて難航中である。皆必死である。今日では繁栄とは何か、それは幸か不幸かとさえ考えねばならぬ時代でもあるから、私学としての経営も教育もそれだけ苦悶が激しい。学校も時代とともに幾変遷し、往年の少数英才教育は、いま決して英才というわけではないが中高大一貫人間教育校とその姿をかえた。

そして皆明大を卒えて社会に活躍している。優れた大先輩を多数持っている後輩諸君が常にその指導啓発をうける機会は同窓会においてである。涵養海の如し、とは私の好む座右の銘で陋屋にもその額を掲げている。私は、学校とは万物を涵養する海の如きものでありたいと願っている。学校も同窓会も人間を生々化々する温かいベッドであり、そのベッドを活字化したものがこの同窓会報であろう。諸氏があらゆる懐旧奮発の情報を寄せあって、会報中心にくだけた親和連帯と啓発発展とをして欲しいと思う。なくもがな情報が多い今日、諸氏の少年時代にちなむ情報はそこはかとなく楽しいもの。創刊にあたって懐想的で再生産的な情報で本誌が充たされるよう哀心から期待する次第である。人生には何か拠というものが必要である。宗教に非ず、思想に非ず、たとえ地縁血縁を失うともさらに一つの因縁がここにある。同窓の因縁こそ人間としての生きる力を養うものでありたい。人間の生き方の根源には同窓紐帯に基づいたお互いの育て合いの考えが必要である。創刊号と聞いたせい未だ湯気の立っている若い卒業生に寄せるような堅いものになってしまった。お宥しを乞う。

おわりに、すべて小規模にはじめたものは成功し易い。なお本紙の発刊に踏みきられ、力を会の発展に寄与せられつつある推進者諸氏に教職員一同を代表して敬意を表する。

昭和50年 第1号総明会会報より

第6章 資料編



総明会略年表

●は総明会の行事 ○は学校の行事

年 代	行 事
1924年 (大正13年)	●この年同総会設立の議おこり会則を定める 会則抜粋 ・同総会を学友会(普通会員在校生・特別会員同総生)の一部門とする ・会長=校長(鵜澤總明先生) 副会長=教頭(大橋留治先生)とする ・総会を毎年1回開催する
1926年 (大正15年)	●第1回総会開催(1月5日 於: 母校講堂)
1928年 (昭和3年)	●第2回総会開催(1月5日 於: 母校講堂) 大正天皇崩御による諒闇のため、昭和2年の開催を1年延期 以後1964年(昭和39年)まで活動停止
1964年 (昭和39年)	●明治中学校・高等学校同窓会設立発起人会発足(11月21日 於: 母校会議室) ●旧制明治中学校卒業の有志を中心とした諸先輩の努力により、この日同窓会設立発起人会が新発足
1965年 (昭和40年)	●発起人会において同窓会設立準備委員指名(2月27日 於: 母校会議室) ●設立総会その他について議す ●同窓会設立委員会発足(3月13日 於: 母校会議室) ●同委員会開催(4月17日 於: 母校会議室) ●組織・役割分担を議す ●同委員会開催(5月15日 於: 母校会議室) ●総会運営・役員選任などにつき議す ●同窓会再建 第1回総会開催(6月5日 於: 明治大学記念館) ●会則を決定し、会長・役員選任する 初代会長/笹村越朗氏(大正9年卒・汽車製造㈱社長) 副会長/片岡龍夫氏(大正10年卒・共同印刷㈱常務取締役) 副会長/嶺 駒夫氏(大正12年卒・昭和製袋工業㈱社長) ○母校校長は島田正郎(昭和8年卒・明治大学法学部長より転任)
1966年 (昭和41年)	●第2回～10回の総会は日本工業倶楽部に於いて概ね6月に開催 ●同窓会員名簿発行(6月5日) ●総会担当は昭和22年卒が中心となる
1970年 (昭和45年)	●同窓会員名簿発行(2月1日)
1974年 (昭和49年)	●第10回総会(6月15日 於: 日本工業倶楽部開催 総会担当昭和22年卒) ●第2代目会長 片岡龍夫氏(大正10年卒)就任 ○明治高校 四号館完成、二号館上棟
1975年 (昭和50年)	●第11回総会開催(5月17日 於: 母校体育館 総会担当同窓会本部) ●会報創刊(4月20日)

1976年 (昭和51年)	●第12回総会開催(6月12日 於：母校体育館 総会担当 昭和26年卒)
1977年 (昭和52年)	●第13回総会開催(6月11日 於：母校体育館 総会担当 昭和26年卒) ●会則を改正する(弁護士 君塚美明氏(昭和28年卒)による) ●会費納入方法改正(学年会費制度導入)
1978年 (昭和53年)	●第14回総会開催(6月17日 於：ホテルニューオータニ 総会担当 昭和26年卒) ●会名を「明治高等学校同窓会」と改称する
1979年 (昭和54年)	●第15回総会開催(7月7日 於：母校視聴覚教室(懇親会 母校体育館) 幹事学年 昭和17年卒 一七会) ●総会運営・会報発行を卒業年次順に担当する幹事学年制が実施
1980年 (昭和55年)	●第16回総会開催(7月12日 於：池之端文化センター 幹事学年 昭和28年卒 明窓会) ●第3代目会長に栗原勝一氏(大正11年卒)就任 ●第1回チャリティゴルフ開催(10月22日)
1981年 (昭和56年)	●第17回総会開催(5月15日 於：私学会館 幹事学年 昭和31年卒 明楽会) ●同窓会員名簿発行
1982年 (昭和57年)	●第18回総会開催(5月22日 於：母校体育館 幹事学年 昭和30年卒) ●同窓会協力団体としてクラブOB会発足(会長卯木敏夫氏(昭和26年卒) ●第4代目会長に坂本朝一氏(昭和9年卒)就任 ●母校創立70周年協賛 ●第1回クラブOB会ゴルフ大会開催 ◎明治高校 創立70周年記念式典挙行
1983年 (昭和58年)	●第19回総会開催(6月4日 於：銀座三越 幹事学年 昭和29年卒 二九会)
1984年 (昭和59年)	●第20回総会開催(10月13日 於：赤坂プリンスホテル 幹事学年 昭和32年卒 明治会) ●会の名称を「総明会」と改称
1985年 (昭和60年)	●第21回総会開催(10月5日 於：東京プリンスホテル 幹事学年 昭和36年卒 明駿会) ●総明会「会旗」完成
1986年 (昭和61年)	●第22回総会開催(11月8日 於：ホテルニューオータニ 幹事学年 昭和33年卒 三三会)
1987年 (昭和62年)	●第23回総会開催(11月21日 於：明大100周年記念大学会館 幹事学年 昭和34年卒 旧雨会) ●同窓会員名簿発行
1988年 (昭和63年)	●第24回総会開催(11月26日 於：九段会館 幹事学年 昭和35年卒 珊瑚の会) ●会則を改正
1989年 (平成元年)	●第25回総会開催(11月17日 於：ホテル国際観光 幹事学年 昭和37年卒 37会)

1990年 (平成2年)	●第26回総会開催(11月16日 於：明治記念館 幹事学年 昭和38年卒 二年に一会)
1991年 (平成3年)	●第27回総会開催(11月22日 於：上野精養軒 幹事学年 昭和39年卒 三九会)
1992年 (平成4年)	●第28回総会開催(11月7日 於：椿山荘 幹事学年 昭和40年卒 明優会) ●第5代目会長に向殿政男氏(昭和36年卒)就任 ◎明治高校 創立80周年記念式典挙行
1993年 (平成5年)	●第29回総会開催(11月6日 於：東京會館 幹事学年 昭和41年卒 41明友会) ●同窓会員名簿発行(7月1日) ●「M・総明ホットライン」が在校生向けに創刊号(第11号まで発行)(12月24日)
1994年 (平成6年)	●第30回総会開催(11月5日 於：ホテルニューオータニ 幹事学年 昭和42年卒 M41)
1995年 (平成7年)	●第31回総会開催(11月18日 於：椿山荘 幹事学年 昭和43年卒 紫讃会) ●第1回総明会ゴルフ大会開催(1月24日) ●母校高校卒業式に於いて第1回総明会賞表彰が実施
1996年 (平成8年)	●第32回総会開催(11月17日 於：母校視聴覚教室(懇親会 母校体育館) 幹事学年 昭和44年卒 男坂倶楽部)
1997年 (平成9年)	●第33回総会開催(10月18日 於：東京プリンスホテル 幹事学年 昭和45年卒 獅子の会)
1998年 (平成10年)	●第34回総会開催(11月14日 於：ホテルオークラ 幹事学年 昭和46年卒 明潮会) ●同窓会員名簿発行(9月28日) ●活動組織を「部」から「委員会制」へ変更
1999年 (平成11年)	●第35回総会開催(11月20日 於：帝国ホテル 幹事学年 昭和47年卒 四七四七同志酔会) ●会費納入方法改正する学年会費制を廃止し、終身会費制(卒業時に徴収)を導入 ●「特別基金」を設立
2000年 (平成12年)	●第36回総会開催(11月2日 於：東京マリオネットホテル錦糸町東武 幹事学年 昭和48年卒 波の会) ●現在の「明朗会」が「総明会シニアクラブ」として第1回 開催
2001年 (平成13年)	●第37回総会開催(10月13日 於：東京ドームホテル 幹事学年 昭和49年卒 翼明会) ●同窓会員名簿発行(平成11、12、13年卒卒業生追加版) ◎明治高校 明治大学評議員会にて調布移転決定
2002年 (平成14年)	●第38回総会開催(11月16日 於：浦安ブライhtonホテル 幹事学年 昭和50年卒 明紫会) ◎明治高校 創立90周年記念式典挙行
2003年 (平成15年)	●第39回総会開催(11月15日 於：浅草ビューホテル 幹事学年 昭和51年卒 明々会) ●第6代目会長に佐久間洋一氏(昭和43年卒)就任

2004年 (平成16年)	<ul style="list-style-type: none"> ●第40回総会開催(11月20日 於：アルカディア市ヶ谷 幹事学年 昭和52年卒 男子校根性組) ◎明治高校 男女共学化決定
2005年 (平成17年)	<ul style="list-style-type: none"> ●第41回総会開催(11月20日 於：ホテルバシフィック東京 幹事学年 昭和53年卒 紫友会)
2006年 (平成18年)	<ul style="list-style-type: none"> ●第42回総会開催(12月3日 於：セルリアンタワー東急ホテル 幹事学年 昭和54年卒 明誠会) ●会則を改正
2007年 (平成19年)	<ul style="list-style-type: none"> ●第43回総会開催(11月17日 於：母校視聴覚教室(懇親会 明治大学アカデミーコモン) 幹事学年 昭和55年卒 紫魂会)
2008年 (平成20年)	<ul style="list-style-type: none"> ●第44回総会開催(11月15日 於：調布新校舎 幹事学年 昭和56年卒 明翔会) ◎明治高校 猿楽町から調布に移転 男女共学化
2009年 (平成21年)	<ul style="list-style-type: none"> ●第45回総会開催(11月29日 於：ANAインターコンチネンタルホテル 幹事学年 昭和57年卒 明魂会) ●第7代目会長 尾島育四郎氏(昭和41年卒)就任
2010年 (平成22年)	<ul style="list-style-type: none"> ●第46回総会開催(11月20日 於：ホテルイースト21 幹事学年 昭和58年卒 明輪会)
2011年 (平成23年)	<ul style="list-style-type: none"> ●第47回総会開催(11月19日 於：ホテルイースト21 幹事学年 昭和59年卒 明心会) ●母校創立100周年を記念して「鶴澤総明奨学金」に3千万円寄付 ●初めてのOG会員(64名)入会 ●班・クラブOB会旗の管理が総明会事務局へ移管
2012年 (平成24年)	<ul style="list-style-type: none"> ●第48回総会開催(11月25日 於：ハイアットリージェンシー東京 幹事学年 昭和60年卒 闕魂会) ●総明会主催「母校創立100周年祝賀会」開催(於：明治大学アカデミーコモン) ●母校創立100周年を記事にした会報号外発行 ◎明治高校 創立100周年記念式典挙行
2013年 (平成25年)	<ul style="list-style-type: none"> ●第49回総会開催(11月10日 於：ハイアットリージェンシー東京 幹事学年 昭和61年卒 新世輝)
2014年 (平成26年)	<ul style="list-style-type: none"> ●第50回総会開催(11月16日 於：ハイアットリージェンシー東京 幹事学年 昭和62年卒 明猿会) ●会報ネーミング「紫紺^{しこん}の詩^{うた}」に決定 ●総明会小会旗完成 ●50周年記念式典開催

明治中学校同窓会規則

昭和14年(1939年)12月21日発行
学友会誌第9号(同窓会に就いて所収)

- 第一條 本會ハ會員相互ノ懇親ヲ圖リ其奮交を溫メ且ツ母校トノ連絡ヲ保ツヲ以テ目的トス
- 第二條 本會ハ明治中學校學友會ノ一部トス
- 第三條 本會會員ヲ分チテ下ノ三種トス
- 一、 特別會員 明治中學校職員及職員タリシ者ニシテ在職滿五年以上タリシ者
 - 二、 普通會員 明治中學校ヲ卒業シタル者
但明治中學校第四學年ヲ修業シ高等專門學校ニ入學ノ爲メ退學シタル者ハ卒業者ニ准ス
 - 三、 名譽會員 明治中學校ニ功勞アリタル者ニシテ役員會ノ推薦ニ係ル者
右第一項及第二項ニ該當セザル者ニシテ特ニ役員會ノ推薦ニ係リ學友會基本金ニ金貳圓以上ヲ寄付シタル者ハ本會員タルコトヲ得
- 第四條 明治中學校ノ卒業者及准卒業者ハ當然本會員タルモノトス
- 第五條 本會ニ下ノ役員ヲ設ク
- 一、 會長 一名 母校校長ヲ推ス
 - 二、 副會長 一名 母校教頭ヲ推ス
 - 三、 幹事 母校現職員二名、各回卒業者二名宛、前任幹事ノ指名ニシテ任期ヲ一箇年トス、但重任ヲ妨ケズ
 - 四、 必要ニヨリ地方委員ヲ設クルコトアルベシ
- 第六條 本會員ヨリノ通信其他ノ記事ハ明治中學校學友會誌ニ掲載ス
- 第七條 本會ヨリ會員一般ニ對スル通知ハ特別ノ場合ヲ除キ會員名簿ニ記載シテ之ヲ爲ス
- 第八條 本會員ニシテ學友會基本金中ニ金五圓以上ヲ寄付シタル者ニハ毎年學友會誌ヲ配布ス
- 第九條 本會ハ毎年十二月會員名簿ヲ編纂シ一般會員ニ配布スルモノトス
- 第十條 本會ハ毎年一月總會ヲ開ク
但必要ニ依リテハ其時期ヲ變更スルコトアルベク或ハ臨時總會ヲ開クコトアルベシ
- 第十一條 毎年開カルベキ總會ノ會費ハ其出席會員ヨリ徴取ス
- 第十二條 本會員ハ學校、勤務先又ハ住所等ニ變更アリタルトキハ其都度本會事務所ニ通知スルモノトス
- 第十三條 本會ノ事務所ハ母校内ニ置ク
- 第十四條 本會ノ規則ニ變更ノ必要アルトキハ役員會ニ謀リ會長之ヲ決定ス
- 第十五條 本會員ニシテ本會ノ體面ヲ汚ス行爲アルトキハ役員ハ本會ヲ代表シテ凝議ノ上退會セシムルコトアルベシ
- 第十六條 本會員ガ母校ノ爲メ建議又ハ意見ヲ發表セントスルトキハ必ず本會員役員ヲ經テ之ヲ爲スヲ要ス

明治大学付属明治中学・高校同窓会会則

昭和40年(1965年)施行(1970年発行名簿所収)

この会則は、1965年(昭和40年)6月5日の第1回総会において決定された。

会則の名称は「明治大学付属明治中学・高校同窓会会則」である。まだ「総明会」の名称は使用されていない。

今回本書に収録した会則は、1966年(昭和41年)6月5日発行の同窓会名簿と1970年(昭和45年)9月15日発行の同窓会名簿に所収されていた会則を底本とした。

第1条 本会は会員相互の親睦を深め母校の発展を図ることを目的とする。

第2条 本会は明治大学付属明治中学・高校同窓会と称する。

第3条 本会は事務所を明治高等学校内に置く。

第4条 本会は第1条の目的を達成するため下の事業を行なう。

1 懇親会の開催

2 会員名簿の発行

3 機関誌の発行

4 その他の必要な事業

第5条 本会の会員は下のとおりとする。

普通会員 明治中学校(旧制および新制)明治高等学校を卒業した者、ただし旧制明治中学校第四学年を終了し高等専門学校に入学のため退学した者は卒業者に準ずるものとする。

特別会員 明治中学校(旧制および新制)明治高等学校の教職員もしくはこれに準ずる者またはその経歴者で3年以上在職し役員会が推薦した者。

第6条 普通会員は前条に定めた資格取得のとき、また特別会員は役員会の推薦を受けたときに本会に入会したものとする。

第7条 本会に下の役員を置き、また必要に応じ職員を置くことができる。

1 会 長 1 名

2 副会長 2 名

3 理 事 若干名

4 委 員 若干名

5 監 事 2 名

第8条 役員の選任方法は下の通りとする。

1 正副会長は理事の互選によって決定する。

2 理事、監事は委員の互選によって決定する。

3 委員は特別会員中より若干名および普通会員中旧制中学または高等学校の卒業者中より年度毎に2名宛を互選により決定する。役員の任期は選任の時から翌々年の総会終了までとする。ただし重任は妨げない。

第9条 役員の職務は下の通りとする。

1 会長は本会を代表し、会務を統括する。

2 副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるときはこれを代理する。

3 理事は会長副会長を補佐し、常務を処理する。

4 監事は本会の会計を監査する。

5 委員は役員会に出席して第4条に定めた事項の実施その他必要な事項を審議し、および会員相互の連絡に当

- たる。
役員会は必要に応じて会長が招集する。
- 第10条 本会に名誉顧問および顧問を置く。
名誉顧問は学校法人明治大学総長、顧問は現職の明治高等学校校長および本会に功労のあった会員を役員会において推薦する。
- 第11条 本会は毎年少くとも一回懇親会を兼ねて開催する。
ただしその時期、場所等については役員会においてこれを決定する。
総会は、会長がこれを招集する。
ただし総会招集の通知は適宜の方法による。
- 第12条 本会の経費は下の収入をもってこれに

当てる。

1 会 費

2 篤志寄付

- 第13条 会費は金1,000円也とし、普通会员より入会の際これを徴収する。
総会および懇親会等の費用はその都度出席者よりこれを徴収する。
- 第14条 会員はその氏名、住所、上級学校、勤務先等に変更のあった場合、その都度本会事務所に通知するものとする。
- 第15条 本会の会計年度は毎年4月2日に始まり翌年3月31日に了る。
- 第16条 この会則の変更は、総会の承認を得なければならない。

明治大学付属明治高等学校同窓会会則 (第1回改正)

昭和52年(1977年)6月11日施行(1987年発行名簿所収)

1977年(昭和52年)6月の第13回総会において会則の改正が承認された(施行日は同年6月11日)。この改正は、三上外喜男氏(昭和17年卒)が会報第2号に寄稿した同窓会への提言がきっかけとなり、弁護士でもある君塚美明氏(昭和28年卒)が主として改正案を作成した。

改正のポイント(旧会則との違い)は以下のとおりである。

- ①会則の名称が「明治大学付属明治高等学校同窓会会則」になる。(第1条)
- ②同窓会の目的に、「会員相互の結束と親睦を図る」だけでなく、「母校の教育を受けた同窓生の知的および精神的連帯のもと」に「母校の伝統と名声を維持し、かつ母校のその教育事業の発展のためにこれを賛助すること」が付け加えられた。(第2条)
- ③同窓会に事業として、同期会の開催の奨励、母校との協力関係の維持促進、母校への賛助活動の推進が付加された。(第3条)
- ④事務局の設置とそれを母校内に置けるようになった。(第4条)
- ⑤卒業生でなくても「かつて母校に学籍を有した者」で「同期会の推せんにより理事会の承認を得」られれば同窓会の会員資格を持つことが、「一日でも在籍すれば同期である」という本校の伝統が、明文化されたこと。(第5条)
- ⑥旧会則で規定された入会金(入会の際に納入する。)の徴収方法と毎年支払う年会費の徴

収を設定する。(第6条、第7条)

- ⑦総会の開催月を確定し、開催手続、議事進行等総会開催に必要な事項を規定した。(第9条、第10条)
- ⑧理事の人数を「30人以上」と明文化するとともに、同窓会内での理事会の位置づけが行われ、開催及び議事運営の方法が規定されている。なお、理事会とは別に常任理事会が設置されている。常任理事会と理事会の棲み分けがどのようになっていたかは不明である。(第11条、第12条)
- ⑨役員から「幹事」、「委員」が無くなり、「専務理事」、「常務理事」、「監事」を設置した。(第13条、第14条)
- ⑩委員会制度の採用。(第16条)
- ⑪代表幹事制の導入。(第17条～第19条)
- ⑫同期会を組織することを明文化する。(第20条)
- ⑬入会金の使い道として基金を設定する。(第22条)
- ⑭「予算」、「決算」の概念の導入。(第23条、第24条)

第1章 総 則

第1条 (名称)

この同窓会は、明治大学付属明治高等学校同窓会と称する。

第2条 (目的)

この同窓会は、母校の教育を受けた同窓生の知的および精神的連帯のもとに、会員相互の結束と親睦を図るとともに、母校の伝統と名声を維持し、かつ母校のその教育事業の発展のためにこれを賛助することを目的とする。

第3条 (事業)

この同窓会は、前条の目的を達成するための事業として、次のことを行う。

- 1 会員名簿を整備し、刊行すること。
- 2 会報などの広報物を発行すること。
- 3 総会にあわせて行う会員大会その他の懇親会を開催すること。
- 4 同期会の開催を奨励すること。
- 5 この同窓会と母校との間における協

力関係を維持し、促進すること。

- 6 母校に対する賛助活動を推進すること。

- 7 その他、この同窓会の目的を達成するために必要なこと。

第4条 (事務局、所在地)

この同窓会の事務を行うために事務局を設ける。事務局は、明治大学付属明治高等学校内に置く。

第2章 会 員

第5条 (会員資格)

この同窓会は、次に掲げる者を会員とする。

- 1 明治大学付属明治高等学校を卒業した者
- 2 旧制の明治中学校を卒業した者およびこの中学校の第4学年の課程を修了して上級の学校に進学した者
- 3 前各号に定める者のほか、かつて母

校に学籍を有した者で同期会の推せんにより理事会の承認を得た者

第6条 (入会金)

会員は、入会金を納入するものとする。
入会費の額およびその徴収の方法は、
理事会が明治大学付属明治高等学校
校長の同意を得て定める。

第7条 (年会費)

会員は、年会費を納入するものとする。
年会費の額およびその納入方法は、総
会で定める。

第8条 (特別会員)

母校の教職員である者およびその職に
あった者を特別会員とする。
特別会員は、この同窓会が行う事業に
参加することができる。

第3章 総 会

第9条 (総会の招集)

総会は、毎年5月に開催する。ただし、
2ヵ月を超えない期間に限り、会日を伸
長することができる。
この総会は、会員の懇親を目的とする
会員大会とあわせて行うものとする。
この総会のほかに必要のあるときは、臨
時に総会を開催することができる。
総会は、会長がこれを招集する。
総会を招集するには、会日より2週間前
に会員に対して通知を発しなければなら
ない。ただし、代表幹事の1人に対し
て発した通知は、その代表幹事の属す
る同期会のすべての会員になされたも
のとみなす。
総会の招集の通知は、この同窓会が発
行する会報その他の広報物または東京
都で発行される日刊新聞に掲載する廣
告をもってこれをすることができる。

第10条 (総会の議事)

総会は、この会則に定める事項および
その他の重要な事項を議決する。
総会の議長は、会長または会長によっ
て指名された者がこれにあたる。
総会の議事は、出席会員の過半数でこ
れを決し、可否同数の時は議長の決す
るところによる。

第4章 役 員

第11条 (役員の種類および数)

この同窓会に理事30人以上および監事
2人を置く。
理事および監事は、総会で会員のうち
からこれを選任する。
理事および監事の任期は、2年とする。
この同窓会を代表する理事および会務
を分掌する理事は、理事会の決議をもっ
てこれを定める。
理事は、委員または代表幹事を兼ねる
ことができる。
監事は、理事または委員もしくは代表
幹事を兼ねることができない。

第12条 (理事会)

この同窓会の会務の執行は、理事会が
これを決する。
理事会は、会長がこれを招集する。
理事会の議長は、会長またはその理事
会で指名した者がこれにあたる。
理事会の議事は、出席理事の過半数で
これを決し、可否同数のときは議長の
決するところによる。
理事は、書面により理事会の決議に加
わることができる。
監事は、理事会に出席し意見を述べる
ことができる。

第13条 (会長、副会長、専務理事、常任理事および常任理事会)

この同窓会に会長1人、副会長2人以上、専務理事1人、および常任理事5人以上を置く。

- 1 会長はこの同窓会を代表し、会務を総理する。
- 2 副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるときは、あらかじめ会長が指名した順位にしたがい会長の職務を代行する。
- 3 専務理事は、常務に属する会務を総括してつかさどり、かつ事務局を総括する。
- 4 常任理事は、常務に属する会務を分担してつかさどる。

この同窓会の常務に属する会務は、前項各号に掲げる理事をもって構成する常任理事会が、これを決する。

常任理事会は、会長がこれを主宰する。常任理事会には、監事を出席させることができる。

第14条 (監事の職務)

監事は、この同窓会の会計及び財産の状況並びに会務の執行を監査する。

監事は、監査の結果を総会に報告する。

第15条 (名誉役員)

この同窓会に名誉会長、名誉顧問および顧問を置くことができる。

名誉会長、名誉顧問および顧問は、この同窓会または母校に特別に功労のあった者のうちから理事会の承認を得て会長がこれを委嘱する。

学校法人明治大学の総長は、その在職中名誉顧問としてこれを推戴する。

明治大学付属明治高等学校の校長は、その在職中顧問としてこれを推戴する。

第5章 委員会

第16条 (委員会の設置)

この同窓会は、第2条の目的の達成および第3条の規定に掲げる事業の遂行のために必要な事項を調査し、研究し、審議し、または実施する機関として委員会を設けることができる。

委員会は委員長1人および委員2人以上をもって構成する。

委員長は理事のうちから理事会の決議により会長がこれを委嘱し、委員は会員のうちから会長の同意を得て委員長がこれを委嘱する。

委員会は、委員長がこれを主宰する。

第6章 代表幹事

第17条 (代表幹事の登録)

この同窓会に、同期会ごとに1人以上5人以内の代表幹事を置く。

代表幹事は、この同窓会に備える代表幹事名簿にこれを登録する。

同期会は、代表幹事となるべき者を同期会の会員のうちから選任して登録の請求をしなければならない。

同期会は、代表幹事を更迭しようとするときは、登録取消の請求をしなければならない。

代表幹事に欠員がある場合に、その属する同期会により代表幹事となるべき者を選任できない事情があるときは、会長は補欠の代表幹事を指名して登録の請求にかえることができる。

第18条 (代表幹事の職務)

代表幹事は、この同窓会の会務の円滑な執行をはかるために、その属する同期会およびその会員に対する会務の具体的な執行として会長が委任する事務をつかさどる。

第19条 (諮問および評議)

会長は、会務の執行に関する事項について代表幹事にこれを諮問することができる。

会長は、前項の諮問のために代表幹事の評議を求めることができる。

代表幹事の評議は、全部の同期会または一部の同期会についてすることができる。

代表幹事の評議の議長は、これに加わる代表幹事のうちから会長が指名した者がこれにあたる。

議長は、評議の経過および結果を会長に報告する。

この評議において表決するときは、同期会ごとに1個の表決権を行使するものとし、代表幹事の意思が統一できないため1個の表決権を行使できないときは、その表決を棄権したものとみなす。

第7章 同期会

第20条 (同期会)

会員は、同期会を組織するものとする。

同期会は、同期会名簿を整備し、この会則の規定に沿う規約その他運営に関する準則を定めるものとする。

同期会は、代表幹事の職務の執行をたすけなければならない。

第8章 会 計

第21条 (会計年度)

この同窓会の会計年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終る。

第22条 (基金)

入会金および総会で基金繰入れを決議した資金は、基金として積み立て、他に流用することができない。

基金は、総会が決議でこれを取り崩す

ことができる。

第23条 (経費)

年会費および寄付金ならびに財産から生じる果実その他の収入は、この同窓会の経費にあてる。

第24条 (予算)

予算は、会長がこれを作成し、総会に提出してその承認を得なければならない。

第25条 (決算)

この同窓会の収入支出の決算は、監事がこれを監査し、会長がその監査報告とともに、これを総会に提出しなければならない。

第9章 補 則

第26条 (特別決議)

会則の改正および解散に関する総会の決議は、出席会員の4分の3以上にあたる多数をもってこれをする。

第27条 (届出)

会員は、氏名、住所及び職業を変更したときは事務局に届け出るものとする。
同期会は、同期会員名簿および役員名簿を事務局に届け出るものとする。

附 則

(施行期日) この会則は、昭和52年6月11日から施行する。

(経過規定) この会則の施行前に役員であった者は、この会則によって選任されたものとみなす。ただし、学年委員であった者は、この会則による代表幹事とみなす。

総明会（明治大学付属明治高等学校同窓会）会則（第2回改正）

昭和63年（1988年）11月27日施行（1993年発行名簿所収）

1988年（昭和63年）11月26日の第24回総会において会則の改正が承認された（施行日は同年11月27日）。改正案は、弁護士でもある谷正之氏（昭和36年卒）が主として作成した。会則の名称は「総明会（明治大学付属明治高等学校同窓会）会則」である。

改正のポイント（旧会則との違い）は以下のとおりである。

- ①名称に「総明会」が登場する。（第1条）
- ②年会費は同期会ごとに納入することが明記され、現在の納入形式がこの頃から始まっていることがわかる。また、旧会則では「入会金」と表現されていた入会費を納入するのは新会員であることが明示されている。旧会則と比べると、入会金、年会費の納入主体（誰が納入するのか）をはっきりと明文化している。（第6条、第7条）
- ③旧会則では明文化されていた総会の開催月を明記しないようにした。初期の頃は毎年5～6月に開催されていた総会もこの頃になると晩秋に開催されるようになり、実情に合わなくなったための改正である。また、臨時総会招集の可能性を鑑み、その項目を追加した。（第9条）
- ④会長・副会長の選任が総会の決議によることが初めて明記される。（第11条）
- ⑤理事の人数が10人以上20人以下に変更される。（第11条）
- ⑥「常任理事」と「常任理事会」が無くなる。（第13条）
- ⑦評議員制の導入。現在の評議員と評議員会の制度が導入される。
- ⑧委員会制から部会制への変更。

第1章 総 則

第1条（名称）

本会は、明治大学付属明治高等学校同窓会であって、総明会と称する。

第2条（目的）

本会は、母校の教育を受けた同窓生の知적および精神的連帯のもとに、会員相互の結束と親睦を図るとともに、母校の伝統と名声を維持し、かつ母校のその教育事業の発展のためにこれを賛助することを目的とする。

第3条（事業）

本会は、前条の目的を達成するための事業として、次の事を行う。

- 1 会員名簿を整備し、刊行すること。
- 2 会報などの広報物を発行すること。
- 3 総会にあわせて行う会員大会その他の懇親会を開催すること。
- 4 同期会の結成を助成し奨励すること。
- 5 本会と母校との間における協力関係を維持し、促進すること。
- 6 母校に対する賛助活動を推進すること。
- 7 その他、本会の目的を達成するために必要なこと。

第4条（事務局、所在地）

本会の事務を行うために事務局を設ける。
事務局は、明治大学付属明治高等学校内に置く。

第2章 会 員

第5条 (会員資格)

本会は、明治大学付属である旧制・新制明治中学校もしくは明治高等学校の卒業生ならびに同校に在籍したことのある者を会員とする。

第6条 (入会費)

新会員は、入会費を納入するものとする。入会費の額およびその徴収の方法は、理事会が明治大学付属明治高等学校校長の同意を得て定める。

第7条 (年会費)

同期会は、本会を運営する費用に充てするための年会費を納入するものとする。年会費の額およびその納入方法は、評議員会で定める。

第8条 (特別会員)

母校の教職員である者およびその職にあった者を特別会員とする。
特別会員は、本会が行う事業に参加することができる。

第3章 総 会

第9条 (総会の招集)

定時総会は毎年1回開催し、臨時総会は必要のあるときに開催する。
定時総会は、会員の懇親を目的とする会員大会とあわせて行うものとする。
総会は、会長がこれを招集する。
総会の招集は、本会が発行する会報に掲載し、もしくはその他の方法で会員に通知して行うものとする。

第10条 (総会の議事)

総会は、この会則に定める事項およびその他の重要な事項のうち理事会もし

くは評議員会が総会において議決することを適当とした事項を議決する。

総会の議長は、会長または会長の指名したものがこれにあたる。

総会の議事は、出席会員の過半数でこれを決し、可否同数の時は議長の決するところによる。

第4章 役 員

第11条 (役員の種類及び数)

本会に理事10人以上20人以内および監事2人を置く。

会長及び副会長は、総会の決議をもってこれを選任する。

会長は、会員のうちから理事および監事を選任する。理事および監事は、選任後最初の評議員会の承認を得るものとする。

専務理事は、理事会の決議をもってこれを選任する。

役員の任期は2年とする。但し、再任は妨げない。

第12条 (理事会)

本会の会務の執行は、理事会がこれを決する。

理事会は会長がこれを招集する。

理事会の議長は、会長又は会長が指名したものがこれにあたる。

理事会の議事は、出席理事の過半数でこれを決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

理事は書面により理事会の決議に加わることができる。

監事は、理事会に出席し意見を述べることができる。

第13条 (会長、副会長、専務理事、理事および理事會)

本會に会長1人、副会長2人以上、専務理事1人、および理事5人以上を置く。

1 会長が本會を代表し、會務を総理、執行する。

2 副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるときは、あらかじめ会長が指名した順位にしたがい会長の職務を代行する。

3 専務理事は、會務を総括してつかさどり、かつ事務局を総括する。

4 理事は、會務を分担してつかさどる。

本會の會務は、前項各号に掲げる理事をもつて構成する理事會が、これを決する。

理事會は、会長がこれを主宰する。

理事會には、監事を出席させることができる。

第14条 (監事の職務)

監事は、本會の會計及び財産の狀況ならびに會務の執行を監査する。

監事は、監査の結果を時總會に報告する。

第15条 (名誉役員)

本會に名誉会長、名誉顧問および顧問を置くことができる。

名誉会長、名誉顧問および顧問は、本會または母校に特別に功勞のあつた者のうちから理事會の承認を得て会長がこれを委嘱する。

學校法人明治大學の総長は、その在職中名誉顧問としてこれを推戴する。

明治大學付属明治高等學校の校長は、その在職中顧問をそれぞれ推戴する。

第5章 部 會

第16条 (部會の設置)

本會は、第2条の目的の達成および第3条の規定に掲げる事業の遂行のために必要な事項を調査し、審議し、または実施する機關として部會を設けることができる。

部會は部會長1人および部員2人以上をもつて構成する。

部會長は理事のうちから理事會の決議により会長がこれを委嘱し、部員は會員のうちから会長の同意を得て部會長がこれを委嘱する。

部會は、部會長がこれを主宰する。

第6章 評議員及び評議員會

第17条 (評議員)

本會に、同期會ごとに2人以内の評議員を置く。同期會は、同期會の會員のうちから評議員を選任して会長に届出るものとする。

同期會が結成されていないか、もしくは同期會において評議員を選任できない事情があるときは、会長は、当該学年のために同学年の會員の中から仮評議員を選任できる。

第18条 (評議員の職務)

評議員及び仮評議員は、評議員會に出席するほか、この同窓會の事務のうちその属する同期會の關係に必要な事務を処理する。

評議員及び仮評議員は、適宜代行者を選任して評議員會への出席、その他の事務処理を代行させることができる。

第19条 (評議員会)

評議員会は、理事会が総会において議決することとした事項を除き、この会則に定める事項およびその他の重要な事項につき議決する。

評議員会の議長は、評議員の中から会長が指名したものがこれにあたる。

評議員会は、会長が適宜これを招集する。

評議員会の議事は、出席評議員、仮評議員の過半数でこれを決し、可否同数のときは会長の決するところによる。議長は、評議の経過および結果を会長に報告する。

第7章 同期会

第20条 (同期会)

会員は、同期会を組織するものとする。

同期会は、同期会名簿を整備し、この会則の規定に沿う規約その他運営に関する準則を定めるものとする。

同期会は、評議員の職務の執行をたすけなければならない。

第8章 会 計

第21条 (会計年度)

本会の会計年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終る。

第22条 (基金)

会費および総会で基金繰入れを決議した資金は、基金として積み立て、他に流用することができない。

基金は、総会が決議でこれを取り崩すことができる。

第23条 (経費)

分担金および寄付金ならびに財産から

生じる果実その他の収入は、この同窓会の経費にあてる。

第24条 (予算)

予算は、会長がこれを作成し、総会に提出してその承認を得なければならない。

第25条 (決算)

本会の収入支出の決算は、監事がこれを監査し、会長がその監査報告とともに、これを総会に提出しなければならない。

第9章 補 則

第26条 (特別決議)

会則の改正および解散に関する総会の決議は、出席会員の4分の3以上にあたる多数をもってこれをする。

第27条 (届出)

会員は、氏名、住所及び職業を変更したときは事務局に届け出るものとする。

同期会は、同期会会員名簿および役員名簿を事務局に届け出るものとする。

附 則

(施行期日) この会則は、昭和63年11月27日から施行する。

(経過規定) この会則の施行前に役員であった者は、この会則によって選任されたものとみなす。但し、会長、副会長、専務理事、常務理事であったものを除き理事は退任したものとみなす。代表幹事であった者は、この会則による評議員とみなす。但し、1つの同期会から2人以上の代表幹事が選任されていた場合には、その者の互選により速やかに評議員となるべき者を定め会長に届け出るものとし、届け出のない場合には会長が指名するものとする。

総明会（明治大学付属明治高等学校同窓会）会則（第3回改正）

平成18年（2006年）12月3日施行（2014年発行会報所収）

2006年（平成18年）12月3日の第42回総会において会則の改正が承認された（施行日は同年12月3日）。改正案は、当時の会長で弁護士でもある佐久間洋一氏（昭和43年卒）が主として作成した。会則の名称は「総明会（明治大学付属明治高等学校同窓会）会則」である。

改正のポイント（旧会則との違い）は以下のとおりである。

- ①目的が「会員相互の結束と親睦を図り、且つ母校のためにこれを賛助すること」だけになり簡素化された。（第2条）
- ②事業から「会員名簿の発行」が無くなり、「会員名簿の整備、管理」のみになる。その理由としては、総明会（以下本会という。）が2005年（平成17年）4月に全面施行された『個人情報保護に関する規則（個人情報保護法）』の対象事業者になることから、個人情報を保護するためと財政面の問題から会員名簿の発行を本会の事業から外すこととした。また、「班部OB会の開催」の助成・奨励を新たに加え、「本会と母校との間における協力関係」の維持・促進を「本会の目的を達成するために必要なこと」に含まれることとして外している。（第3条）
- ③事業遂行にあたっての会計処理の原則を明示している。（第3条）
- ④会員資格を有する者に明治大学八丈高等学校の卒業生ならびに在籍した者を加えた。（第5条）
- ⑤平成10年度卒業生より終身会費を納入して頂くことになったので、終身会費を明文化するとともに旧会則では「入会費」としていたものを入会金とした。（第6条）
- ⑥副会長の定員を3人以内に変更し、新たに事務局長、会計の定員を設定する。また、常務理事を若干名置くことを明示する。（第8条）旧会則では表記されていなかった常務理事、事務局長、会計の職務を明記している。（第11条）
- ⑦これまで「総会の決議をもって」選任することしか定めていなかった会長及び副会長の選出方法を、巻末の「会長及び副会長選出規定」を含めて詳細に規定している。（第9条）
- ⑧部会制から委員会制への変更。（第17条）
- ⑨名誉役員に相談役を追加した。（第13条）

旧会則と比較すると、記述が詳細になっていることがよくわかる。

第1章 総 則

（名称）

第1条 本会は、総明会と称する。

（目的）

第2条 本会は、会員相互の結束と親睦を図り、
且つ母校のためにこれを賛助すること
を目的とする。

（事業及び会計処理）

第3条 本会は、前条の目的を達成するため次

の事業を行う。

- 1 母校に対する賛助活動を推進すること。
- 2 会員名簿を整備、管理すること。
- 3 会報などの広報物を発行すること。
- 4 同期会の結成を助成し、奨励すること。
- 5 班部OB会の開催を助成し、奨励すること。

- 6 その他、本会の目的を達成するために必要なこと。

- ② 前項に定める事業はすべて一般会計として処理する。ただし、会長は、理事会の議決と評議員会の承認を得て、前項1号ないし6号に定める一部もしくは全部を特別会計として処理することができる。

(事務局、所在地)

第4条 本会の事務を行うために事務局を設ける。

- ② 事務局は、明治大学付属明治高等学校内に置く。

第2章 会 員

(会員資格)

第5条 本会は、旧制、新制明治中学校、明治大学八丈高等学校もしくは明治高等学校の卒業生ならびに同校に在籍したことのあるものを会員とする。

(入会金及び終身会費)

第6条 会員は、入会の時に入会金及び終身会費を本会に納入するものとする。入会費及び終身会費の額ならびにその徴収の方法は、理事会が明治大学付属明治高等学校校長（以下「校長」という）の同意を得て定める。

(特別会員)

第7条 母校の教職員であるもの及びその職にあったものを特別会員とする。

- ② 特別会員は、本会が行う事業に参加することができる。

第3章 役 員

(役員の種類及び定員)

第8条 本会に理事10人以上20人以内及び監事2人を置く。

- ② 本会に会長1人、副会長3人以内、専務

理事1人、事務局長1人、会計1人を置く。

- ③ 必要であれば、本会に常務理事を若干名置くことができる。

(役員の選任)

第9条 会長及び副会長の選任は、別に定める「会長及び副会長選出規定」に基づいて選定し、理事会及び評議員会の承認を受け、総会の決議をもってこれを選任する。会長及び副会長はその就任と同時に理事となる。但し、任期中途で会長及び副会長を補充すべき場合は、「会長及び副会長選出規定」に準じて選定し、理事会及び評議員会の承認を得て選任することができる。この場合は選任直後の総会において承認を得るものとする。

- ② 会長及び副会長以外の理事並びに監事（以下「会長選任役員」という）は、会員の中から、会長が選任する。会長選任役員は、選任後最初の評議員会の承認が得られなかったときは、選任されなかったものとみなす。これにより会長選任役員に欠員が生じたときは、会長は欠員のないように直ちに役員を選任しなければならない。

- ③ 専務理事、常務理事及び事務局長並びに会計は、副会長の同意を得て、会長が理事の中から選任する。

- ④ 役員の任期は2年とする。ただし、再任を妨げない。

- ⑤ 会長は、副会長の同意を得て、いつでも会長選任役員を解任することができる。これにより会長選任役員に欠員が生じたときは、会長は欠員の無いように直ちに役員を選任しなければならない。

- ⑥ 理事は評議員を兼務できない。

(理事会)

第10条 本会の会務の執行は、理事会がこれを決する。

- ② 理事会は理事をもって構成する。
- ③ 理事会は会長がこれを招集する。
- ④ 理事会の議長は、会長又は会長が指名したものがこれにあたる。
- ⑤ 理事会の議事は、出席理事の過半数でこれを決し、可否同数のときは議長の決するところによる。
- ⑥ 理事は書面により理事会の決議に加わることができる。
- ⑦ 監事は、理事会に出席し意見を述べることができる。

(会長等の職務)

第11条 会長は本会を代表し、会務を総理、執行する。

- ② 副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるときは、あらかじめ会長が指名した順位にしたがい会長の職務を代行する。
- ③ 専務理事は、会長の指揮のもとに会務を総括してつかさどり、かつ事務局を総括する。
- ④ 常務理事は、専務理事を補佐する。
- ⑤ 事務局長は、専務理事の指揮のもとに事務局を統括する。
- ⑥ 会計は、本会の会計及び財産の状況並びに会務の執行を行う。
- ⑦ 理事は、会務を分担する。

(監事の職務)

第12条 監事は、本会の会計及び財産の状況並びに会務の執行を監査する。

- ② 監事は、監査の結果を定時総会に報告する。

(名誉役員)

第13条 本会に名誉会長、名誉顧問及び顧問、相談役を置くことができる。

- ② 名誉会長、名誉顧問及び顧問、相談役は、本会又は母校に永年にわたり特別

に功労のあったものの内から理事会が推薦し、評議員会の承認を得て会長がこれを委嘱する。

- ③ 学校法人明治大学の総長、学長は、その在任中、名誉顧問としてこれを推戴する。
- ④ 明治大学付属明治高等学校の校長は、その在任中、顧問をそれぞれ推戴する。
- ⑤ 相談役は、会務に永年にわたり功労のあった者の内から理事会が推薦し、評議員会の承認を得て会長がこれを委嘱する。

第4章 総会及び懇親会

(総会の招集)

第14条 定時総会は毎年1回開催し、臨時総会はある必要のあるときに開催する。

- ② 総会は、会長がこれを招集する。
- ③ 総会の招集は、本会が発行する会報に掲載し、もしくはその他の方法で会員に通知して行う。

(総会の議事)

第15条 総会は、この会則に定める事項及びその他の重要な事項のうち理事会が提案し、評議員会が必要と認めた事項を総会における審議事項として決議する。

- ② 総会の議長は、会長又は会長の指名したものがこれにあたる。
- ③ 総会の議事は、出席会員の過半数でこれを決し、可否同数の時は議長の決するところによる。

(懇親会の開催)

第16条 懇親会は、会員の懇親を目的として毎年1回開催する。

- ② 懇親会の開催に関する事項は、理事会が決定し、評議員会の承認を得て、会長が会員に通知する。この通知は、総会の召集通知に準じて行う。

第5章 委員会

(委員会の設置)

第17条 本会は、第2条の目的の達成及び第3条の規定に掲げる事業の遂行のために必要な事項を調査、研究、審議し、または実施する機関として委員会を設けることができる。

- ② 委員会は、会則に定めるほか理事会の決議により設置する。
- ③ 委員会は、委員長1人及び委員2人以上をもって構成する。
- ④ 委員長は、理事会の承認を得て会長がこれを委嘱し、委員は、会員及び特別会員の中から会長の同意を得て委員長がこれを委嘱する。
- ⑤ 委員会は、委員長がこれを主宰する。
- ⑥ 委員長は、その就任と同時に理事となる。

第6章 評議員及び評議員会

(評議員)

第18条 本会に、卒業学年毎に2人以内の評議員を置く。同期会は、同期会の会員のうちから評議員を選任して本会に届けるものとする。また、総明会に登録した班部OB会毎に1人の評議員を置くことができる。評議員を選任した場合は、本会に届けるものとする。

- ② 同期会が結成されていないか、もしくは同期会において評議員を選任できない事情があるときは、会長は、当該学年のために同学年の中から仮評議員を選任できる。
- ③ 総明会に登録すべき班部OB会が結成されていないか、もしくは班部OB会に評議員を選任できない事情がある場合は、評議員を置くことができない。
- ④ 同期会の評議員と班部OB会の評議員

は兼任できない。

(評議員の職務)

第19条 評議員及び仮評議員は、評議員会に出席するほか、本会の事務のうちその属する学年もしくは同期会及び班部OB会の関係で必要な事務を処理する。

- ② 評議員及び仮評議員は、適宜代行者を選任して評議員会への出席、その他の事務処理を代行させることができる。(評議員会)

第20条 評議員会は、この会則に定める事項及びその他の重要な事項につき議決する。

- ② 評議員会は、会長が適宜これを招集する。
- ③ 評議員会の議長は、会長もしくは評議員の中から会長が指名したものがあたり、その進行は事務局長が行う。
- ④ 評議員会の議事は、出席評議員、仮評議員の過半数でこれを決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

第7章 同期会

(同期会)

第21条 会員は、学年ごとに同期会を組織するものとする。

- ② 同期会は、同期会名簿を整備し、運営に関する準則を定めるものとする。
- ③ 同期会は、その選任した評議員の職務の執行を助けなければならない。
- ④ 同期会は、同期会の総会を開催したときは、本会に報告するものとする。

第8章 班部OB会

(班部OB会)

第22条 会員は、在学中在籍した班部ごとに班部OB会を組織することができる。

- ② 班部OB会は、OB会名簿を整備し、運営に関する準則を定めるものとする。

- ③ 班部OB会は、その選任した評議員の職務の執行を助けなければならない。
- ④ 班部OB会は、OB会の総会を開催したときは、本会に報告するものとする。

第9章 会 計

(会計の分類と会計年度)

第23条 本会の会計処理は、一般会計と特別会計に区分して行い、特別会計はこの会則に定めのある場合の他、理事会において特に定めた会計に関する会計処理、一般会計は特別会計を除いたすべての会計処理とする。

- ② 本会の会計年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

(基金)

第24条 理事会は、本会の財政基盤を安定させ、また第3条に定める事業の遂行資金を形成するため基金を積立てる努力をしなければならない。

- ② 基金は、特別会計（以下「基金特別会計」という）で処理する。
- ③ 入会費、寄付金のうち理事会で基金に組入れることを決議したもの、並びに基金へ組入れることを目的とする寄付金（以下「特別基金」という）は、基金として基金特別会計に計上し、この会則に定めのある場合を除き支弁することはできない。
- ④ 基金は、財政基盤基金と事業遂行基金をもって構成する。
- ⑤ 基金への組入金は、財政基盤基金の総額に満つるまで優先してこれに充当する。
- ⑥ 財政基盤基金の総額は、総会の決議により決定もしくは変更する。この場合、第26条の定め（特別決議）を準用する。

- ⑦ 財政基盤基金は、原則として取崩すことができない。ただし、総会において承認を得た場合はこの限りではない。この場合、第28条の定め（特別決議）を準用する。

- ⑧ 基金のうち、財政基盤基金の総額を超える額を事業遂行基金とする。

- ⑨ 事業遂行基金は、第3条1項1号に定める事業もしくは理事会で決議した事業に支弁するため、理事会及び評議員会の決議によりこれを取崩し、当該事業のために支弁することができる。

- ⑩ 会長は、緊急に対処を要すると認めた事項（以下「緊急処理事項」という）のために、副会長の同意を得て、事業遂行基金を取崩し緊急処理事項に支弁することができる。この場合、会長は、緊急処理事項が生じた後、最初に開催される総会において、当該事項の緊急性及び事業遂行基金取崩しの必要性を説明し、取崩しについて承認を得なければならない。

- ⑪ 事業遂行基金を支弁して行う事業を検討するため、本会に基金事業委員会を設置する。第17条4項の定めにかかわらず、この委員会は委員長1人と委員8人をもって構成し委員は理事の中から委員長が選任する。

(経費)

第25条 本会の経費は、入会費（ただし基金組入れ分を除く）、終身会費及び寄付金（ただし基金組入れ分を除く）並びに一般会計に属する財産から生じる果実その他特別会計に属さない収入をもって支弁する。

(予算)

第26条 会長は、会計年度の終了する前に、理事会の承認を得て翌会計年度の予算を作

成する。翌会計年度の予算は、評議員会の承認を得て、総会に提出してその承認を得なければならない。

- ② 前項により、会長は、その会計年度の最後に開催される評議員会に翌会計年度の予算を提出し、その承認を得た場合は、翌会計年度の初めから総会開催の日までの間、その予算を執行できるものとする。(決算)

第27条 本会の収入支出の決算は、監事がこれを監査し、会長がこれを総会に提出して報告しなければならない。

- ② 基金特別会計の決算報告においては、財政基盤基金と事業遂行基金を区別し、それぞれの収支の概要及び決算時の在り高のほか、特別基金の累計額を報告するものとする。

第10章 補 則

(特別決議)

第28条 本会の会則の改正は、総会における出席会員の4分の3以上の多数による決議によらなければならない。

(届出)

第29条 会員は、氏名、住所及び職業を変更したときは本会に届け出るものとする。

- ② 同期会は、同期会員名簿及び役員名簿を本会事務局に届け出るものとする。
③ 班部OB会は、OB会名簿及び役員名簿を本会事務局に届け出るものとする。

附 則

(経過措置 1)

第1条 (年会費同期会)

前回の会則の改正が施行された平成11年1月1日以前に会員となった者が構成される同期会(以下「年会費同期会」という)が納入する年会費については、

次に会則改正のあるまで改正前の第7条の定めによるものとする。

第2条 (年会費)

同期会の納入する年会費は、第25条の定める経費に支弁する。

(経過措置2)

第1条 (年会費班部OB会)

班部OB会は、本会を運営する費用に充てるための年会費を納入するものとする。年会費の額及びその納入方法は、評議員会で定める。

第2条 (年会費)

班部OB会の納入する年会費は、第25条の定める経費に支弁する。

(施行期日)

この会則の改正は、平成18年12月3日より施行する。

(参考)

改正前第7条 (年会費)

同期会は、本会を運営する費用に充てるための年会費を納入するものとする。年会費の額及びその納入方法は、評議員会で定める。総明会 会長及び副会長選出規定会則第9条1項に基づき、会長及び副会長の選出は本規程により行う。

(選出委員会の設置、解散、委員の選出)

第1条 会長及び副会長の選出を行う場合は「選出委員会」(以下委員会という)を設置する。

- ② 委員会は役員改選又は補充の時期に合わせて、十分な期間を考慮し、理事会が設置する。
③ 委員会の構成は、委員長1人、委員6人とする。委員の選出は理事会及び評議員会で各々3人とする。委員長は会長が指名したものがこれにあたる。
④ 委員会の解散は、総会において会長及

び副会長が選出された時点とする。

(会長、副会長の選出、承認について)

第2条 委員会は、会長及び副会長の選出にあたり、推薦及び立候補を受け、その者をもって候補者とする。

- ② 候補者の中より、会長及び副会長候補者を選出する。選出においては全員一致を原則とするが、定員に絞り込めない場合は、その状態で選出終了とする。
- ③ 理事会は、委員会より選出された候補者の承認を行う。
- ④ 評議員会は、理事会で承認された候補者の承認を行う。
- ⑤ 評議員会において承認された会長、副会長は、総会の決議をもって、これを選任する。

(理事会の承認)

第3条 委員会より選出された会長候補者が1名の場合、理事会において過半数の信任をもって承認されたものとする。

- ② 委員会より選出された会長候補者が2名以上の場合、理事会において投票を行い、最も得票数の多い候補者を会長候補者として承認する。
- ③ 委員会より選出された副会長候補者が3名の場合、理事会において過半数の信任をもって承認されたものとする。
- ④ 委員会より選出された副会長候補者が4名以上の場合、理事会において投票を行い、得票数の多い順に3名を副会長候補者として承認する。

(評議員会の承認)

第4条 理事会より選出された会長及び副会長候補者は、評議員会において過半数の信任をもって承認されたものとする。

(会長、副会長の資格)

第5条 会長及び副会長は、総明会会員として20年以上在籍し、かつ評議員又は理事

を経験していることを資格とする。

この規定は、平成18年12月3日より施行するものとする。

総明会（明治大学付属明治高等学校同窓会）会則（第4回改正）

平成26年（2014年）11月16日施行

今回の改正は、会長及び副会長選出規定（以下本規定という。）の見直しである。

会長及び副会長選出委員会から指摘を受け、副会長の関谷芳久氏（昭和44年卒）を委員長とした選挙規定検討委員会で1年近くの時間をかけて検討した結果、会長及び副会長選出委員会の指摘に答えきれていない（今後の検討課題として残る。）ことを認めながら、「会長、副会長の資格」として「立候補届出締め切り時の年齢が70歳未満であること」を追加した（詳細は、平成26年度第50回総明会総会議事録を参照のこと。）。

会則の名称は「総明会（明治大学付属明治高等学校同窓会）会則」である。2014年（平成26年）11月16日の第50回総会において改正が承認された（施行日は同年11月16日）。

第1章 総則

（名称）

第1条 本会は、総明会と称する。

（目的）

第2条 本会は、会員相互の結束と親睦を図り、且つ母校のためにこれを賛助することを目的とする。

（事業及び会計処理）

第3条 本会は、前条の目的を達成するため次の事業を行う。

- 1 母校に対する賛助活動を推進すること。
- 2 会員名簿を整備、管理すること。
- 3 会報などの広報物を発行すること。
- 4 同期会の結成を助成し、奨励すること。
- 5 班部OB会の開催を助成し、奨励すること。
- 6 その他、本会の目的を達成するために必要なこと。

- ② 前項に定める事業はすべて一般会計として処理する。ただし、会長は、理事会の議決と評議員会の承認を得て、前項1号ないし6号に定める一部もしくは全部を

特別会計として処理することができる。

（事務局、所在地）

第4条 本会の事務を行うために事務局を設ける。

- ② 事務局は、明治大学付属明治高等学校内に置く。

第2章 会員

（会員資格）

第5条 本会は、旧制、新制明治中学校、明治大学八丈高等学校もしくは明治高等学校の卒業生ならびに同校に在籍したことのあるものを会員とする。

（入会金及び終身会費）

第6条 会員は、入会の時に入会金及び終身会費を本会に納入するものとする。入会費及び終身会費の額ならびにその徴収の方法は、理事会が明治大学付属明治高等学校校長（以下「校長」という）の同意を得て定める。

（特別会員）

第7条 母校の教職員であるもの及びその職にあったものを特別会員とする。

- ② 特別会員は、本会が行う事業に参加す

ることができる。

第3章 役員

(役員の種類及び定員)

第8条 本会に理事10人以上20人以内及び監事2人を置く。

- ② 本会に会長1人、副会長3人以内、専務理事1人、事務局長1人、会計1人を置く。
- ③ 必要であれば、本会に常務理事を若干名置くことができる。

(役員の選任)

第9条 会長及び副会長の選任は、別に定める「会長及び副会長選出規定」に基づいて選定し、理事会及び評議員会の承認を受け、総会の決議をもってこれを選任する。会長及び副会長はその就任と同時に理事となる。但し、任期中途中で会長及び副会長を補充すべき場合は、「会長及び副会長選出規定」に準じて選定し、理事会及び評議員会の承認を得て選任することができる。この場合は選任直後の総会において承認を得るものとする。

- ② 会長及び副会長以外の理事並びに監事（以下「会長選任役員」という）は、会員の中から、会長が選任する。会長選任役員は、選任後最初の評議員会の承認が得られなかったときは、選任されなかったものとみなす。これにより会長選任役員に欠員が生じたときは、会長は欠員の無いように直ちに役員を選任しなければならない。
- ③ 専務理事、常務理事及び事務局長並びに会計は、副会長の同意を得て、会長が理事の中から選任する。
- ④ 役員の任期は2年とする。ただし、再任を妨げない。
- ⑤ 会長は、副会長の同意を得て、いつでも会長選任役員を解任することができる。

これにより会長選任役員に欠員が生じたときは、会長は欠員の無いように直ちに役員を選任しなければならない。

- ⑥ 理事は評議員を兼務できない。

(理事会)

第10条 本会の会務の執行は、理事会がこれを決する。

- ② 理事会は理事をもって構成する。
- ③ 理事会は会長がこれを招集する。
- ④ 理事会の議長は、会長又は会長が指名したものがこれにあたる。
- ⑤ 理事会の議事は、出席理事の過半数でこれを決し、可否同数のときは議長の決するところによる。
- ⑥ 理事は書面により理事会の決議に加わることができる。
- ⑦ 監事は、理事会に出席し意見を述べることができる。

(会長等の職務)

第11条 会長は本会を代表し、会務を総理、執行する。

- ② 副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるときは、あらかじめ会長が指名した順位にしたがい会長の職務を代行する。
- ③ 専務理事は、会長の指揮のもとに会務を総括してつかさどり、かつ事務局を総括する。
- ④ 常務理事は、専務理事を補佐する。
- ⑤ 事務局長は、専務理事の指揮のもとに事務局を統括する。
- ⑥ 会計は、本会の会計及び財産の状況並びに会務の執行を行う。
- ⑦ 理事は、会務を分担する。

(監事の職務)

第12条 監事は、本会の会計及び財産の状況並びに会務の執行を監査する。

- ② 監事は、監査の結果を定時総会に報告する。

(名誉役員)

第13条 本会に名誉会長、名誉顧問及び顧問、相談役を置くことができる。

- ② 名誉会長、名誉顧問及び顧問、相談役は、本会又は母校に永年にわたり特別に功労のあったものの内から理事会が推薦し、評議員会の承認を得て会長がこれを委嘱する。
- ③ 学校法人明治大学の総長、学長は、その在任中、名誉顧問としてこれを推戴する。
- ④ 明治大学付属明治高等学校の校長は、その在任中、顧問をそれぞれ推戴する。
- ⑤ 相談役は、会務に永年にわたり功労のあった者の内から理事会が推薦し、評議員会の承認を得て会長がこれを委嘱する。

第4章 総会及び懇親会

(総会の招集)

第14条 定時総会は毎年1回開催し、臨時総会は必要のあるときに開催する。

- ② 総会は、会長がこれを招集する。
- ③ 総会の招集は、本会が発行する会報に掲載し、もしくはその他の方法で会員に通知して行う。

(総会の議事)

第15条 総会は、この会則に定める事項及びその他の重要な事項のうち理事会が提案し、評議員会が必要と認めた事項を総会における審議事項として決議する。

- ② 総会の議長は、会長又は会長の指名したものがこれにあたる。
- ③ 総会の議事は、出席会員の過半数でこれを決し、可否同数の時は議長の決すところによる。

(懇親会の開催)

第16条 懇親会は、会員の懇親を目的として毎

年1回開催する。

- ② 懇親会の開催に関する事項は、理事会が決定し、評議員会の承認を得て、会長が会員に通知する。この通知は、総会の召集通知に準じて行う。

第5章 委員会

(委員会の設置)

第17条 本会は、第2条の目的の達成及び第3条の規定に掲げる事業の遂行のために必要な事項を調査、研究、審議し、または実施する機関として委員会を設けることができる。

- ② 委員会は、会則に定めるほか理事会の決議により設置する。
- ③ 委員会は、委員長1人及び委員2人以上をもって構成する。
- ④ 委員会は、理事会の承認を得て会長がこれを委嘱し、委員は、会員及び特別会員の中から会長の同意を得て委員長がこれを委嘱する。
- ⑤ 委員会は、委員長がこれを主宰する。
- ⑥ 委員長は、その就任と同時に理事となる。

第6章 評議員及び評議員会

(評議員)

第18条 本会に、卒業学年毎に2人以内の評議員を置く。同期会は、同期会の会員のうちから評議員を選任して本会に届けるものとする。また、総明会に登録した班部OB会毎に1人の評議員を置くことができる。評議員を選任した場合は、本会に届けるものとする。

- ② 同期会が結成されていないか、もしくは同期会において評議員を選任できない事情があるときは、会長は、当該学年のために同学年の中から仮評議員を選任できる。
- ③ 総明会に登録すべき班部OB会が結成

されていないか、もしくは班部OB会に評議員を選任できない事情がある場合は、評議員を置くことができない。

- ④ 同期会の評議員と班部OB会の評議員は兼任できない。

(評議員の職務)

第19条 評議員及び仮評議員は、評議員会に出席するほか、本会の事務のうちその属する学年もしくは同期会及び班部OB会の関係で必要な事務を処理する。

- ② 評議員及び仮評議員は、適宜代行者を選任して評議員会への出席、その他の事務処理を代行させることができる。

(評議員会)

第20条 評議員会は、この会則に定める事項及びその他の重要な事項につき議決する。

- ② 評議員会は、会長が適宜これを招集する。
③ 評議員会の議長は、会長もしくは評議員の中から会長が指名したものがあたり、その進行は事務局長が行う。
④ 評議員会の議事は、出席評議員、仮評議員の過半数でこれを決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

第7章 同期会

(同期会)

第21条 会員は、学年ごとに同期会を組織するものとする。

- ② 同期会は、同期会名簿を整備し、運営に関する準則を定めるものとする。
③ 同期会は、その選任した評議員の職務の執行を助けなければならない。
④ 同期会は、同期会の総会を開催したときは、本会に報告するものとする。

第8章 班部OB会

(班部OB会)

第22条 会員は、在学中在籍した班部ごとに班

部OB会を組織することができる。

- ② 班部OB会は、OB会名簿を整備し、運営に関する準則を定めるものとする。
③ 班部OB会は、その選任した評議員の職務の執行を助けなければならない。
④ 班部OB会は、OB会の総会を開催したときは、本会に報告するものとする。

第9章 会計

(会計の分類と会計年度)

第23条 本会の会計処理は、一般会計と特別会計に区分して行い、特別会計はこの会則に定めのある場合のほか理事会において特に定めた会計に関する会計処理、一般会計は特別会計を除いたすべての会計処理とする。

- ② 本会の会計年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

(基金)

第24条 理事会は、本会の財政基盤を安定させ、また第3条に定める事業の遂行資金を形成するため基金を積立てる努力をしなければならない。

- ② 基金は、特別会計（以下「基金特別会計」という）で処理する。
③ 入会費、寄付金のうち理事会で基金に組入れることを決議したもの、並びに基金へ組入れることを目的とする寄付金（以下「特別基金」という）は、基金として基金特別会計に計上し、この会則に定めのある場合を除き支弁することはできない。
④ 基金は、財政基盤基金と事業遂行基金をもって構成する。
⑤ 基金への組入金は、財政基盤基金の総額に満つるまで優先してこれに充当する。
⑥ 財政基盤基金の総額は、総会の決議により決定しもしくは変更する。この場合、第26条の定め（特別決議）を準用する。
⑦ 財政基盤基金は、原則として取崩すこ

とができない。ただし、総会において承認を得た場合はこの限りではない。この場合、第28条の定め（特別決議）を準用する。

- ⑧ 基金のうち、財政基盤基金の総額を超える額を事業遂行基金とする。
- ⑨ 事業遂行基金は、第3条1項1号に定める事業もしくは理事会で決議した事業に支弁するため、理事会及び評議員会の決議によりこれを取崩し、当該事業のために支弁することができる。
- ⑩ 会長は、緊急に対処を要すると認めた事項（以下「緊急処理事項」という）のために、副会長の同意を得て、事業遂行基金を取崩し緊急処理事項に支弁することができる。この場合、会長は、緊急処理事項が生じた後、最初に開催される総会において、当該事項の緊急性及び事業遂行基金取崩しの必要性を説明し、取崩しについて承認を得なければならない。
- ⑪ 事業遂行基金を支弁して行う事業を検討するため、本会に基金事業委員会を設置する。第17条4項の定めにかかわらず、この委員会は委員長1人と委員8人をもって構成し委員は理事の中から委員長が選任する。

（経費）

第25条 本会の経費は、入会費（ただし基金組入れ分を除く）、終身会費及び寄付金（ただし基金組入れ分を除く）並びに一般会計に属する財産から生じる果実その他特別会計に属さない収入をもって支弁する。

（予算）

第26条 会長は、会計年度の終了する前に、理事会の承認を得て翌会計年度の予算を作成する。翌会計年度の予算は、評議員会の承認を得て、総会に提出してその

承認を得なければならない。

- ② 前項により、会長は、その会計年度の最後に開催される評議員会に翌会計年度の予算を提出し、その承認を得た場合は、翌会計年度の初めから総会開催の日までの間、その予算を執行できるものとする。

（決算）

第27条 本会の収入支出の決算は、監事がこれを監査し、会長がこれを総会に提出して報告しなければならない。

- ② 基金特別会計の決算報告においては、財政基盤基金と事業遂行基金を区別し、それぞれの収支の概要及び決算時の在り高のほか、特別基金の累計額を報告するものとする。

第10章 補則

（特別決議）

第28条 本会の会則の改正は、総会における出席会員の4分の3以上の多数による決議によらなければならない。

（届出）

第29条 会員は、氏名、住所及び職業を変更したときは本会に届け出るものとする。

- ② 同期会は、同期会員名簿及び役員名簿を本会事務局に届け出るものとする。
- ③ 班部OB会は、OB会名簿及び役員名簿を本会事務局に届け出るものとする。

附則

（経過措置1）

第1条（年会費同期会）

前回の会則の改正が施行された平成11年1月1日以前に会員となった者で構成される同期会（以下「年会費同期会」という）が納入する年会費については、

次に会則改正のあるまで改正前の第7条の定めによるものとする。

第2条 (年会費)

同期会の納入する年会費は、第25条の定める経費に支弁する。

(経過措置2)

第1条 (年会費班部OB会)

班部OB会は、本会を運営する費用に充てるための年会費を納入するものとする。年会費の額及びその納入方法は、評議員会で定める。

第2条 (年会費)

班部OB会の納入する年会費は、第25条の定める経費に支弁する。

(施行期日)

この会則の改正は、平成18年12月3日より施行する。

(参考)

改正前第7条 (年会費)

同期会は、本会を運営する費用に充てるための年会費を納入するものとする。年会費の額及びその納入方法は、評議員会で定める。

総明会 会長及び副会長選出規定

会則第9条1項に基づき、会長及び副会長の選出は本規程により行う。

(選出委員会の設置、解散、委員の選出)

第1条 会長及び副会長の選出を行う場合は「選出委員会」（以下委員会という）を設置する。

- ② 委員会は役員改選又は補充の時期に合わせて、十分な期間を考慮し、理事会が設置する。
- ③ 委員会の構成は、委員長1人、委員6人とする。委員の選出は理事会及び評議

員会で各々3人とする。委員長は会長が指名したものがこれにあたる。

- ④ 委員会の解散は、総会において会長及び副会長が選出された時点とする。

(会長、副会長の選出、承認について)

第2条 委員会は、会長及び副会長の選出にあたり、推薦及び立候補を受け、その者をもって候補者とする。

- ② 候補者の中より、会長及び副会長候補者を選出する。選出においては全員一致を原則とするが、定員に絞り込めない場合は、その状態で選出終了とする。
- ③ 理事会は、委員会より選出された候補者の承認を行う。
- ④ 評議員会は、理事会で承認された候補者の承認を行う。
- ⑤ 評議員会において承認された会長、副会長は、総会の決議をもって、これを選任する。

(理事会の承認)

第3条 委員会より選出された会長候補者が1名の場合、理事会において過半数の信任をもって承認されたものとする。

- ② 委員会より選出された会長候補者が2名以上の場合、理事会において投票を行い、最も得票数の多い候補者を会長候補者として承認する。
- ③ 委員会より選出された副会長候補者が3名の場合、理事会において過半数の信任をもって承認されたものとする。
- ④ 委員会より選出された副会長候補者が4名以上の場合、理事会において投票を行い、得票数の多い順に3名を副会長候補者として承認する。

(評議員会の承認)

第4条 理事会より選出された会長及び副会長候補者は、評議員会において過半数の信任をもって承認されたものとする。

(会長、副会長の資格)

第5条 会長及び副会長の資格は次の各号のい

ずれをも満たすものとする。

1. 総明会会員として20年以上在籍していること。
2. 評議員又は理事を経験していること。
3. 立候補届出締め切り時の年齢が70歳未

満であること。

この規定は、平成26年11月16日より施行するものとする。

個人情報保護に関する規則 平成18年(2006年)4月1日施行

2006年(平成18年)12月3日の第42回総会において「個人情報保護に関する規則」(以下本規則という。)が承認された(施行日は同年4月1日)。

本規則は、当時の会長で弁護士でもある佐久間洋一氏(昭和43年卒)が主として作成した。

総明会が2005年(平成17年)4月に全面施行された「個人情報保護に関する規則」(以下個人情報保護法という。)の対象事業者になることから、個人情報保護法に対応する必要があった。すでに、2005年(平成17年)の会報の巻末に「プライバシーポリシー」を掲載していることや本規則の承認(12月3日)からさかのぼって4月1日から施行することなどから、個人情報保護への総明会の強い姿勢が顕れていると言っていいだろう。

しかしながら、本規則を熟読すると、個人情報保護のために行わなければならないことがまだ残っていることがわかり、管理者に指定された役職者のさらなる精勤が期待される。

なお、今回本書に収録した会則は、2006年(平成18年)の会報に所収されていた本規則を底本とした。

第1章 総 則

(目的)

第1条

この規則は、明治大学付属明治高等学校・中学校同窓会 総明会(以下「総明会」という。)における個人情報の取り扱いに関する基本的事項を定めることにより、同窓会活動の適正かつ円滑な運営を図るとともに、個人の権利利益を保護することを目的とする。

(定義)

第2条

- 1 この規則において「個人情報」とは、総明会の会員に関する情報であつ

て、当該情報に含まれる氏名、生年月日その他の記述等により特定の個人を識別することができるもの(他の情報と容易に照合することができ、それにより特定の個人を識別することができることとなるものを含む。)をいう。

- 2 この規則において「保有個人情報」とは、総明会が作成し、又は取得した個人情報であつて、総明会が組織的に利用するものとして、保有しているものをいう。ただし、文書、図面及び電磁的記録(電子的方式、磁気的方式その他の人の知恵によっては認

識することができない方式で作られた記録をいう。以下同じ。)に記録されているものに限る。

- 3 この規則において、「個人情報ファイル」とは、保有個人情報を含む情報の集合物であって、次に掲げるものをいう。

- (1) 一定の事務の目的を達成するために、特定の保有個人情報を電子計算機を用いて検索することができるように体系的に構成したもの。
- (2) 前号に掲げるもののほか、一定の事務の目的を達成するために、氏名、生年月日その他の記述等により特定の保有個人情報を容易に検索することができるように体系的に構成したもの。

- 4 この規則において「情報主体」とは、個人情報によって識別される特定の個人をいう。

(会長、個人情報保護管理者)

第3条

- 1 総明会会長は、この規則及び関係法令等の趣旨にのっとり、個人情報の適正な取扱いを確保するために必要な施策を総合的に策定し、実施するとともに、保有個人情報の管理について、これを統括する。
- 2 この規則の目的を達成するため、個人情報保護管理者（以下「管理者」という。）を置く。
- 3 管理者は、専務理事・事務局長とする。
- 4 管理者はこの規則の定めに従い、その所管する業務の範囲内における個人情報について、各理事、各委員会及び会員がこれを適正に取扱うよう指導し、監督するとともに、その取扱い並びに所管する保有個人情報の開示及び訂正等の請求、個人情報の取得、保管、利用、第三者提供等に関し、会長を補佐し、これを適正に処理する。
- 5 保有個人情報の管理責任範囲について疑義が生じ、これが緊急性を要する場合は、当該管理者間の協議により、これを定めるものとする。
- 6 管理者は会長及び理事会並びに評議

員会に対して、個人情報の処理、協議等について報告し、会長の承認を受ける。

第2章 理 事 会

(審議事項等)

第4条

- 1 理事会は、次の事項について審議する。

- (1) 個人情報の保護に関する基本的施策に関する事項
 - (2) その他、本規則に定める事項及び個人情報の保護に関する重要な事項
- 2 理事会は前条に規定する事項の審議のため、関係する総明会会員の意見を求めることができる。
- 3 理事会は、管理者からその執り行った措置に関する報告を受ける。

第3章 個人情報の取扱い

(利用目的と保有の制限等)

第5条

- 1 個人情報の保有は、総明会の活動を遂行するために必要または有益な場合に限るものとし、保有にあたってはその利用の目的（以下「利用目的」という。）をできる限り特定しなければならない。
- 2 個人情報は、前項の規定により特定された利用目的の達成に必要な範囲を超えて、これを保有してはならない。

(利用目的の明示)

第6条

- 1 文書、図面及び電磁的記録に記録された個人情報を取得するとき、及び情報主体から直接書面（電磁的記録を含む。）に記録された当該情報主体の個人情報を取得するときは、次に掲げる場合を除き、あらかじめ、当該情報主体に対し、その利用目的を明示しなければならない。
- (1) 会報の発送・総会開催のための通知。
- (2) 各種総明会行事の案内・提供、会員名簿の維持管理。
- (3) その他同窓会活動に関連・付随する業務。
- (4) 人の生命、身体又は財産の保護のための緊急に必要があるとき。

- (5) 利用目的を情報主体に明示することにより、当該情報主体又は第三者の生命、身体、財産その他の権利利益を害するおそれがあるとき。
- (6) 出版、報道等により当該情報主体がすでに公にされているとき。
- (7) 法令の規定に基づくとき、又は司法手続上必要と理事会が判断したとき。
- (8) 前各号に掲げる場合のほか、取得の状況からみて利用目的が明らかであると理事会が認めたとき。

(利用及び提供の制限)

第7条

- 1 保有個人情報、利用目的以外の目的のために利用し、又は提供してはならない。
- 2 前項の規定にかかわらず、次の各号のいずれかに該当すると認めるときは、利用目的以外の目的のために保有個人情報を利用し、又は提供することができる。ただし、保有個人情報を利用目的以外の目的のために利用し、又は提供することによって、情報主体又は第三者の権利利益を不当に侵害するおそれがあると認められるときは、この限りでない。
 - (1) 法令の規定に基づくとき。
 - (2) 情報主体の同意があるとき。
 - (3) 人の生命、身体又は財産の保護のために必要がある場合であって、情報主体の同意を得ることが困難であると管理者が判断したとき。
 - (4) 公衆衛生の向上又は在校生の健全な育成の推進のために特に必要がある場合であって、情報主体の同意を得ることが困難であると管理者が判断したとき。
 - (5) 総明会の活動に必要な限度で保有個人情報を総明会内部で利用する場合であって、当該保有個人情報を利用することについて相当の理由があると管理者が判断したとき。
 - (6) 管理者が、情報主体以外の者に提供することが明らかに当該情報主体の利益になると認めたとき。
 - (7) 前各号に掲げる場合のほか、専ら統計の作成のために保有個人情報を提供するとき、その他管理者が相当の理由があると認めたとき。
- 3 前項により利用目的以外の目的のために保有個人情報を利用し又は提供するときは、対象とする保有個人情報の範囲をできる限り特定するものとし、個人情報のうちの必要な事項に限定して利用し又は提供しなければならない。
- 4 第2項第5号の場合にあっても、管理者は、個人の権利又は利益を保護するため特に必要があると認めるときは、当該保有個人情報の利用を特定の組織単位に限定することができる。
- 5 管理者は、第2項により利用目的以外の目的のために保有個人情報を利用し又は提供するときは、その事実を記録しなければならない。

(提供を受ける者に対する措置要求)

第8条

管理者は当該保有個人情報の提供を受ける者に対し、所管する保有個人情報を提供する場合において必要があると認めるとき、提供に係る個人情報について、その利用の目的若しくは方法の制限その他必要な制限を付し、又はその漏えいの防止その他個人情報の適切な管理のために必要な措置を講ずることを求めることができる。

(安全確保の措置)

第9条

- 1 管理者は、所管する保有個人情報の漏えい、滅失、き損及び改ざんの防止その他保有個人情報の適切な管理のために必要な措置を講じなければならない。
- 2 個人情報事故が発生した場合における取扱は、管理者が行う。
- 3 理事、会員等は、個人情報事故が発生したと認められる事実を探知した場合あるいはそのおそれのある場合、直ちに管理者にその旨を連絡する。
- 4 管理者は、前項の場合直ちに調査を実施する。

5 管理者は、2項の連絡を受けた場合、3項の調査結果を、会長に速やかに報告する。

6 前項の規定は、説明会から個人情報の取扱いの委託を受けた者が、受託した業務を行う場合について準用する。

(委託に伴う取扱い)

第10条

1 個人情報の取扱いを含む業務を外部委託する場合は、当該契約において、個人情報の適正な取扱いについて受託者が講ずべき措置を明らかにしなければならない。

2 前項の委託を受けた業務に従事している者又は従事していた者は、その業務に関連して知り得た個人情報の内容を他に知らせ、又は不当な目的に利用してはならない。

(外部要員の受入れに伴う取扱い)

第11条

前項の規定は、個人情報の取扱いを含む業務を行うため、外部から要員を受入れる場合について準用する。

(保有等に関する事前通知)

第12条

総明会の各委員会及び会員において個人情報ファイルを保有又は利用等を行うおうとするときは、当該委員会の長は、あらかじめ管理者に対し、次に掲げる事項を届出なければならない。届出た事項を変更しようとするときも、同様とする。

- (1) 個人情報ファイルの名称
- (2) 委員会の名称及び委員会担当の理事の氏名
- (3) 個人情報ファイルの利用目的
- (4) 個人情報ファイルに記憶される項目及び個人情報ファイルに記録される情報主体の範囲
- (5) 個人情報ファイルに記録される個人情報の収集方法

第4章 情報の開示その他

(個人情報に関する開示請求及び提供)

第13条

1 総明会会員からの開示請求については管理者が処理、対応する。

2 管理者は総明会会員から本人に関する開示請求が総明会所定の書面においてなされた場合、請求者が本人であることを確認した上で速やかに文書にて回答するものとする。

3 会員は、代理権の存在を示す資料を提出して代理人によって前項の請求を請求することができる。

4 なお、会員からの請求に関しては別途定める手数料を徴収するものとする。

5 この「個人情報保護法に基づく開示等」の方法については、管理者がホームページまたは会報などを用い、会員に対して周知徹底を図らなければならない。

第14条

総明会の各同期会及びクラブのOB会からの開示請求については管理者が処理、対応する。なお、各同期会は評議員が、各クラブOB会はその責任者が総明会所定の書面をもって開示請求する。

(監査)

第15条

- 1 会長は、総明会における個人情報の取扱いについて、定期的に監査を行う。
- 2 会長は、前項の監査を行うにあたっては、監査担当者を任命するものとする。
- 3 監査担当者は、監査の結果を会長に報告しなければならない。

(個人情報の帰属)

第16条

本規則に定める個人情報は、総明会に帰属する。

(補則)

第17条

この規則に定めるもののほか、この規則の実施に関し必要な事項は、別に定める。

(改廃)

第18条

この規則の改廃は、理事会の議を経て会長がこれを行う。

附則

(施行期日)

第19条

この規則は2006年4月1日より施行する。

総明会歴代役員一覧

総明会創成期から現在まで、同窓会活動にご尽力された役員の方々の一覧表です。

◎役員一覧は、各学年作成の会報誌から引用し、会長以下、理事までを記載しています。
出来る限り校正致しましたが、内容に不正確なところが含まれている場合もありますことをご了承ください。
※総会の日程などにより、会長が年の途中で交代しています。

西暦(元号)	役 員			
1924年 (大正13年)	会 長 副会長	鶴澤 總明(校長) 大橋 留治(教頭)		
1965年 (昭和40年)	会 長 副会長 副会長 監 事 監 事	笹村 越郎(T9) 片岡 龍夫(T10) 嶺 駒夫(T12) 中村 貫一(S9)(会計) 小宮 文雄(S16)(会計)	加美長揖織(T7)(総務) 大沼 孝夫(S2)(総務) 蒲山 博(S4)(総務) 柚木 要(S4)(総務) 高木 正夫(S8)(総務) 滝沢 寿雄(S9)(総務) 新谷 源八(S11)(事業) 鈴木善次郎(S13)(事業) 佐藤 三郎(S17)(事業) 三上外喜男(S17)(事業) 佐野 桂一(S21)(事業) 篠木 修二(S27)(事業) 筒井 義彦(S30)(事業)	
1974年 (昭和49年)	会 長 副会長 副会長 副会長 副会長 名誉会長	片岡 龍夫(T10) 栗原 勝一(T11) 望月 晃一(T14) 野玉 善雄(S2) 薄山 博(S4) 笹村 越郎(T9)		
1977年 (昭和52年)	会 長 専務理事 名誉会長 監 事	片岡 龍夫(T10) 三上外喜男(S17) 笹村 越郎(T9) 大西 新二(S23)(監査)	小林 昭雄(S22)(会計) 大場 隆之(S30)(会計)	
1980年 (昭和55年)	会 長 会 長 副会長 副会長 副会長 専務理事 名誉会長 名誉会長 監 事 監 事	片岡 龍夫(T10)～6月 栗原 勝一(T11)7月～ 望月 晃一(T14) 高木 正夫(S8) 坂本 朝一(S9) 卯木 敏夫(S26) 笹村 越郎(T9) 片岡 龍夫(T10)7月～ 岡館野 春男(S13) 大西 新二(S23)		
1981年 (昭和56年)	会 長 副会長 副会長 副会長 専務理事 名誉会長 顧問 監 査 監 査	栗原 勝一(T11) 望月 晃一(T14) 高木 正夫(S8) 坂本 朝一(S9) 卯木 敏夫(S26) 片岡 龍夫(T10) 清水 義汎(校長) 館野 春男(S13) 大西 新二(S23)	大場 隆之(S30)(会計) 二村 昌也(S33)(会計)	

1982年 (昭和57年)	会 長 栗原 勝一 (T11)～5月 会 長 坂本 朝一 (S9) 6月～ 副会長 望月 晃一 (T14) 副会長 三上外喜男 (S17) 副会長 小林 昭雄 (S22) 名誉会長 片岡 龍夫 (T10) 名誉顧問 小島 憲 (総長) 顧問 中野 隆彰 (校長) 監 査 館野 春男 (S13) 監 査 大西 新二 (S23)	大場 隆之 (S30) (会計) 二村 昌也 (S33) (会計)
1984年 (昭和59年)	会 長 坂本 朝一 (S9) 専務理事 卯木 敏夫 (S26) 名誉会長 片岡 龍夫 (T10) 顧問 保坂 吉彦 (校長) 監 査 館野 春男 (S13) 監 査 大西 新二 (S23)	大場 隆之 (S30) (会計) 伊藤 茂雄 (S31) (会計) 二村 昌也 (S33) (会計)
1985年 (昭和60年)	会 長 坂本 朝一 (S9) 副会長 三上外喜男 (S17) 専務理事 卯木 敏夫 (S26) 常務理事 大場 隆之 (S30) (会計) 名誉会長 片岡 龍夫 (T10) 監 査 館野 春男 (S13) 監 査 大西 新二 (S23)	
1988年 (昭和63年)	会 長 坂本 朝一 (S9) 副会長 小林 昭雄 (S22) 副会長 卯木 敏夫 (S26) 専務理事 大場 隆之 (S30) 常務理事 山崎 敬生 (S32) (事務局長) 名誉会長 片岡 龍夫 (T10) 監 事 館野 春男 (S13)	伊藤 茂雄 (S31) (総務部) 三浦 昭生 (S38) (事業部) 向殿 政男 (S36) (組織部) 二村 昌也 (S33) (会計)
1990年 (平成2年)	会 長 坂本 朝一 (S9) 副会長 小林 昭雄 (S22) 副会長 卯木 敏夫 (S26) 専務理事 大場 隆之 (S30) 常務理事 山崎 敬生 (S32) (事務局長) 名誉会長 片岡 龍夫 (T10) 監 査 館野 春男 (S13)	伊藤 茂雄 (S31) (総務部) 二村 昌也 (S33) (会計) 向殿 政男 (S36) (組織部) 三浦 昭生 (S38) (事業部) 矢島 芳郎 (S36) (クラブOB部)
1992年 (平成4年)	会 長 坂本 朝一 (S9) 副会長 小林 昭雄 (S22) 副会長 卯木 敏夫 (S26) 副会長 向殿 政男 (S36) 専務理事 山崎 敬生 (S32) 名誉会長 片岡 龍夫 (T10) 監 査 館野 春男 (S13) 監 査 大場 隆之 (S30)	二村 昌也 (S33) (会計) 栗野 哲也 (S49) (学校代表) 三浦 昭生 (S38) (事務局長) 伊藤 茂雄 (S31) (総務部長) 長棟 良元 (S37) (総務副部長) 加藤 真義 (S36) (組織部長) 服部 雄二 (S44) (組織副部長) 結城 康郎 (S42) (事業部長) 山形 英明 (S45) (事業副部長) 矢島 芳郎 (S36) (クラブOB会部長) 小川 滋 (S44) (クラブOB会副部長)

1993年 (平成5年)	<p>会 長 向殿 政男 (S36) 副会長 小林 昭雄 (S22) 副会長 卯木 敏夫 (S26) 専務理事 山崎 敬生 (S32)</p> <p>名誉会長 坂本 朝一 (S9) 名誉顧問 片岡 龍夫 (T10) 監 事 二村 昌也 (S33) (会計) 監 査 館野 春男 (S13) 監 査 大場 隆之 (S30)</p>	<p>栗野 哲也 (S49) (学校代表) 三浦 昭生 (S38) (事務局長) 伊藤 茂雄 (S31) (総務部長) 長棟 良元 (S37) (総務副部長) 加藤 真義 (S36) (組織部長) 服部 雄二 (S44) (組織副部長) 結城 康郎 (S42) (事業部長) 山形 英明 (S45) (事業副部長) 矢島 芳郎 (S36) (クラブOB会部長) 小川 滋 (S44) (クラブOB会副部長)</p>
1994年 (平成6年)	<p>会 長 向殿 政男 (S36) 副会長 山浦 晟暉 (S29) 副会長 山崎 敬生 (S32) 専務理事 三浦 昭生 (S38)</p> <p>名誉会長 坂本 朝一 (S9) 名誉顧問 片岡 龍夫 (T10) 顧問 小林 昭雄 (S22) 顧問 卯木 敏夫 (S26) 監 事 高橋 信雄 (S25) 監 事 大場 隆之 (S30)</p>	<p>尾島育四郎 (S41) (事務局長) 増田 利明 (S38) (財務部長) 長棟 良元 (S37) (組織部長) 結城 康郎 (S42) (事業部長) 米山 広昭 (S40) (クラブOB会部長・副組織部長) 栗野 哲也 (S49) (学校代表) 谷 正之 (S36) (事務局長補佐) 服部 雄二 (S44) (事務局広報部長) 菊地 博道 (S41) (事務局書記) 原田 繁 (S44) (事務局書記) 高村 光昭 (S37) (組織部副部長) 八木下 恵三 (S43) (組織部組織員) 家中 勉 (S44) (財務部副部長) 関谷 芳久 (S44) (財務部会計担当) 山形 英明 (S45) (事業部副部長) 伊藤 茂雄 (S31) (会旗担当)</p>
1995年 (平成7年)	<p>会 長 向殿 政男 (S36) 副会長 山浦 晟暉 (S29) 副会長 山崎 敬生 (S32) 専務理事 三浦 昭生 (S38)</p> <p>名誉会長 坂本 朝一 (S9) 名誉顧問 片岡 龍夫 (T10) 顧問 小林 昭雄 (S22) 顧問 卯木 敏夫 (S26) 監 事 高橋 信雄 (S25) 監 事 大場 隆之 (S30)</p>	<p>尾島育四郎 (S41) (事務局長) 増田 利明 (S38) (財務部長) 長棟 良元 (S37) (組織部長) 結城 康郎 (S42) (事業部長) 米山 広昭 (S40) (クラブOB会部長・副組織部長) 栗野 哲也 (S49) (学校代表) 谷 正之 (S36) (事務局長補佐) 服部 雄二 (S44) (事務局広報部長) 菊地 博道 (S41) (事務局書記) 原田 繁 (S44) (事務局書記) 高村 光昭 (S37) (組織部副部長) 阿部 正行 (S40) (組織部組織員) 八木下 恵三 (S43) (組織部組織員) 家中 勉 (S44) (財務部副部長) 関谷 芳久 (S44) (財務部会計担当) 山形 英明 (S45) (事業部副部長) 伊藤 茂雄 (S31) (会旗担当)</p>
1996年 (平成8年)	<p>会 長 向殿 政男 (S36) 副会長 山浦 晟暉 (S29) 副会長 山崎 敬生 (S32) 専務理事 三浦 昭生 (S38)</p> <p>名誉会長 坂本 朝一 (S9) 名誉顧問 片岡 龍夫 (T10) 顧問 小林 昭雄 (S22) 顧問 卯木 敏夫 (S26) 顧問 石崎 章生 (校長) 監 事 高橋 信雄 (S25) 監 事 大場 隆之 (S30)</p>	<p>尾島育四郎 (S41) (事務局長) 増田 利明 (S38) (財務部長) 高村 光昭 (S37) (組織部長) 結城 康郎 (S42) (事業部長) 阿部 正行 (S40) (クラブOB会部長) 栗野 哲也 (S49) (学校代表) 谷 正之 (S36) (事務局長補佐) 服部 雄二 (S44) (事務局広報部長) 家中 勉 (S44) (財務部副部長) 長棟 良元 (S37) (組織部副部長) 米山 広昭 (S40) (組織部副部長) 山形 英明 (S45) (事業部副部長) 比留間竹郎 (S45) (クラブOB会副部長) 菊地 博道 (S41) (事務局書記) 原田 繁 (S44) (事務局書記) 関谷 芳久 (S44) (財務部会計担当) 八木下 恵三 (S43) (組織部組織員) 伊藤 茂雄 (S31) (会旗担当)</p>

1997年 (平成9年)	<div> <div> 会長 副会長 副会長 専務理事 </div> <div> 向殿 山浦 山崎 三浦 </div> <div> 政男 (S36) 晟暉 (S29) 敬生 (S32) 昭生 (S38) </div> </div> <div> <div> 名誉会長 名誉顧問 顧問 顧問 顧問 監事 </div> <div> 坂本 片岡 小林 卯木 石崎 高橋 大場 </div> <div> 朝一 (S9) 龍夫 (T10) 昭雄 (S22) 敏夫 (S26) 章生 (校長) 信雄 (S25) 隆之 (S30) </div> </div> <div> 尾島育四郎 (S41) (事務局長) 増田利明 (S38) (財務部長) 高村光昭 (S37) (組織部長) 結城康郎 (S42) (事業部長) 阿部正行 (S40) (クラブOB会部長) 栗野哲也 (S49) (学校代表) 谷正之 (S36) (事務局長補佐) 服部雄二 (S44) (事務局広報部長) 家中勉 (S44) (財務部副部長) 長棟良元 (S37) (組織部副部長) 米山広昭 (S40) (組織部副部長) 山形英明 (S45) (事業部副部長) 比留間竹郎 (S45) (クラブOB会副部長) 菊地博道 (S41) (事務局書記) 原田繁 (S44) (事務局書記) 関谷芳久 (S44) (財務部会計担当) 金子敏一 (S46) (事業部副部長) 伊藤茂雄 (S31) (会旗担当) </div>
1998年 (平成10年)	<div> <div> 会長 副会長 副会長 専務理事 </div> <div> 向殿 山浦 山崎 尾島育四郎 </div> <div> 政男 (S36) 晟暉 (S29) 敬生 (S32) 昭生 (S41) </div> </div> <div> <div> 名誉会長 名誉顧問 顧問 顧問 顧問 監事 </div> <div> 坂本 片岡 小林 卯木 清水 高橋 大場 </div> <div> 朝一 (S9) 龍夫 (T10) 昭雄 (S22) 敏夫 (S26) 紀夫 (校長) 信雄 (S25) 隆之 (S30) </div> </div> <div> 服部雄二 (S44) (事務局長) 増田利明 (S38) (財務部長) 家中勉 (S44) (副財務部長) 関谷芳久 (S44) (財務部会計) 高村光昭 (S37) (組織部長) 米山広昭 (S40) (副組織部部長) 阿部正行 (S40) (クラブOB会部長) 比留間竹郎 (S45) (クラブOB会副部長) 結城康郎 (S42) (事業部長) 山形英明 (S45) (副事業部長) 下野進 (教員) (学校代表) 菊地博道 (S41) (事務局書記長) 金子敏一 (S46) (事業部スタッフ) 伊藤茂雄 (S31) (会旗担当) 谷正之 (S36) (事務局長補佐) 原田繁 (S44) (事務局員) 長谷川裕 (S43) (事務局スタッフ) 池谷行正 (S43) (事務局スタッフ) 寺田康夫 (S44) (事務局スタッフ) 中村裕次 (S45) (事務局スタッフ) 北島一弘 (S45) (事務局スタッフ) 熊沢正幸 (S54) (事務局スタッフ) 熊倉章雄 (S54) (事務局スタッフ) </div>
1999年 (平成11年)	<div> <div> 会長 副会長 副会長 専務理事 </div> <div> 向殿 山浦 山崎 尾島育四郎 </div> <div> 政男 (S36) 晟暉 (S29) 敬生 (S32) 昭生 (S41) </div> </div> <div> <div> 名誉会長 顧問 顧問 顧問 顧問 監事 </div> <div> 坂本 小林 卯木 清水 高橋 大場 </div> <div> 朝一 (S9) 昭雄 (S22) 敏夫 (S26) 紀夫 (校長) 信雄 (S25) 隆之 (S30) </div> </div> <div> 服部雄二 (S44) (事務局長) 関谷芳久 (S44) (会計) 下野進 (教員) (学校代表) 伊藤茂雄 (S31) (会旗担当) </div>

2001年 (平成13年)	<p>会 長 向殿 政男 (S36) 副会長 山崎 敬生 (S32) 副会長 尾島育四郎 (S41) 専務理事 服部 雄二 (S44)</p> <p>名誉会長 坂本 朝一 (S9) 顧問 小林 昭雄 (S22) 顧問 卯木 敏夫 (S26) 顧問 山浦 晟暉 (S29) 監事 伊藤 茂雄 (S31) 監事 小林正三郎 (S32)</p>	北島 一弘 (S45) (事務局長)
2002年 (平成14年)	<p>会 長 向殿 政男 (S36) 副会長 山崎 敬生 (S32) 副会長 尾島育四郎 (S41) 専務理事 服部 雄二 (S44)</p> <p>名誉会長 坂本 朝一 (S9) 顧問 小林 昭雄 (S22) 顧問 卯木 敏夫 (S26) 顧問 山浦 晟暉 (S29) 監事 伊藤 茂雄 (S31) 監事 小林正三郎 (S32) 学校側担当 小柴 仁美</p>	<p>北島 一弘 (S45) (事務局長) 関谷 芳久 (S44) (会計) 竹澤 啓 (S49) (財務) 結城 康郎 (S42) (総会) 阿部 正行 (S40) (ゴルフ) 薬谷 豊 (S44) (組織) 佐久間洋一 (S43) (会報) 中村 正容 (S43) (企画) 田中徹太郎 (S47) (総務) 竹澤 啓 (S49) (名簿兼任) 山崎 秀樹 (S50) (広報)</p>
2003年 (平成15年)	<p>会 長 向殿 政男 (S36) 副会長 山崎 敬生 (S32) 副会長 尾島育四郎 (S41) 副会長 佐久間洋一 (S43) 専務理事 服部 雄二 (S44)</p> <p>名誉会長 坂本 朝一 (S9) 顧問 小林 昭雄 (S22) 顧問 卯木 敏夫 (S26) 顧問 山浦 晟暉 (S29) 監事 伊藤 茂雄 (S31) 監事 小林正三郎 (S32) 学校側担当 小柴 仁美</p>	<p>北島 一弘 (S45) (事務局長) 関谷 芳久 (S44) (会計) 竹澤 啓 (S49) (財務) 内田 茂 (S47) (総会) 阿部 正行 (S40) (ゴルフ) 薬谷 豊 (S44) (組織) 佐久間洋一 (S43) (会報兼任) 中村 正容 (S43) (企画) 田中徹太郎 (S47) (総務) 竹澤 啓 (S49) (名簿兼任) 山崎 秀樹 (S50) (広報)</p>
2004年 (平成16年)	<p>会 長 佐久間洋一 (S43) 副会長 尾島育四郎 (S41) 副会長 服部 雄二 (S44) 専務理事 関谷 芳久 (S44) 専務理事 北島 一弘 (S45)</p> <p>名誉会長 向殿 政男 (S36) 顧問 山浦 晟暉 (S29) 顧問 山崎 敬生 (S32) 監事 伊藤 茂雄 (S31) 監事 阿部 正行 (S40)</p>	<p>山崎 秀樹 (S50) (事務局長) 中村 正容 (S43) (会計)</p>
2006年 (平成18年)	<p>会 長 佐久間洋一 (S43) 副会長 尾島育四郎 (S41) 副会長 服部 雄二 (S44) 副会長 吉田耕太郎 (S45) 専務理事 関谷 芳久 (S44) 専務理事 北島 一弘 (S45)</p> <p>名誉会長 向殿 政男 (S36) 顧問 山浦 晟暉 (S29) 顧問 山崎 敬生 (S32) 監事 伊藤 茂雄 (S31) 監事 阿部 正行 (S40)</p>	<p>山崎 秀樹 (S50) (事務局長) 中村 正容 (S43) (会計)</p>

2008年 (平成20年)	<p>会 長 佐久間洋一 (S43) 副会長 尾島育四郎 (S41) 副会長 服部 雄二 (S44) 副会長 吉田耕太郎 (S45) 専務理事 関谷 芳久 (S44) 常務理事 井家上哲史 (S51)</p> <p>名誉会長 向殿 政男 (S36) 顧問 山浦 晟暉 (S29) 顧問 山崎 敬生 (S32) 監 事 佐藤 仁 (S39) 監 事 阿部 正行 (S40)</p>	<p>熊倉 章雄 (S54) (事務局長) 中村 正容 (S43) (会計)</p>
2010年 (平成22年)	<p>会 長 尾島育四郎 (S41) 副会長 関谷 芳久 (S44) 副会長 吉田耕太郎 (S45) 副会長 井家上哲史 (S51) 専務理事 竹澤 啓 (S49) 専務理事補佐 小林 祥悟 (S51)</p> <p>名誉会長 向殿 政男 (S36) 顧問 山浦 晟暉 (S29) 顧問 山崎 敬生 (S32) 監 事 佐藤 仁 (S39) 監 事 阿部 正行 (S40)</p>	<p>中村 正容 (S43) (会計) 熊倉 章雄 (S54) (事務局長) 戸張 毅 (S47) (総会) 玉置 孝一 (S54) (会報) 有田 幸訓 (S52) (ゴルフ) 岡本 雅仁 (S51) (企画) 比留間竹郎 (S45) (学校渉外) 菊池 正純 (S57) (組織) 染谷 貴男 (S57) (育成) 大西静士郎 (S52) (総務) 山崎 秀樹 (S50) (広報) 桑崎 安弘 (S50) (100周年記念)</p>
2011年 (平成23年)	<p>会 長 尾島育四郎 (S41) 副会長 関谷 芳久 (S44) 副会長 吉田耕太郎 (S45) 副会長 井家上哲史 (S51) 専務理事 竹澤 啓 (S49) 専務理事補佐 小林 祥悟 (S51)</p> <p>名誉会長 向殿 政男 (S36) 顧問 金子 光男 (校長) 顧問 小林 昭雄 (S22) 顧問 山浦 晟暉 (S29) 顧問 山崎 敬生 (S32) 顧問 佐久間洋一 (S43) 顧問 服部 雄二 (S44) 監 事 佐藤 仁 (S39) 監 事 阿部 正行 (S40)</p>	<p>中村 正容 (S43) (会計) 熊倉 章雄 (S54) (事務局長) 戸張 毅 (S47) (総会) 玉置 孝一 (S54) (会報) 近藤 敏彦 (S50) (ゴルフ) 岡本 雅仁 (S51) (企画) 比留間竹郎 (S45) (学校渉外) 菊池 正純 (S57) (組織) 染谷 貴男 (S57) (育成) 桑崎 安弘 (S50) (100周年記念) 山崎 秀樹 (S50) (広報) 大西静士郎 (S52) (総務) 吉武 孝生 (S50) (名簿)</p>
2012年 (平成24年)	<p>会 長 尾島育四郎 (S41) 副会長 関谷 芳久 (S44) 副会長 吉田耕太郎 (S45) 副会長 井家上哲史 (S51) 専務理事 山崎 秀樹 (S50) 常務理事 中村 正容 (S43)</p> <p>名誉会長 向殿 政男 (S36) 顧問 金子 光男 (校長) 顧問 小林 昭雄 (S22) 顧問 山浦 晟暉 (S29) 顧問 山崎 敬生 (S32) 顧問 佐久間洋一 (S43) 顧問 服部 雄二 (S44) 監 事 佐藤 仁 (S39) 監 事 佐藤 眞弘 (S49)</p>	<p>熊倉 章雄 (S54) (事務局長) 狩野 智雄 (S56) (会計) 染谷 貴男 (S57) (総会) 衛藤 雅一 (S56) (会報) 近藤 敏彦 (S50) (ゴルフ) 岡本 雅仁 (S51) (企画) 上野 雅宏 (S51) (組織) 須藤 貢一 (S56) (総務) 大西静士郎 (S52) (広報) 吉武 孝生 (S50) (名簿) 桑崎 安弘 (S50) (周年)</p>

<p>2013年 (平成25年)</p>	<p>会 長 尾島育四郎 (S41) 副会長 関谷 芳久 (S44) 副会長 吉田耕太郎 (S45) 副会長 井家上哲史 (S51) 専務理事 山崎 秀樹 (S50) 常務理事 中村 正容 (S43)</p> <p>名誉会長 向殿 政男 (S36) 顧問 金子 光男 (校長) 顧問 小林 昭雄 (S22) 顧問 山浦 晟暉 (S29) 顧問 山崎 敬生 (S32) 顧問 佐久間洋一 (S43) 顧問 服部 雄二 (S44) 監事 佐藤 仁 (S39) 監事 佐藤 眞弘 (S49)</p>	<p>熊倉 章雄 (S54) (事務局長) 狩野 智雄 (S56) (会計) 染谷 貴男 (S57) (総会) 衛藤 雅一 (S56) (会報) 近藤 敏彦 (S50) (ゴルフ) 小林 謙之 (S57) (企画) 上野 雅宏 (S51) (組織) 須藤 貢一 (S56) (総務) 大西静士郎 (S52) (広報) 吉武 孝生 (S50) (名簿) 桑崎 安弘 (S50) (周年)</p>
<p>2014年 (平成26年)</p>	<p>会 長 尾島育四郎 (S41) 副会長 関谷 芳久 (S44) 副会長 吉田耕太郎 (S45) 副会長 井家上哲史 (S51) 専務理事 山崎 秀樹 (S50) 常務理事 中村 正容 (S43)</p> <p>名誉会長 向殿 政男 (S36) 顧問 安藏 伸治 (校長) 顧問 小林 昭雄 (S22) 顧問 山浦 晟暉 (S29) 顧問 山崎 敬生 (S32) 顧問 佐久間洋一 (S43) 顧問 服部 雄二 (S44) 監事 佐藤 仁 (S39) 監事 佐藤 眞弘 (S49)</p>	<p>熊倉 章雄 (S54) (事務局長) 狩野 智雄 (S56) (会計) 染谷 貴男 (S57) (総会) 衛藤 雅一 (S56) (会報) 志村 和哉 (S54) (ゴルフ) 小林 謙之 (S57) (企画) 近藤 敏彦 (S50) (組織) 須藤 貢一 (S56) (総務) 大西静士郎 (S52) (広報) 吉武 孝生 (S50) (名簿) 桑崎 安弘 (S50) (周年)</p>



調布の新校舎



調布の新校舎のエントランス。

総明会50周年記念事業御寄付者一覧 (敬称略) 平成27年8月31日現在

■個人寄付者一覧

山崎 有一郎 (昭和6年卒)	大和田 勝 (昭和30年卒)	大出 勝 (昭和37年卒)	中嶋 純之 (昭和41年卒)
小野 昌廣 (昭和16年卒)	沖山 二郎 (昭和30年卒)	小山 雅司 (昭和37年卒)	浜田 豊 (昭和41年卒)
木崎 左一 (昭和17年卒)	川渕 雅弘 (昭和30年卒)	佐藤 信雄 (昭和37年卒)	廣瀬 準 (昭和41年卒)
稲毛 善次郎 (昭和18年卒)	藤本 芳徳 (昭和30年卒)	知久 倭 (昭和37年卒)	小澤 清一 (昭和42年卒)
北村 隆英 (昭和18年卒)	星野 武男 (昭和30年卒)	染谷 武俊 (昭和37年卒)	小宮 秀夫 (昭和42年卒)
林 幹夫 (昭和18年卒)	大出 育男 (昭和31年卒)	向山 勝 (昭和37年卒)	佐藤 隆士 (昭和42年卒)
大屋 悌 (昭和19年卒)	佐藤 健一 (昭和31年卒)	森 敏孝 (昭和37年卒)	手塚 康二 (昭和42年卒)
斉藤 久也 (昭和21年卒)	鈴木 保俊 (昭和31年卒)	吉田 信行 (昭和37年卒)	結城 康郎 (昭和42年卒)
鈴木 利彦 (昭和23年卒)	高橋 朝見 (昭和31年卒)	鈴木 誠 (昭和37年卒)	緒方 奨 (昭和43年卒)
平木 龍雄 (昭和23年卒)	土田 饒 (昭和31年卒)	戸倉 正雄 (昭和37年卒)	佐久間洋一 (昭和43年卒)
松倉 康信 (昭和23年卒)	中野 勝則 (昭和31年卒)	中村 哲士 (昭和37年卒)	中村 正容 (昭和43年卒)
吉澤 忠一 (昭和24年卒)	府川 利幸 (昭和31年卒)	岩間 勝雄 (昭和38年卒)	堀切 憲治 (昭和43年卒)
牛久 順之 (昭和25年卒)	大塚 和哉 (昭和32年卒)	浦川 忠雄 (昭和38年卒)	家中 勉 (昭和44年卒)
小田川玉城 (昭和25年卒)	小貫 邦夫 (昭和32年卒)	刑部孝次郎 (昭和38年卒)	栗田 茂 (昭和44年卒)
田代 敏範 (昭和25年卒)	小林正三郎 (昭和32年卒)	姿 卓 (昭和38年卒)	関谷 芳久 (昭和44年卒)
松ヶ野 寛 (昭和25年卒)	佐々木武久 (昭和32年卒)	鈴木 豊 (昭和38年卒)	寺田 康夫 (昭和44年卒)
車 健一 (昭和26年卒)	高橋 潔 (昭和32年卒)	高橋 正佑 (昭和38年卒)	中河 孝樹 (昭和44年卒)
桑原 精一 (昭和26年卒)	中村 和雄 (昭和32年卒)	糠田喜一郎 (昭和38年卒)	服部 雄二 (昭和44年卒)
斉藤 英二 (昭和26年卒)	細野 秀雄 (昭和32年卒)	松下 義超 (昭和38年卒)	福田 実 (昭和44年卒)
長井 朗 (昭和26年卒)	堀内 邦彦 (昭和32年卒)	松丸 芳昭 (昭和38年卒)	藁谷 豊 (昭和44年卒)
後藤 博司 (昭和27年卒)	矢野 英司 (昭和32年卒)	石川 隆 (昭和39年卒)	石山 雅範 (昭和45年卒)
小林 常康 (昭和27年卒)	山崎 敬生 (昭和32年卒)	駒場 宏二 (昭和39年卒)	一ノ瀬和美 (昭和45年卒)
内藤 彰 (昭和27年卒)	佐藤 康二 (昭和33年卒)	佐藤 仁 (昭和39年卒)	大久保正徳 (昭和45年卒)
松尾 吉夫 (昭和27年卒)	米山 武男 (昭和33年卒)	篠原 弘治 (昭和39年卒)	笹本 和義 (昭和45年卒)
吉田 満 (昭和27年卒)	江澤 安正 (昭和34年卒)	武村 隆二 (昭和39年卒)	志村 辰雄 (昭和45年卒)
米山 耕右 (昭和27年卒)	鈴木 康男 (昭和34年卒)	渡辺 誠一 (昭和39年卒)	高橋 淑浩 (昭和45年卒)
秋元 宏信 (昭和28年卒)	高田 信一 (昭和34年卒)	朝田英太郎 (昭和40年卒)	藤掛 聖二 (昭和45年卒)
井野川博昭 (昭和28年卒)	渡辺 敏昭 (昭和34年卒)	阿部 正行 (昭和40年卒)	前田 治行 (昭和45年卒)
小田 稔 (昭和28年卒)	天野 洋一 (昭和35年卒)	大関 清人 (昭和40年卒)	三間 勇行 (昭和45年卒)
佐藤 欣生 (昭和28年卒)	岩崎 建自 (昭和35年卒)	小原 義久 (昭和40年卒)	吉田耕太郎 (昭和45年卒)
鈴木 健 (昭和28年卒)	丞村 裕次 (昭和35年卒)	片山 三隆 (昭和40年卒)	源平 守正 (昭和46年卒)
高橋 和夫 (八丈島高卒)	田村 貢 (昭和35年卒)	重田 衛 (昭和40年卒)	小島 隆 (昭和46年卒)
持丸 孝雄 (八丈島高卒)	満留谷 融 (昭和35年卒)	戸塚 眞司 (昭和40年卒)	新堀 俊明 (昭和46年卒)
齋藤 敏行 (八丈島高卒)	神野 武美 (昭和36年卒)	中馬 希芳 (昭和40年卒)	鈴木 秀男 (昭和46年卒)
大出 彰 (昭和29年卒)	橋爪 英夫 (昭和36年卒)	池田 勉 (昭和41年卒)	武井 隆之 (昭和46年卒)
加藤 量平 (昭和29年卒)	向殿 政男 (昭和36年卒)	岡本 隆 (昭和41年卒)	伊達 忠伸 (昭和46年卒)
倉田 秀夫 (昭和29年卒)	村田 保廣 (昭和36年卒)	尾島育四郎 (昭和41年卒)	藤井 義則 (昭和46年卒)
山浦 晟暉 (昭和29年卒)	秋葉 敏雄 (昭和37年卒)	小林 滋 (昭和41年卒)	矢口 隆 (昭和46年卒)
石橋 裕 (昭和30年卒)	大出 宏 (昭和37年卒)	竹澤 順一 (昭和41年卒)	渡辺 潔 (昭和46年卒)

市村 俊樹(昭和47年卒)	中村 光晴(昭和51年卒)	田所 晴貴(昭和57年卒)	矢澤 徹(昭和60年卒)
内田 茂(昭和47年卒)	前田稲一郎(昭和51年卒)	宮田 健(昭和57年卒)	山田 啓明(昭和60年卒)
鈴木 信夫(昭和47年卒)	大西静士郎(昭和52年卒)	米田 昌弘(昭和57年卒)	山本 伸幸(昭和60年卒)
関谷 知孝(昭和47年卒)	佐藤 大英(昭和52年卒)	青木 正美(昭和58年卒)	池田 曜(昭和61年卒)
月村 嘉男(昭和47年卒)	樋田 哲次(昭和52年卒)	秋間 聡(昭和58年卒)	鷗飼 友義(昭和61年卒)
戸張 毅(昭和47年卒)	山田 啓介(昭和52年卒)	荻部 大(昭和58年卒)	片桐 泰裕(昭和61年卒)
長束 政憲(昭和47年卒)	大野 和彦(昭和53年卒)	鈴木 裕文(昭和58年卒)	栗本 宜長(昭和61年卒)
中村 守邦(昭和47年卒)	糟谷 光範(昭和53年卒)	高橋 浩(昭和58年卒)	清水 孝浩(昭和61年卒)
判澤 勉(昭和47年卒)	竹越 利之(昭和53年卒)	西秋 輝彦(昭和58年卒)	清水 稔夫(昭和61年卒)
廣野 宏士(昭和47年卒)	荒井 信之(昭和54年卒)	馬場 健二(昭和58年卒)	高澤 誠司(昭和61年卒)
尾崎 幸平(昭和48年卒)	岩田 茂(昭和54年卒)	真野 大(昭和58年卒)	千葉 定保(昭和61年卒)
宮坂 利夫(昭和48年卒)	河合 洋(昭和54年卒)	赤堀 康浩(昭和59年卒)	土田 正昭(昭和61年卒)
森田 勉(昭和48年卒)	熊倉 章雄(昭和54年卒)	岩井 孝之(昭和59年卒)	細野 秀樹(昭和61年卒)
山口 隆(昭和48年卒)	佐藤浩一郎(昭和54年卒)	大山 輝芳(昭和59年卒)	山田 篤司(昭和61年卒)
大前 実之(昭和49年卒)	志村 和哉(昭和54年卒)	工藤 隆行(昭和59年卒)	横山 一実(昭和61年卒)
坂上 真啓(昭和49年卒)	助川 寧(昭和54年卒)	紺谷 周司(昭和59年卒)	植村 政孝(昭和62年卒)
佐藤 眞弘(昭和49年卒)	常住 豊(昭和54年卒)	佐藤 昌彦(昭和59年卒)	内田 敬之(昭和62年卒)
竹澤 啓(昭和49年卒)	大迫 好孝(昭和55年卒)	島村 武史(昭和59年卒)	大武 利弘(昭和62年卒)
宮下 守正(昭和49年卒)	大橋 泰男(昭和55年卒)	田中 重幸(昭和59年卒)	岡本 浩一(昭和62年卒)
横田 信之(昭和49年卒)	中西 宏之(昭和55年卒)	平野 一哉(昭和59年卒)	斉藤 剛志(昭和62年卒)
雨宮 弘典(昭和50年卒)	安蒜 信夫(昭和56年卒)	藤原 輝夫(昭和59年卒)	辻村 誠之(昭和62年卒)
窪崎 弘匡(昭和50年卒)	飯野 善明(昭和56年卒)	本澤 健一(昭和59年卒)	年田 善政(昭和62年卒)
桑崎 安弘(昭和50年卒)	衛藤 雅一(昭和56年卒)	水沼 仁志(昭和59年卒)	永瀬 守(昭和62年卒)
近藤 敏彦(昭和50年卒)	狩野 智雄(昭和56年卒)	渡邊 文夫(昭和59年卒)	日向 功(昭和62年卒)
世古 俊之(昭和50年卒)	鴨下 裕彦(昭和56年卒)	植村 成典(昭和60年卒)	岡崎 正和(昭和63年卒)
林 正信(昭和50年卒)	小暮 太郎(昭和56年卒)	大塚 大(昭和60年卒)	尾崎 博之(昭和63年卒)
益子 哲郎(昭和50年卒)	齐木麻州男(昭和56年卒)	大貫 俊隆(昭和60年卒)	梶木 基晴(昭和63年卒)
三森 勳(昭和50年卒)	寺村 一義(昭和56年卒)	織田 晴彦(昭和60年卒)	鑄木 祥介(昭和63年卒)
山崎 秀樹(昭和50年卒)	深山 隆義(昭和56年卒)	柴 貴(昭和60年卒)	郡司 晃浩(昭和63年卒)
吉武 孝生(昭和50年卒)	吉田 英晃(昭和56年卒)	鈴木 重之(昭和60年卒)	高田賢一郎(昭和63年卒)
井家上哲史(昭和51年卒)	蓬田 裕一(昭和56年卒)	住谷 孝雄(昭和60年卒)	滝沢 修(昭和63年卒)
石渡 浩二(昭和51年卒)	阿久津一也(昭和57年卒)	竹内 寿彦(昭和60年卒)	田中 一任(昭和63年卒)
上野 雅宏(昭和51年卒)	浅香 晃房(昭和57年卒)	竹口 忠克(昭和60年卒)	光岡 孝之(昭和63年卒)
岡本 雅仁(昭和51年卒)	岩崎 広人(昭和57年卒)	田中 嘉一(昭和60年卒)	武者 信久(昭和63年卒)
川名 猛司(昭和51年卒)	菊池 正純(昭和57年卒)	寺山 裕也(昭和60年卒)	森田 浩章(昭和63年卒)
小池 良通(昭和51年卒)	小林 謙之(昭和57年卒)	原 健治(昭和60年卒)	安川 琢哉(昭和63年卒)
河野 雅彦(昭和51年卒)	小林 芳隆(昭和57年卒)	町側 尚則(昭和60年卒)	山下 征隆(昭和63年卒)
月岡 正明(昭和51年卒)	関川 一浩(昭和57年卒)	松尾 智己(昭和60年卒)	小柳 貴裕(平成元年卒)
津野 祐二(昭和51年卒)	染谷 貴男(昭和57年卒)	森田 聡一(昭和60年卒)	杉山 純也(平成元年卒)

■個人寄付者一覧

鈴木 宏房(平成2年卒)	五十嵐明彦(平成6年卒)	渡邊 圭(平成6年卒)	岡田 光平(平成26年卒)
高山 剛(平成2年卒)	大谷真二郎(平成6年卒)	服部啓一郎(平成14年卒)	斎藤明日香(平成26年卒)
片岡 善明(平成4年卒)	熊木 達朗(平成6年卒)	関根 次朗(平成15年卒)	
富樫 展広(平成4年卒)	内藤 貴夫(平成6年卒)	上野 由貴(平成17年卒)	
藤井 広之(平成4年卒)	三谷 知弘(平成6年卒)	小佐野貴成(平成19年卒)	
今井 高志(平成5年卒)	三保谷建介(平成6年卒)	山本 康太(平成19年卒)	※卒年順に記載。

■母校教員寄付者一覧

青木 茂雄	尾崎 義夫	齊藤 信弘	並木 啓	吉田 重幸
安藏 伸治	金子 光男	坂口 泰通	松本麻奈美	渡部 真也
栗野 哲也	川瀬 孟俊	櫻井 清孝	宮下 崇	山田 伸夫
石原 照子	北村 純	関根 正人	村松 教子	
一瀬 尚史	小林 伸一	田中徹太郎	山口 弘	※五十音順に記載。 退職教員も含まれています。
大野 正隆	後藤 朋智	中小路(小西) 哲男	横山 晴之	

■班クラブOB会寄付一覧

応援指導班OB会	硬式野球部OB会 明球会	物理部OB会 明物会	地理研究部OB会
吹奏楽班OB・OG会	フェンシング部OB会	庭球部OB会	歴史研究部OB会
水泳部OB会 明水会	バスケット部OB会	バレー部OB会	

■同期会寄付一覧

八明会(八丈島高卒)	M41(昭和42年卒)	明々会(昭和51年卒)	關紺会(昭和60年卒)
明楽会(昭和31年卒)	紫讃会(昭和43年卒)	男子校根性組(昭和52年卒)	新世輝(昭和61年卒)
明治会(昭和32年卒)	男坂倶楽部(昭和44年卒)	紫友会(昭和53年卒)	明猿会(昭和62年卒)
旧雨会(昭和34年卒)	獅子の会(昭和45年卒)	明誠会(昭和54年卒)	昭和戊辰乃会(昭和63年卒)
明駿会(昭和36年卒)	明潮会(昭和46年卒)	明翔会(昭和56年卒)	明雄会(平成22年卒)
三七会(昭和37年卒)	四七四七同志酔会(昭和47年卒)	明魂会(昭和57年卒)	
明優会(昭和40年卒)	翼明会(昭和49年卒)	明輪会(昭和58年卒)	
明友会(昭和41年卒)	明紫会(昭和50年卒)	明心会(昭和59年卒)	※卒年順に記載。

■50周年記念広告協力者一覧

山浦 晟暉(昭和29年卒)	佐藤 康二(昭和33年卒)	佐藤 仁(昭和39年卒)	井家上哲史(昭和51年卒)
大出 育男(昭和31年卒)	土田 饒(昭和31年卒)	尾島育二郎(昭和41年卒)	前田稲一郎(昭和51年卒)
大出 彰(昭和29年卒)	土田 正昭(昭和61年卒)	佐久間洋一(昭和43年卒)	熊倉 章雄(昭和54年卒)
大出 勝(昭和37年卒)	山崎 敬生(昭和32年卒)	関谷 芳久(昭和44年卒)	狩野 智雄(昭和56年卒)
大出 宏(昭和37年卒)	向殿 政男(昭和36年卒)	坂上 真啓(昭和49年卒)	※卒年順に記載。 共同での広告の場合 代表者の次に記載。
佐藤 健一(昭和31年卒)	吉田 信行(昭和37年卒)	竹澤 啓(昭和49年卒)	

■その他の寄付一覧

向井 真一(明大理事)	第20回総明会チャリティゴルフ参加者一同	ゴルフ委員会	組織委員会
-------------	----------------------	--------	-------

おわりのことば

昨年（平成26年）、総明会設立50周年を迎え、総会の際に記念式典を開催し、向殿名誉会長による記念講演、総明会功労者である先輩に謝意を込め記念品を贈呈することができました。

しかし総明会創立50周年の大きな目標でありました「50周年記念誌」の発行に掛かる費用を会員皆様方からのご寄付により賄うという非常に高いハードルを掲げてしまいました。

果たして本当に達成できるのかと疑心暗鬼になった時期もありましたが、総明会の役員、各委員長、各副委員長をはじめとする関係者の皆様の底力と、総明会の皆様方のご支援をもちまして無事発行することができました。

総明会は、昭和40年に明治中学校・高等学校同窓会として発足して以来、昭和50年には会報を創刊、昭和54年には幹事学年制ができ、現在の総明会の基盤が出来上がりました。

このたび長い歴史の中で大先輩から築き上げられた、総明会の生い立ちを「記念誌」としてまとめる事ができました。また、未来の総明会会員の皆様にはバイブルとして後世に引き継がれる事と確信致しております。

この場をお借りして記念誌の発行に携わって頂きました皆様に心より御礼申し上げます。
ありがとうございました。

総明会周年委員会委員長 桑崎 安弘（昭和50年卒）

総明会50周年記念誌編集委員会	取材協力	明治大学付属明治高等学校・中学校
委員長 玉置 孝一（昭和54年卒）		一般社団法人日本工業倶楽部
大西 静士郎（昭和52年卒）		小林 昭雄（昭和22年卒） 岡本 雅仁（昭和51年卒）
飯野 善明（昭和56年卒）		山崎 敬生（昭和32年卒） 岩田 茂（昭和54年卒）
衛藤 雅一（昭和56年卒）		栗田 茂（昭和44年卒）
小林 謙之（昭和57年卒）		
関川 一浩（昭和57年卒）	出典	60年の歩み（明治大学付属明治高等学校・中学校刊）
宮田 健（昭和57年卒）		90年の歩み（明治大学付属明治高等学校・中学校刊）
佐藤 昌彦（昭和59年卒）		過程（明治大学付属明治高等学校生徒会誌）
島村 武史（昭和59年卒）		総明会会報（総明会刊）
田中 重幸（昭和59年卒）		卒業生名簿（総明会刊）
岩月 義明（昭和60年卒）		五明会会報（大正10年卒業生同窓会刊）
山本 伸幸（昭和60年卒）		総明会保存資料

総明会50周年記念誌

発行年月日 平成27年10月1日
発 行 明治大学付属明治高等学校・中学校同窓会 総明会
〒182-0033 東京都調布市富士見町4-23-25
明治大学付属明治高等学校内
TEL.042-444-9100
[http : //www.meiji-soumeikai.com/](http://www.meiji-soumeikai.com/)
編 集 総明会 周年委員会 編纂委員会
本文デザイン 島村デザイン
印刷・製本 大日本印刷株式会社
